真田幸村

講談名作文庫

真田幸村

講談名作文庫

カバー画　生頼範義
装　幀　平野甲賀

真田幸村

講談名作文庫 1

講談社
320

講談名作文庫

320円
0193-433013-2253 (0)

真田幸村

真田幸村

講談名作文庫

講談社

講談名作文庫

1

真田幸村

講談社

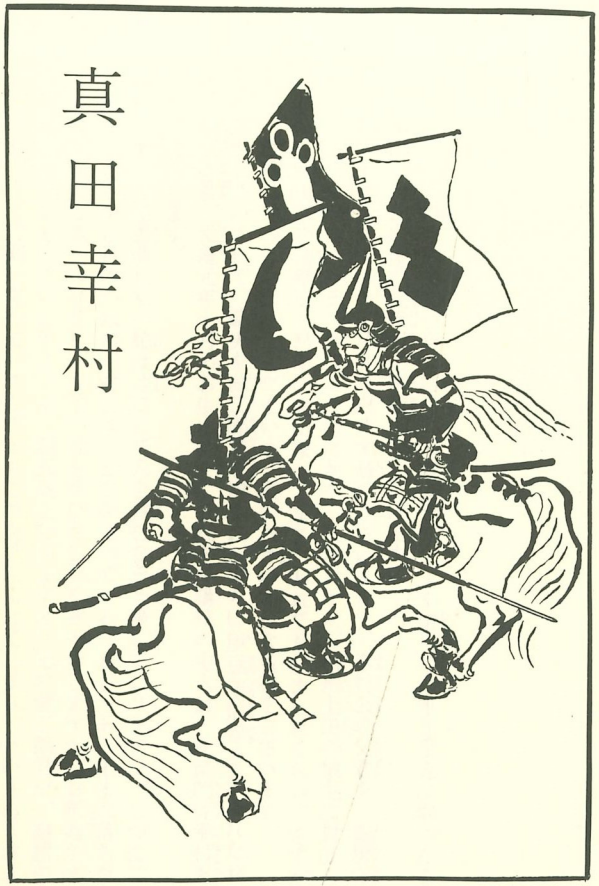
目次

きのうにかわるきょうの身の上……九
負うた子に教わる浅瀬……一四
血に餓えて夜泣きをする名剣……二〇
天体の乱れに知る、天下の異変……三一
親子兄弟が敵と味方に……四〇
孤城一つに天下の大軍を釘づけ……四六
用いざれば孔明たりともすなわち臥竜……五一
関所の前でにわかの仮病……五九
うへっ、ぶっそうなご家来衆……六六
度肝を抜かれた両重役……七四

本シリーズは、昭和29年に小社より刊行された『講談全集』の文庫版選集です。今回の刊行にあたって現代表記に改めました。

〈編集部〉

突っ張りすぎた欲の皮……八二
苦肉に報いる苦肉の策……八九
おのれ家康、覚悟におよべっ……九九
びっくりぎょうてん、大助初陣の功名……一〇九
デマに迷うな、放言を信ずるな……一一七
くわばらくわばら、死んでも命があるように……一二五
絶体絶命、九死に一生の大御所……一三一
いやはや、褞袍姿の将軍家……一四三
名代に立ったが運の尽き……一五二
無念残念、長蛇を逸す……一五七
城中に秘密をもらす曲者あり……一六九
毒には毒を、敵には敵をの妙計……一七五
ねらいを定めた秘蔵の短筒……一八〇
命を芥の人海戦術……一八九
敵をはかるはまず味方から……一九七
知らぬが仏の大御所家康……二〇三
屍の山、血汐の河の負け戦……二一四
三十六計逃げるにしかず……二二一
敵の本陣に通じる秘密の間道……二二九
そこは泣く子と地頭の権力……二三三
ああ予の首は無事であったか……二三九
牝鶏暁を告げてその家滅ぶとか……二四九
哄笑微笑の平和攻勢……二五五
使命は重し血判見届けの使者……二六一
天なり命なり、千秋の恨事……二七三
翼をもがれた鳥も同然……二八一



虎の威を仮る狐の勢い……二八
二世かける妻白妙の遺書……二九五
貰い首の功名で二百石……三〇三
奇妙な命令、不思議な下知……三〇九
回天最後の大奇計……三一三
恨みを呑んで薩摩落ち……三一九

さし絵　中尾新太郎

きのうにかわるきょうの身の上

今回は、かたむく豊臣の運命を一身ににない、智謀智略、よく徳川の大軍を手玉に取ったる、古今無双の大軍師、真田左衛門佐幸村の事蹟を申しあげます。

そもそも真田家と申しますのは、清和源氏の末裔でございまして、幸村公の父君を、安房守昌幸と申され、武田信玄公につかえて智謀ことのほかすぐれたおかた、信州上田の城主に封ぜられておりましたが、武田家の昌幸か、昌幸の武田家かとまでいわれておりましたくらい、さすがの太閤秀吉もその智略にぞっこんほれこんだという、実に古今にまれな名将でございます。

お子さまが二人ございまして、嫡男を源二郎君と申され、のちに伊豆守信幸となられたおかた、ご次男が与三郎君、元亀元年十月のお生まれで、これぞ本講談の主人公、左衛門佐幸村となられるおかたでございます。

昔から栴檀は嫩にして香ばしく、蛇は寸にして人を呑むなぞと申しておりますが、じつにこの与三郎君、幼少のときから世のつねの子供とは、どこか違っている。おぎゃあと生まれ落ちたとたん、右手を高く上げて天をゆびさし、左手で地をゆびさしたなぞと申しますが、お釈迦さまではないから、そんなこともございますまいが、四五歳となりますと、兄の源二郎君が、論語の素読をなされるのを、そばで聞いていて、ことごとくこれをそらんじてしまう、というありさまで

ございます。昌幸公もこれをご覧ぜられて、

昌「うむ、与三郎こそはげにもたのもしい子供であるわい。成長ののちには必ず、わが真田の家名をあげるであろう」

と、たいそうなお喜びでございます。六歳のときから、学問、武芸の稽古をはじめられたが、一を聞いて十を悟るという天性の発明。どうもその上達のすばらしいこと、ただただ舌を巻いて驚くばかりでございます。するとここに、与三郎幸村十三歳のときのこと、真田家の浮沈にかかわる、大事が出来いたしました。

と申しますのは、主家の武田家におきましては、信玄公ご逝去ののち、お跡目をつがれた嫡男の勝頼公、血気の勇にはやられまして、安房守昌幸はじめ、老臣忠義の人々の言を用いず、織田、徳川の連合軍と戦って、長篠に敗れてこのかた、日に日にその勢いふるわず、甲府なる躑躅ヶ崎の館をすてて、韮崎の新府の城へとこもりましたが、天正十年三月、織田、徳川、北条の軍勢に、三方から攻めこまれて、わずか二万たらずの同勢をもって、潮と寄せ来る二十余万の大軍を相手といたし、勇気をふるって戦いはいたしましたが、なんといっても多勢に無勢、さんざんに打ち破られて、ここに傷つきかしこに倒れ、あるいは三々伍々に逃げ失せてしまうなど、わずか一夜のうちに、三千人に減ってしまいました。

このとき信州上田から、急いで馳せつけてまいりました安房守昌幸は、ただちに勝頼公のお目通りへいで、

昌「それがしは上田城に立てこもり、敵の大軍を防ぐ準備をいたしますゆえ、お館には一時、要害堅固なる上州吾妻の城へひきあげて、再挙をはからせたまえ、万事はこの昌幸の方寸にござ

いますれば……」

と、くれぐれも申し述べて、自分はその準備のためにと、すぐさま帰国いたしましたが、勝頼公はついにこの進言を用いず、かえって逆臣、小山田出羽守信茂が、

信「上州方面にはもはや、織田家の手の者が入って火の手をあげ、道をふさいでいる由に聞きおよびます。さればお館以下大勢のものが、無難にのがれ得られようとは考えられませぬ。それにひきかえ、それがしの居城岩殿山は、御先祖代々の甲州のうちにあって、しかも日本一の要害、ひとまずここにご籠城あそばし、そのうえのご思案、そのあいだには四散したお味方も、馳せ集まりましょう……」

と、甘言をもって献策いたしましたから、

勝「うむ、しからば岩殿へひきあげよう?……信茂、そのほうは一刻も早く岩殿へ立ち帰り、準備いたしてあいまてよ。予はあとよりすぐに乗りこむであろう」

信「ははっ……かしこまりましてございます」

と、小山田信茂は、ただちに岩殿へひきあげました。これより勝頼公は敗残の一族郎党をしたがえ、きのうにかわるきょうの身の上、岩殿さして落ちのびまする心のうちはいかばかり、心ある勇士の面々は、鎧の袖をしぼりながら落ちてまいります。

ころしも天正十年三月三日、上巳の節句、岩殿のてまえ駒飼という所までまいり、もう小山田の同勢が、迎えに来るだろうと、勝頼公はここに本陣を立てて、お待ちうけにあいなりましたが、いっこうに迎えの者の来るけはいもない。その翌日になっても、まだ迎えは見えません。そこで勝頼公には、

勝「たれかある。これより岩殿へまいり、勝頼がまいった、はやはや迎えに出よと申してまいれ」

とおおせられると、「はっ」と答えて立ちいでましたのは、土屋惣蔵というわかざむらい。この土屋惣蔵は二人の弟とともに、新府の城を落ちてこのかた、悲運の主君を守って、なみだぐましいばかりにつかえてきた、忠魂義胆の戦国武士。いましも主君のおおせに、弟二人をはじめ、五十余名の同勢をば引き連れ、岩殿をさして笹子の峰までまいりまするが、むこうに柵を立てて、逆茂木を結いめぐらし、厳重に陣所をかまえている者がありますから、これは合点いかずと、

惣「やあやあ、それなる陣所へもの申さん、われらは勝頼公の近臣、土屋惣蔵であるが、もしや陣中に小山田出羽守信茂殿あらば、勝頼公にはすでに、駒飼の里までまいられたり。はやはや迎えにまいられよ」と、大音声によばわりまするが、その声に応じて、

○「それ打てっ……」

というので、数十挺の鉄砲筒口をそろえ、ドドンドドンと打ち出しました。これをながめて土屋惣蔵、

惣「さては小山田信茂なるか、なにゆえあってかようなことをいたすっ」

と、威丈高によばわりまするが、このとき鎧兜に身をかためて、たちあらわれましたる小山田出羽守信茂、

信「だまれっ……弱輩者のぶんざいにてなにをか申す、暗愚の君勝頼には、かく申す小山田信茂、愛想もこそも尽きはてたり。いまこそ勝頼ここへまいりなば、首にいたして織田殿へ送りまいらせんと、かくは待ち受けたり。すみやかに立ち帰って、勝頼にこのむねを申し伝えよ」

と、にくにくしき一言。これを聞いた土屋惣蔵、こぶしをにぎり歯を食いしばり、

惣「うむ……おのれにっくき小山田信茂……さては逆心をもってわがお館を偽わり、かようなところへ、われら主従をおびきだしたるか。それにつけても真田安房守殿のお言葉にそむきたるは残念至極……いまさらなんと悔むもせんないこと……。されば寸時も早くこのことを、お館にお知らせ申さなければならぬ」

と、たちまち馬首をめぐらして駒飼へ立ち帰り、ことの次第を勝頼公へ申しあげましたから、さすが剛気の勝頼公も、いまさらのようにうち驚かれ、

勝「うーむ……ふらちせんばんなる小山田信茂……ああ予は安房に面目次第もない」

と、身をふるわしてご立腹、ご後悔にあいなりましたが、六日の菖蒲、十日の菊、あわれきのうまで、三軍を叱咤いたしましたる英雄も、悲嘆の涙にくれるばかりでございます。

おはなしかわって、こちらは真田安房守昌幸、信州上田の城へ立ち帰り、主君勝頼公をば、上州吾妻に迎えて織田勢を防がんと、籠城の準備に取りかかられたとき、勝頼公には岩殿の城へ落ちのびられたが、小山田信茂の謀反によって、天目山へ立てこもられるという注進。

昌「すわこそ一大事、またしても昌幸の申すことをお用いなきため、かようなことにあいなったか。いまさらなんといっても詮ないこと、一刻も早くお救い申さねばならぬ」

と、上田城はご舎弟信尹殿に守らせ、その身はただちに軍勢を取りまとめ、上田の城をあとにして、えいえい声も勇ましく、天目山をさして急がれました。これにしたがう人々は、嫡男源二郎信幸、次男与三郎幸村をはじめ、なうての勇士六百余名、六文銭の旗印をおし立て、もみにも

んで押し出してまいりました。

負うた子に教わる浅瀬

昌幸の軍勢は、いったん甲州路に入って、それより道を左にとり、天目山をめあてに、ひた押しに押してまいりますと、とつぜん道端の辻堂の戸をあけて、ぱっととびだした一人の修験者風の男がございます。

修「やあやあ、それなるは真田殿の軍勢ではござらぬか。安房守昌幸殿の軍勢ではござりませぬか……」

と、大音によびかけましたから、これを聞いた真田家の家臣たちは、

家「やあ、なにやつなるぞっ……」

と、ばらばらっとかの修験者のまわりを、おっ取り巻きました。みるとこの修験者のふところには、三歳ばかりの嬰児がいだかれて居りますから、一同不思議な修験者もあるものよ、とみつめて居りますと、

修「ご不審はごもっともながら、それがしは武田勝頼公の近臣、土屋惣蔵と申す者でござる。ふところにあらせられるは、これぞ武田家の若君、勝千代君でございまするぞ……じつはご主君勝頼公のご遺言により、惜しからぬ命をながらえ、若君の御供いたして、上田の城へ真田殿をおたずね申さんと、重囲を脱けてようようこれまでまかりこしたるところ、天運いまだ武田家をみすてたまわず、このところにおいて、真田殿に邂逅いたすとはもっけのさいわい、なにとぞ安房守殿におとりつぎのほどを願いたい」

と、まごころおもてにあらわして申し述べましたから、さっそくこのことを昌幸公に申しあげると、

昌「うむ、さようか、なにはともあれここへと申せ」　家「ははっ」

と答えて、家臣が案内いたす修験者を見れば、これぞまごうことなき勝頼公の近臣、土屋惣蔵でございますから、

昌「お見ればたしかに土屋惣蔵……、して、お館には、いかがいたされたのじゃ」

惣「真田殿、なんとも面目次第もございませぬ……お館には貴殿のお言葉に背いて、逆臣小山田の甘言にまどわされ、ついに岩殿さして落ちのびられまする途中、きやつめの返り忠のため

に、城に入ることかなわず、天目山に立て籠らんといたして、あえなくもかの地に、哀れなご最期をとげられました。それがしもおあとしたいて、お供いたさん覚悟でおりましたるところ、勝頼公には臨終のきわにそれがしを召させられ、

「われらと嫡男太郎信勝とは、この地において討死いたす。されば新羅三郎以来、連綿たる武田の血すじをつぐものは、これなる嬰児、勝千代ただ一人、これを殺せばご先祖へ対して申しわけがない。さればなんじはこの勝千代をともなって、信州上田へまかりこし、予がなきのちはたとえ小禄でもかまわぬ、武田の家名の立つようにはからいくれよと、くれぐれも安房守に伝えてくれ。これぱかりが心にかかる、ただ一つの願いじゃ」

と、涙ながらのお言葉。いまはぜひなくおおせを受けて、これなる勝千代君のお供をいたし、これまでまいりましたる次第でございます」

といちぶしじゅうのものがたり。聞いて安房守昌幸も、落つる涙をとどめかね、

昌「ああわが主君には武運つたなく、天目山にて討死にあそばされつるか。しからばこれより天目山へまいっても詮ないこと。このうえはご遺言にしたがって若君をもりたて、武田家の再興をはからねばあいならぬ……それ者ども、上田へひっかえせ」

と、下知を伝え、信州上田へ立ち帰らんといたしまするると、このとき土屋惣蔵、

惣「これにてそれがしの役目、あい果し申しました。さればこれよりひきかえして、天目山に立ち帰り、勝頼公の屍のわきにて、追腹切らん拙者の覚悟。真田殿、勝千代君の御行末、くれぐれもお願い申しあげますぞ……」

と、いったかと思うと、身をひるがえして、飛鳥のように駈け去ってしまいました。あと見

送って安房守昌幸、

昌「ああかかる忠義の者どもを、あたら散らせる不憫さよ……」

と、さすがに猛き名将も思わず落すひとしずく……。これより昌幸公には、勝千代君を抱いて陣立を立て直し、上、信、武の境をなす三国山のふもとまでひっかえしてまいりまするとこはそもいかに上杉景勝が、このところへでばって、真田を討ち取ろうと、直江山城守、柿崎和泉守、甘粕近江守など、股肱の臣をはじめ、三千余人の同勢をひきい、旗差物を押し立て、鉄砲、弓矢をたずさえて、峠の上に待ち受けておりますから、これには昌幸公も驚きました。

なにしろうしろには織田、徳川の大軍をひかえ、前には上杉の精鋭が、勇気凛然と待ちかまえているという、いわばはさみ討ちにあっているというわけ。さすが明智の大軍師といわれた安房守も、いかがいたしたものであろうと、しばしぼうぜんとしておられたが、やがて天を仰いで長嘆息、

昌「ああいまやわが武運も、ここに尽きたるか。いでこのうえは刀の目釘のつづかんかぎり、斬って斬って斬りまくり、勝頼公の冥土の御供つかまつらん……者ども覚悟はよいか」

と、一同をかえりみられたとき、最前から昌幸公のかたわらに、神色自若としてひかえておられたのが、年歯わずかに十三歳の与三郎幸村。

幸「お父上、なにをおおせられます。いまここでお父上が討死あそばしたあかつきには、勝頼公のご遺言、武田家の再興はいかがあいなります……」

昌「与三郎、こざかしいことを申すな。父とてもそのくらいのことをわきまえんでなんとする。さりながら、かく前後に大軍をひき受け、いかに鬼神の勇ありとも、わずか六百の手兵をもって、これをうち破ることは、夢にも思いおよばぬことじゃ」

幸「あははははは」

昌「こりゃ、なにを笑う、いかに年端がいかぬからとて、かような場合に笑うとはなにごとぞ。次第によってはわが子たりとも、ようしゃはいたさぬぞっ」

幸「お父上、これはまたひごろのお父上にも、にあわしからぬお言葉でございます。かばかりの上杉勢に進退きわまり、討死のお覚悟なぞとは、わたくしはおかしくてたまりませぬ」

昌「おのれっ、無礼のことを申すやつである。しからばなんじにはこの大軍を前にして、なんぞ勝算でもあると申すか」

幸「おおせまでもございませぬ。たかのしれたる上杉勢、この与三郎幸村においては、一兵も労せず、わずか三寸の舌先をもって、このところを通ってごらんにいれましょう」

あまりにひともなげなる大言に、安房守昌幸も眼をみはって、はったと幸村をにらまえ、

昌「与三郎、無益な大言を申そうより、いざ斬りこみの用意をいたせ」

と、ご信用になりませぬ。するとこのとき与三郎幸村、

幸「お父上、敵陣への斬りこみはいつにてもできまする。まずもってここは、わたくしの申すことを一度試みられ、そのうえにて事成就いたさぬあかつきにこそ、命を捨てて斬って入り、勝頼公の御供いたしても、遅くはございますまい」

昌「うーむ、しからばいかなるてだてをもって、道をあけさせるか……」

幸「さればお父上、はかりごとは密なるをもってよしといたすとか、おそれながらお耳を拝借……」

と、父昌幸の耳へ口をあて、なにかぽしゃぽしゃとささやかれました。これをお聞きになった昌幸公、ぽんと小膝を打って、

昌「うーむ、負うた子に教えられて浅瀬を渡る……げにも恐ろしいそのほうの智謀才略、父は感心いたしたるぞ。すみやかにその計略を行なえっ」

と、たいそうなお喜び。親ながらもまだ十三歳の幸村の智謀に、目をまるくして驚きました。

幸「ではさっそくこれより……」と、幸村は父の目通りをしりぞき、ただちに荒小姓の一人、自分と同年なる、穴山岩千代を呼び寄せました。

血に餓えて夜泣きをする名剣

岩千代を呼び寄せた与三郎幸村は、このときなに思ったか、鎧兜を脱いで萌黄繻子の陣羽織に着かえ、

幸「これ、岩千代……」岩「ははっ」

幸「このほうはただいまより、上杉の陣へ使いにまいる。そのほう供をいたせ」

岩「えっ、上杉の陣中へ……。それなら若君、せめて鎧兜を着用なされてはいかがでございますか……」

幸「いやいや、その心配無用じゃ。それともそのほうは、鎧兜が無うてはこわいか……」

岩「いえ、けっしてこわいことはございませんが、そのお支度では、あまりに不用心のように思われます」

幸「あははははは岩千代、弱音をはいたな。たとえ身に金鉄を帯びたとて、三千人の同勢の中へ乗りこんで、それがなんとなろう。身に寸鉄の備えはなくとも、要はただ心の置きどころ一つじゃ」

と、悠々として立ちいでる。ここにおいて岩千代も劣らじ負けじと、

岩「よしっ、それなら若君と一緒に、あくまで上杉の軍勢を驚かしてやろう」

とばかり、十三歳の子供ににげなく、肩肱いからせながら、のっしのっしと主人の幸村にしたがって、大道せましと歩き出しました。この岩千代は後年、真田十勇士の一人とうたわれた、穴山小助となる人物でございまして、弱年ながらもなかなかの器量。幸村も兄弟のように愛しております。

主従二人が、早くも上杉方の本陣まぢかくまいりまするると、弥生の風にはためいておりますのは、上杉家名代の竹に雀の旗印、かしこにここにいななく駒も勇ましく、同勢およそ三千余人、その勢いは天をつかんばかりでございます。与三郎幸村は大声を張りあげて、

幸「やあやあ、上杉殿の陣中へもの申さん……」

○「おう……」

と答えて、ばらばらっと駈けつけたのは、五六人の番卒……。見るとまだようやく、十四五歳とおぼしき少年武士が二人、傲然と突っ立っておりますから、

番「こりゃこりゃ、そのほうどもは何者だ」

幸「われは信州上田の城主、真田安房守昌幸の次男、与三郎幸村と申すものであるが、御大将上杉景勝殿に見参いたして、申し談じたいことがあってまいった。……さようおとりつぎをたのむ」

と、おそれる気色もなく呼ばわった。

番「えーっ……こいつ、なんという大胆なこせがれであろう？……また真田安房守ともあろう者が、こんなこせがれ二人を、軍使に立てるなぞとは……」

不審の眉をひそめていると、

岩「こらこら、きさまらではわからん……早く上杉殿にとりつぎいたせ」と岩千代が、幸村にも増した大声でどなりつけたから、

番「おやっ……こいつまで生意気なことをいいおるぞ……ただいまとりついでやるから、待っておれ」

と、番卒の一人が奥へ入って、このことを大将景勝に申しあげましたから、景勝公もふしぎに思われ、かたえにひかえておりました直江山城守、柿崎和泉守、甘粕近江守の三将をかえりみられて、

景「ただいま、真田のこせがれがまいったということであるが、いかがいたしたものであろう」

と、おたずねにあいなりました。すると直江山城守兼続が、まっさきに口を開いて、

山「これはお会いにならぬほうが得策かと存じまする。こわっぱとは申しながら、名に負う安房守のこせがれ、なにをいたそうやもはかられませぬ。兼続つらつら案じまするに、これ必ず弁舌をもって、この囲みを解かんとするてだてと考えますれば、なまじいこわっぱとあなどって、まんまとその術中におちいらぬよう、陣前より追い帰すがよろしかろうと存じまする」

と申しあげたときに、次にひかえた甘粕近江守が、

近「なるほど山城殿の申されるところ、いちおうごもっともとは存じまするが、敵中へおそれげもなくまいったる与三郎幸村、いまさらこれを、陣前より追い帰したとあっては、これ畢竟、敵の勇気におそれたるに似て、上杉家の名折れとなりましょう。わたくしの考えますところでは、たとえ目通りをお許しになればとて、またかれがいかに蘇秦、張儀の弁をふるいましょうとも、お聞き入れにさえならなければ、あえてさしつかえはござるまいと考えます。

ことにかれのまいりましたるこそさいわい、当方の勇気を示して遣わすのも、策を得たものと存じまするから、なんぞ思案をこらして、かれ与三郎幸村めの心胆を、寒からしめてはいかがでございましょう」

と、山城守とは反対の意見を申し述べましたから、これを聞かれて景勝公、

景「なるほど、山城の言葉にも一理はあるが、ここは近江の申すところがもっともじゃ。たとえ会うて遣わしたとて、かれのいうことを聞き入れさえしなければ、山城もあえて心配いたす必要はなかろう。なんぞ与三郎めの荒胆を、取りひしぐような趣向をいたして、目通りを許すことにいたせ」

というお言葉でございます。そこで二十四五名の家来の者が、おのおの抜き身の槍を押っ取って、与三郎主従の、ひかえておりまするところへ出てまいり、

家「こら、真田のこせがれとやら、主君景勝公に申しあげたるところ、目通りして取らせるとのお言葉であるぞ。いざいざこちらへ通られい」

と、いったかと思うと、四方から槍ぶすまを作って、ぴたりと取りかこんだ。与三郎幸村は驚く色も見せず、にっこり笑って岩千代をしたがえ、ずーっと中へ入りますと、大勢の家来は槍をつけたまま案内する。お供の岩千代は心のうちで、

岩「なるほど、こいつはすごいことになったわい、一つまちがったら田楽刺し、芋や豆腐とちがって、人間の田楽なんぞはありがたくない。いったい若君はどんな顔をされているな……おやおや鼻唄で与三さんなんぞ唄っているぞ、若君と同じ名前だから、縁が深いというわけか……よしっ……それならおれもひとつ、石松の代参でもうなってやろう……。岩と石とは親類筋だ……」

まさかその時分、こんなものはなかったから、やりゃあしないが、岩千代肩をゆすってふふんと鼻唄まじりでいるから、上杉の家来どもはこれを見て、

家「おやおや、なんというずうずうしい野郎だ。こにくらしいやつめ、ひとつおどかしてやれ」

とばかり、ひょいっと岩千代の鼻の先へ槍を突き出した。しかしもとより大胆不敵の穴山岩千代、おそれるどころか、ぺろりと舌なぞ出して、おでこをたたいているから、こうなるとかえって上杉の家来のほうが、こいつ気味の悪いやつだと、あきれかえってしまった。こちらは与三郎幸村、いよいよ本陣の前までまいりますと、帯びていた陣刀をはずして岩千代に渡し、

幸「これをそのほうに預けておく、そのほうはこれにあって、予の帰るまで待っておれ」

岩「若君、それはあまりにむぼうでございます。敵中へまいるのに甲冑も着さず、そのうえ無刀のまま、お一人でおいであそばすとは、これぞまことに暴虎馮河、なんとおおせられましょうとも、岩千代はおそばをはなれませぬ」

と、いうのを幸村はおさえて、

幸「岩千代、必ず心配いたすな、死中に活をもとめることこそ勇者のつね、そのほうはこのところにおいて、こころやすく待っておれ」

と、はやりにはやる岩千代をあとに残して、与三郎幸村、弱冠十三歳の身でありながら、無刀のままでただ一人、さらにおそれる気色もなく、景勝の前へ出てまいりました。

見ると正面には上杉景勝が、緋縅の大鎧を着し、龍頭の兜をかたえにおいて、ゆうぜんと床几にひかえ、そのそばには直江山城守、柿崎和泉守、甘粕近江守をはじめといたして、杉原常陸介、宇佐見駿河守なんどという、上杉家名代の勇士豪傑のともがらが、きらほしのごとくいならんだるありさまは、実に威風堂々、あたりを払うばかりでございます。与三郎幸村はおめず臆せず、ゆうぜんとしてその前に座をしめて、

幸「ははっ、さっそくのお目通り、与三郎幸村、つつしんで御礼を申しあげます」

と、ことさらにていねいなあいさつをいたすと、景勝は床几に腰をかけたるまま、泰然として幸村を眼下にみくだし、

景「いかに与三郎幸村とやら、そもそもそのほうは何用あって当陣中へはまいったるぞ。さあ、すみやかにことの次第を申してみよっ」

と大音に呼ばわると、幸村はなに思ったか突然、

幸「あっはははは」

と、大声に笑い出した。これをながめて気早の景勝、いや怒ったの怒らないのじゃございません。額に青筋を立て、満面に朱をそそいで、

景「おのれっ小冠者、予が問いに答えもいたさず、あざけり笑うとはなにごとじゃ、ここなぶ

れいものめがっ」

と、大喝一声どなりつけました。幸村は景勝公の顔を、じっとうちながめながら、

幸「さればそれがしの笑いましたのは、余の儀でもございませぬ。かねて君には謙信公の甥御にあたられ、智勇兼備の御大将とうけたまわっておりましたが、見ると聞くとは大きなちがい、ただ一人の与三郎幸村をおそれられて、かくぎょうぎょうしくも軍兵に甲冑を着せ、槍ぶすまを作ってそれがしをとりかこみ、すわといえば、ただ一突きといわんばかりのご準備とは、あまりと申せば笑止の極みでございます。

ごらんのとおりそれがしは腰のものも帯さず、ただ一人にて参上いたしましたるに、なにをおそれての槍ぶすまかと、おぼえず笑いをもよおしました次第でございます」

と、弁舌さわやかに申し述べたから、さすがの景勝もおおいに赤面いたし、しばし言葉もありませんでしたが、

景「うむ、これは予のあやまりである。さすがは安房守のせがれ、聞きしにまさる大胆者じゃ。者どもさがれっ」と、槍ぶすまの軍兵をしりぞけられて、

景「与三郎、近うまいれ。して、そのほうがまいりし用むきというは何事じゃ」

幸「ははっ、さればにございまする、このたび主君武田勝頼公、天目山に立て籠られて、織田、徳川、また北条の三軍を引き受け、最後の決戦をあそばされる由をうけたまわり、父昌幸とともに、主君を救いまいらせんと、上田の城を出立におよんで、ひた押しに天目山へ馳せまいる途中、残念にも主君勝頼公には、織田勢のために、討死をあそばされしとうけたまわり、無念骨髄に徹し、おのれっ信長ただひとうちと思いましたが、多勢に無勢、いかんともいたしがたく、残

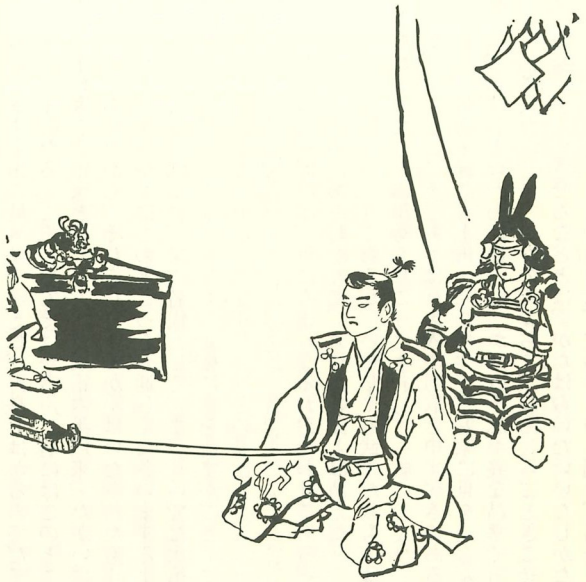
念ながらひとまず上田の城へひっかえし、再挙をはかるのでだてをいたそうと、当所までひっかえしてまいりましたるところ、なんぞはからん、君にはこのところをさえぎりたもう。

由来、上杉家と武田家とは、さんぬる天正六年以来、たがいに和を結んで、織田、徳川に対せんといたしたあいだがら、それをなにとてかくはいたされたもうぞ。なにとぞ事情、ご賢察をくださいまして、すみやかにこのところをお通しくださいまするよう、この儀ひとえにお願いのため、弱年ながら与三郎幸村、父の名代として、まかりいでた次第でございまする」

理路整然として一糸の乱れもなく、立板に水を流すがごとくに申し述べました。すると景勝公のかたわらにひかえた、直江山城守がひとひざのり出して、

山「ひかえよ与三郎幸村、なんじの父安房守昌幸は、あっぱれの名将軍師と聞きつるが、ただいまなんじの言葉を聞けば、世にもまれなるおおたわけであるぞ。なぜかと申せば、主君勝頼公には、小山田のためにあざむかれて、天目山の露とは消えたり。しかるにこれを助けんと乗りいだしたるは、神妙のいたりであるが、いやしくも武士たるものは、主討たるればすなわち臣死す、かなわぬまでも、織田勢をむこうにまわして一戦におよび、なぜ勝頼公にしたがって殉死をとげぬか。かくしてこそ、あっぱれ忠義の弓取と申すべきである。

しかるに、臆病未練にも上田へ立ち帰って、安楽に世を送らんなどとは、これぞ武士の風上にもおけぬ、卑怯者といわねばならぬ。かかる不忠不義な昌幸であるから、わが主君がここへ、同勢を繰り出されたのじゃ。しかのみならず、なんじらごときこせがれを遣わして、われらをあざむき、陣払いをいたさせんなどとは、かたはらいたいいたしかた、浅慮にもほどがあると申すものじゃ。疾く立ち帰ってこの由をば、父昌幸に申し聞け、弓矢をもって通るがよい」と、威丈高



になってどなりつけました。幸村はこれを聞いて驚くかと思いのほか、にっこと笑って、

幸「ははあ、世にはずいぶん痴者も多いものじゃ。上杉家の直江山城守とは、智勇兼備の老臣と聞きおよんだが、これまた見ると聞くとは大きな違い……一を知ってその二を知らずとは、直江殿、貴殿のことでござろうぞ。われらが主君勝頼公は、明智果敢の大将ではあったが、おしいかな御年若きため、小山田はじめ佞奸邪智のともがらにあざむかれたまい、父昌幸の諫言をお用いなく、それがため父は、上田の城に立ち帰っておったのであるが、このたびわが主君のご難戦を聞き、なんじょううちすておかれ申すべきや、そうそうに新府の城へ馳せつけて、献策をいたしたれども、これまたお用いなく、ついには天目山の露と消えたまいしはかなさ……このとき

わが父とても、殉死追腹くらいのことは知っている。

しかれども古語にいわずや、死は一旦にしてやすく生はかたしと……それについて勝頼公のご次男、勝千代君には、ただいま父のてもとへまいられている。よってこの君を守り立て、織田、徳川、北条の大軍を取りひしぎ、ふたたび武田の家名を回復なし、勝千代君をもって甲信一円の太守となすのこころえ、これ真の忠義である。さればいったん、上田へ立ち帰らんとするわれら同勢を、不忠者……または世を安楽に送らんとする、未練者などとののしるは、短見浅慮もはなはだしいと申さねばならぬ……。いかに山城殿、ご返答をうけたまわりたい……」

と、言葉するどく問いつめられてさすが山城守ほどの人物も、言句につまったか、うむうむと口の中でつぶやいている笑止さ。このときたまりかねたか、おそばにひかえし荒武者、杉原常陸

介が立ちあがりまして、

常「おのれっ、よくもつべこべとしゃべるこわっぱ」

と、よせばよいのに、帯びたる金剛兵衛の大刀を引きつけ、はったとばかりに幸村をにらみつけて、

常「いかに与三郎幸村、なんじいかほど弁舌をもって、この囲みを解かせんといたしても、当上杉の陣は、弁舌にては通すこと思いもよらぬ。ただじんじょうに合戦をいたして、通られるものなら通ってみよ。上杉家にはかくのごとく血に餓えて、夜泣きをいたす名剣がある。四の五のぬかすにおいては、これをもってまず第一に、なんじが首を血祭りにあげてやるから、覚悟におよべ」

と、くだんの大剣、いまにも切ってはなたんとばかり、居合腰になってつめよりました。このとき与三郎幸村においては、

幸「あははははは……さような名剣がござれば、一度拝見がいたしたいものでござる」と、大口あいて笑い出したから、さあ、杉原常陸介、怒ったの怒らないのじゃあございません。わずか十三歳の小冠者が、五十路にあまる古強者にむかって、思いもおよばぬ大言をはいたのでございますから、

常「おのれっ、こわっぱっ……」というなり、夏なお寒き氷の刃、水もしたたるばかりの金剛兵衛の大刀、すらりと抜きはなちまして、ぐいとばかりに、与三郎幸村の面前へさしつけました。

天体の乱れに知る、天下の異変

上杉家きっての荒武者、杉原常陸介がさしつけた、夏なお寒き氷の一剣、いかに剛気とは申しながら、いまだ十三歳の与三郎幸村、「あっ」とばかりに驚いて、気絶でもするかと思うとさにあらず、顔色ひとつかえずににこにこと笑って、

幸「うむ、なるほどこれは名剣でござるな。なれどもこの名剣をもって、なんぴとをお斬りなさるのでござる……」

と、どこ吹く風とばかり問い返したから、

常「やあ、面憎きいまの一言、なんぴとを斬るとは知れたこと、なんじをはじめなんじが父、天道にそむくものはこれことごとく、この名剣の錆にいたすのじゃ……」

幸「これはしたり常陸介殿、わが父はじめわれらをば、なんとて天道にそむく者とはいわれるぞ。天道にそむくものとはこれ、とりもなおさず上杉の臣、杉原常陸介殿でござりましょう。さればまずもっておんみみずから、おんみの首をはねるが至当ではござらぬか」

と、さかねじに一本食らわしたから、

常「ぬかしたりなこわっぱ、なにゆえ拙者が天道にそむいている。さあそのわけを申せ。仕儀によってはこの場を去らせず、なんじの首は宙に飛ぶぞよ。性根をすえて返答いたせっ」

と、怒り心頭に発したか、わなわなと手をふるわせてつめよりました。与三郎幸村は神色自若として、

幸「さればそのわけを申して聞かそう。貴殿こそ耳の穴をよくほじり、性根をすえてお聞きなされよ。すでに先年、わが父安房守昌幸が主君勝頼公と、上杉の先君謙信公とのあいだにつかいして、両家の間に和談がなってよしみを結び、これよりのちは両家力をあわせて、織田信長を討たんといたしたるところ、残念なるかな謙信公には、にわかの病にてみまかられ、このことはついにそのままにあいなったこと、よもお忘れはござるまい。

しかるところ上杉家におかれては、謙信公の跡目について、ご養子景虎殿と、ここにひかえられたる景勝殿とのあいだにおいて、ご相続をめぐっての御争い、武田家といたしては、景虎殿とはご縁辺のあいだがら、本来ならば、景虎殿にお味方いたすべきところを、そのさいそれなる直江山城殿をもって、武田家へ和睦を申し入れ、謙信公の血すじをもって、跡目といたしたいというお言葉……。

勝頼公には仁義にあつき大将であるから、人の情としてもっともしごくのこととおおせられ、景虎殿への援助を、中絶いたされたのじゃ。これをもって景勝殿はこんにちの安全……しかるにいまその大恩人なる勝頼公が、織田、徳川、北条のために滅びたることを知りながら、その恩をも返そうとは思わず、かえって仇にむくわんために、かかるところまで出陣いたされたるは、これすなわち、天道にそむくにあらずしてなんといおうや。与三郎幸村、いっこうにその心事を解しかねます。

これしかしながら、智勇兼備の御大将たる、景勝殿のご心底からいでたることとも思われず、

畢竟ずるに貴殿らがおすすめ申して、かくはここにいたったものとこころえる。されば天道にそむくとは、これことごとく仁義の道を忘れたる、貴殿らのことであるから、まず御身みずから御身の首をはねて、謙信公のご霊前へ手向けられよと申すのじゃ」

と、とうとうと申し述べましたから、常陸介も理の当然に説き伏せられて、はじめの勢いはどこへやら、ただぼうぜんとあっけに取られております。このとき始終のようすを、ただ黙然とお聞きになっていた景勝公、床几をはなれて幸村のそばへまいられ、

景「ああ弱年ながら与三郎幸村、そのほうの申すところまことにあっぱれ、予はことごとく感心いたしたるぞ。いまもしなんじがきたって、予に説いてくれなかったら、予は天下の人々にわらいを招くところであった。さあ、いっときも早く立ち帰って、父昌幸に予が、よろしく申しておったと伝えてくれ。予はさっそく陣払いをして、帰国するであろう」

と、景勝も、条理をつくした幸村の才智に感嘆、打ってかわったおあつかいでございます。

幸「ははっ……さすがは仁義にあつき御大将……父昌幸も満足にこころえましょう。ありがたきしあわせにございます……ごめん……」

立ち帰ろうといたしまするとと、

景「あいや、しばらく待て与三郎」

幸「ははっ、このうえにまだ、なんぞ御用がございまするか」

景「これなる一刀は差しふるしなれど、そのほうこんにちの勇気と才智に愛で、これを取らせるであろう。これをもって織田、徳川の軍勢を、じゅうぶんに斬り伏せよ」幸「ははっ……」

景「ああっぱれなる者かな……ゆくすえは真田の家名を、いやがうえにも高める者はそなた

であろう」

と、たいそうおほめのお言葉。幸村は面目をほどこして、景勝のご前をしりぞき、幕張りの外へ出ると、ここにひかえてようすいかにと、手に汗にぎって中をのぞきこんでいたのが、穴山岩千代でございます。このときはじめて、ほっとひといきいたして、

岩「若君……おめでとうございました」

幸「おお岩千代、どうじゃ、さすがの景勝も返答につまったであろう」

岩「いや、どうも驚き入りました……若君はあの刀を突きつけられたとき、なんと思し召されました」

幸「あっはははは、なんともなかったわい。じたいあの常陸介は、心からこのほうを斬ろうというつもりではないのじゃ。およそ人を斬ろうとするときには、なんぴとにあれその眼中に、殺気のただよっているものであるが、かれはこのほうを少年とあなどり、ただおどかさんがために抜いたのであるから、言葉はきびしくとも眼中いたって平穏、まことに面白かったわい……」

岩「わたくしはまた遠くでそれがわからないから、まかりまちがったら、景勝を斬ってやろうと思っておりました」

と、主従は笑いながら立ち帰って、このことを安房守昌幸に申しあげましたから、安房守殿も、

昌「ああああっぱれなるかな与三郎……」

と、わが子ながらも舌をまいて感嘆、幸村の手を取ってくれぐれも礼を述べられました。そのうちに上杉の軍勢は、ここを陣払いしてしりぞきましたから、まずこれで安心と昌幸、勝千代君をお守りして、どんどんと道を急がせ、難なく三国山を打ち越し、上州路から上田の城へと立ち帰られました。

上田の城へと立ち帰った昌幸は、城のそなえを堅くいたし、織田、徳川、北条の三軍、きたらばきたれ、目にもの見せてくれんと、てぐすね引いて待ちかまえましたが、いっこうに攻め入ってくるようすがない。これはひとえに敵方が昌幸の智謀を恐れたことと、信長にはさらにいっぽう、中国征伐という大役があるから、上田の小城一つに大軍をさしむけるいとまがない。そこで上信一円のそなえとして、腹心の将、滝川一益をとどめて後事を託し、みずからは南船北馬、ただちに軍を返して秀吉の後詰となり、中国征伐に出かけたからでございます。

さて真田父子は、勝頼の遺子、勝千代君を守り育てながら、なおも武田家再興のために、肝胆をくだいておりましたところ、ちょうど六月一日の真夜中のこと、今宵も今宵とて、安房守昌幸と与三郎幸村、上田本城の天守台にのぼって、勝千代君のご運やいかに、天下の動きはいかがあろうかと、しばし天文を占っておりましたが、やがて二人とも、「あっ」とばかりに驚きの声をあげ、

幸「お父上、ごらんぜられましたか……西にあたって容易ならざる星の乱れ、こは一大事の出来とこそは思われまするが……」

昌「うむ、与三郎、そのほうにもあいわかったか」

幸「はい、これは京都の方にあって、大変がおこる前兆とおぼえました」

昌「うむ、いかにも……はるかに惑星飛びきたったと見るや、たちまちのうちに晃々たる主星が光を失い、惑星のために打ち消されてしまった。おお見よ与三郎、ぱっと輝いたと思う惑星

が、いままた一瞬にして消え去ったではないか……ああこんどはかしこに輝き出した新たな星、与三郎なんと美しいかがやきではないか……。そのほうこの天体の乱れをなんと見るな……」

幸「ははっ、お父上、あの消え去った主星を、信長と見るはひがめでございましょうか……」

昌「うむ、予もそのように思うぞ。されば、主星の光を奪った惑星をだれと見るな……」

幸「これぞ、逆臣のなせるわざにちがいございますまい。しかりとすれば、明智日向守のほかにはないかと存ぜられます……」

昌「うむ、惑星の光を消した新たな星をだれと見たてな……」

幸「ははっ、織田家には、柴田、佐久間、丹羽、前田など、股肱の臣が数多くございまするが、わたくしの見るところではおそらくは羽柴秀吉、あるいは徳川家康ではないかと思いまする……」

昌「ふーむ、そのほうの見るところ、父の案ずることと寸分たがわぬ……。与三郎ここで天下が大きくかわるぞ。さるにても武田の家のご運勢――勝千代君の御行末はいかがであろう？……」

と、安房守昌幸、なおも天の一角をにらんでおりましたが、「うーむ」とひとこえ、うめくような声を発したかと思うと、ばたりと手にした軍扇を取り落してしまった。与三郎幸村は驚いて、

幸「お父上、いかがあそばされました」

昌「あれ見よ与三郎、あの北斗のまたたきを……黄色く淡くしだいにうすれてゆくではないか……。ああ武田の家のご運もすでに尽きたるぞ……運なり命なり、やんぬるかな勝千代君。おおそうじゃ、こうしてはおられぬ、いまはただ若君の御身のうえが案じられる。与三郎、早々におり立って、ご機嫌をうかがわねばならぬ……」

父子はすぐさま、天守台をおりて居間に立ち帰り、夜中ながらも宿直に命じて、勝千代君のご機嫌をうかがわせると、お奥では勝千代君、にわかのご発熱ということで、奥方はじめお傅役の老女、腰元など、目の色をかえてご介抱の真最中、昌幸公へもお知らせ申そうというところでございましたから、宿直の者は取って返して、このことを申しあげる。父子は急いでお奥にかけつけて見ると、痛ましいかな勝千代君、身もだえして苦しんでおられましたが、ぐっと目を引きつけたかと思うと、はやくも玉の緒は天外に飛び去って、呼べど叫べど答えはない。あまりのことに昌幸公、思わず勝千代君を抱きあげて、

昌「ああ八幡太郎以来つたわる、源家の御旗、まった、楯無の鎧を受けつがせたもうべき若君が、かくも一夜のうちに、はかなくならせたもうとは……、昌幸一生一度の思い出に、若君を守り立てて、甲信一円の地を武田菱の旗風に、なびかせんとはいたしつるものを……」

と、落つる涙をせきあえず、声をかぎりに泣きくやめば、なみいるものもだれ一人、袂をしぼらぬ者とてはございません。昌幸父子は天を仰ぎ、地に伏して、嘆き悲しまれましたが、ぜひもなく、ご遺骸は、真田のご菩提所へ葬り、諡名して、涼風朝夢幼覚大居士と申され、法要ばんたんも、ことのほかてあつくとりおこないました。

それよりのちは涙の明け暮れ、もはや武田家再興の望みも絶えましたので、父子ともども鬱々と暮しておりまするとは、はからずも伝わってまいったのが、本能寺の変と、山崎合戦のてんまつでございます。これぞかつての夜、天守台で昌幸、幸村の父子が案じたごとく、天正十年六月二日、信長公には本能寺において、逆臣明智光秀のためにあえなく自刃、光秀はまた六月十三日、羽柴秀吉、のちの大閤殿下のために、攻め滅ぼされたという、大変事でございました。

きのうは主家武田家を滅ぼして、日の出の勢いをふるった信長が、一朝にして逆臣のために攻め滅ぼされる。戦国の世とは申しながら、まことにうたてき世のさだめでございます。かかるおりしも、信州上田の城へたずねてまいったのが、大谷刑部吉継でございます。吉継は少年の日から秀吉に仕えて、智略は石田三成に並び、誠忠は加藤清正とともに指を折られた人物、この吉継が秀吉の使いとして、安房守をたずねてまいりました。

吉「真田殿、われらが主君秀吉公におかれては、貴殿が武田家にささげられた誠忠と、そのすぐれたる智謀武略に、舌をまいて感嘆いたしてござる。うけたまわれば武田家においても、御血をわけた勝千代君がみまかられ、すでにその名跡は絶えはてたとのこと、さすれば貴殿の義も、もはや残りなくまっとういたされたことでござれば、あらためてわれらが主君、秀吉公にご随身を願われまじくや。われらこのたび君公の命を受け、はるばる参上いたした次第でござる」

と、まごころこめての口上でございます。ここで安房守昌幸も、源二郎信幸、与三郎幸村の二人を吉継に引きあわせ、夜をこめてこもごものおものがたり。主客はたちまち意気投合して、百年の知己のごとく、ここに安房守昌幸は、秀吉の知遇に感激いたし、いよいよ随身いたすこととあいなりましたから、吉継の喜びはひとかたならず、とどめられるままに、上田の城に数日を過しましたが、語れば語るほど吉継は、いよいよ真田家の父子に敬服、わけても与三郎幸村には、ぞっこんのほれこみかたでございます。後年、吉継の愛娘が、秀吉公のお声がかりで幸村の妻となり、ここに一子大助をもうけるのでございますが、これぞまことに奇しき因縁とも申せましょう。

さてそののち、秀吉の勢いは旭日昇天、柴田を討って北国をたいらげ、長曾我部をくだして四国を治め、島津と戦っては九州をしずめ、いよいよ天正十八年、小田原征伐へと乗り出しました。このとき真田父子は、召しによってこのいくさに馳せ参じ、抜群の功名手柄、秀吉公もほとほとその武勇智略にご感心あそばされ、恩賞として上州沼田、二万七千石の地をたまわりました。

そのうえ秀吉公には、二十一歳の若武者、与三郎幸村の駈引き軍配を、いたくご賞美なされて、佐衛門佐の名乗をたまわり、しかも寵臣、大谷刑部少輔吉継の娘浪江、これは才色兼備の佳人でございましたが、これをば幸村にめあわすようにという御諚、うけたまわって吉継も幸村もおおよろこび。

吉「幸村殿は先年、主君の御命によって、それがし、上田へまかりこしたるときより、ぞっこんほれこんだる若殿、娘がいやじゃと申せば、かく申すそれがしがまいるでござろう。いかがでござるな幸村殿」

幸「ははっ、由緒正しき大谷殿のご息女、しかも才色ともに誉れ高き佳人、願うてもなきしあわせでございます」

ということで、ありがたくお受けをいたしましたから、ここで真田家は喜びにつぐ喜びの連続、凱陣ののちは嫡男源二郎が、伊豆守信幸となって沼田の城主となり、幸村はここに父昌幸とともに、上田城をば治めることとなりました。

親子兄弟が敵と味方に

しかるところ、ここに星移り年かわって、慶長三年八月十八日、一世の英雄、豊臣秀吉公には、伏見においてご他界にあいなり、それよりまもなく、関ケ原の戦いが出来いたしました。そもそもこの関ケ原の合戦と申しますのは、豊臣家五奉行の随一人、石田三成と、上杉家の重臣、直江山城守と、この両人の胸中からおこりましたことで、命旦夕にせまるを知った秀吉公が、

露とおき露と消えぬるわが身かな
浪花のことは夢のまた夢

のご辞世とともに、ご遺言をもって、天下の後見を徳川家康、幼君秀頼公の輔佐役を、前田利家公に託されました。ところが利家公もあいついで、ご他界になられましたので、はたせるかなこれをきっかけとして、徳川家の勢いが、日に日にさかんにあいなってまいりました。これを見るに見かねた五奉行の筆頭、石田治部少輔三成は、

三「これぞ豊臣家の一大事、このまま過すにおいては、天下は家康のために奪われてしまう。災いの根は嫩のうちにつまねばならぬ」

と考えまして、折あらば家康を亡き者にせんとはかったが、ご運の強い家康公、危いところを切り抜け切り抜け、いつも三成の計略は食い違ってばかりいる。切歯扼腕、歯がみをしてくやしがった三成は、ついにこの計画を、刎頸の友、直江山城守に打ち明けました。

直江山城守は前にも申しあげましたとおり、上杉家第一の重臣、米沢三十万石を領して、陪臣ながらも、秀吉公から、諸侯並の礼をもって迎えられ、秀吉公の御前において、独眼龍伊達政宗公を、一本やりこめたというほどの傑物でございますから、上杉家百二十万石は、直江の一挙手一投足によって、意のままに動いたというくらいの人物でございます。

三成はこの直江山城とはかって、家康を除かんという計画をたてた。そこで慶長五年、山城は主君景勝公にすすめて、その領地、奥州会津へ引きこもり、要害をつくろい、兵糧をたくわえ、諸浪人を集めて、戦争の用意をいたしましたから、天下の後見役、家康公は、これは容易ならざることと、豊臣譜代の大名を引きつれ、会津征伐のために下向ということになり、慶長五年六月十六日、大阪を出立におよんで、関東にご下向、下野国小山へ本陣をすえて、上杉と一戦におよぶということにあいなりました。

ここで諸国の軍勢は、ぞくぞくと小山の本陣へ乗りこんでくる。真田安房守昌幸も、出陣の催促を受けましたるにより、上杉追討の人数に加わらんと軍勢をもよおし、信州上田を出立におよんで、沼田の城主伊豆守信幸、次男左衛門佐幸村の両人を召し連れ、下野国へ、佐野の犬伏というところまで乗りこみました。ところがここへ石田三成から密使がまいりまして、たずさえてまいったのは、秀頼公のご朱印のすわった文書、見ると、

徳川家康、故大閤殿下のご恩を忘れ、その勢いをほしいままにして、豊臣の天下を奪わんとする。これによってわれら一同、幼君秀頼公にかわって家康を追討いたす。すみやかに大閤のご遺言を守り、幼君を守護して豊臣へ忠義を尽すべし。

という文面で、石田をはじめ、小西、長束、大谷、浮田、島津などと、豊臣恩顧の諸大名の連名がございます。この書面がまいりましたによって、安房守昌幸は、伊豆守信幸、佐衛門佐幸村の二人を、わが陣所にさしまねき、はるかに家臣を遠ざけまして、

昌「さて、このたび、上杉景勝、会津城に立てこもって叛旗をひるがえし、われらもこれが征討の軍に加わって、出陣いたした次第であるが、ただいま石田殿よりの密使によって、上方にては石田治部少輔三成、大谷刑部吉継殿をはじめ、豊臣恩顧の諸大名、幼君秀頼公の御為に兵をおこし、徳川家康を討たんとする、容易ならぬ大事をもたらした。徳川にしたがうたものか、石田に味方いたすべきものか、これぞわれらが運命のわかれるところ、われにはわれの所存もあれど、そのほうどもも遠慮なく、意見を申して見よ。伊豆守、そのほうから申し述べい」

とおおせられた。このとき伊豆守信幸、やおらおもてをあげまして、

信「されば、信幸の所存を申し述べます。これぞまさしく佞奸邪智なる、石田の奸計と存ぜられます。徳川殿にさような野望なきことは明々白々。ただ声望日を追うて加うるをねたんで、小人石田めが、幼君秀頼公の名をかりて、おのれの

野心をみたさんがため、仕組んだわざに相違ございませぬ。いまさら申しあげるまでもなく、石田に一味いたすにおいては、末世までも悪名を残すは必定。徳川殿へお味方あって、しかるべくと存じます」

昌「うむ、幸村、そのほうの考えはどうじゃ」

幸「さればお兄上のお言葉、いちおうごもっともとも存ぜられます

が、わが真田家は信玄公についで、太閤殿下の知遇もっとも深い家柄、武田家なきこんにちにおいては、豊臣家に報いるの道こそ、まこと武夫の道かと愚考つかまつります。このたびの密使が、たとえ石田の邪心よりいでたるにせよ、かりにも秀頼公のご判のすわったるご文書、勝敗はいかんともあれ、幸村は秀頼公のお味方いたすべきかと存じます」

と申し述べた。兄信幸と幸村の意見が、まったく食いちがっているから、昌幸も静かに目をつむって、じっと腕をくんだまま黙っていると、伊豆守信幸が、

信「お父上、お父上のご所存をおお聞け願いとう存じます」

昌「うむ、予も幸村と同じ意見じゃ、豊臣に恩顧あるばかりでなく、さんぬる天正十年三国越えにあたっては上杉にも義がある。……信幸、思えばそのほうの妻は、徳川譜代の臣本多忠勝殿の娘、また幸村、そのほうの妻は太閤殿下のお声がかり、大谷刑部殿の娘じゃ、これも浮世の因縁であろう。遠く歴史をひもとけば、かの保元の乱においても、六条判官為義公と、御曹司左馬頭義朝殿とが、敵と味方にわかれたためしもある。これぞ弓矢のならい、詮ないことじゃ。信幸、予と幸村はこれより上田に立ち帰って、石田方に味方をいたす。なんじはここにて徳川殿の指揮を得よ。父子のえにしもこれまでなるぞ……」

と、はらはらと涙を流したまえば、信幸もせきくる涙をとどめあえず、

信「父上、信幸はけっして妻のえにしに引かされて、徳川殿へしたがうものではございませぬ。海野小太郎以来の真田の名跡、これをば絶やしては、ご先祖に申しわけがありませぬ」

と、せつせつの思いを披瀝する。このときかたえにひかえたる左衛門佐幸村は、

幸「お兄上のおおせ、先祖の家名を末世に残さんとの思し召し、お家の嫡男としてまことにごもっともしごく、幸村、ご心中のほどお察し申しあげまする」

と、これまた涙とともに申し述べましたから、

昌「うむ、信幸……そのこころねは父も忘れはいたさぬぞ」と、にっこりとうち笑い、家来を呼んで酒肴の用意をいたさせ、

昌「いざ信幸、離別の盃を遣わす、父子兄弟、七生までの別れであるぞ。このうえは、戦場にてなんじとあいまみえん。すわそのときには、わが子たりともようしゃはいたさぬ、なんじも父と心得て、不覚なことをいたすでないぞ。あくまで徳川方へ無二の忠義をつくせ」

敵と味方に別れたりとはいえ、切っても切れぬが父子のえにし、伊豆守信幸は父の盃を受け、弟幸村が残りの盃を納めはしたが、さすがに名残りの惜しまれて、信幸は座を立ちかねまするようす、安房守昌幸公これをご覧ぜられて、

昌「信幸、いまさら未練がましきふるまい、急いで陣屋へ立ち帰り、なんじはなんじの道を歩め」

と、言葉をはげまして申しましたから、よんどころなく信幸は、すごすごと昌幸公のご前をさがる。これをば追って、立ちいでましたる左衛門佐幸村は、

幸「兄上しばらくお待ちくださりませ。それがし、考えまするに、このたびの合戦、上方の敗軍はうたがいなきところ、父上のお言葉、お気におかけなさらぬよう」というのは、父がたとえああいったからとて、戦場で父を討つようなことがあってはならぬという、幸村のこころぞえでございます。

信「なんじさように心得るなれば、なぜ徳川殿に味方するといわぬ。なんじが徳川殿に味方す

ると申すれば、父上のお心もかわりつろうに……」

幸「いやお兄上、幸村には父上のご心中、おおせのまえからわかっておりました。さればそれがしだけは父上に殉じ申したく、兄上は真田の家名のために殉じ、かく申す幸村は、豊臣の恩顧と父上のご心中に殉ずる決心、ご意見はご無用でございまする」

信「いかにももっとも千万、幸村さらばじゃ、父上のことをたのむぞよ」

と、兄弟ここに右と左に袂をわかち、伊豆守信幸は、陣前につなぎおいたる栗毛の駒にうちまたがり、まいちもんじにおのが陣屋へと馳せ帰りました。

孤城一つに天下の大軍を釘づけ

さて陣屋に立ち帰った伊豆守信幸は、叔父、隠岐守信尹ともはかって、ただちにおのが軍勢を引き連れて、ここを発足いたし、下野の小山へ乗りこみ、舅の本多中務大輔忠勝について、

信「このたび父安房守昌幸、舎弟左衛門佐幸村は、石田方へ加担のおもむきにつき、それがしは父と弟幸村に義絶をいたし、叔父、隠岐守信尹とともに、徳川殿お味方に参上いたしました」

と申しあげたから、すぐさま忠勝からこのことを、家康公に言上する。家康公にはたいそうなお喜びで、即刻信幸をご前に召され、

家「そのほう、父昌幸、弟幸村と義絶におよんで、徳川の味方いたしくれること、まことに満足のいたりである。以来なにごとも腹蔵なく……」

というので、脇差の下緒の結び目を切ってくだされた。これは以来懇意をいたし、けっしてうたがわないという印でございますから、伊豆守信幸も、おおいに面目をほどこして引きさがりました。

こちらは安房守昌幸と、左衛門佐幸村の御親子、その日のうちに犬伏を陣払いいたして、下野から上州路へとお乗りこみにあいなり、それより信州上田へと引っかえす。

さて上田に立ち帰った父子は、碓氷峠に砦を築き、いよいよ城の守りをかたくして、徳川の軍勢きたらばきたれと、満を持して待ち受けます。こなた徳川方におきましては、上方の旗上げに、おおいに驚きあわてましたが、ここに軍議をこらして会津の征伐を中止いたし、宇都宮に家康の次男、結城秀康をとどめて上杉へのそなえとし、家康公は軍を返して東海道から、二代将軍秀忠公は、中仙道から攻めのぼるということにあいなりました。

ここに慶長五年八月二十四日、宇都宮を出発した秀忠の軍勢は、潮のような勢いで、上田をさして押し寄せました。これにしたがう面々は、榊原康政、本多正信、酒井忠重、大久保忠隣など、譜代股肱の大将をはじめ、二十を数える諸大名におよび、伊豆守信幸も先陣をうけたまわって駈けむかう。その数およそ五万、なんの上田の小城一つと、もみにもんでひしめきたった。昌幸父子におきましては、城兵三千、いずれも一騎当千の強兵ばかりでございますから、得たりや応とけちらし、駈けなやます。なにさま神出鬼没の采配でございますから、関東方はさんざんの大敗北。秀忠もじだんだふんでくやしがったが、どうすることもできません。

こうして、荏苒日を過しておりますところへ、家康公からの急使で、関ケ原の戦機いよいよ切

迫、急いで上方へ馳せ参ぜよ、という御諚でございます。ここに無念の涙を呑んで秀忠公、

秀「ええい、かかる小城一つをも踏みつぶさいで、なんの面目あって父上にお目にかかれよう」

と、歯がみをしてくやしがったが、関ケ原に遅れては一大事、やむなくここは森忠政、石川康長、仙石秀久などの諸将を押えとして残し置き、みずからは関ケ原をさして、いで立たれましたが、上田城攻めに、あまりに日数をついやしたために、九月十七日、木曾の妻籠というところまでまいりますと、すでに関ケ原においては十五日に大合戦、徳川方のご勝利という早打ちでございます。秀忠公、

秀「南無三しまった。遅れたか」

と、これより昼夜兼行、もみにもんで美濃街道へおはいりになり、ようやく二十日に家康公の本陣に到着いたしましたが、合戦はすでに、徳川の大勝利におわったあとのことゝて、家康公のご立腹ことのほかはなはだしく、お目通りを許されない。そこで秀忠のさしぞえとして、つきしたがった榊原康政、本多正信の両将が、

両人「この罪は秀忠公にはこれなく、さしぞえのわれら両人にございますれば、願わくばわれらを罰せられ、秀忠公をばおとがめあそばされぬよう」

と、くれぐれもおわび申しあげましたから、家康公にもようやくお怒りを解かれたが、秀忠公のご心中はまことに無念千万。

秀「おのれっ、安房守父子め、やわかこのままにてはおくべきや。これよりひっかえして上田城を取りかこみ、にっくき昌幸父子をば、八っ裂きにぞいたしてくれん」

と、もってのほかのおいかりでございます。いっぽう、ここに伊豆守信幸におきましては、関

ケ原の合戦が、すでに徳川方の大勝利とあいなったうえは、父昌幸ならびに舎弟幸村、いかに智謀智略のあればとて、上田の小城一つに、天下の大軍を引き受けて、よく持ちこたえべくもあるべきや、と覚えましたから、

信「これはすこしも早く城を開かせ、父と弟の命を助けねばならぬ。たとえ義絶いたしたとは申せ、真実血をわけた父と弟、わが軍功にもかえて、この儀を嘆願いたそう」

と、家康公のご前にまかりいで、このおもむきを嘆願におよび、信幸の力をもって、かならず上田は開城いたさせるむねを、申しあげましたるところ、家康公には、下野小山このかたのことがありますから、さっそくご承知にあいなりましたが、

家「しかしこの儀は、秀忠がなかなか承知いたすまい。秀忠にもよう願うて見やれ」

というお言葉。そこで秀忠公のご前にこのことをお願いいたすと、前に申しあげたような次第でございますから、いっかな承知がありません。するとこのとき、家康公のおおせを受けた本多正信が、かげながら秀忠公に向って、

正「大御所さまのおおせられまするには、安房守父子は、軍術すこぶる名誉の者、二代さまふたたび上田へまかり越して、城攻めにおよびなば、この戦いはてまどるまじきものでもない。しかるときはかえって、天下大乱のもといとなるおそれあり。むかし千早の城にて楠木正成、鎌倉の大軍に取り囲まれながら、数ヵ月を持ちこたえているうちに、宮方の軍勢、四方にたちあがって、ついには鎌倉方の敗軍とあいなった。真田父子は小敵とはいえども、今楠木と異名あるものなれば、ここは遠きおもんぱかりをもって、上田を明け渡さすにしかず。いま伊豆守がいのちごいをさいわいに、承諾をいたして遣わせ……、というご内意でございます」

と申しあげたから、秀忠公も残念ながら、まことにごもっともなことゆえ、

秀「しからば城地を召しあげ、上田の地を退引いたすということで、助命いたして遣わせ……」

ということでございます。伊豆守信幸はおおきに喜び、これより信州上田へまいって、昌幸、幸村のお二人にお会いいたし、事の次第を落ちもなく申し述べて、ひとまず当城を立ちのかれるようにと、ご意見をいたされました。

もとよりご両人におかれても、上方勢が敗軍をいたし、石田、小西、大谷をはじめ、豊臣恩顧の諸大名が、滅亡いたしたとあれば、ぜひにおよばぬことと、覚悟いたしておりましたことととて、ひとまず当地を退散して、秀頼公のご成長を待ちたてまつるほかはないと、紀州高野山の麓なる九度山村へ、閑居ということにあいなりました。これはすわ合戦というときには、いつでも大阪へ入城が、たやすくできるよう、地の利を考えてのうえのことでございます。

ここで上田の城は伊豆守信幸に引き渡し、住み馴れた信州上田をあとにして、紀州九度山をさしていで立つことになりましたが、このときもはや幸村、三十一歳とあいなっておりましたので、昌幸公には、

昌「これよりのちは、予は後見の役をいたすによって、なんじにいっさいをまかせるぞ」

と、すべてを幸村におまかせにあいなりました。

用いざれば孔明たりともすなわち臥竜

さて上田の城を明け渡した真田父子、きのうまでは五万石の城主が、きょうは紀州高野山を目ざして落ちてゆく浪々の身の上。さぞやさびしくありつらんと見てあれば、さにあらず、譜代の家臣郎党、だれひとりとして欠ける者なく一千余人、隊伍をととのえ、えんえんとしてつきしたがってくる。幸村は涙とともにこれをかえりみて、

幸「そのほうどものこころざし、いまさらなんと謝するに言葉もないが、しかしいまや、無禄の浪人とあいなった幸村父子、こんにちかぎりそのほうどもに、ながのいとまを遣わすによって、いずかたへなりとも仕官をいたし、ゆくゆく身を立て、世に出るようにいたしてくれい」

と、まごころこめて優しくさとしたが、一同の者どもは首をふって、

一同「こはもったいないお言葉、かたじけなくは存じまするが、われら一同、いずかたへ参る心底も毛頭ございません。主君のおいでにあいなるところ、たとえ地のはて海のきわみまでも、お供をつかまつりとう存じます。もっとも浪人をあそばしたるご主君のことゆえ、米一粒、銭一文もちょうだいはいたしませぬ。われわれが働きまして、こんにちのなりわいを立て、ご奉公だけいたす所存。なにとぞどこまでも、お召し連れくださりまするよう、主君のご先途を、お見届けつかまつりとう存じます」

とあって、一人として立ちのこうという者がございません。昌幸公も、ともども双眼に涙を浮べられ、

昌「なんじらのこころざし、まことに喜ばしいが、浪人の身となって、かく大勢を召し連れるときには、なにか所存のあるようにて、世上の聞えもいかがと思われる。予はもはやこのままにて朽ち果てるとも、せがれ幸村は、一度は世に出ることもありつろう。そのときにはなんじら、早々に馳せきたって、幸村につかえ、忠義を励みくれまするよう、なんじらの心底、かえすがえすもうれしゅう思うぞ……」

と、かさねて申し聞かせましたから、一同もよんどころなく、

一同「されば、せめてご領地ざかいまでお供いたして……」

とあって、国境までお供をいたし、これより涙をふるって、しおしおと八方へ立ち別れました。

あとへ残りましたのは、岩千代あらため穴山小助、三好清海入道、おなじく伊三入道、猿飛佐助、根津甚八、霧隠才蔵、由利鎌之助らの十勇士をはじめ、腹心の者ども二十八人、これよりべつだんのお話しもなく、九度山へと到着いたしました。そこでここにささやかな邸宅をかまえ、田地田畑なども買い入れて百姓をいたす。なにさま、大力勇士の面々がそろっていますから、仕事のはかどることは面白いくらい。

また幸村は、自分で工夫した木綿紐を、雨の日、風の日などには、家来どもを相手にせっせと組んで、これを穴山や猿飛などに命じて、諸国へ売り歩かせる。この組紐は真田紐と呼ばれて、じょうぶでなかなかちょうほうなもの、こんにちなお、いろいろのみちに使われております

が、これぞ幸村の工夫になるところのものでございます。

幸村が、なぜこのようなものを工夫したかと申しますると、うわべは生計のためと見せかけながら、内実は天下の形勢を、うかがうための間者として、家来どもを物売りに仕立て、諸国大名の動静を、探るためのてだてでございます。かようにいたしておりまするうちに、翌年七月、奥方におかれては、玉のような男子をお生みあそばされる。幸村はじめ昌幸公のお喜びは天にも昇るばかり、大助と命名いたして、掌中の玉とお愛しになる。これぞ後年、真田家の最後をかざる、花の若武者、大助幸昌でございます。

しかしながら、満つれば欠くる世のたとえ、奥方浪江殿には産後の肥立ち悪しく、秋立つ風とともに、あわれはかなくなってしまいましたから、幸村の嘆きはひとかたならず、涙ながらに野辺の送りも手厚くおこない、それよりのちはなおひとしおに大助を愛でいつくしんで、その成長を楽しんでおられます。

さて左衛門佐幸村においては、昼間は家来どもを相手に、百姓、紐打ちなどをやっているが、夜ともなれば父昌幸とともに、一間に閉じこもり、陣法、城取、戦の駈引き万端にわたって、夜の目も眠らず工夫をこらし、念々ただひとすじに、豊臣の天下回復のために、肝胆をくだいております。

かくのごとくにして月日に関守なく、光陰まことに矢のごとしとやら、上田を立ちのいてより、星霜ここに十一年、慶長十六年とはあいなりました。

おりしもちょうど春のはじめのこと、ふとした風邪がもとで、わずらいついた安房守昌幸、ひましに病いは重るばかり、いまはあやうくさえもあいみえますから、左衛門佐幸村はじめ、家臣一同眠りもやらず手を尽して看病いたしますが、さらにききめも現われず、真赤な血を吐きまること数度、いまや命旦夕にせまるばかりの容体となりました。するとある日、昌幸公には幸村を枕もとへと呼び寄せまして、双眼に涙を浮かべたまい、

昌「いかに幸村、わが命数ももはや旦夕に迫った。これ天のしからしむるところ、ぜひによばん。ただ心にかかるは豊臣家の運命、この昌幸にいま三年の命があれば、奇計をもって必ず関東の大軍を打ち砕き、ふたたび豊臣の天下を回復して、故太閤のご恩に報いたてまつるものを……おしいかな天、わが命をちぢめたもう。肥後守清正殿すでになきこんにち、だれかわがごとく肺肝を砕いて、豊臣の天下を思う者あらんや」

と、英雄の心緒乱れて糸のごとく、さめざめと泣き崩れましたから、さすが左衛門佐幸村もしばし涙にくれておりましたが、やがて心を取り直し、

幸「お父上、ご病気はおもしとは申しながら、お心を静かにご養生をあそばしますれば、必ずご恢復をあそばします。もしまた万々が一、この世を去りたもうようなことがございましょうとも、不肖幸村、まかりありまするかぎりは、お父上のご遺志をつぎ、秀頼公をおまもりして、天下一統の儀を取りはからいまする……」

昌「いやいや、いかにそのほうが智謀にすぐれたりとは申せ、このことはなはだこころもとない。それについてわれ病床にあって、思いをこらすこと半歳、いまここに、天下の大軍を破るの計略を案じ出した。しかしこれをなんじに授くるとも、しょせん用いることはかのうまじくと思われる……」

と、うけたまわった幸村が、

幸「いかなる妙計にござりまするか、なにとぞご伝授をくださいまするよう、不肖なれども幸村、心を砕いて用い申すべく存じますれば……」

昌「いやいや、これぞ授くるとも益ないことである」と、思い入ったる父の言葉。幸村もさてはお父上、われを頼り少なきものと、おぼしめされているな、とはなはだ不興なおももちをいたして、

幸「さてさてお父上、よくよく不甲斐なき幸村と、おぼしめしでもござりましょうが、幸村とてもすでに齢不惑、父上の子をもって任じておりますものを……」と、うらみの語気を含んで申し述べましたから、安房守はびっくりして、

昌「これこれ幸村、なんで父がそのほうをさようなことに思おうぞ。あっぱれ父にまされる器量人物、すこしもこれをうたがいはいたさぬ。しかれども、用いざれば孔明たりともすなわち臥竜、玄徳三顧の礼をもって、よくこれを用いたればこそ、昇天飛竜の大軍師とはあいなったのだ。この安房守は甲州以来、信玄公の信任をかたじけのうし、おおよそ弓矢に励むほどの者なれば、この安房守を知らざる者なく、また怖れざる者もあるまい。

もしあすにても合戦おこらば、大阪の城中に乗りこんで、予が軍配を取って下知いたさんには、たれかわが指図にそむく者があろうや。しかるところそのほうは、智謀武略ともに父にも勝るとはいいながら、世の人々は、いまだそのほうの真価を知らぬ。たとえ大阪へ入城いたし、そのほう軍配を預かるとも、大野、渡辺らのともがら、予のごとくなんじの言を用いることはかのうまい。用いざるときは、いかなる明智も画餅にひとし。これをもって教うるとも、無益なりとは申したのである」

幸「おおせごもっともにございます。しかしながら、父上ただいまのお言葉を胸に体し、大阪の城内の面々、よくそれがしの言を用いまするよう、思慮つかまつりまするあいだ、なにとぞその妙計お授けをくださいまするよう……」

昌「さほどまでに申するなら、ともかくもいちおう、申し聞かせることといたさん」

と、ここで寝床の下より取り出したのは、大きな絵図面、これを幸村の前へひろげさせまして、

昌「幸村、ここをいずれと心得るな……」

幸村がこれを見ると、広々たる野原にして、近辺に小山が起伏している。北にあたっては高嶺そびえ、界隈一帯に小松林が多くございます。そのところへ白旗を立てた軍勢、数万が押して参りまするありさま、また西のかたにはその十分の一とも見える小勢が、赤旗をば押し立てて、陣地をかまえているといった絵図面……。

昌「これはいずこと心得る……」　幸「されば、美濃国の関ケ原かと心得まするが……」

昌「いかにも関ケ原だ。われら大阪に入城いたさば、このところまで出馬いたして、関東勢を迎え討ち、大阪方の勝利たらしめんとするが、なんと幸村、そのほうの工夫をもって、この計略をいかんと見るな」

幸村は絵図面をにらんで、しばらく案じていましたが、

幸「父上、ときにとって背水の陣などと、申すこともございますが、多くは大河を前にし、あるいは難所を扼するなどいたして敵を防ぐが、これ小勢をもって、大軍を砕きまする場合の常道、しかるにこのところは、広々たる野原にして四方に道あり、敵大軍なれば八方よりの包囲を

受けて、鬼神といえども、策のほどこしようとてはないかと存ぜられまするが……」

昌「うむ、いかにもその通りじゃ。さりながらここに幸村、さきほどより申したところの、名のおこなわれたる者と、名のおこなわれざる者とのちがいがあるのじゃ。かくいう安房守昌幸が武略、よく徳川の恐るるところなれば、いまこのところに予が布陣いたしたとせば、深き謀計あってのことならんと、徳川においてはうたがいの気を生ずるが必定、うかつには攻めかかって参るまじ。

ことわざにも一将の狐疑よりして、万卒の乱れとなるということがある。そのとき猿飛、霧隠をはじめ、忍びの者を放って流言をいたさせ、なんのたれがしは大阪の味方、なにがしは裏切りをいたし、真田と内通をしているなどと、さまざまの方便をもってあざむくにおいては、疑心暗鬼、いよいよかれはこれをうたがい、これはかれをうたがい、互いにうたがいあうこととなろう。そのときよく変に応じて、夜討をかけ、また朝駈けをなして、ひともみにもみこまば、さてこそとあって戦う勢いもなく、たちまち敗走せんこと、火をみるよりもあきらかなり。

もしかようにいたして、関東勢を尾州辺までも追い返さんか、これを手本として太閤旧恩の面面、大阪へ心を寄するは必定、さるときは勝利うたがいなしじゃ。しかれどもなんじではこの謀計、敵も味方もそこまでは信ずまいによって、いかんともあいなるまい。いわば中身のいかんを別として、老舗と新店との違いとも申すべきものじゃ」

と、安房守の一言に、左衛門佐幸村、

幸「いかにも父上のおおせ、肺肝に銘じましてございます」

といったが、さすがに安房守の一言、のちにいたってぞ思いあわされることがございます。か

くて安房守昌幸、ついに慶長十六年八月四日、六十四歳を一期として、冥土黄泉の客とはなられました。左衛門佐幸村はじめ家臣一同、悲嘆の涙にくれましたが、さていたしかたもございません。遺骸は遺言によって甲冑をよろわせ、兵仗を持たせて人知れず紀之川へ葬り、法号は正誉干雪居士と申します。

さて幸村におきましては、父のこころざしをついで、大阪へ忠を尽さんと、日夜心をくだき、せがれの大助もようよう十二歳とあいなりましたので、学問、兵法、軍学等をひたすらに励ましまする。幸村は父昌幸に別れましてのち、月代をのばして総髪とあいなり、名も伝心月窓とあらため、時きたるをあいまっておりましたところ、はたして父昌幸が察しの通り、関東、関西がお手切れとあいなって、左衛門佐幸村父子、いよいよ大阪城へと乗りこみ、その智謀勇胆、武名を天下に、輝かすこととあいなるのでございますが、この辺でちょっとひといき……。

関所の前でにわかの仮病

こちらは徳川家康、関ケ原の合戦で、石田その他が滅びましてのちは、旭日昇天の勢い、日に日にご威勢はさかんでございますが、これにひきかえ豊臣家は、摂河泉三ヵ国において、六十七万七千石という、諸侯同様のお蔵入り、その勢いは日に月に衰えるばかりでございます。

しかし加藤清正をはじめ、片桐且元などという無双の忠臣が、秀頼公を輔佐いたしましたか

ら、秀頼公にはことなくご成長、ここに十五歳とあいなりました。秀頼が十五歳になれば、家康は天下を豊臣に返すという、約束がございますから、大阪方の人々は、約束通り天下を秀頼にゆずるだろうと、みな心待ちに待っていたが、なにさま深く腹にたくんだ家康、そんな事は知らぬ顔の半兵衛、すこしも天下を返しそうなようすがない。そればかりか茶の湯にことよせて、まず忠臣清正を毒殺してしまいました。

また家康は、秀頼のご母公淀君が、派手好きでみえぼうなのをうまくおだてあげ、せっかく太閤殿下が軍用金にと、城中の金蔵へたくわえておいた、莫大な黄金を、大仏建立だのなんのかのといって、惜しげもなく使い捨てさせ、残り少なくなったころを見はからって、今度はさまざまの無理難題を吹きかけ、苦肉の策をもって片桐且元を、とうとう隠居するのやむなきに、立ちいたらせてしまいましたから、もうこうなれば豊臣家は、翼をもがれたこすずめ同然、まことに孤城落月の哀れさでございます。

ここで家康は、わが目の黒いうちに、一日も早く秀頼を滅ぼして、徳川の天下の礎をかためようと、じつに抜け目のない計画を立てて、じりじりと大阪方をいためつける。さあ、怒ったのは秀頼をはじめ大阪方の人々。

秀「さては、家康のためにうまうまとはかられたか。このうえは、天下の要害たる大阪城に立て籠り、関東と一戦をまじえて、天下を取り戻さねば、亡き父上、太閤殿下にあいすまぬ」

と、秀頼公もついに決心いたされ、いよいよ合戦のしたくにとりかかった。そこで、八方へ触れを出して、諸国の浪人をお招きにあいなったが、別して真田左衛門佐幸村に対しては、秀頼公じきじきのお使者を立てることとあいなりました。

ところが徳川方におきましては、清正亡く、且元隠居いたしてしまったのちは、恐るべきは左衛門佐幸村ただ一人、もし幸村が大阪に入城いたさんか、難攻不落の大阪城に立て籠って神算鬼謀をめぐらすにちがいない。さようなことにあいなっては、徳川家の前途もあやういと思いましたから、紀州和歌山の城主、浅野但馬守に命じて、九度山の近くに関所をかまえ、出入りの者を厳重にあらため、幸村の進退をじっと監視させることといたしました。

かような次第でございますから、うかつに使いをやるわけにはいかない。だれに申しつけようかというときに、進み出たのが真野豊後守、この人は大阪七手組の大将を勤める、立派な人物でございます。

豊「なにとぞこの使いは、拙者へおおせつけを願いとう存じます」

と、秀頼公の御教書をちょうだいにおよんで、巡礼姿に身をやつし、御教書をば笈の底に貼りこんで、見あらわされぬように用心いたし、高野山を目ざして出立におよびました。豊後守が九度山の近くへ参りますと、なるほど厳重な新関をかまえ、往来をきびしくあらためております。

豊「ははあ、これはうかつなことはできないな。真田殿をおたずね申すなどといえば、必ず怪しまれるにちがいない。いかがいたしたものであろう」

と、しばし思案にくれておりましたが、やがてなにを思いついたか、ポンと小膝を一つたたくと、足元もあぶなげに、よろよろと歩き出したかと思うと、関所の前までくると、「うーむ」とばかりうめいて、ばったり倒れてしまった。びっくりしたのは関所の役人ども、

○「おいこれ、近藤氏、巡礼男が倒れたではないか……」

近「うむ、なにさまよろよろと歩いて来たと思ったが、さては栄養失調かな……とにかくその

まま捨ててもおけまい……」

そこで役人二人が近寄って見ると、しきりに胸のあたりを押えて、うめき苦しんでいるから、

近「これ巡礼、どうした」

豊「はい、にわかのさしこみで、腹がいたんでなりませぬ。うーむうーむ……」

近「なに、腹が痛む……山本、貴公なにか薬を持っていないか……」

山「うむ、三年前の梅干がある。こいつをこめかみに貼ったらどうだ」

近「頭痛じゃあるまいし、そんなものがきくか。それ、ちかごろはやりの抗生物質……」

まさかそんなものがあるわけのものじゃございません。そのうちにかの巡礼、手足をばたばたさせて、いよいよ苦しみがはげしくなってまいるようす。これには役人も手のほどこしようがなく、ほとほと困じはてているところへ、向うからやって来たのが、四十五六とも見える一人の男、総髪の髪の毛は肩うつばかり、鼠木綿の単衣に丸ぐけの帯をしめ、手作りともおぼしき、枇杷の木の木剣をたずさえている。武士にもあらねば、百姓でもないといういでたち、これぞ伝心月窓こと、真田左衛門佐幸村でございます。

幸村はきょうしもふもとの橋本村まで、碁敵の仁辺川角兵衛をたずね、いつもの通り碁を楽しんでの帰り道。見ると一人の巡礼姿の男が、関所の前でのたうちまわって苦しんでいるから、どうしたことかと足をとどめて見ると、どうもこの巡礼、いやしい身なりをしているが、人品骨柄、じんじょうの者とは見えない。こはふしぎな巡礼よと思いながら、

幸「お役人衆、いかがいたされたのじゃな」

近「おおこれは真田殿、ただいまこれなる巡礼が、にわかの腹痛と申してこの苦しみ……、なにかお薬のお持ちあわせはござらぬかな」

幸「ははあ、それはおきのどく、それがしがちょっと見て進ぜよう……」

幸村は医術の心得もあったから、まず巡礼の手を取って脈を計って見ると、ふしぎなるかな少しも乱れがない。それから眼中を調べて見たが、これまた一点の曇りもかげもみいだせない。ただいきだけがいたずらに苦しそうに見えるが、これはどうも、心からの病人の息づかいとは違う。

幸「ははあ、この巡礼、仮病をつかっているな。なにかわけあって、関所役人をたばかろうとしてに違いない……。さりとせばこの幸村に、秘密の所用ある者やも計られぬ。関東、関西、お手切れと伝えられるこんにち、もしやわれをたずねる、秀頼公の密使にてはあらざるか」

と、しきりに心のうちで考えている。こちらは真野豊後守、

豊「さてはこれぞ、わがたずねんとする真田殿であったるか。天道われをあわれんで、めぐみをたれたまわったに違いない。あなありがたしかたじけなし……」

と思ったが、ここが大事のせとぎわと思ったから、なおも「うーむ、うーむ」とうめき苦しんでいる。幸村は仔細にからだを見おわって、

幸「ははあ、これは雨に打たれ、夜露にぬれての旅の疲れ、そのうえ食あたりなどいたしたと見える。このままいたしておくときには、命にかかわる。袖すりあうも他生の縁とやら、さいわいそれがしの家には薬の用意もござれば、お役人衆いかがでござろう、この病人だれぞに申しつけて、それがしの家までお連れくだされば、幸村介抱をしてつかわそう」

幸村、これは仮病だなどといっては一大事、また関所役人に怪しまれてはならぬから、連れて

ゆくなどとはいわない。連れてくれば面倒を見てやるとは用意周到、役人どもはまた、こんなところで巡礼などに死なれては、あとのしまつがやっかいだと思ったから、

山「真田殿、それはまことにお情けぶかいこと……」

と、心中ひそかに喜んで小者に申しつけ、巡礼を背負わせて真田の屋敷まで送らせる。こちらは真野豊後守、計略がこれほどうまく図にあたろうとは、夢にも思わなかったから、その喜びはたいへんなもの。小者の背中で、いつかうめき声が鼻唄にかわり、ついにはジャズ・メロディーになったといいますが、こいつはまさかうそでしょう。

わが家に立ち帰った幸村は、奥の一間に床をとって巡礼を休ませ、家の子に申しつけて、白湯よ薬よと介抱いたさせるうちに、豊後守旅の疲れと安堵のおもいから、ついぐっすりと寝込んでしまった。どのくらい眠ったかはっと目が覚めると、すでに夜に入ったと見えて、枕元に行燈がともされ、床下に秋虫のすだく声が聞える。

豊「おおこれは、思わずよう寝入ったわい」

と、ひとりごとをいっていると、すたすたとこの居間へ、だれか来る足音がする。やがて間の襖がさらりとあいて、入ってまいったのは別人ならぬ左衛門佐幸村、豊後守は思わず起きあがって居ずまいを直そうとすると、

幸「いや、どうぞそのまま」

といったかと思うと、幸村はぴたりと下座にすわって、両手をつかえ、

幸「お姿は巡礼にてござれども、まことはかく申す幸村に対し、秀頼公御使とこそみたてまつります。なにとぞ御用の筋、お申し聞けを願わしゅう存じます」

と申し述べたから、真野豊後守もいまさらのように、幸村の慧眼にびっくりぎょうてん。

豊「さすがは音に聞く真田殿、いかにもそれがしは秀頼公御使としてまいったる、真野豊後守でござるが、いかにしてこれをば見破りたまいしぞ……」

幸「されば貴殿の人品骨柄、いかに巡礼に身をやつしたもうとも、隠しても隠され申しましょうや。なおまた、関所の前にてのにわかのご発病、それがし脈を案じ、眼中を調べまいらすれども、いささかの乱れも曇りもこれなきは、これ畢竟、関所役人をたばかるための、仮病とこそはお察し申した。ここにまいって関所役人をたばからんとするは、これ幸村に御用あってのかたに違いない。幸村への御用と申せば、これ必ず、大阪よりのご使者と存じた次第でござる」

と、たなごころをゆびさすような明断、豊後守も、

豊「ご明察、ただただ恐れ入ってござる」

と、これより笈の底に秘めたる、御教書を取り出して、幸村に渡しましたから、幸村はあらためて含漱手水に身をきよめ、つつしんで披見いたしますと、軍師として大阪へ入城をお待ちするという、懇篤なお言葉と、五十万石をくださるというお墨付、幸村はつつしんでこれをおしいただき、

幸「数ならぬ幸村に対し、かほどまでの御思召し、幸村粉骨砕身、きっとご奉公をつかまつります。ついては近日入城をつかまつる心得、このだんよろしくご披露を願いあげまする」

とお受けにおよび、それより一子大助幸昌をも招いて、ここに三人、その夜は語り明かし、翌日豊後守は病いも治った風に見せかけ、難なく関所を越えて、大阪へ立ち戻りました。

うへっ、ぶっそうなご家来衆

こちらは左衛門佐幸村、さっそく穴山小助をはじめ、三好兄弟、猿飛、霧隠、由利など、例の十勇士の面々を集めて、それぞれ命令をあたえ、諸国に分散いたしております家来たちへ、触れを出される。

なにしろ真田紐の行商で、諸国を歩きまわらせたのはおもてむき、実はこうして諸国、諸大名のようすを探るとともに、散り散りになっている家来たちとも、いつもうちあわせをさせてあったのだから、すわ旗上げとなると、たちまちのうちに勇み立って集まってまいります。

その家来どもを、ひとしれず河内、和泉あたりに待たせておいて、いよいよ慶長十九年九月十七日、左衛門佐幸村はただ一人、鼠木綿のどんつく布子を着用いたし、例のごとく不器用な、手作りの木刀を腰に打ちこみ、小牧鹿毛という逸足ではございますが、手入れもいたしませんから、まるで小荷駄馬同様にあいなっている、これに打ち乗りまして、供もつれずぽっくりぽっくりと、山をくだってまいります。例の浅野家がかまえた関所へさしかかると、よそながらつねに幸村の動静をみまもっております番士ども、

番「これはこれは真田殿、お出かけでござるか。こんにちはどちらへ……お気ばらしに和歌山の赤線区域あたりにでもまいられますかな……」

いや、これはうそだが、幸村くみしやすしと見て、つまらぬ無駄口をきいてからかっている。幸村はそしらぬ顔で、

幸「はい、高野山へ参詣してまいりまする」

番「ははあ、それはご信心なことでござるな。気をつけていかっしゃい」

幸「はい、後刻またお目にかかります」

と、そのまま幸村は、ぽっくりぽっくりいってしまう。そのうしろすがたを見送って番士ども、

甲「どうだいご同役、あのぼけたかっこうは。頭は火のつくようながっそう頭、着物なんぞは乞食の親分というところ、いやはや、三文の値打ちもない。あれでももとは信州上田五万石の城主、真田安房守のせがれだというのだから、人間落ちぶれると性根まで腐ってしまうものと見えるな」

乙「あっはっはっはっは、あれでも一時は、今楠木などという評判だったが、どうやらあの辺が地金かな……あんな者を、わざわざ関所を設けて見張るなどとは、ばかげたはなしでござるのう」

と、燕雀いずくんぞ大鵬のこころざしを知らず、うしろゆびをさして笑っております。

さて幸村は、番士どもが笑うのはさらに耳にもかけず、山のふもとの橋本の宿までまいりますと、ここに日ごろ懇意な、仁辺川角兵衛という商家がございます。前にも申しあげた通りこの仁辺川は、幸村とは互先という、まことによい碁敵、ここへぶらりとおとずれました。

角「おおこれは真田さま、よくお出かけで」

幸「いや、このあいだ打ちわけになっている勝負を、ぜひともつけようと思ってまいった。さあ、なにはともあれ、勝負とまいろう」

角「へへっ、これはまたわざわざ山からおりて、返り討ちに逢いにこられたか。どれ、さっそく一局……」

と、憎さも憎しなつかしの相棒、たちまち碁盤を取り出して、パチーリパチリと打ち始めた。双方しばらく夢中で石を戦わせていると、にわかに宿内がわーっという大騒ぎ、往来をかけ歩く大勢の足音が、入り乱れて聞えてきたから、驚いた角兵衛、

角「ほほう、何事が始まったかな。だれかおもてへいってようすを見てこいよ」

といっているところへ、召使いが一人飛んでまいりまして、

召「だ、だんなさま、た、た、たいへん……」

と、まっさおな顔をして、おもてをゆびさしながらどもっているから、なんのことだかちっともわからない。

角「六助、落着け、どうしたというのだ」

しかりつけられてようやく落着いた召使いの六助、

六「だんなさま、たいへんでございます。ただいま、大和の国五条の城主、松倉豊後守さまが、関東のご下知で真田さまを討ち取らなければならんと、同勢三千人を引き連れて、押し寄せてまいりました。真田さまが、ここにおいでなさることが知れたら、だんなさまたいへんなことになります」

聞いて角兵衛、いままでの落着きはどこへやら、でんぐり返りを打って驚いた。名前が角兵衛

だから、でんぐり返ったわけでもあるまいが、おろおろ声で、

角「そりゃたいへんだ……。真田さま、お聞きの通りでございます。見つかったが最後、あなたもわたしも、どんなことになるかしれません。早く、どこへなりと、お逃げいただきとう存じます」

幸「ばかを申せ角兵衛、この幸村はたかが一人の素浪人、その幸村一人を討たんといって、一国の城主が、二千三千という軍勢を、繰り出すはずはあるまい。第一この幸村は、関東将軍のお憎しみをこうむり、おとがめを受ける覚えはかつてない。おおかたなにかのまちがいであろう。まあまあ落着いて、この一番を打ちおわろう。さあ角兵衛、この石をかように切るがなんといたす」

角「真田さま、そんなのんきなことを……切るの押すのの段じゃございません。これはわたしの負け、あなたさまのまる勝ちじゃによって、はようどこへなといってくださいませ」

幸「ははあ、そのほうが負けで幸村がまる勝ちと申すか。これはさいさきのよい言葉を聞いたもの、しからば角兵衛、この碁は幸村の勝ちとして打ち納める。さて角兵衛、ながらくのあいだそのほうに懇意をいたしたが、実はこんにち、よそながら暇乞いにまかりこした次第じゃ。不肖なれどもこの幸村、このたび大阪よりのお招きにあずかり、軍師としてこれより大阪へ、入城いたす首途である」

と、はじめて真実を打ち明けられて、

角「ええっ、それではあなたさまが、大阪城の軍師に……それはえらいことになりました……。それにいたしてもまあそのお姿、鼠木綿のどんつく布子で、ぼかぼか頭、いやはやだらしのない

軍師でございますな」

幸「いや、これではいかんともしかたがない。これより支度を整えて、堂々と入城をいたす。ついてはその支度場所に、角兵衛、実はそのほうの屋敷を選んでおいたのだ。そのため昨夜来、家来ども四五人を、当家へつかわしておいてある。いや、いろいろと家来どもが厄介にあいなってかたじけないぞ」

角「へっ、ごじょうだんをおっしゃってはいけません。あなたさまのご家来など、一人もお見えではございません」

幸「いやいや、裏の土蔵の中にいるはずじゃ。どれ、呼び出して支度をいたそうか」

と、悠然と縁ばなへ立ちあがった、左衛門佐幸村が、ポンポーンと拍手を打ち鳴らしますると、はるか向うの土蔵、扉が内からあいて姿を現わしたのは、これぞ忍術の名人、猿飛佐助をはじめ、小手脛当の姿もりりしい四五人の荒武者、鎧櫃や打物などをにないまして、ドカドカッと出てまいりましたから、角兵衛これを見て驚いたの驚かないの。

角「うへーっ、こりゃあどうもぶっそうなご家来衆じゃ。土蔵の錠前をどうしておあけなすった。なにか失くなった物でもありゃあしませんか」

と、胆をつぶしている。やがて鎧櫃のふたをはらい、取り出しましたところの武具、早くも幸村、ざっくりとこれを一着いたし、小手脛当を厳重になし、太刀を佩いて采配をたずさえ、くだんの鎧櫃の上へ、どっかりと腰うちかけたるありさまは、いままでの幸村とは打ってかわっておちがい、いやもう、威風あたりを払って輝きわたり、あっぱれ大将軍も、かくやと思うばかりでございます。角兵衛もいまは碁敵などといって、心やすくつき合っていた人とも覚えず、思わずそこにすわりこんで、「ははっ」と面形をつけて平伏いたしましたから、

幸「いや角兵衛、いかにもながらくのあいだそのほうには懇意をいたし、種々世話にあいなった段は、幸村、生涯忘れはいたさん。これは幸村がてごしらえにいたした木刀、平素腰をはなさざる秘蔵の品であるが、今生のかたみにそのほうに取らせる。堅固で暮せよ」

と、自分の削りました枇杷の木刀を、角兵衛にあたえまするると、角兵衛はこの木刀を押しいただいて、

角「ありがとう存じます。子孫に伝えて末代までの宝といたします……。なにとぞみごとなご勝利、お祈り申しあげまする」

と大喜び。幸村は猿飛はじめ家来達をしたがえて、ここを立ちいでると、門前につないだ小牧鹿毛には、いつかすっかり手が入れられて、立派な鞍がおいてある。幸村これにひらりと打ちまたがれば、駒も勇んでひひーんと一声、いななく声も勇ましく、左衛門佐幸村かいぐる手綱もあざやかに、見送る角兵衛に別れをつげ、橋本の宿をあとにして、これより紀伊見峠をさして、乗り込んでまいりました。

ここにはすでに真田大助幸昌をはじめ、諸方より馳せ集まった真田の同勢数百人、六連銭の旗を秋風にひるがえしながら、幸村を迎えている。幸村これを打ち見やって、

幸「ああ勇ましいかな、真田六連銭の旗風よ、父上生きておわしまさば、なんとおおせありつらん。なんじら約を守って、よくは馳せさんじてくれたるぞ。このたびわれは、右大臣家のお招きにより、大阪城へ入城いたす。関東の大軍、たとえ百万ありとても、みんごとこれを打ち破り、天下をふたたび豊臣家のものと、なしたてまつるの覚悟じゃ。それにつけても頼むは、

なんじら一同が忠節、上田このかたの、わが真田の武勇を示してくれよ」

と、まごころあふれるあいさつ。一同もただ喜び勇んで忠誠を誓い、えいえいおうとあげたる鬨の声は、山もくずれんばかりのありさまでございます。

さて幸村は駒の頭を立て直し、小手をかざしてはるかに、九度山の方を打ちながめまするに、いましも松倉豊後守の同勢三千余騎、紀之川を打ち渡り、まいちもんじに九度山なる、幸村閑居に押し寄せて、十重二十重に取り囲み、わーっとばかりに、鬨の声をばあげたるようす。

幸「あはははは、松倉の腰抜けども、いまに胆をひやすであろうぞ」

と、なおもながめておりまするに、先手の者ども、どどっとばかりに表と裏から、なだれを打って乱入したが、こはそもいかにこはいかに、武器はもちろん、家財道具にいたりますまでなにもない、もぬけのからの空家でございます。いや片付いたの片付かないの、かまどの下の灰もなければ、縁の下のぬかみそもないというしまつ。一同顔見あわせてあきれかえっております。すると一人の軍兵が、床の間の天井から、一本の縄がぶらさがっているのを見つけて、

○「はてな、みょうなものがあるぞ。なんのまじないだろう、ためしに引っぱってみよう」

と、面白半分にその縄を引っぱったからたまりません。とたんに、ガラガラガラッ、ドドドンッと天地も砕けるような大音響。これぞ幸村が、床下、天井裏へしかけておいた、自慢の地雷火、一時に大爆発をいたしましたから、ぎゃぎゃっとばかりにあまたの軍兵ども、幸村の閑居もろとも、木っ端微塵となって天空に吹きあげられ、五体ばらばらにちぎれて、血の雨降らせて死に果てました。その人数およそ二三百人ばかり。

豊「やあ、敵に計略ありと見えるぞ。油断するなっ」

松倉豊後守、あわてふためく軍兵どもを、必死となってしかりつけたが、いまとなっては六日の菖蒲十日の菊、もうまにあいません。

このとき、この地雷火の爆発を合図として、四方の山々峰々に、にわかに六連銭の旗がむくむくっと現われたかと思うと、幾百幾千とも知れぬ人数が、わーっとばかりに鬨の声をあげて、だんだんに攻めきたりまするようす。これを見るなり松倉豊後守、馬からころがり落ちんばかりにびっくりぎょうてん。

豊「やあやあ、さては真田の十面埋伏の計略におちいったるぞ。八方を取り囲まれぬうちに、早々引きあげよ」とばかり、ほうほうの体で三千の軍兵、だれ一人踏みとどまる者もなく、命からがら先を争って逃げ出しました。紀伊見峠の上で、これをながめた幸村、にっこと打ち笑って、

幸「おお首途の血祭り、さいさきがよいぞ。それ者ども、押し出せっ」

と、持ったる采配を、ばらりと一振りいたしまするとたんにドドンドドンと打ち鳴らされる押し太鼓、隊伍堂々として真田の同勢、一糸乱れず、大阪城をばさしていでたちました。ところで、四方の山々峰々の軍兵どもは、何者かと申しまするとこれぞふだん幸村が、恵みをほどこして手なずけておいた、百姓、木樵ども、紙旗や紙の馬印を押し立てて、空声をあわせて鬨の声と見せかけ、敵の肝魂を奪った偽兵の計でございます。

度肝を抜かれた両重役

真田の同勢は威風堂々、その日は三日市へまいって宿陣におよび、ここよりさっそく使者を城中へ送って、

使「幸村儀お召しによって、いよいよ明十九日をもって入城つかまつります」

と申し入れましたから、秀頼公をはじめとして重役の面々、おおいに喜びましたが、重役どものうちでも思慮の深い、木村長門守重成、真野豊後守の両人は、秀頼公のご前へまかりいでまして、

重「左衛門佐幸村は、古今無双の大軍師、この者が入城いたしまするうえからは、百万の味方を得たよりも心強き限りにございます。さりながらかれ幸村、長らく浪々いたしておりまするによって、ご城内の面々、自然とかれをあなどり申すべく、さようなことにあいなっては豊臣家の一大事、なにとぞ入城の節は、じゅうぶんに礼をあつうして、万人がかれをうやまうようにいたさねばあいなりませぬ」

と申しあげましたから、秀頼公もきこし召して、

秀「もっともことである。さればいかがいたさばよろしきや」

豊「その儀はまず明日、幸村当城へまいりまする節に、上さまご名代として、歴々の重役二人ほどを、城外まで出迎えとして、おさしつかわしにあいなりますよう……」

秀「いかにももっともの次第……」

と、ここで家柄権勢ともに、大阪城内でもっとも幅をきかせている、織田有楽斎長益と、大野主馬治房の両人を、秀頼公ご名代として、出迎えの役をおおせつけられた。ところが日ごろから傲慢なこの両人、ご前をさがると顔をしかめて、

有「ふふん、大阪城の重役たるわれわれが、素浪人の真田ごときを、城外まで出迎えるとは片腹いたい。しかし君命なればひもない。一つ幸村めをへこまして、最初からわれわれの威勢を見せつけておこうではござらぬか」

主「さようさよう。真田めはながの浪人くらしにて、さぞや尾羽打ち枯らしてまいることでござろう。われわれ両名は立派な支度をいたし、大勢の供まわりを引きつれ、かれに赤恥かかして、今後、頭のあがらぬようにいたしてつかわそうではござらぬか」

腹黒いやつらで、かように相談をきめまするとと、いよいよ十九日のあさがた、ことさらに美々しくいでたちまして、阿倍野村というところまでで ばり、さあ来いきたれと、幸村のやって来るのを、いまかいまかと待ちかまえております。ところが待てども待てども幸村はやって来ない。さあ、すっかりあきあきした両人、なま欠伸をかみ殺して、

主「有楽殿、どうしたことでござろう。いまだにまいらぬところを見ると、路用の工面がつかず、出立しないのかもしれ申さんぞ」

有「さようさよう、なにさま慶長五年このかた、十四年間の浪人ぐらし、とりわけここ二三年のデフレ財政、首がまわらんのも無理はあるまい。ことによると待ちぼけかな。どうもつまらぬ

目に遭ったものだ」

と、立って見、居て見、または伸びあがったりして、不平たらたら、待ちくたびれている。やがてひるもすぎ、八つ（午後二時）もまわったがまだ来ない。業を煮やした両人、いよいよ引きあげようかと思っている折から、物見に出しておいた家来があたふたと飛んで来て、

○「申しあげます。ただいま真田殿、向うの街道よりお乗りこみでございます」

主「ははあ、さてはやっとまいったか。どれどれ」

と、道ばたへ家来どもを整列させ、威儀を正してあいまつところへ、はるか南の街道から一隊の人馬が、隊伍堂々として進んでまいります。

有「おや大野氏、さすがは左衛門佐幸村、浪人ながら、隊伍を整えてやって来るではござらぬか」

と、すこし拍子抜けして待ち受けるところへ、まっさきに鉄砲二十挺、弓二十張、長柄十五筋、堂々たる隊伍に金唐人笠の馬印、六連銭の旗をひるがえした一隊、ひきいる大将は、黒糸縅の鎧に三枚錣の兜をいただき、馬上にて悠々と乗りこんでまいりますから、織田有楽斎と大野主馬の両人、心のうちで舌を巻いて、

主「いやはや、真田のやつめ、ながながの浪人ぐらしというに、この隊伍の豪勢さはどうしたことじゃ。まるで城持大名の武者振り同様だ。これはばかにできんぞ」と、最初とは大いに見込みも違いましたから、床几を離れて、そのところへ、ずかずかと進み出て、ていねいに一礼いたし、

有「これは右大臣家のご名代として、織田有楽斎、大野主馬の両人、お出迎えにまいってござる。こんにちのご入城、さてさてご苦労に存じたてまつる」

と、いんぎんにあいさつにおよびまするとこのとき黒糸縅の馬上の大将、鷹揚に会釈をなして、

○「これはこれは、ご城内お歴々のお出迎え、痛みいりましてございまする。拙者は左衛門佐幸村の家来、海野三左衛門と申しまする者、主人はいずれあとよりまかりこしまするはず、軍中でござれば馬上ごめん……」

と、あいさつを返してそのまま悠然といってしまった。あとに残った有楽斎と主馬の両人、腐ったの腐らないの、閻魔が塩辛をなめたような顔を見あわせ、

主「ちぇっ、いまのは真田ではない家来か。いや、つまらんやつに頭をさげた。どう考えてもばかばかしい」

有「いや、これは取って返しのつかんことをいたした。しかし家来があれくらいなら、主人はもっと立派でござろうな。真田と申すやつは、どうもう気味のわるい人物でござる」

と、怒ったりあきれたり、感心したりしている。ところへまたもや、一隊の人馬が堂々と繰りこんで来る。

これまた鉄砲、弓、長柄の物の具をたずさえた徒歩立ちの武者二三百人、型のごとくに隊伍をととのえ、中軍をうって騎馬武者十余名、なかにもひときわ目立って大将とおぼしきは、紺糸縅の鎧、烏帽子形の兜をいただき、緋の采配をたずさえておりまするから、

主「やあ、今度こそは本物だ。どうだこの武者振りの立派なことは……」

有「まったく真田はたいした代物だ。どれ、出迎えの口上を述べ申そうか」

と、二人並んで、うやうやしく進み出ると、

主「これは左衛門佐殿、こんにちのご入城、まことにご苦労に存ずる。われわれ両名においては大野主馬、織田有楽斎、いずれも秀頼公ご名代として、このところまでお出迎えにまかりいでました」と、いんぎんにあいさついたしまするとと、くだんの大将、ひらりと馬より飛びおり、かぶれるところの兜をぬいで、

○「これはこれはお歴々のお出迎え、ご苦労に存じたてまつる。拙者めは真田左衛門佐幸村が家の子穴山小助と申す者でござる。幸村はあとよりまかりこしまする。軍中なればこれにてごめん……」

といい捨てたかと思うと、そのままひらりと馬に打ちまたがって、とうとうとうといってしまった。いや、両人とも魂を天外に飛ばして驚いた。

主「なんだと、あれも真田ではない、やはり家来か。うーむ、残念至極……」

有「食うや食わずのやせ浪人と、見くびったのがこのほうのあやまり、なにしろどうも真田というやつ、恐ろしい男であるわい」

と、驚いているところへ、五人一組、七人一組、あるいは十人一組となって、長持、小荷駄が、ぞくぞくと打ちとおる。中には一人で大筒を二つもかついでゆくものがあるから、いよいよ驚いたのは織田、大野の両人、

有「いや、真田の家来には、恐ろしい力持ちが大勢いる。あの筒を張子のようにかるがるとかついでゆく」と、肝をつぶして見ているが、これはまったく幸村がながらくのあいだ九度山において張りあげた、張抜きの筒でございますから無理もないはなし……。なにしろ乾ききった街道

を、多くの軍勢が、どんどんどんどん過ぎてゆくから、砂煙りがのんのん立ちあがる。両人汗をかいているところへ、頭からこれを浴びるから、目も口も鼻もあいていられないというありさま。かくと知ったら、悪いいでたちで来るんだったとくやんだが、いまさらおっつきません。

しかるところへ、さらに南のかたより繰りこんで来る、五六百にもあまると思う同勢、これぞ真田にまちがいあるまいと、両人首を伸ばして見てあれば、威風あたりを払って、馬上ゆたかに打たせたる大将の姿が目に入った。そのいでたちはと見てあれば、緋縅の鎧に金銀の金物かがやき渡り、金の鍬形うったる兜をいただき、黄金づくりの太刀をば佩いて、金覆輪の鞍を置き、かいぐる手綱もあざやかに馬足を鳴らし、とうとうと乗りこんでまいります。織田、大野の両人、このさまをながめて、さすがは真田左衛門佐幸村、あっぱれ無双の名将ぶり、今楠木とはことわりなるかなと、大いに恐れ、かつは恥じいりまして、最初とはまったく料見が違ったから、両名小腰をかがめまして、

主「あいや、真田左衛門佐幸村殿、われらは右大臣家のご名代、織田有楽斎ならびに、大野主馬の両名でござる。貴殿こんにちのご入城を、秀頼公にはことのほかご満足におぼし召され、おおせをこうむってわれら両名、これまでお出迎えにまかりいでましてござる」

と、いとていちょうに、あいさつを申し述べましたるときに、馬上の大将、やおら兜を脱いで近侍に持たせ、馬上に片鐙をはずしたから、両人これを見ると、こはそもいかに前髪立の若武者、両人またもやあっとばかりに驚いて、

有「おやおや、またまちがったか。こうのべつに違った日にはたいへん、……ああわかった。ながいあいだ、紀州の山奥で、のんきに暮していたから、あんなに若くなったんだ。それにして

も少々若くなりすぎたぞ……」

二人は心中おだやかならず、怪訝の顔をしていると、片鎧をはずしたかの若武者、

○「これはこれはお歴々のかたがた、遠路お出迎え大儀に存じまする。拙者は左衛門佐幸村の嫡男、大助幸昌でございまする。軍中なれば馬上ごめんをくださるよう」

といって、そのまま馬上ゆきすぎようとするから、あいた口のふさがらぬ有楽斎、

有「あいや大助殿、左衛門佐殿には、このあとよりまいられまするかな」

大「いや、それがしがしんがりでございまするゆえ、父幸村儀は、もはや城内に参上つかまつったはずと存じまする」というあいさつ。両人はまるで狐につままれたような気持、すっかりしょげかえって、出かけるときの勢いはどこへやら。

有「なんだ、家来やこせがれに滅法ていねいな頭をさげて、かんじんの幸村が先に入城したと

は、まったくもっていいつらの皮だ。さるにても左衛門佐幸村、よくもこの同勢を集めたものよ」

と、両人とも舌を巻いて恐れおののき、ほうほうの体でここをば引きあげました。

突っ張りすぎた欲の皮

こちらは左衛門佐幸村、考えるところあって、わざと大助や家来たちと別れ、ただ一人やってまいったのが、大阪方の執権職大野修理治長の屋敷。ぶらりとこの玄関へ立って、

幸「頼ーむ。お頼み申す」　○「どーれ」

と、出て来た取次ぎの若侍、見ると見すぼらしい修験者風の男だから、よもやこれが大軍師、真田左衛門佐幸村とは夢にも思わない。ぞんざいな口調で、

○「ふーむ、どこからまいったな」

幸「てまえは紀州根来の、大法院と申す修験者でございます。大野殿はご在宅にござりまするかな」　○「いや、まだご下城にあいならん」

幸「さようか。では少々待たせていただくことといたそう。ご案内をねがいたい」

○「これこれ、待たせていただくといって、人の家へずかずかあがるやつがあるか」　幸「いや、大野殿にはよくご存じの者、いっこうにかまわん」

と、のこのこ玄関をあがりこんでしまったから、取次ぎの者もしかたなく、使者の間へ案内する。しかし昔も今もみなりが粗末だと、どうも扱いがよくないもの、茶も出さなければ、煙草盆も持って来ないという、まことにひどい扱い。幸村はいまに見ろどうするか、驚かしてくれようと、澄ましております。

ところが、なにしろ近いうちに、関東と合戦が始まろうというまぎわだから、大野の家中の者どもも張り切っている。この使者の間に隣りあった詰所で、大勢の若侍が、たがいに腰の物を見せあって、だれそれの大刀は業物だとか、なにがしの脇差は鈍刀だとか、わいわい騒いでいる。なかにも山田新助という男、なかなか鑑定が自慢でございますから、一同の腰の物を見くらべて、いいの悪いのといって、しきりに鑑定をいたしておりましたが、ふと、一人腕組みしている幸村に目をつけると、

新「なんとおのおの、あそこにいる根来の山伏な、どうも差している大小が、よさそうに思われる。というのは、昔根来寺には僧兵がいて、大いに武がさかんだった。自然いい腰の物などがたくさん伝わっている。あの山伏がさしている大小、どうもよさそうに思われる」

と、しきりに幸村のほうを見ては、ひそひそしゃべっている。幸村早くも目をつけて、

幸「ははあ、あいつこの大小に目をつけて、せしめようというのだろう。いまに驚かしてくれよう」

と、なに食わん顔をしていると、案のごとく新助、仲番の者にいいつけて、にわかにお茶だ火鉢だと、ちやほやしだしたから、いよいよそれに違いないと、心中おかしく思っているうちに、山田新助にこにこ笑いながらやって来て、

新「いや、さぞお待ちどおでござろう。ほどなくお上もおさがりにあいなる。いましばらくおひかえなされ」

幸「いやもう、待たせるとも待つ身になるなと申すとおり、待つというのは、なかなか退屈なものでござりまする」

笑いながら、おだやかに相手になっていると、山田新助そろそろ口火を切り出して、

新「ときにその許もうけたまわったであろうが、関東、関西お手切れ、いよいよ合戦ということになりそうじゃ。そこで武器刀剣のたぐいは、とても値上りをいたし、平素は一両ぐらいの品が、昨今は四五両もいたす。根来というところは、昔から由緒のあるところ、いい刀剣類が沢山あるというが、その許の腰の物なども、さぞ立派な物でござろう。どうだな、一つ拝見さしていただけまいかな」

よい値で買ってやるから、見せろといわぬばかり。幸村もいい退屈しのぎと、

幸「さようでございまするか、いや、よいか悪いかは存じませぬが、先祖から伝来の品、相当の値で売れまするものなら、なあに山伏など、中身は竹光でもけっこうゆえ、この刀を手放してもよろしゅうございまする。ではひとつ、ご覧くだされたい」

新「しからば、ちょっと拝見を……」

と、取りあげてみると、こしらえははなはだどうも粗末、柄糸は木綿の真田紐で巻いてあり、鍔は大きな角鍔、たいしたものとも思われません。ただ目貫ばかりは、小田原征伐のみぎり、太閤から拝領したときのままの、五七の桐の金無垢の紋を入れた立派なのがついている。しかし新助はこしらえから見て、「ふふん、これは鍍金かも知れんな」と思いながら、さてすらりと鞘を

払って見ると、あっとばかりに眼をみはった。夏なお寒き氷の刃、地鉄のしまり鋭のようすから、いやもう、言葉もおよびがたいたいした名刀でございます。

しかし悲しいことには山田新助、生まれてこのかた、こんなすばらしい名刀は、見たことがないから、だれの作だか鑑定をすることができない。

新「うーむ、うーむ」

と、しきりにうなっていましたが、やがて、

新「どれ、銘を拝見いたそう」

といって、目釘を抜いて刀心を見ると、相州鎌倉の住、五郎入道正宗という銘がある。いや新助め、びっくりぎょうてんした。しかしこいつずるい男だから、すぐになに食わぬ顔をして、

新「大法院、これには正宗と銘があるが、まったく本物ではない。いまどき世の中に本物の正宗だの、お化けなどはあるものではない。これは真赤なにせものだ。だがしかし、よくできている。では、脇差のほうを拝見しよう」

と、脇差を取りあげてみると、新助、また見当がつかなくなってしまった。心のうちで、「ほほう、大刀に劣らぬ業物だが、正宗でもなし、だれの作かな」と思いながら、またもや柄をはずして刀心を見ますと、彦四郎貞宗の銘がございます。

いや新助、驚いたのなんのって、この修験者め、とんだ物を差しているわい。こいつはうまくごまかして、買い取らずんばあるべからず。と、ずるいことを考えました。

新「いや大法院、これも貞宗という銘があるが、まずりっぱなにせものだ。しかし大小ともに、なかなか器用に似せてある。あまり上手な似せぶりだによって、にせものと承知のうえで、拙者

求めたいと思う。いくらなら手ばなす気だな」

幸「ははあ、にせものでございましたか。いやにせものでも本物でも、てまえにとっては、犬おどしに持っておりまするもの、値段次第でお譲り申します。いくらでお買い取りくださいますな」

幸村、心のうちでおかしくてたまらないが、わざと知らぬ顔でたずねると、山田新助、しめたと思う心は顔にも出さず、

新「うむ、なるほど。さらば清水の舞台から飛びおりる思いで、ぎりぎり十両と奮発しよう。どうだ大法院」

正宗の大刀に貞宗の小刀、これに金無垢つきの目貫、それをたった十両とは、よくも踏み倒したものだと、さすがの幸村もあっけにとられたが、

幸「ほほう、十金でお求めくださるか。それは近ごろかたじけない。しかし宿元へ戻って、差し替えを調えましたうえで、ご相談をいたしましょう」

新「よし、さらば十両で手をしめよう。それ、しゃんしゃんしゃん」

いい気なやつで、正宗と貞宗の両刀で、おおもうけをしたつもりでおります。ところへ大野修理治長、下城にあいなりました。「お帰り――」という声に家来一同、玄関先へ出迎える。すると幸村も、使者の間をのっそり立ちいでて、玄関式台の正面へぬっと立ちはだかったから、驚いたのは大野の家来ども、

家「これこれ大法院、そんな所へ突っ立ってはならぬ。ひっこんでいさっしゃい」

けれども幸村は知らぬ顔、やがて玄関をあがろうとする修理に向って、

幸「めずらしや修理殿、左衛門佐でござる」

と呼びかけたから、びっくりした大野修理、

修「おお、これはこれは真田殿、ようこそご入来、こんにちお城入りとうけたまわり、城内にてお待ち申しておりましたるところ、ご子息大助殿、ならびにご人数ばかりのご入城ゆえ、上さまはじめ一同、お案じ申していたところでござった。まずまずこれへ」

と、手をとらぬばかりにして、奥の一間へ案内する。これを見て一同の者は、びっくりぎょうてんした。とりわけ驚いたのは山田新助、

新「ひぇっ、あれが真田幸村殿だったか。道理でどうも、たいへんなものを持っていると思った。値をつけなければよかったが、十両などと踏み倒したことは、生涯の失策、いかがなさん」

とあって、生きたる心地もございません。

奥座敷では修理と幸村、相対してさまざまな物語り。修理はそのあいだに、さっそく城内へ使いをやって、幸村到着のことを報告いたしましたから、秀頼公もたいそうなお喜び、わざわざ旅の疲れを慰める、お使者を差しつかわされ、その夜の宿所の用意もととのえ、明日、修理同道で登城せよ、との上意でございます。幸村はありがたくこれをお受けいたし、

幸「されば明日、あらためて参上つかまつります。こんにちはこれにておいとま……」

と、いとまをつげる。玄関へ出てまいりまするに、家来一同、平伏してのお見送り。幸村、山田新助が顔をあげないで、小さくなっているのをながめて、

幸「山田氏、後刻それがしの宿所まで、大小の代金をお届けくだされたい。その節、品物をお渡し申す」

と、たしなめのひとことをちくりとやったから、

新「うへーっ。め、め、面目次第もございませぬ」と新助、眼を白黒して冷汗をぬぐっている。

さて明くれば、慶長十九年九月二十日、真田左衛門佐幸村においては、大野修理の案内で、威儀を正して登城をいたし、表御書院の間へ伺候いたしまするると、ほどなく秀頼公にはご出座あそばされ、ご座所まじかへ幸村をさしまねかれて、

秀「かねてそのほうの英名は聞きおよぶ。父太閤の旧恩を忘れず、この秀頼を助けんと味方に馳せ参じくれたること、過分のいたりじゃ。このたびの一戦には、ひとえにそのほうの武略を頼みに思うぞよ」

とおおせられ、ご定紋のついたる、緋の陣羽織をくだしおかれました。幸村はつつしんで平伏をいたし、

幸「身不肖なる幸村に対して、かたじけなきただいまのお言葉、必ず身命をなげうって、ご運の開かせらるるよう、ご奉公を尽くしたてまつります。恐れながら幸村が軍配におまかせくださらば、ひとたびは豊臣の御代につかまつらんこと、たなごころのうちにございます」

と、忠誠を誓います言葉の頼もしさ。秀頼公も大いに喜ばれ、ここに君臣水魚の契りを固めるおさかずきをばたまわり、城中の一同にも、軍師としてお引きあわせにあいなりました。

苦肉に報いる苦肉の策

さてその翌二十一日は、ご城内千畳敷の広間において、関東の大軍を引き受け、いかに合戦いたすべきかについての、大評定をおおせいだされました。

ところが困ったことには、この大阪城中には、秀頼公のご母公、淀君という婦人がおられて、これがたいした権勢、事ごとになにかと口を出したり、指図をいたされる。その淀君におべっかをつかうのが、大野道犬、同じく修理、主馬、織田有楽斎なんどという佞臣ばら、これが淀君の威光をかさに、古参を鼻にかけて、なんにでも出しゃばる。

いよいよ軍議評定とあいなりますと、まず第一に口を切ったのが大野道犬、一膝乗り出しまして、座中をきっと見まわし、

道「差し出がましゅうはござるが、当豊臣家にとって一大事の軍評定、存意のあるところを申すも、主家を思う拙者の微衷のことゆえ、ご無礼の段はひらにお許しを願いたい。さて、拙者つらつら考えまするに、当城は故太閤殿下、心をこめてお築きなされたる天下の名城、ことに兵糧矢弾の準備もじゅうぶんでござれば、まず城中に立て籠って敵を疲らせ、そのうちには故殿下のご恩を思って、返り忠をいたす者もござろうから、そのときこそ城中より打っていで、事を一挙に決するが得策と心得まするが、おのおのにはいかが思し召されますや」

と、いと誇り顔に申し述べました。するとこのとき幸村におきましては、にやりとうち笑って、

幸「大野殿のご意見、いちおうごもっともとは存じまするが、およそ古今の合戦のためしを見まするに、保元、平治のその上よりいたして、守って勝利を得たることはほとんどございませぬ。まず勝利は敵の機先を制するにあり、攻撃は最上の防備とも申すべく、これぞ軍略の奥義にござります。いかに当お城が天下の名城なりとは申せ、守るのみにてはいつかは落城は、まぬかれぬところと存ぜられます……」

と、これよりいたして、父昌幸とともに、練りに練ったる軍略を、とうとうと述べ立て、

幸「よろしく関ケ原まで兵を出して、関東の同勢をここにおびきよせ、しかるのちはかくかくうんぬん……」

と、父昌幸が臨終の遺言に、さらに幸村が苦心の軍略を加え、立板に水を流すがごとくに申し述べましたから、聞き入る諸将はあっと感嘆いたし、

一同「げにも真田殿の妙計、感じ入ってござる」

と、異口同音に申しましたから、さすがの大野道犬も、顔を真赤にいたして、下うつむいてしまいました。秀頼公もまことにもっともと思し召され、

秀「うむ、幸村の

申すところ、まことに時宜に適せる軍略、さっそく出陣の用意におよべ」

と、勇み立たれた。するとこのとき、

○「あいや、しばらくしばらく」

と、声をかけた者がございますから、なみいる諸将、こは何者なるかとそのほうを見まわすと、これぞ表面に豊臣家の忠臣を装いながら、その実、徳川方の間者たる、小幡勘兵衛景憲という、軍学者でございます。勘兵衛、秀頼公の意気込みを見て、これはたいへんなことになりそうだ、と思いましたから、

勘「あいや、ただいまの軍師のお言葉にござれど、関ケ原はわが豊臣家にとって、はなはだ不吉なところでござる。かような不吉なところをもって、お家の浮沈にかかわる、合戦の場とすること、勘兵衛まことにその意を得ませぬところ、ことには当方より討って出るということ、われより戦を好むに似て、世人のそしりのほどもいかが……よってそれがしといたしては、先刻よりの大野殿のお説、最上無二の良策とこそは心得まする」

と、いかにももったいぶって申し述べた。さあこうなると大野道犬、すっかり元気を取り戻して、

道「いや小幡殿、貴殿は甲州流の名だたる軍学者、貴殿のご同意によって、道犬おおいに、意をつよういたしてござる……」

などとやり出したから、せがれの修理、主馬の兄弟や、織田有楽なんどという臆病ども、有「いや、小幡殿のおせ、まことにごもっとも……」

なにもわからないくせに、とんだ賛成意見をぶち出すしまつ。するとこのとき、ご母公の淀君

におかれては、

淀「これ秀頼殿、ただいまも大野、小幡の申すとおり、この城はお父君、太閤殿下の築かれた難攻不落の名城、この城に立て籠って敵を防げば、なんのあやういことがありましょう。進んでご出馬などとは、みずから墓穴を掘るにひとしいこと、けっしてこの母が許しませぬぞえ」

と、まなじりを逆立てて鶴のひとこえ。ここでせっかく張り切った、秀頼公のご出馬も沙汰やみとなり、幸村父子が多年心魂を傾けた妙計も、ついにめちゃめちゃとあいなってしまいました。

左衛門佐幸村は天を仰いで長嘆息におよび、後藤又兵衛はじめ七手組の人々も、しょせんこの小人佞臣どもがいてはと、もはや一言も発する者がございません。いよいよここにご籠城と決って、その日の評定は、退散をいたしました。

ここに左衛門佐幸村は、いまさらに父安房守の遺言に思いあたり、父安房守昌幸存生いたして、当城内へ乗りこんだならばと、いちいち父の残した言葉が胸にこたえ、悲嘆の涙にくれるばかりでございますが、しかたなくなく籠城と決心いたし、

幸「よしこのうえは、はなばなしく一戦して、関東勢の肝っ玉を取りひしぎ、かつは佞臣ばらに目にもの見せてくれよう」

と、ここに地の利を選び、大阪城の南、小高いところにみずから縄張りをいたして、出城を築き、ここに立て籠って、関東の大軍をむかえ撃つの計画を立てました。この出城は真田丸と呼ばれ、のち、いくたびとなく関東の大軍を、めちゃめちゃにうちしりぞけた要害でございます。

お話しかわって関東では、駿府におられる大御所家康公、松倉豊後守をもって、幸村をば討ち

取らせようとしたが、世の常ならぬ智略の権化、左衛門佐幸村のこととて、事の次第やいかがあらんと、うち案じておりますところへ、浅野、松倉両家より早打ちの注進をもって、左衛門佐幸村、大阪へ入城をいたしたというしらせでございますから、

家「南無三、さてこそ取り逃がしたか。よし、このうえはわが計略をもって、幸村を大阪城内の者どもからうたがわしめ、かれ幸村めの軍略を用いざるようにいたせば、千人の真田、万人の幸村が大阪にあればとて、なんの恐れることがあろう」

と、そこは古狸といわれるほどの大御所、たちまち一計を案じて、幸村の兄信幸とともに、関東方に味方している、叔父の真田隠岐守信尹を呼び出し、

家「そのほうの甥、左衛門佐幸村、このたび大阪へ入城いたしたる由にうけたまわる。かれのごとき大軍師を失うは、いかにも残念である。いまにも予の味方にきたらば、旧領信州上田の城主にいたし、十五万石をあておこなわんと心得る。そのほう、これより大阪にまいり、よくよく事のわけをさとして、わが味方に引き入れるようすすめてまいれ」

隠「ははっ、ありがたきおお せ……。しからばさっそく大阪へ馳せさんじ、上意のおもむき申し聞かせて、すみやかに召し連れまかり帰るでございましょう」

と、人のいい隠岐守、すっかり喜んでお受けをいたし、すぐさま大阪さして発足いたしました。

左衛門佐幸村におきましては、出丸の城普請、夜を日についで急いでおりまするところへ、関東より上使として、叔父隠岐守信尹がまいったというしらせ。はて、叔父上にはなんでまいったのであろう。なにしろ対面におよんで、ようすをあいたずねようと、本城へ対しても、このむねお届けをいたし、城内へ通して、

幸「叔父上にはなんの御用あって、わざわざおいでにはなられました」

隠「されば、このたびまいったのは余の儀ではない。大御所家康公より、かくかくのおおせをうけたまわり、そのほうによく事のわけを申し聞かせて、関東へは召し連れんとしてまいったのじゃ。そのほういかに張良、孔明の妙術をつくすとも、勝敗すでにはじめより定まったる合戦、早々こころざしをあらため、関東のお招きにしたがい、家名をかがやかし、美名を後世に残すがよかろう」

と、まごころ面にあらわして、幸村へすすめます。幸村はこれを聞いて心中に、

幸「さてさて叔父上はよくできたお人だ。結構人はばかのうちというが、どうもちと人がよすぎる。あの古狸に一杯のせられて、おおまじめですすめにくるなどとは、少しおめでたいにもほどがある。これぞまさしく大御所が、幸村にはふたごころありとのうたがいを、城内の者に起させるための策略に違いない。よし、さらばこの計略に乗ったと見せて、まんまとこの裏をかいてくれん」

と、もとより明智の左衛門佐幸村、はやくも一計を思いつきまして、隠岐守に向い、

幸「叔父上、まことにもっておおせのおもむき、幸村、肺肝に徹してございます。それがし、義によって秀頼公にお味方はつかまつりましたが、いかにも大阪城内は不和多く、しょせん敗軍はまぬかれませぬ。この上はすみやかにこころざしを改め、関東にお味方をつかまつりましょう。さりながらいったんかく入城いたして、一方をあずかるいまの身の上、かるがるしくお受けもいかがと存じますれば、いずれあとより使者をもって、ご返答つかまつります。なにとぞ大御

所公へのご前体、叔父上よりよろしくおとりなしを……」

と、まことしやかに申し述べたから、隠岐守信尹もおおきに喜び、

隠「そのもと、さような心底なれば、一家のさいわい、先祖への孝行、しからば吉左右の返答をあいまつぞよ……」

と、天にも昇るばかりのお喜び。ここに堅く約束をして、隠岐守は道を急いで駿府へ立ち帰りました。さて幸村は、隠岐守をあざむいて帰し、ひごろの望みを達すべきはこのときぞと、心中おおいに喜びました。いずれ使者をもって返答をいたすといったのは、刺客をもって大御所を、討ち取ろうという考えからで、これは容易ならぬ大事。

何者をつかわそうかと、ややしばらく考えていましたが、相手は名に負う老巧明智の家康、尋常一様のものでは成就はすまい。よろしく家康に油断をさせ、側近く進み寄ることのできるものでなければならぬ。しかりとすればせがれ大助よりほかに、このことをおこなわしめるものはない。

われ秀頼公の御為に、一人の子を捨てて、大御所だに討ち取るにおいては、諸大名の心もここに動いて、たちまち味方に馳せさんずるは必定……。一人のせがれの命を惜しんで、天下の大事をあやまってはならない。そうじゃそうじゃと、うちうなずいた左衛門佐幸村、さっそく大助幸昌を、このところに呼び寄せました。

大「お父上、なに御用でござりまするか」

幸「おお大助、そのほうの命をこの父にくれぬか。いや、秀頼公の御為に、そのほういさぎよく死んでくれぬか……」

と、思いいったる父幸村の言葉。大助はこれを聞いて、驚くかと思うとさにあらず、年歯わずかに十五歳とはいいながら、さすがは父の名をはずかしめぬ大助幸昌、

大「お父上、弱年とは申せそれがしも父上の子、豊臣の御為、天下の御為とあらば、なんの命を惜しみましょう」

きりりと眉をあげて、決心のほどを示しましたから、

幸「うーむ、よくぞ申した。大助、近うまいれ」

と、幸村はわが子を膝元近く招き寄せて、うち明けたのは刺客の密命、善悪ともに生きては帰らぬ死出の使者。大助これをうけたまわって瞋する色もなく、

大「お父上、お眼識にかなってこの大役、身にあまる大慶に存じます。かく申す大助、一命を捨てて首尾よくこの大役を、果してご覧に入れまする」

莞爾と笑って見上げる父の顔、これをばじっと見つめた左衛門佐幸村、さすがに猛き鉄石の心も、張り裂けるばかりでございます。とりわけ幼くして母に死別し、父の手一つで育て上げたるこの大助、人にすぐれたあっぱれ器量の若者を、先立たせるこそ残念ながら、これぞ武門のほまれ、嘆くは愚痴と心で心を取り直し、

幸「おお勇ましいかなただいまの一言、大助よう言うたぞ、必ずともに心いたして仕損じまいぞよ。さらばこれより出立の用意をいたせ」

大「かしこまってございまする」

と、ここに大助においては、ただちに発足の用意におよびましたが、どこまでも細心周到なのは左衛門佐幸村、叔父隠岐守がたずねてまいったことは、城内のともがらはみなこれを知ってい

る。しかるにいままたせがれの大助を、関東へつかわしたと知れたなら、大野父子のともがらなど、いかような讒言をかまえて、われをおとしいれんとするかわからない。そんなことはとんとかまわんが、千丈の堤も、蟻の一穴から崩れるということがある。これがために回天の大事を、逸するようなことがあっては残念、だれか忠義の人に、わが心中の秘密を話しておこうと、ただちに城中へ使いをやって、招きよせたのは木村長門守重成。

幸「さて長門殿、余の儀でもござらぬが、このたび関東大御所の命を受けて、わが叔父、真田隠岐守が、拙者を関東の味方に引き入れんと、これまで拙者をたずねてまいった。さりながらこれ家康が、拙者をおとし入れんとする深き計略と存ずる。されば拙者はこの計略の裏をかき、返り忠をば誓って、せがれ大助をかの家康の許へつかわし、機をうかがってただ一突きに家康めを、刺し殺させる計略でござる。

しかし城中には、大野父子をはじめ、佞臣ばらのあまりに多く、君のご前に、いかような讒言をいたそうやもはかられぬ。よって後日のために、この計略を貴殿のお耳に達しおき、こと万一の場合には、証を立てていただきたいと存じ、わざわざお招き申した次第でござる……」

と、心底ここにうち割っての話し。聞いて長門守重成、

重「ああ驚きいったる真田殿のご心中、最愛のご子息大助殿をば、ゆきて帰らぬ、死出の使者にお立てなさるとは……。重成なんと、申しあげる言葉もござりませぬ」と、感きわまってはらはらと落涙する。左衛門佐幸村は、

幸「いや、われわれ父子の身命は、秀頼公にお捧げ申してありつるもの、戦場で捨てる命も、敵の城中へ乗りこんで、死する命も同じご奉公、なんのせがれの一命、惜しいことがござろう。

長門殿、なにとぞ幸村の苦衷、ご賢察をたまわるとともに、はかりごとは密なるをもってよしといたす。万一のことあるまでは、ご他言ご無用に願いたい……」

と、深謀遠慮、しかも父子一世の別れにあたって、涙一滴おとさぬ幸村の心底を推量いたし、さすが長門守重成も、涙とともにいとまをつげて立ち帰りました。

おのれ家康、覚悟におよべっ

さて、こちらは駿府へ立ち帰った、真田隠岐守信尹、さっそく家康に目通りをいたして、幸村の返事を伝えまするると、

家「うーむ、幸村がそれほどたやすく、こころざしをかえるとは心得がたい」と、心中早くもうたがいを抱いたのは、さすがに百練千磨の大将軍。

家「おおきに大儀であった、ゆるりと休息いたせ」

といって、何気なく隠岐守をさげると、そのあとですぐお召しになったのが、天海大僧正。

家「このたび真田幸村をはからんと、隠岐守をつかわしたるところ、幸村さっそくに承知との返答。察するところかれ予が心中を察し、かえって予をはからんとする、計にてはあらざるかと思う。そのほう易を立てて占ってみよ」

天「かしこまりましてござる」

と、ここで天海僧正が易を立てたところが、水雷屯というよくない卦が出た。天海はしばらくうち案じておりましたが、

天「これは君の御身の上に、なにかわざわいが生じまする卦面、しかしあとがよろしいから、このわざわいはおのがれあそばすが、くれぐれもご用心が肝要にござります。天海察しまするに、真田が表向きの使者を立て、君にご対面のときに臨んで、君を害したてまつらんなどという、はかりごとをめぐらしおるやも計られません」

家「うむ、予もおおかたはさように心得る。よしよし、委細心得おくぞ……」

と、これより真田のおとずれを、あいまっているところへ、ほどなく幸村の使者として、せがれの大助幸昌が、ただ一人まいったと聞いて、さすがの家康も小首をかしげた。

家「はて、どうも合点がいかぬことじゃ。天海の易の面には、予を害さんとする、くせものがまいると出たというに、せがれの大助はまだ、十四五歳の前髪と聞きおよんでいる。かかるこせがれをもって、予を害さんとすべきはずがない。してみると隠岐守への返事は、かれ幸村の本心に違いない。さればこそ、たった一人のせがれをつかわしたのであろう。いや、天海の易も根っから当てにならん。……」

あたるも八卦、あたらぬも八卦と、家康すっかり天海の易をかるく見た。さすがに左衛門佐幸村が、この大役を果し得るもの、せがれ大助のほかはあらじとみきわめたのは、恐れいったる明察でございます。家康公においては、

家「よしよし、さっそく目通りを申しつけろ」

と、すぐ目通りへ呼び出させようとした。するとお側にひかえた大久保彦左衛門が、

彦「恐れながら真田幸村は、父安房守に劣らぬ智謀の者とうけたまわる。このたびせがれを使者として差しつかわしたるは、なにか深きたくらみのあらんも計りがたく、たとえ幼弱の者たりとも、かるがるしくご前へ召さるるは、いかがかと存じまする」

と申しあげたが、家康公、鼻の先でふふんと笑って、

家「いやいや、いまだ前髪の真田のこせがれ、これを恐れたとあっては、かえって真田のために笑われるぞよ」

と、少しも用心をいたしません。そこですぐお目通りということになり、案内につれて大助幸昌、少しも臆するところなく、ゆうゆうとご前まぢかに進み出ました。家康がその姿をご覧になると、当年わずかに十五歳というが、身の丈抜群にして眉目ひいで、威あって猛からず、さすがは信州上田の城主、真田安房守昌幸が孫、日本無双の大軍師、左衛門佐幸村がせがれとして、まことにふさわしい若武者。

家「いかに大助とやら、使者の儀、大儀であるぞ。幸村なんと心決したるか、すみやかにそのむねを申し述べよ」

このとき大助、はっと平伏いたして、

大「恐れながら父幸村儀、かたじけなきご上意をばいただきましたるうえからは、すぐさま関東へ馳せさんずべきでござりまするが、まずご奉公のてはじめに、人の驚く大功を立てたくと申しおりまする」

家「うむ、奉公のてはじめに、大功をと申しおるか。して、その大功とはいかなることであるな」

大「ははっ、この儀は壁に耳ありのたとえ、密々に言上つかまつりたく、なにとぞしばらくのあいだ、お人払いの儀を願い上げたてまつります」

家康公これを聞し召して、

家「いや、その心配は無用じゃ。いまこの席に連なる者は、ことごとく予が譜代の家臣のみ、少しも苦しゅうない。心おきなく申し述べてよろしいぞ」

と、つぎの言葉をうながしている。大助このとき心中に考えたが、これはとても人払いなどといっても、一人でも立たせるきづかいはない。さればすきをうかがって飛びかかり、ただ一突きに刺し殺すよりほかはない、と思案しまして、

大「しからばご前近く進み、ひそかに言上つかまつります。ごめんっ」

といいながら、ツツツツッと前へいざり出したから、側にひかえた大久保彦左衛門、

彦「これ、ひかえろ大助、ひかえろひかえろ」

と、大声でしかりつけたけれども、かねて覚悟の大助幸昌、その言葉などには耳をも貸さず、大御所の前近く進み寄ったと思うや、いつのまに取り出したか、父より授かった千手院村正の短刀、抜く手も見せず立ちあがり、

大「おのれ家康、覚悟におよべっ」

と、大喝一声飛びかかった。家康公、いや驚いたの驚かないの、「あっ」といって立ちあがろうとしたときに、そこがこのかたのご運の強いところ、自分で自分の着物のすそを踏みつけて、どうとばかりにころがった。大助は思わず宙を突いて、

大「しまった、突き損じたかっ」

と、歯がみをかんでふたたび飛びかからんといたした折から、この体を見たお側の人々おおいに驚き、

○「おのれっ狼藉、くせものなり」

と、一度にどっと立ちあがり、ばらばらっと大助を取り巻いた。このまに家康公はコロコロコロコロ、とうとう奥へ逃げこんだのではない、ころがりこんでしまった。このとき近習の近藤角之丞、手捕りになさんと、大手をひろげて飛びこんだ。

大助おおいにいかって、持ったる短刀さっと真向から突いたから、さすがの近藤角之丞、左の肩先をざくりと突かれて、血煙り立ててぶっ倒れる。つづいて山口勘六、これまた組まんとするところを、胸板目がけて突きをいれたから、これまた血へどを吐いてくずおれた。

大助もはやこれまでなりと、血走る眼に八方をにらんで、飛鳥のごとくに突き立て突き立て、飛びこえはねこえ、死物狂いで暴れ出したから、手傷を負うもの数知れず、いまは大勢取りかこむといえども、どうにも取り押さえることができません。

するとこの場へかけつけたのが、本多出雲守忠朝、この人は徳川きっての大豪傑、百貫目の大石を手玉に取ってほうりあげた……これは少しはおまけもありましょうが、なにしろ関ケ原の合戦に、馬上にまたがる父親の平八郎忠勝を、馬もろともにさしあげて、進軍したという逸話の持主、この出雲守忠朝が、

出「さてさて言い甲斐なき人々かな。たかが一人のこせがれになんたるありさま、いでこのうえは忠朝が、手捕りにいたしてお目にかけん」

と呼ばわりながら、大手をひろげて飛びかかった。大助幸昌これをながめて、

大「もはや家康を討つことは、とてもかなわぬ。せめて徳川随一の豪傑、本多出雲守を討ち取って、冥土のみちづれになさん」

と血に染みかえった短刀をひらめかし、忠朝目がけて突っかかる。出雲守忠朝は無双の大力、ことに武術もすぐれた者なれば、

出「おのれっ、こしゃくなこせがれめっ」と、右に左にこれをばかわし、抜けつくぐりつ手元へつけいる。大助こは残念なりと、さっと突き出す村正の一刀、忠朝の左の臂のあたりを、プツーリとつんざいたが、忠朝これをものともせず、そのまま飛びこんで、「やっ」と一声大助に組みついた。

大助も短刀がらりと投げ捨て、むずと引っ組んでもみあったが、忠朝は前申しあげた通りの大力、ことには新手、大助は弱年なり、そのうえ先刻より大勢を相手に奮戦、身体綿のごとくに疲れておりまするから、とうとう出雲守忠朝のために、その場に組み伏せられ、寄ってたかって、高手小手にしばりあげられてしまった。そこでこのことを家康に言上におよぶと、家康公も寿命を三年がほどは縮めた思い。

家「いや、真田というやつは、実に恐るべきやつである。われをあざむき討たんとて、せがれをつかわして心を許させるとは、ても恐るべきその心底……、またせがれの大助幸昌、弱年の身をもって当城に乗りこみ、予に近づいて害せんとするこころざし、恐るべし恐るべし。ことに不思議なるは、かれが短刀を抜き放ったとき、われ覚えず身の毛のよだつを覚えたこと、ひとかたならぬものであった。かれが持ったる短刀はいかなる品か、さっそく取り調べるよう」というおおせ。ここでその短刀を調べて見るとこれぞ名代の村正の悪剣。

家「さてさて幸村というやつ、深くもたくらんで、われを失わんとしつるものかな」

と、胆をつぶして驚き、舌を巻いて感嘆……。というのは、村正の刀は徳川のお家にたたるといわれ、徳川のご代々が、村正の刀で非業の最期をとげているから、徳川家においては村正の刀を、鬼門としている。その村正を大助に持たせたというのは、どこまでも幸村の、用意周到なるところでございます。家康つくづくとこれをながめて、

家「うーむ、それにいたしても幸村というやつ、敵ながらあっぱれな男だ。せがれ一人の命をすてものにしてまで、秀頼のために忠義を立てんとするこころざし、感ずるにあまりがある。かかる幸村を、甘言をもってたばからんといたしたは、予があやまりであった。さらばこのたびはかれ大助に仁恩をほどこし、一命を助け帰しつかわしたなれば、いかに大丈夫の幸村たりとも、いかでかわが心に打たれざらん、これかれが英気をくじく計略である」

と、心中ふかくうなずいた家康、

家「これ、たれかある。大助の縄目を解いて、予が面前につれてまいれ。敵ながらそのこころざしはあっぱれ、すべてを許して、大阪へ送り帰してつかわさんと思う」

とおおせられたから、これを聞いた大久保彦左衛門、こりゃあ上さま、あんまりびっくりして、気が動転しているなと思ったから、

彦「上さま、なにをおおせられます。ご仁恩をもって、一命をお助けあそばすのはよろしいが、これ屈竟の人質、大助めを当城へとどめおくにおいては、たとえ幸村、鉄石心の者といえばとて、わが子に心ひかれて、その槍先もにぶろうかと思いまする。これは当城内へおとどめあるがもっとも上策……」

と申しあげたから、満座の人々も、なるほど大久保の一言、もっとも至極と思っておりまする と、家康公にっこり笑って、

家「いやいや、もとよりわが子の一命をなげうって、予を討たんとはかるほどの幸村、人質になんぞ心を鈍らすことやあらん。かえって手強くてむかうであろう。これ大阪城内の疑心を恐るればである。しかるに大助を助け帰せば、幸村とてもわが仁心に心弱まるであろう。早々にこれへ連れてまいれ」

なるほど彦左衛門などとは、役者が一枚ちがう。一同もおおいに感服して、それより大助をご前に引き出し、縄目を解いて、

家「いかに大助、なんじ弱年の身をもって身命を惜しまず、不敵にも予を害せんとせしそのこころざし、まことに大丈夫といいつべきである。助けがたきところなれども、そのこころざしに愛でて一命を助け、父の許へ帰してつかわす。なんじ予がこころざしを思わば、立ち帰ってよろしく父をいさめ、予が味方にしたがわしめるよういたせ」

と申し渡しました。大助はこれをうけたまわって喜ぶかと思うと思いのほか、とつぜん大口をあいてあっははは と笑い出した。

大「こは大御所のおおせとも思われぬ。たとえ弱年なりとも、父の命を受け、大御所を討たんと、はるばるこの地へきたって仕損じ、なんの面目あってふたたび父の許に帰らんや。いざすみやかに命を取られよ」と、大音声に呼ばわったから、家康公これを聞いて、からからとうち笑い、

家「いや大助、なんじなんの面目ないことがあろうぞ。なんじを助け帰すは、なんじの器量の

すぐれたるがゆえに、あたら一命を奪うに忍びぬからじゃ。さればなんじが誉れともいいつべきもの……。この理をわきまえ、とくとく立ち帰って、なお忠孝をはげめよ」

と説きさとす。すると側から本多佐渡守正信が、

佐「これ大助、かくもありがたきお言葉をつべこべ申すは、身のほどを知らぬというものじゃ。厚くおん礼申して立ち帰り、父幸村にこんにちのことを申し伝えよ」

聞いて大助、ますます大口あいてうち笑い、

大「いかに佐渡守、なんじのごとき腰抜武士は、不覚に命助かって、鼠舞いをいたすか知れぬが、この大助は喜ばぬぞ。この大助を喜ばせたくば、わが面前に、大御所家康の首を斬って差し出せ。さらば三拝九拝、いかなる礼をも申し述べる。さもなき限り礼言などとは、いやはや、片腹いたいことであるぞ」

大胆というか、不敵というか、眼中家康もなければ、本多も大久保もない。なみいる近習、老臣も、いやとんでもないアブレ野郎と、思ったかどうか知らぬが、頭からぽっぽと湯気を立てていきり立った。一同の騒ぎ立てるのを、家康公はさらにおしとどめて、

家「いや、面白いほど性根のすわったこせがれであるわい。さりながら大助、死するばかりが忠義でないぞ。まことの忠義とは、たとえ身に恥辱を受けるとも、これを忍んで命をまっとうし、君父の先途を見とどけるをもって、第一とする。忠臣はおのれの名をいさぎよくせず、というのがここじゃ。この理を考え、早々まかり帰るがよろしかろう」

情理をつくした家康の言葉に、さしもの大助もげにもと思ったか、

大「さほどまでにわれを助け帰さんと思うなら、特別をもって帰ってつかわす。しかしわれらは、少しもそれを恩には着ないぞ。いざ合戦ともなれば、容赦なくその白髪首を申し受ける。大阪へ出陣なさるその際は、よくえりもとを洗って乗りこまれよ」と、大胆不敵の一言、なみいる一同、手に汗にぎって大御所の顔を見上げると、このとき家康公にっこり笑って、

家「うむ、勇ましいかなその一言、討つ討たるるは天命にあり、さらば戦場にてあいまみえん。早々に立ち帰れ」といって座を立たれる。大助においてもゆうゆうとこの場を立ち上り、大手をふって駿府の城を立ち去りましたが、家康はじめ徳川家の面々、さすがは幸村のせがれであるわいと、舌を巻いて驚かぬ者とてはございません。

びっくりぎょうてん、大助初陣の功名

さて、慶長十九年十一月、大御所家康、二代将軍秀忠においては、いよいよ大阪城を攻め落して、天下をまったく徳川の物にいたさんと、日本国中の軍勢をもよおし、五十万の大軍をもって、大阪表さして、ひしひしと攻め寄せました。

大阪城内においても、かねて覚悟のことでございますれば、軍備おさおさおこたりなく、要所要所をば固めまして、本丸には太閤秀吉公ご出馬のときのごとく、千成瓢箪のお馬印、五七の桐の紋ついたる旗をば飾り、ご近臣大勢、秀頼公を守護したてまつり、いまにも関東の大軍きたらば、目にもの見せてくれんと、手につばをして待ちかまえております。

城は名におう豊太閤が、苦心をかたむけて築きあげた大阪城、難攻不落ととなえられる、日本無双の名城にして、五重の天守は雲をつき、めぐらすほりの深さは数丈、石垣高くその上に柵をきずき、この要害に大軍師、真田幸村をはじめとして、世に聞えたる大豪傑、後藤又兵衛、木村長門守、薄田隼人、塙団右衛門、長曾我部盛親、その他の一騎当千の勇士豪傑数知れず、総勢十二万の軍勢をもって立て籠り、厳重にそなえを立てたからには、なかなか落つべしなどとはあいみえません。

さて、関東勢の先陣をうけたまわったる、藤堂和泉守高虎、勇みに勇んで大阪へ押し寄せたが、なかなか城攻めの下知がくだらない。ところが目の前に、茶臼山という小高い山があって、ここに大野主馬治房が、出城をかまえて守っている。高虎はるかにこれをながめて、

高「わが陣前に敵の砦をながめて、手をこまぬくは言い甲斐なきに似たり。ひともみにこれを乗っ取って、味方の陣場にせん」

と申し渡して、その準備におよびましたから、家老の藤堂仁右衛門がご前に進み出て、

仁「かねて御下知あるまでは、合戦あるべからずとのご軍令、この儀おひかえを願わしく存じます」

と申しあげたが、横紙破りと異名を取った藤堂高虎、からからとうち笑って、

高「たとえ軍令なりといえども、われ先陣をうけたまわったるうえからは、まず第一の功名を立てなければあいならぬ。早々合戦の用意におよべ」

と、いやもうたいへんな張りきりかた、このとき藤堂家の豪傑、渡辺勘兵衛が進み出まして、

勘「いかさま殿のおおせごもっとも、それがしお先手をうけたまわり、即座にこれを乗っ取って、軍陣の血祭りにつかまつりましょう」

と申しあげたから、高虎おおいに喜んで、

高「おおよくぞ申した。望みにまかせてそのほうに申しつける。明朝すみやかに攻め取ってしまえ」

とあって、八千余人の同勢を手配りにおよびました。ところがここに真田幸村においては、猿飛佐助、霧隠才蔵なんどという忍者が、八方へ出てよせてのようすをうかがい、一々これを幸村のもとへ知らせている。ときしも猿飛佐助が、藤堂の陣中へ忍びいって、このことを聞き出したから、いっさいの手配りまですっかり調べあげ、取って返してこのことを、幸村に注進におよんだ。幸村これを聞いて、

幸「なに、藤堂の軍勢が茶臼山の砦を攻めると申すか。ようこそ注進いたした、なお油断なく敵陣のようすをさぐり、事大小となく注進を頼むぞよ……」と、ふたたび佐助を藤堂の陣地につかわして、やがて大助幸昌を呼び寄せました。

大「お父上、なにごとにござります」

幸「おお大助、ただいま猿飛佐助がまいっての注進に、明早朝、藤堂勢が茶臼山を乗っ取らんとして、押し寄せる由である。もっともかのところは味方に取って、さのみ重要なところではない。かえって敵に取らせて陣所とさせおき、わが奇計をもって敵を破るの、おとしあなといたしたい。されば取らるるとも苦しゅうないが、最初の合戦に、味方の柵を破らるるとあっては、全軍の士気にかかわる。ことにわが軍配に服さぬ大野のともがらに、わが手並のほどを見せんともする。そのほう、われにかわって茶臼山へかけむかい、あっぱれ初陣の功名を現わせよ」

聞いた大助、こおどりしてお喜び、

大「いかにもかしこまりました。ついてはお父上、これについての軍略を、お授け願いまする……」

と、いわせも果てず左衛門佐幸村、はったと大助をにらみつけて、

幸「なんと申す。かばかりの小勢を破るに、なんぞ人に計略を求めるや。かねてそのほうに教えこんだる軍学兵術は、なんのために用いるぞ。人を頼って合戦せんなどという心にては、敵を破らんこと思いもおよばぬ。幸村がせがれには不似合いなり、ここなうつけものめ」

と、頭ごなしにしかりつけた。これぞ獅子が三日にして、その子を千仞の谷底へけおとすという、ひそみにならった親心。大助は恐れいって平伏し、ややしばらく考えていましたが、やがてポンと胸をたたいて、

大「いかにも承知つかまつりました。どうか人数をお授けくださいまし」

幸「おおよくぞ申した。して敵を破る計略は、なんとそのほうは心づいた。いかがして敵を破らんと心得る」

大「ははっ、明朝の合戦には、不意の横矢を覚悟いたしました」という簡単な答え。聞いて幸村ははたと膝をたたいて感服いたし、

幸「それでこそあっぱれわが子じゃ。計略まさに図にあたらん、その余は臨機応変をもっていたせ」

と、ここに真田にさる者ありと聞えたる、三好清海入道、同じく伊三入道、そのほか三輪琴之助、駒ケ嶽大仁坊、伊勢崎五三郎などと申す、屈強の勇士を選んで、精兵一千五百人を授けまし

た。

大助はおおきに勇み立ち、宵より用意いたして手配を定め、真夜中を期して粛々と、真田丸の出城を出発におよびました。ところが大助、茶臼山をあとに見て、はるかにゆき過ぎますから、驚いたのは三好清海入道、大助のそばへ駒を近づけ、

清「いかに若殿、茶臼山の砦はとうにゆき過ぎましたるに、どこまで進ませたもうぞ。この分にてはもはや、敵陣まぢかと心得まするが……」

大「うむ、われに少しく思う仔細のあれば、黙ってついてまいれ」といい捨てたまま、なおもどんどんどんどん進んでゆくから、このようすを見て清海入道、あっけにとられて弟の伊三入道へ、

清「おいおい弟、若殿もお利口のようだが、どうも片意地で困る。お年若のうえに初陣、なんのわきまえもない。いまに夜が明けてから、あわててあとへ、しりぞかねばならぬことになりそうじゃて……困ったもんだな弟……」

兄だの弟だのというと若々しく聞えるが、いずれも五十に近い大入道、弟の伊三入道が、

伊「なるほど兄貴、若殿は初陣に上気して、すこしぼーっとしていられるに違いない。大殿が、われわれ兄弟をおつけになったのは、こんなときの用心に違いない。遠慮をすることはねえから、びしびし意見をしなせえ」

清「うむ、いかにも、もっともじゃもっともじゃ」

と、兄弟ひそひそ相談していると、大助幸昌においては、またまた五六町ばかり、人数を前へ進めましたから、たまりかねて清海入道、

清「これこれ若殿、どこまでおいでなさる……」
伊「さように深入りをなさっては、たいへんなことになりまするぞ」
大「いやいや、うるさい坊主どもだ。何事も申すにおよばん、黙ってついてまいれ」
清「うへっ、坊主とは恐れいった」
と、兄弟閉口しているうちに、とうとう手塚山というところの、山の下までやって来て、この小山の上に、全軍を押し上げようといたしますから、いよいよあきれかえった三好兄弟。
清「若殿、これは正気でござるか。そもそも伏兵というものは、低い所、木立の中、すべて敵の目にとまらぬ所へ隠れねばならぬもの。しかるにかような、四方八方、見通しの丘に大兵を引き上げて、いったい、夜が明けたらいかがなさるおつもりじゃ」
伊「われわれ兄弟、安房守さま以来ご奉公いたして、戦場をかけまわること三十余年、いくさのかけひき、なにもかも知りつくしてござる。若殿はご発明だが、戦場はきょうがはじめて、なにもごぞんじないから血気の勇にはやり、とかく深入りをなさる。悪いことは申さん、夜の明けぬうちに兵をまとめて、お引きあげなされい」
と、兄弟口を合せてやかましく諫言する。大助これを聞いて、おおいに立腹の体にて、
大「黙れ、入道、われ弱年たりとも大将なるぞ。なんじらなにゆえあってわが下知にくちばしを入れる。しいて争いとどむるにおいては、なんじらの西瓜頭を打ち落すから、さよう心得ろ」
と、どなりつけた。これを聞くと兄弟も、かんかんになって怒った。
清「このがきめ、しまつにおえないがきだ。赤ん坊のときに九度山で、さんざおれの背中に小便かけたことも忘れて、きいた風の口をたたきおるわい。おい弟、こいつはとんでもねえばか息子だ」

伊「まったくだ兄貴、真田のお家は代々が名将ぞろい、わけても幸隆、昌幸、幸村のご三代は、天下に鳴りひびいた大軍師、いつも柳の下にどじょうはいないというが、このこせがれでぶちこわしだ。いまに敵におっ取りまかれ、ぎゅうぎゅういってそのとき目が醒めろ。仕方がねえからそれまで放っておこうぜ」
と、ぶつぶつぶつ怒っていると、大助やがて、手塚山の台へ人数を押し上げまして、
大「いかに清海、そのほうは一千の兵をもって、このところに伏勢となり、敵の先陣をばやりすごして、中軍めがけていっせいに鉄砲を打ち放せ。わが身は残る五百を率い、さらに進んで陣立をいたす」
と、指図をしたが、清海に兵を伏せろといったその場所は、一面の畑中で立木もなければ凹みもない。これには清海入道ばかりでなく、軍兵どもまであきれてしまった。
□「へえー、ここで伏勢とは、驚き桃の木山椒の木だ。めくら相手の戦場じゃあるまいし、こんなところで寝そべってた日にゃ、頭から足の先までまる見えだわい」
×「さては若殿、微笑政策、平和攻勢なんて、とんでもねえことを考えているんかな」
まさかそんなことはいいますまいが、みんなでぶつぶついいながらも、命令だから仕方がない、畑の上へ長芋を投げ出したように、ごろりごろりと寝ころんだ。ところがだんだん、夜明け近くあいなりますと、その朝の霧の深いこと、視界はもうろうとして、咫尺を弁ぜずというほどの濃霧、兜や槍の穂先からは、ポタリポタリとしずくが、雨だれのように落ちるというありさま。まことにひどい朝霧でございますから、これを見た真田の同勢、

△「おや、奇態なことがあったものだ。どうだい、この朝霧は……」
□「うむ、これはたいへんだ。これじゃ藤堂の軍勢がこれへ来たって、ここにいるわれわれに、ちっとも気がつくまい」
×「いや、あっぱれなのは若殿だ。上は天の時を知り、下は地の理を察し、中は人事を明らかにする。これ大将の勤めというが、けさのこの朝霧の深いことを、とうに察して、この手塚山の先の畑中、敵の通る足元へそなえを立てられたのだ……」
○「さてさて、若殿はお年若でもあっぱれ明智の御大将だ。それにひきかえて三好兄弟、戦場の往来三十年などと、おおぼらを吹いたが、あきれたものだ……」△「あははははまったくその通りじゃ。そこで落首が一つできたぞ」
△「うむ、そいつは強気だ。なんというのだ」
△「負うた子に浅瀬教わる清海は、伊三もろともとんだ入道」
○「名吟名吟、まったくあきれた入道だ……」
軍兵どもは口さがないもので、とんだ陰口をきいて喜んでいる。聞きつけた清海入道、
清「こらこらだれだ。あきれた入道などといってるやつは……」
○「おや、聞こえたか。……頭は足りなくても、耳だけは早いな。いよいよあきれた耳入道だ」
清「この野郎、けしからんことをいうと、張り倒すぞ」と、小言はいったものの、朝霧のために姿がちっとも見えないから、だれがいったのだか少しもわからない。しかし、ぼろくそにいわれながらも清海入道、ぽろぽろと豆粒ほどの涙を、みずっぱなといっしょに落しながら、
清「ああありがたしかたじけなし。大殿にも勝るあっぱれなる若殿の智略。さすがはわれらが真田のお血筋、弓矢八幡も照覧あれ、本日の勝利うたがいなし」
伊「まったくだ兄貴、これで真田のお家は大磐石……」と、忠義一途の兄弟、さんざん気をもまされたことも忘れて、手を取り合って喜んでいる。

デマに迷うな、放言を信ずるな

さて、こちら住吉に砦をかまえた、藤堂勢においては、いよいよてはじめの一戦に、茶臼山の砦を攻め落し、大阪方の胆を奪ってくれようと、渡辺勘兵衛をまっさきに、八千の大軍を五手にわけ、粛々として繰り出しました。これまた折からの朝霧をさいわいとばかり、足音を忍んで押し寄せる。先手の同勢は、ひたひたひたと手塚山の台を押し通り、足元に真田の同勢がひそんでいるのが、朝霧のために少しもわからないから、茶臼山の砦に近づくがいなや、どっと鬨の声をあげて攻めかかる。

けれども砦のほうでは幸村から、あらかじめ知らせがあって待ち受けたところだから、組頭の塙団右衛門、岡部大学、米田監物などという戦場往来の武功の面々、ござんなれっとばかり、狭間を開き鉄砲の筒口をそろえて、ここを先途と応戦する。てごわい砦の奮戦に、勘兵衛いささか当てがはずれて、

勘「はてな、こんなはずではなかったが……。しかしたかのしれたる小砦ひとつ、いざひとも

みにもみつぶしてくれん」
と、士卒を励まし、いよいよ鋭く攻め立てる。このとき二陣、三陣、次から次へと繰りこんで来た藤堂の軍勢、いましも手塚山の台へとさしかかったから、ときこそきたれと先刻より、畑の中に寝ころんでいた、三好清海、伊三入道の一千余騎。
清「すわや折こそよしっ、打てっ」
と、下知をいたせば、はやくも火蓋をきった五百匁筒三十挺、並筒百挺、ドドドドンとばかりに百雷のとどろくごとき響きをもって打ちこんだ。不意を討たれてなにかはもってたまるべき、たちまち騎馬武者、徒歩立ちともに百人ばかり、バッタバタバタ、血煙り立ててぶっ倒れる。そのほか傷をこうむりますもの数知れず、いずれも右往左往に散乱いたします。
△「さては敵に伏勢があったるぞっ」
○「伏勢はいずこぞや。……早くこの霧を追い払え」
気が動転したから、朝霧をすずめかなんぞとまちがえている。そこへまたもや、ドドンドドンと続いて打ち出したから、はやくも臆病風に誘われて、雪崩を打ってしりぞこうとする。このときこの手の大将、藤堂新七、同じく仁右衛門、同じく采女など、さすがに恥を知る豪傑ども、くずるる味方を制して、
仁「やあやあきたなき味方の者どもかな。敵に伏勢ありとてもわずかの小勢、とどまれ返せっ」
新「ただひといきにけちらして、藤堂勢の武勇を示せ……」
と、しきりに大声をあげて、おめき叫んでいる。ところへ、大身の槍をひっさげ、手勢を連れて乗りこんだのは、三好清海入道、伊三入道の荒法師、あたるをさいわい突き立て突き立て、四

角八面に暴れまわるから、だれ一人としてその表に立ちふさがる者がない。藤堂新七これをながめて、歯がみをかんでおおいに怒り、
新「やあ、言い甲斐なき者どもかな、いでこのうえはわが手並を見せてくれん」
と、みずから十文字の槍をひねって、清海入道めがけて突いてかかった。心得たりとばかりに清海入道、穂先二尺にあまる大身の槍、血に染みたるを取り直し、新七を相手に渡り合う。上段、下段、突くかと思えば払い上げ、払ったかと思えばまき返し、ひとまぜもせずに五十余合、ここを先途と戦ったが、双方ともに名うての豪傑、さらに勝負がつきません。
するとこのとき、住吉のかたにあたって、ドドーン、ドドーンというはげしい筒音とともに、わーっという天にもとどろくばかりの鬨の声、藤堂新七おおいに驚き、
新「南無三、さては本陣へ向って、敵が押し寄せたと覚えたり、それ引けっ」
と、たちまち馬をかえして引きさがる。藤堂仁右衛門、同じく采女もこれにつづいて、住吉さしてかけ出した。大将のがれて軍兵たれか踏みとどまらんや、雪崩を打って崩れ立った。清海入道おおいに勇み立ち、
清「いざここの機をのがさず、皆殺しにいたせ」
とあって、無二無三に追い討ちをかけますから、藤堂勢の討たるる者数知れず、屍は積んで山をなし、血汐は流れて河をなす、というありさまでございます。
お話しかわって大助幸昌におきましては、清海入道に授けた残りの人数、五百人をば引きつれて、大胆不敵にも朝霧にまぎれ、住吉さして、藤堂和泉守の本陣まぢかまで押し寄せ、ときこそきたれとあいまっておりまするると、はるか茶臼山のかたにあたって、大筒小筒の響き、つづいて

鬨の声が聞えてきたから、

大「それ、いまこそ本陣へ斬りこめっ」

と、はげしく下知を伝えまするとと、勇み立ったる真田勢、ドドンドンとばかり大筒小筒、一度に筒口をそろえて打ち払い、その煙りの下より槍先をそろえ、どっとおめいて無二無三に突きいりました。驚いたのは和泉守高虎、さぞいまごろは味方の先陣が、茶臼山を攻め落したころと思っているところへ、天から降ったか地からわいたか、まことに思いがけない六連銭の旗印、真田の軍勢に攻めこまれたのですから、一時は胆をつぶしたが、さすがは十六歳の初陣より、千軍万馬往来の大将高虎、

高「やあやあ敵は小勢なるぞ。そなえを崩すな。打ち払ってしまえっ」

と、少しの動ずる気色もなく、声をはげまして下知をする。ところへ乗りこんでまいった真田大助幸昌、端武者どもには目もくれず、大将和泉守高虎を討ち取らんと、群がる敵兵をけちらしなぎ倒して、一気に馬を陣幕の中へと乗り入れました。見ると、金小札黄糸縅の鎧を一着におよび、銀の鍬形打ったる兜をかぶり、正面床几に腰打ちかけて、軍配を打ちふり打ちふり、しきりに下知をくだしている大将、これぞまさしくめざす和泉守高虎にまぎれもない。大助幸昌鞍壺をたたいておどりあがり、

大「やあやあ、藤堂和泉守高虎に見参せん。われこそは、大阪方にさる者ありと知られたる、真田左衛門佐幸村が一子、大助幸昌なるぞ。いで尋常に勝負勝負っ」

と、大音声に名乗りをあげたから、

高「おのれっ、こしゃくなり真田のこせがれ」

と、高虎も陣太刀引き抜いてみがまえた。大助馬に一角入れまして、高虎めがけておどりかからんとする一刹那、この体を見てよこあいから、ひらりと飛び出したのは、身の丈六尺にあまるかと思われる一人の大男、すっくとばかり、大助の前に立ちふさがり、

○「おのれこわっぱ、わが君に勝負などとは片腹いたし。藤堂随一の豪傑園部儀太夫、なんじの細首打ち落してくれん。すみやかにわが大刀の錆となれ」

と、大助に斬ってかかった。大助こともいたさず、右に払い左にかわし、千変万化の秘術をつくして戦ううちに、主君あやうしと見てとった、藤堂家の旗本勢、どっとばかりにはせあつまって、大助をひしひしと取り囲んでしまったから、豪勇無双の大助も、いまはあやうくとぞあいみえました。

すると折しも、この場へ乗りこんで来たのが、身の丈およそ六尺五寸、いがぐり頭に鉢巻をなし、黒糸縅の大鎧を一着におよび、八角の樫の棒に、黒鉄の筋鉄いったるえものをば、かるがるとひっさげ、群がる雑兵ばらをば、右に左にバッタバタバタ、一払いに十人、十五人となぎ倒しながら、夜叉王のあれにあれたる勢いでおどりこんだ。これぞ真田の家来、駒ケ嶽大仁坊という豪傑、ばらばらっと大助のそばにかけ寄って、

駒「若殿、その敵は大仁坊におまかせあれ」といったかと思うと、園部をめがけておどりかかった。いずれも劣らぬ大豪勇士、六尺豊かの大男が、ドシンドシンとじひびきを立てて打ち合ったから、十里四方のもぐらが、目をまわしたといいますが、こいつはうそでしょう。大助はこの間にさっと馬をおどらせて、高虎めがけてかけ寄りざま、

大「えい」とばかりに大喝一声、電光のごとくに槍を突き出した。

不意をくらって和泉守高虎、さけんとしたがまにあわない。したたかに胸板を突かれて、

高「あっ……」

とばかりあおむけざまに、どしんと倒れた。もとより厚鉄づくりの鎧だから、残念にも裏までは突き通らなかったが、胸板を強く突かれた高虎、息もつまるばかりのありさま、大助はこの体をながめて、大音を張り上げ、

大「やあやあ遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ、敵の大将藤堂和泉守高虎を、かく申す真田大助討ち取ったるぞ」

と呼ばわった。これを聞くと胆をつぶしたのが藤堂勢、

○「おやおや、さては親玉はやられてしまったか。こいつはもうだめだわい」

△「ぐずぐずしていると、おれたちまでやられてしまう。命あってのものだね、それ逃げろ」

と、勇気まったくくじけて、どっとばかりに崩れたった。高虎おおいに驚いて、こすっからいがきがあったもんだ。とんでもない小僧だと思ったから、痛いのを我慢して、さっとばかりに飛び起き、

高「やあやあ者ども、高虎は討たれはせんぞ。ぴんぴんいたしておるぞ、デマに迷ってはならん、放言を信ずるではないぞ――」

と、一生懸命にどなったが、いったんくずれ立ったる藤堂勢、さらに耳にも聞きいれず、右往左往に敗走いたします。

ところへ、藤堂仁右衛門、同じく新七、同じく采女の同勢が、どんどんどんどん、引きあげて来る。そのすぐあとからは、勝ちに乗じた清海入道が先頭で、真田の同勢一千余騎が、洪水のせきをきったような勢いで押して来る。またそのあとからは、茶臼山でさんざんにやっつけられた、渡辺勘兵衛がほうほうの体で逃げて来る。敗軍と敗軍のはちあわせ、いよいよしまつの悪い大乱軍となって藤堂勢、目もあてられぬ大敗北でございます。

大「やあやあ味方は大勝利なるぞ。このうえ深追いしてあやまちすな」

と、弱年ながらも大助幸昌、あっぱれ兵法の奥義を会得して、あざやかな采配、ここに味方は、雲を霞と逃げ落ちる藤堂勢のうしろから、えい、えい、おうと勝鬨も勇ましく、隊伍をととのえ、真田丸へと引きあげました。

このようにいたしていくさのてはじめは、まず大阪方の大勝利とあいなりましたので、城内の者どももいまさらながら、真田父子の智勇に驚き、大野、織田などの佞臣ばらも、幸村に対しては恐れはばかるようにあいなり、ここにはじめて幸村の軍配が、重んぜられるようにあいなりました。

くわばらくわばら、死んでも命があるように

茶臼山の一戦に、いよいよ東西両軍の火蓋が切って落されると、諸所方々でこぜりあいがはじまったが、まだあまりめざましい合戦というほどのものはございません。幸村、大助の父子においては、大御所ならびに二代将軍秀忠、一日も早くきたれよかしと、てぐすねひいて待ちかまえております。しかるところ慶長十九年十一月十五日の八っ半刻（午後三時）とも覚しきころ、か

ねて間者として京都へ忍ばせた、霧隠才蔵がはせもどって、

オ「関東の両将軍、いよいよ今朝二条城を出立いたし、二代将軍秀忠は、伏見、枚方より平野口へ向け、大御所家康は奈良より生駒山を越えて、天王寺口へ向いまするもよう、今宵は枚方ならびに、奈良どまりのことかと心得まする」

と、注進におよんだから、

幸「ふーむ、さようか。いやご苦労であった」

と、胸中なにか思案をめぐらしておりました幸村、やがてにっことうち笑って、せがれ大助幸昌を呼び寄せ、

幸「いかに大助、待ちに待ったる大御所家康、ならびに新将軍秀忠の両人、いよいよ京都を出立におよんで、大阪表へ取りつめる由である。そのほう日の暮れるをあいまって、枚方へかけ向い、秀忠の旗本を襲ってあわよくば、秀忠の首級を取って立ち帰れ」大「ははっ、心得ましてございます。して、いかほどの軍勢をお授けくださいますか」

幸「されば鉄砲組頭、伊勢崎久太夫をはじめとして、火術、忍術に鍛錬のもの、十五名を授けつかわす。これにて首尾よく秀忠を討ち取ってまいれ……」

大「ええっ、お父上、軍勢をなにほどとおおせられました」幸「うむ、十五名を取らせる」

大「あの、ただの十五名でござりますか。恐れながら父上、将軍秀忠の旗本勢、少なくとも一万や一万五千はございましょう。しかるにただの十五名では、ちとどうも、人数が少ないように存じまする……」

さすがの大助もこれには驚いたから、じっと父の顔を見上げると、幸村にっことうち笑って、

幸「うむ、そのほうの不審もっともである。さりながら一万の同勢へ、百人、千人で乗りこめばとて、やはり人数は足りまい。人数は少なくともそのほうには、なによりの味方をつかわすであろう」

といって、焔硝庫より足軽どもにかつぎ出させたのは、かねて用意の張抜き筒に仕込んだる、地雷火数十発……。この地雷火をば大助に与えまして、

幸「これを枚方の堤のほどよいところにうずめ、一挙に敵を爆破せしめよ。これぞそのほうに取っては、百万の味方であるぞ……」

大「ははっ、これは奇々妙々のはかりごと、いかにも心得ました。されば首尾よく秀忠の首級をあげて立ち帰ります」

と、ここにさっそく、伊勢崎久太夫、霧隠才蔵をはじめとして、十五人の者どもに支度をいたさせ、おのおの百姓や非人風に姿をやつし、よいやみにまぎれて枚方の堤五十余町にこの地雷火を残らず仕掛けて、秀忠きたれと待ちかまえております。

また幸村は、後藤又兵衛、長曾我部盛親の両将に、別に計画を授けまして、この両将は淀川を船でさかのぼらせ、枚方在に忍ばせました。かようにいたして、この方面の手配りは、水ももらさぬばかりにできあがり、秀忠の一命、いまや袋の鼠も同然とあいみえました。

さて幸村におきましては、このたびは忍術の名人、猿飛佐助を呼んで、

幸「そのほうこれより奈良へ乗りこみ、大御所家康が、本陣のようすをうかがってまいれ……」

佐「ははっ、かしこまりました」

こういうことになると、まことに便利調法なのが忍術、ぷいと出丸を飛び出したかと思うと、

千里一飛び虎のこばしり、ほどもあらせず帰ってまいりまして、

佐「ははっ、申しあげます……」

幸「うむ、いかがであったな……」

佐「はっ、大御所には文珠院大門坊と申す寺にとまり、これを固めておりまするのは、神保長三郎、一柳監物、分部左京亮の軍兵でございまする」

と、敵陣のようす委細を申しあげまするとと、

幸「うむ、さればここに妙計がある」

と、十勇士の一人、由利鎌之助に命じて取り出させたのは、白地無紋の旗、この旗へ一本一本、神保、一柳、分部と三家の紋所をかかせ、まず神保の旗印は、由利鎌之助、浅香郷右衛門、青山彌十郎の一隊に授け、一柳の旗印は、海野六郎、木辻則右衛門、別府若狭守に持たせ、分部の旗印は、明石又七郎、三好兄弟などの軍勢に与えて、それぞれに計略を授け、夜中ひそかに真田丸の出城をいで立たせました。

また木村長門守、塙団右衛門、薄田隼人の三将にも、これまた計略をさずけ、張抜きの大筒を用意におよび、三千余騎を連れさせまして、奈良へと繰り出させました。

智謀の真田が、かような恐ろしい計略を用いて、大胆にも、城を繰り出しさかよせして来ようなどとは、夢にも知らぬ徳川勢、明日こそは大阪へ乗りこんで、たかの知れたる豊臣勢、いかに難攻不落の大阪城に立て籠るとも、ただひともみにもみつぶしてくれんと、勇気凛然、万燈のごとくかがりびをたき、前祝いのさかもりをいたしております。

やがて夜もしんしんとふけわたり、かがりびの光もちらちらと燃えては尽き、尽きては燃えな

んとする丑満刻、みまわりの軍卒も、仮寝の夢にまどろまんとするころ、ときをはかって由利鎌之助の一隊、例の神保のにせ旗印を押し立てまして、家康の本陣を守る分部の陣屋をめがけ、どっとばかりに討ちいりました。このとき由利鎌之助、馬上ゆたかに大音声をば張りあげて、

鎌「やあやあ分部左京よっくうけたまわれ。なんじの謀叛現われて、大阪方へ返り忠のこと、いまは歴然とはあいなった。かく申す神保長三郎、おおせをこうむってかけ向かったり。覚悟におよべっ」

にせ神保の由利鎌之助が、高らかに呼ばわりますと、寝ぼけまなこの分部左京、びっくりぎょうてんしてはね起き、小手をかざして陣内のあたりをながめまするとと、ちょろちょろ燃えるかがりびの光の中に、なるほど神保の旗印が見えます。

分「うーむ、謀叛とは奇怪千万。さては神保長三郎、おのれこそ大阪方へ裏切ったな。それ者ども、かならずうろたえてはあいならぬ、覚悟をきわめてかけ散らせ」

と呼ばわったが、自分がうろたえているから、ぐるぐるこまねずみのようにまわって、どしんとしりもちをついてしまった。大将がこのありさまだから、軍兵どものあわてかたはまたひとしお。

○「くわばらくわばら、死んでも命があるように……」

念仏をとなえたり、お題目をとなえながら、右往左往にかけまわっている。

ところが寝耳に水の騒動は、この陣屋ばかりではございません。神保の陣屋には、一柳の旗印を立てた海野六郎の一隊が、一柳の陣屋には、分部の旗印を立てた三好兄弟の一隊が、どっとばかりに押し寄せたから、三方一時に上を下への大騒動、なにがなにやらさっぱりわからない。

ついには本当の同士討ちがはじまってしまいました。

清「してやったるぞ。思う存分斬り散らせ」

と、清海入道、海野六郎などの勇士も、あたるをさいわい斬りはらいなぎ倒す。うきあし立ったる徳川勢は、乱離こっぱい、雪崩を打って敗走いたします。いっぽう、本陣においては、大門坊の奥の間で、ぐっすり寝こんでいた大御所家康、あまりの騒がしさにふと目を覚まし、

家「たれかある、たれかある。ただごとならぬおもての気配、物見をいたしてまいれ」

○「はっ」と答えて宿直の近侍がかけ出して見ると、ただごとどころか、えらい騒ぎ、あっとぎょうてんいたして、

近「申しあげます。敵方の夜討ちと覚しく、お旗本近くまで、攻め寄せましてございます」

家「なに、大阪方の夜討ち……」

家康驚いてはね起きると、すばやく床の間の鎧を取って着込みながら、

家「して、戦いのもようは……」

近「は、はい、勝敗いずれかにあるとは存じまするが、さもなき時には、相引けということにあいなりましょう」

肝っ玉がでんぐり返っているから、きまりきったことを、いかにももっともらしく言っている。

そのところへ、大久保彦左衛門、西尾豊後守、兼松又四郎、近藤登之助、成瀬隼人、安藤帯刀なんどという、名うての古強者が、すわ一大事とばかり詰めかけたから、家康ここにほっとひといき、まず安心とつく間もあらせず、ドドドッドーンと、地をゆるがしてものすごい砲声一発、

寺の裏門あたりで響き渡ったから、一同思わず顔見合わせたとたんに、ガラガラドシーンと家鳴り震動いたして、家康の陣所まぢかに大爆発をいたしました。

もうもうとわきあがる黒煙、飛び散る木切れや建具のかけら。いやもう、ものすごいありさまでございます。

絶体絶命、九死に一生の大御所

大御所家康公をはじめ、大久保彦左衛門そのほかの旗本連中も、この恐ろしい一発の大筒に、度肝を抜かれて、鳩が豆鉄砲を食ったように、目ばかりぱちくり見合わせたのはもっとも千万。

やがてわれに返った大久保彦左衛門、まだ耳ががんがん鳴っているから、にわかつんぼになってしまったも同然、そこで持前の大声をいっそう張りあげ、

彦「上さまっ、一時も早くこの場をお立ちのきをっ」

と、家康をせきたて、ほうほうのていでここを逃げ出したが、あっちでもこっちでも、めちゃめちゃな斬り合いが始まっているから、どれが敵だか味方だか、いっこうにわからない、立ちのく方角にさえ迷うありさまでございます。

○「上さま、どうも、こっちのほうが安全のようでございます」

安藤帯刀が、やっと静かな、暗い横道を見つけて、そのほうへ落ちのびようとすると、思いも

よらぬゆく手のかたより、神保の旗印がこつぜんと現われて、

○「やあやあ、そこへ逃げのびらるるは、大御所と見たはひがめか。ひきょうにも敵にうしろを見せたもうや、引っ返して勝負あれい……」

と、にせ神保の由利鎌之助の一隊が、おもてもふらず斬りこんでまいりました。これをながめた近藤登之助、西尾豊後守、成瀬隼人の三人は、手勢を下知して取って返し、

三人「おのれ神保の返り忠、ひきょうものとはなんじがことぞ、いまこそ冥土へつかわしくれん。観念いたせっ」

と、チャリンチャリンと斬り結んでおります。そのすきに大御所家康公には、やっと急場をのがれまして、身も魂もあらばこそ、一鞭二鞭と馬に鞭をば加えられて、一生懸命に逃げ出してまいります。するとまたもや横手の林の中より、分部の旗印をひるがえした三好清海、伊三入道の軍勢、どっとばかりにおどりいで、

清「いかに家康、われらここにてなんじを待つこと久し……」

伊「いで尋常に、その白髪首を渡してしまえ」

尋常に首なんぞ渡せるもんじゃない。さすがの家康も、いまはまったく顔色青ざめ、魂天外に飛んで無我夢中、安藤帯刀、兼松又四郎ら、兵二百余人を残して、わずかな軍勢と大久保彦左衛門がこれにつきしたがい、道を転じて北のかたへと逃げのびられました。

しばらくすると、矢叫びの声も剣戟の響きも、ややとおのいたので、一同思わずほっと安心、ひといきいたしているところへ、またもや地からわいたか天から降ったか、こつぜんと現われたのが木村長門守重成、薄田隼人ら三千余人の大軍。

重「いかにそれなるは、大御所家康公とは見たてまつる。もはや袋の鼠、網中の鯛、のがれぬところとお覚悟あれよ」

と、鬨をつくっておっ取りまいた。なにさま智謀すぐれた大軍師、左衛門佐幸村が練りに練り、考えに考えぬいた苦心の陣立て、尋常いちよう、人間わざではのがれられようとは思えません。さすが家康ほどの人物も、進退ここにきわまったと見えまして、

家「ああ恐ろしいやつは真田幸村、これぞ幸村のはかりごとにちがいあるまい。わが天運もここに尽きたるか」と、天を仰いで長嘆息におよびまするとこのとき大久保彦左衛門は、

彦「ええお心弱きただいまのご一言、なんの大阪勢の千や二千、この彦左が踏みつぶしてご覧にいれる」

といったかと思うと、家康の乗ったる馬の首をくるりと向けなおし、いきなり尻っぺたを槍の柄で、ぴしりっと殴りつけたから、驚いたのは馬で、

馬「あっこのじじい、痛いぞっ。なにを乱暴するっ」

ともなんともいわないが、家康を乗せたままおどりあがってかけ出した。あとに残った彦左衛門、わずかな手勢を下知して、死物狂いの防戦をいたし、ほんのしばしのあいだではあったが、ひとささえいたしました。

さて虎の牙をのがれた心地の家康公、どんどん馬を走らせて、般若寺の門前あたりまでまいり、ふと気がついて見ると、自分はただ一人となっております。

家「うーむ、どうもひどい目にあったわい」

と、薄氷をふむ心地で、なおも馬を進めてまいりますと、うしろのほうの闇の中より、ひずめ

の音がパカパカと聞こえて、だれやら自分のあとをついてまいる者があるようすでございますから、はてなと怪しみながらも家康公、振り返ってご覧になりますと、夜目にもしるき鎧武者がただ一騎、ゆうゆうと馬を走らせて近づいてまいります。

家「おおそれへまいったるは彦左衛門、それとも安藤か……」

まさかここまで敵が来るとは思わないから、馬を止めて声をかけまするとと、近よってまいったかの一騎、からからとうち笑って、

○「あっはっははは、せっかくながら大久保でも安藤でもござらぬ。われこそは大阪城の軍師、真田左衛門佐幸村なるぞ。待てば海路の日和とやら、豊臣家の恩義を忘れ、これにあだなす大御所殿、など天道の許したもうべきや。幸村このところにおいて、お首級ちょうだいつかまつる。いざお渡しあれ」

と、大音に呼ばわりましたから、うへっとばかりにびっくりぎょうてん、せっかく落ち着きかけた肝っ玉が、ふたたびでんぐり返って、

家「南無三宝、しなしたり……」

と、いまはまったく無我夢中、鞭を取り上げるやいな、馬の頭をぴしりと殴りつけた。とんでもないところを殴られたから、馬のほうもまた驚いた。乗り手の家康と同じようにあわを食って、めくらめっぽう、風をきってかけ出しました。見るより左衛門佐幸村、

幸「やあ、ひきょうなり未練なり。敵にうしろを見せるは武門の恥。返せや家康、戻せや大御所」

と、鐙をけって追いかけてまいり、六文銭を散らしたる、朱塗柄の槍をば取り直して、

幸「お覚悟あれや……」

と、突っかけましたが、ここが家康公のご運の強いところ、紙一重の違いでからだまでは届きませぬ。残念なりと幸村、なおも突き出すその槍は、馬の鞍壺にがちりと当たって、無念にもはね返った。大御所家康はもはや生きたる心地もなく、滅多やたらに鞭をふるって、ピシリピシリと乗馬にあてる。馬はなにさま無双の逸物、天下の大将軍がまたがる駿馬、ジェット機なんぞも、ものかはの勢いで突っ走りますが、このときばかりはさすがの家康、馬が足踏みをしていると思ったといいますが、まことに無理からぬお話……。

家「南無弓矢八幡大菩薩、なにとぞこの危難を助けさせたまえ」

夢中で祈りながら馬を走らせます。と、天なるかな命なるかな、なにしろ恐ろしいという一心で、方角を定めず馬を走らせたのだからたまりません。ゆく手にあたって幅三間あまりの、大きなみぞの前に乗りつけて、右することも左することも、できなくなってしまいました。

あとよりは左衛門佐幸村が、きょうこそ大御所を討ちもらしてはならぬと、馬をあおって追いかけてまいりまするから、家康公のいのちは、げにや風前の燈火と申しましょうか、累卵のあやうさもかくやと思うばかりでございます。もはや絶体絶命、九死に一生といわんより、万死に一生と観念した家康公、目をばつむって心中ふかく、なおも弓矢八幡の加護を念じながら、ピシャリと高く一鞭加えると同時に、両角ぱっとけこみまするとと、馬はたちまちひらりと身をおどらして、三間あまりのこのみぞを、みごとにおどり越えましたのは、さすが日本無双の名馬でございます。家康、心中大いに喜んで、

家「ああ、あやういことであった。やれやれこれで助かった。これぞ弓矢八幡の加護、天運いま

だ家康を見捨てたまわず」

と、勇みに勇んでなおも一生懸命に馬を走らせます。こちらは左衛門佐幸村、みぞのふちへ家康を追いつめたので、しめたとばかりここで討ち果してやろうと、きりりと手綱を絞ったところだからたまらない、心中しまったと思いながらも、馬の頭を立て直し、両角けって、同じくみぞを飛び越えようとしたが、心の乱れはおおうべくもございません。ざんぶとばかり馬もろともに、みぞの中へ落ちこんでしまいました。

幸「うーむ残念っ、さても家康の運の強さよ……」

と、やっとみぞからあがったときには、はや夜も引き明けとなりまして、東のほうがしらみ渡っております。幸村は小手をかざして、家康いずれに逃げ失せたかと、ながめまわしたが、影も形も見えません。残念ながら左衛門佐幸村、ここに手勢をまとめて、大阪城へと引きあげました。

さて、幸村必死の追い討ちをまぬかれて、九死に一生を得ました大御所家康、命からがら夜明けの道をただ一騎、なおもうしろから幸村が、追いかけて来る心地で、ひた走りに馬を走らせ、いつしか奈良の町を、とっとっとかけ抜けようといたしますると、町はずれに一軒、よほど早起きと見えて、桶屋が店をあけ、表へ水を打って、ほうきでしきりにはいております。これをながめた家康公、

家「これこれ町人」○「へい」

と、桶屋の市右衛門、ほうきの手を休めてひょいと見ると、からだじゅうへびっしょり汗をかいた馬にまたがった、大将と覚しきりっぱな老武士だから、

市「へへっ、これはいらっしゃいまし」

家「しばらく予をかくまってくれい」市「へへっ」

家「恩賞は望みにまかせてつかわすぞ……」

市「へい、さようでございますか。お安い御用と、申しあげたいところでございますが、ご覧の通り表から裏へ、ゆき抜けみたいな家でして、どこへも隠れる場所がございません……あっそうそう、さいわい新しく作った風呂桶がそこにございます、あの中へでもお隠れなすってはどうで……」

見ると門口に、三つばかり新しい風呂桶が並んでいるから、

家「おおこれはありがたい。しからばこの中へ隠れるといたそう。して、これなる馬は、どこぞ人目につかぬ所へ、連れていってはくれぬか」

市「へいへい、心得ました」

大御所家康、いそいで新造の風呂桶の中へもぐりこみ、頭の上へふたをのせて息を殺し、じっと隠れております。市右衛門はそのあいだに、裏のたけやぶへ馬をひいていってつなぎ、なに食わぬ顔で店へ戻って突っ端にすわりこみ、しきりにのみやかんなの、商売道具をとぎ始めました。

さて、こちらは大久保彦左衛門と、安藤帯刀の両人、乱軍のあいだからやっと抜け出して、大

御所家康のゆくえをたずね、そここことうろうろ探してまわったが、なかなか見つからない。大いに心配をいたして、

彦「安藤氏、どうも心がかりではござらぬか」

帯「されば、なにさま心配でござる」彦「いやはや、なんともたいへんなことになりましたなあ」

と、半分べそをかきながら、桶屋の前へ通りかかった両人、なにしろはげしい働きをいたしましたので、甲冑にはところどころ血がついているという見るからに身の毛のよだつばかり、乗ったる馬のあちこちからも血が流れているありさま……見ると早起きの桶屋がもう店をあけて、刃物をといでいるから、それへ近寄ってまいりまして、

彦「これこれ桶屋、ちょっとものをたずねるぞ」

と、いわれて桶屋の市右衛門、そーらきやあがったなと思いながらも、

市「へい、なんでございますかい」と、わざと平気の平左をよそおって、一心に仕事をやっております。彦左衛門はあたりをながめながら、

彦「ほかでもないが、りっぱな馬にまたがった、かようかようのおかたが、ここをご通行にはならんだったか。そのほう気がつかんであったかのう……」

市「へいへい、さようでございます。わたくしもいま起きて店を出したばかりで、年寄りにも若いにも、御大将にも足軽にも、そういうおかたがお通りになったか、ならなかったか、いっこうに存じませぬ。なんですかい、このへんでいくさでも始まりましたんで……」

帯「これこれ町人、隠してはならんぞ。本当にそのほうは見かけなかったか」

市「へい、わたくしはまだ、うそと坊主の頭は、いったことがありませんので……」
市右衛門、これが徳川家の大忠臣とは知りませんから、敵方の者とのみ考えまして、すっかりしらをきっている。彦左衛門と帯刀の両人は、いたしかたないという風で、
彦「さようか。知らぬとあらばぜひもない。……安藤氏、困ったことでござるのう」
帯「さようでござる。万一御身に……」
彦「さあ、そこでござる……」
彦左衛門と安藤帯刀、なかばあきらめてゆきかけると、このとき彦左衛門の乗っていた馬が、ひひーんと一声いなないた。すると裏のたけやぶにつないであった家康公の乗馬が、同じくひひーんと高くいななき返したから、さてはと顔を見合わせた両人、
帯「大久保氏、どうも裏のたけやぶが怪しい。拙者ちょっと見てまいろう」
彦「うむ、たしかに聞き覚えのある馬のいななき。しからば貴殿、見てまいってくれい」
さあ、こうなると桶屋の市右衛門、気が気でありません。
市「ああ困ったことになった。うっかりすると、おれもあの年寄りをかくまったとがで、ばっさりやられるかも知れぬ。どうか風呂桶の中に、気がついてくれねばいいが」
と、顔色青ざめ、胸はどきどきと早鐘のよう……。そこへ、裏手から飛んで戻った安藤帯刀、
帯「大久保氏、裏のたけやぶにわが君のご乗馬がいましたぞ」彦「おおっ、さようか。しからばわが君には、必ずこのあたりにおいでに違いない」
といっているところへ、風呂桶の中でなにやら、ごとごと音がするから、
彦「うむ、この桶がどうも怪しい……」

と、両人ずかずかと、風呂桶の側へまいりますから、驚いたのは市右衛門、
市「ああもし、旦那さま」
と、あわてて飛び出して来まして、
市「そ、そ、そりゃなんでございます、このあいだ猫めが、桶の中へ子を生みましたので……へい、その、こればかりはどうも、調節がききませんようなわけでして……」と、とんでもない洒落たことをいっている。早くもそれと心づいた彦左衛門は、
彦「こりゃあ猫の子であろうと、ゴジラの卵であろうと、このほうどもが怪しいと思うから、しらべてみるのだ。ぐずぐず申すにおいては手は見せぬぞっ」
ぐっとにらみつけたから、市右衛門、「うへっ」とへたばるところを、彦左衛門と帯刀の両人、ぱっと飛びこんで風呂桶に手をかけた。
こちらは風呂桶の中にもぐりこんでいた、大御所家康、大きな声でどなっている声が、どうも彦左衛門らしいから、ふたを持ちあげて、立ちあがろうとしているところへ、両人が飛びこんで、桶のふちを引っ張ったからたまらない、ごろっと桶が前に転んだかと思うと、中からコロコロッと転がり出してしまった。両人はこれを見ると、あっとばかりに驚きもし、よろこびもいたしまして、さっそく助け起こしてちりうちはらい、その場へ平身低頭いたしまして、
帯「ははっ、わが君にはご無事にて渡らせられ、さっそくの朝風呂をお召しとは、恐悦至極に存じたてまつります」と、まさかそこまではいわないが、ぽろぽろとうれし涙を流して、喜びを申しあげると、家康公にっこりと笑って、
家「やあ、どうも驚いたぞ。幸村のために、すんでに一命を取られるところであったわい」

彦「ははっ、恐れいりましてござりまする。……こりゃあ亭主っ」　市「うへっ、へい……」

彦「そのほうは不埒千万なやつだぞ。なんではよう申さなかった。ばかものめ、これへ出い。……はようこれへ出いと申すに……」

と、主君を助けてもらったことには気づかない。隠し立てをされた腹立ちまぎれに、大刀の柄に手をかけて、ぐっとにらみつけたから、市右衛門、ぶるぶるっとふるえあがって、歯の根も合わずがくがくやったから、入歯が飛び出してしまって、

市「ふにゃふにゃふにゃ」と、なにをいっているかわからない。両手を合わせて、しきりに彦左衛門をおがんでいます。これをご覧になった家康公、

家「こりゃこりゃ彦左衛門、なにを申す。この市右衛門が予を助けてくれねば、予は幸村のために一命を、奪われるところであったのじゃ……うむ、その礼をも申さずに、なんということを申す。……これ市右衛門、そのほうの恩は忘れはいたさぬぞ。後日、望みにまかせて恩賞を取らせるであろう……」

と、ここにまったく、安堵の胸をなでおろした大御所家康、彦左衛門、帯刀の両人を連れられまして、石川河内守の陣所へとのがれてまいりました。この桶屋の市右衛門は、のちに徳川家より重き恩賞をたまわり、江戸に出て町人頭をおおせつけられましたが、これはのちのお話でございます。

いやはや、褞袍姿の将軍家

お話かわって、こちらは、新将軍秀忠をねらって、わずか十五人をもって枚方に乗りこんだ、大助幸昌はじめ勇士の面々、手はず万端あいととのえて、秀忠きたれと待ちかまえているところへ、かくとも知らぬ秀忠とその本隊、伏見街道をば枚方さして進んでまいり、その夜は枚方どまりのつもりで、いましも延々二里にもおよぶ、枚方堤へとさしかかってまいりました。おりしもかねて、堤の森かげにひそんでいた、大助幸昌の家来、伊勢崎久太夫、行列の真中めがけて、ドーンと一発、鉄砲をぶっ放しました。驚いたのは徳川の軍兵ども、

○「すわ曲者」　△「それ引っ捕えろっ」

とあって、ばらばらっと一散にかけ出さんとしたときに、にわかに大地鳴動いたしてドドドッドーンとばかりに、さながら百雷の一時に落ちきたったかと思われる大音響とともに、地雷火、銅連火一時にここに破裂をいたしまして、火焔はほとばしり、黒煙はうずを巻き、火の玉虚空へ飛びあがって、浅間の山の大噴火もかくやと思うばかり、徳川家の同勢は、馬人ともに空天へ打ちあげられ、首は首、腕は腕、足は足と、五体ちぎれちぎれとあいなって、命を失いまする者数知れず、たまたま命を助かるものも、煙にむせんでうろたえまわり、八方へ散乱いたして、この世ながらの地獄ともいうべき、すさまじいありさまでございます。

△「それ、敵の計略にかかったぞっ」

と、生き残った連中は、浮足立って総崩れ、親は子を捨て、家来は主君をかえりみるいとまもなく、ただわれがちに逃げのびようとあせっている。ところへ大助はじめ久太夫以下が、土手一面の枯草へ火を放ったから、枚方堤二里にわたって、ただ一面の火の海となってしまいました。

このとき川船に乗って、さきまわりしておった、後藤又兵衛、長曾我部盛親の軍勢、燃えさかる土手のまぢかへ舟をこぎ寄せ、どっと横合いから斬りかかりましたから、いよいよ驚いたのは徳川の軍勢。火難、水難、剣難がいちどきに降りかかって来たようなもの、こういちどきに降りかかられては、たまったものではございません。

△「逃げろ逃げろっ」

□「命あってのものだねだっ」

とばかり、踏みとどまって戦うものは、ただの一人もないというのは、よくよく最初の地雷火に、肝っ玉をぶっつぶしてのことでございましょう。

さて新将軍秀忠においては、この思いがけない計略に落ちて、命からがら馬を飛ばしてのがれようとしたが、乱離こっぱいのこの乱軍、おそばにつきしたがう者とては、一人もございません。ただ一騎馬をあおって、夢中で伏見の方角へ逃げてまいりますと、ふいに目の前の堤の底から、ガラガラドドーンという、すさまじい響きが起こって、火の玉虚空に飛びあがり、大石小石の雨が、顔を打ってのすさまじい大爆発、なにかはもってたまるべき、秀忠公のご乗馬、南部出の駿足ではございますが、ひひんと一声、屏風倒しにぶっ倒れる。鞍にあまった秀忠公、これまたもんどり打って、どーんと落馬をいたし、ゴロゴロゴロッと転がって来ると、どぶーんとばか

り淀川の川中へ、水煙を上げて落ちいりました。

親父の家康は、からっぽの風呂桶の中へ入ったのだが、こっちは本物の水の中、しかも旧暦十一月なかば、氷のような冷たい川の深みへ、重い鎧を着こんだまま落ちこんだのだから、まことに念がいった話……。

忠「あっぷあっぷ、こりゃたれぞおらぬか。予はおぼれかけているぞ。た、助けてくれっ」

といったが、幸か不幸か、敵も味方もだれもいない。よほど水を飲んだあげく、ようようすがりついた杭の頭につかまって、全身は水にひたったまま、わずかに頭だけを出して、のがれる道があるかと、八方を見まわしている。

するとここに旗本の一人、安藤治右衛門という男、馬を飛ばしてまいちもんじに、この土手を通りかかったが、ようやく乱軍の中をかけ抜けてほっとひといき。のどのかわきを覚えたので、水を飲もうと岸に近づき、川の中を見ると、なにやらぴかりぴかりと光るものがございます。

治「はて、なんだろう」と、よくよく見ると、秀忠のかぶっている兜の、金の龍頭の前立が、焔の光を照り返して、きらりきらりと輝き渡っている。安藤治右衛門、この龍頭には見覚えがあるから、

治「ややっ、さてはわが君にておわすか。ゆうよはならじ」と、ざんぶとばかり馬を川に乗り入れた。秀忠はこれを見て、

秀「さては、敵方の兵に見とがめられたものと見える。名もなき者の手にかかって果てるは、末代までの恥辱、いでいさぎよく自害をなさん……」

と、すでにこうよと見えましたから、安藤治右衛門大いに驚いて、

治「おーいおーい、そこにあられるはわが君、秀忠公と見たてまつる。かく申すはお旗本、安藤治右衛門でござりまする。……しばらくしばらく」

と、声を限りによばわったから、その声が耳に入ったものか、秀忠公もはっと気を取り直して、

秀「おお、そのほうは治右衛門であったるか」

治「ははっ、恐れながらわが君ご尊体つつがなく、恐悦に存じたてまつります。いざ、この槍の柄に、おつかまりくださりませ」

と、治右衛門、馬上から槍の柄をさし延べたから、秀忠公それにつかまって、ようやくに助けあげられたが、長い間のみずびたし、唇もなにも紫色をしてふるえあがっている。治右衛門は秀忠を抱きかかえるようにして、その場を落ちのびようとするが、乱軍の中のこととて、どこから敵が現われるか知れない。そのうえ堤は焔々として一面の炎でございますから、のがれる道とてはございません。

いかがしたらよろしからんと、主従二人、途方にくれておりまするとすぐ目の前の川の中を、流れにさからってこぎのぼって来る、一そうの小舟がございます。この小舟の主は何者かと申しますと、枚方在、唐崎村の平六という、くらわんか船の商人。酒だの汁だの飯だの肴だのを、舟の中へ積みこみ、

平「くらわんかくらわんか、酒くらわんか。飯くらわんか」

といいながら、京と大阪とのあいだを通う乗合船へこぎつけて、これを客に売って世渡りをする、舟の商人でございます。

この平六じじい、今夜も乗合船相手のあきないをしようと、川中へこぎ出すと、いましも枚方の堤を一万余騎の軍勢が、堂々と大阪へ向かっている姿が、闇にすかしてながめられる。

平「うーん、さてはいよいよ、大阪の城攻めがはじまるな。どうも軍人は立派なもんだ、いやあ旗だの馬印だの、ああたいしたもんだ。おお来るわ来るわ、どうもこんなに押しかけちゃあ、いくら日本一のお城だってとてもたまるめえ。これじゃ当分、乗合船も川止めだろう。こっちの商売もあがったりだ。やれやれ困ったことだわい」

と、くわえ煙管で、ぼんやりと陸をながめていると、ガラガラドドドン――と、一時に打ちあげた例の地雷火、みるみるうちに二里にも近い枚方の堤は一面の焔となって、徳川一万の旗本勢、あっという間に地雷火の中に落ちいりました。いや平六じじい、驚いたの驚かないの、

平「やあ、えれえことが始まった。これだな、地雷火ってえやつは。いやおったまげたもんだ、やれやれかわいそうに関東のおさむれえたち、ここまで来て、みんな地雷火にかかって死んでしまった。軍人ちゅうもんは恐ろしいもんだ。なにしろまあ、こんな無気味なところに、ながいはできねえ。巻添えなんぞ食ったらたいへんだ、早くけえるべえ……」

と、立ちあがった平六が、向う鉢巻、櫓へ手をかけまして、おのれが村へこぎ戻そうとこぎのぼって来たところ……安藤治右衛門これを見ましたから、

治「おーい船頭、その舟待てっ、その舟をもっとこっちへこぎ寄せろ、おーいおーい」

と、声を限りに呼びとめまするようす。なにさま必死の場合だから、その声の大きいこと、手に取るように平六の耳に入ったが、

平「へっ、あの野郎見つけやあがったな。あんな者にかかり合ったが最後、ろくなことはねえ。

よしよし、知らんふりして行っちまえ」

ひどいやつで、聞えないふりをして、ずんずん舟をこぎ去ろうといたしますから、治右衛門さっそくの気転で、腰なる大刀をば鞘ぐるみ引っこ抜き、そいつを右肩にあてて、いかにも鉄砲でねらうようなかっこうをしながら、

治「やあやあ船頭、舟をこれへ寄せればよし、いやだなんどと申そうなら、ふびんながらただ一発のもとに、射ち殺してくれるから覚悟におよべ。命が惜しくば、このところへ船を寄せろ」

治右衛門いまにも、射って放たんというかっこうを見せたから、いや平六、びっくりしてよくよく見ると、なるほど相手のさむらいは、飛道具をかまえてねらっているようす。まさかにそれが鞘ぐるみの刀だとは、夜のことだから気がつかない。

平「うへーっ、むやみにそんなものを、ぶっ放しちゃあいかねえだ、おらがのからだへあたったら、どうする料見だ。痛えも痒いもねえ、あたりどころがわるけりゃあ、すぐにおっ死んじまうじゃあねえか、滅多なことをしねえもんだ……だからおらあ軍人はきれえだちゅうんだ。仕方がねえ、なにをいうか、行って見なくちゃあなるめえ……」

と、平六は仕方がないから、岸辺をさしてこぎ寄せる。してやったりと治右衛門、舟が岸へぴたりと寄りそうとたん、秀忠将軍を抱きかかえたまま、さっと小舟の中へ乗りこんでしまいました。平六は目をまるくして、

平「あれっ、おめえさん鉄砲は……」

治「あははは、そんなものは持っていないぞ。しかし船頭、この刀はよく斬れる。拙者のいうことを聞かばよし、聞かぬにおいてはただ一刀に、斬って捨てるがどうじゃ」

平「うへっ、ま、待っておくんなせえ。どうもぶっそうな人を乗せたもんだ、いってえ、おらになにをしろといいなさるんで……」

治「このおかたを、そのほうが家へお供いたして、しばらくの間おかくまい申せ、恩賞は望み次第にくだしておかれる」平「へへっ」

見ると緋縅の鎧、龍頭の前立打ったる兜をいただき、あたりまばゆきばかりにいでたったる、二代将軍秀忠公でございますから、

平「やあ、おめえさまあ大将さまかね。やれやれえれえ目に出会って、さぞ困んなすったろう。よしよし、おらが家へかくまって進ぜる。敵方の者に見つかった日にゃあてえへんだ、おらまでとんだ側杖を食わねえとも限らねえ、見つからねえように、よく隠れていなせえよ……」

と、平六これより、一生懸命に船をこぎ戻し、取って返したのが唐崎村、秀忠主従を汚い小屋がけのわが家へ案内して、

平「さあ、大将さま、おめえさまあ、びしょ濡れだ。汚くっても濡れたきものより、おらが一帳羅の褞袍を貸して進ぜますべえ。損料を取ろうなんてへんなことはいわねえよ……」

秀「うむ、かたじけない……」

平「さあ、たきびをしやすから、おけつでもまくってあたんなせえ……」

もともと礼儀は知らぬが、人のいい船頭平六、押入れから褞袍を出してすすめたが、なにさま三年も洗濯がしてないというしろもの、いやその臭いのなんの、しかし将軍秀忠もこんな場合、ぜいたくはいっていられない、ぬれねずみの鎧、兜を脱ぎすてて、船頭平六の褞袍に着かえ、毛ずねを出していろりのそばへ、どっかりあぐらをかいた姿は、いや、たいへんな将軍家でござい

ます。

やがて夜が明けると、行方不明の将軍は、唐崎村の船頭平六の小屋に、褞袍を着てござるということが知れ渡ったから、家来達がおいおいに集まってまいりました。やっと生き返った心地になった秀忠将軍、よほどうれしかったと見えて、

秀「平六、そのほうのおかげで、予は命拾いをいたしたぞ。なんぞほうびを取らせるによって、なんなりと望みのものをいえ。必ずかなえて取らせるであろう」というと、

平「へへっ、おらはなんにも望みといってはねえが、無理にほうびをくれるちゅうなら、悪口ごめんを願いてえもんでござえます。どうもおらは生れつき口が悪いで、武家衆にでもなんでも、ぞんざいな口をきいてあきないをしますでな……。おりふし腹を立って、やかましいことをいうやつがあっていかねえ。そこでひとつ、天下ごめんで、悪口のきけるようにしてもらいてえもので……」

秀「ほほう、面白いことを申すやつじゃ。よしよし、望み通りにいたしてつかわそう……」

と、ここに平六に対して、悪口ごめんのお書付をくださいました。これからというものは平六、おおいばりで荒っぽい口をきく。

平「やいやいそこの舟、酒くわんかい、飯くらわんかい、茶、煙草はどうじゃい。くらわんかいくらわんかい」

と、乗合船に対しても、しかりつけるような調子であきないをいたします。これが枚方のくらわんか舟といって、のちには土地の名物にもあいなりました。

名代に立ったが運の尽き

さて、京の二条城より大阪表に向かった大御所家康、二代将軍秀忠の両大将、すっかり気を許しているところを、大阪方の大軍師、真田左衛門佐幸村の妙計に引っかかって、父子ともども、命からがらという目に逢いましたが、あやういところをわずかにのがれて、

両将軍「さてさて、左衛門佐幸村とは、聞きしにまさる恐ろしい智者であるわい」

と、肝に銘じ、腸に徹してふるえあがったが、すぐに陣容を立て直して、あくる日は大阪のまぢかまで迫ってまいりました。秀忠は平野口に本陣を置き、家康は住吉に本陣をかまえて、いよいよ大阪城総攻めの手配をいたします。

なにさま日本国中の軍勢を、かり集めての城攻めのことゆえ、寄手の総勢は四十余万、大阪城の四方を、蟻のはい出るすきまもないまでに、十重二十重に取り囲んでしまいました。

しかれども城は天下の名城なり、守るは日本無双の大軍師、真田左衛門佐幸村をはじめとして、勇士豪傑雲のごとく、十二万余の城兵、はやりにはやって、関東勢よきたらばきたれ、目にもの見せてくれんずと、てぐすねひいて待ちかまえております。

なにさま西は、漫々たる大海に臨んで、人馬を進めるにみちなく、北は淀川の流れを、帯のごとくにめぐらして、岸辺には芦が丈高くおいしげり、いずこに伏勢がひそんでいるか計られな

い。南一方は平地なりといえども、二重の堀切を設け、しかも商家が建ち並んでいるから、大軍を動かすに便が悪く、そのうえ城壁からは、筒先さがりにねらい射ちができる。東は深い沼田が続いて、これもうっかり踏みこんだら、人馬もろとも、底なしの泥沼へ吸いこまれてしまう。

さすがは、豊太閤秀吉が築いた苦心の名城、その要害堅固なること、言語に絶するばかりでございます。しかも、寄手の諸大名の中には、故太閤の恩を思うて、いつ城方へ寝返りを打って、裏切りする者があるかわからない。いろいろ思いあわせると、さすが大御所家康も、決して安心はなりません。そこで家康公、

家「予は一度、諸大名の陣立、陣取のもようを、巡検してまいる。供揃えの支度をいたせ」

とお命じになり、乱鹿と名づけたる三歳駒の駿足に、ゆらりがっきと打ちまたがって、本陣をいで立たれました。つきしたがいまする面々は、関東方の軍師、本田佐渡守正信をはじめ、大久保彦左衛門、安藤帯刀、三浦長門守、成瀬隼人ら股肱の近臣、その他譜代の大名、前後左右をば、厳重に守護して、押しいだしてまいります。

左衛門佐幸村におきましては、かねて敵陣に放った間者、猿飛佐助が早くもこのことを探り出し、馳せ帰って幸村に、事の次第を申しあげましたから、

幸「うむ、さればきょうこそ、みごと一発のもとに射ち殺してくれん」

と、日ごろ手馴れたる十匁筒の鉄砲をひっさげ、蓑笠に姿をやつしてただ一人、真田丸の出城を抜けいでまして、やってまいったのが淀川べりの芦原の中、ころしも十一月の末のことでございますから、吹きすさぶ北風はビュービューとして、六甲はじめあたりの山々には、白雪が降り積っておろうという、どうもその寒さはひとしおでございます。その寒さをいとわず幸村、芦の

中へ身をひそめまして、家康きたらばただ一発と、神に祈り、仏に念じて待ち伏せいたしております。

かかる計略ありとは、神ならぬ身の夢にも知らぬ大御所家康、本陣を離れて十町がほどもまいりますと、風もないのにこはいかに、高くかざした源氏の白旗、三つ葉葵の紋打ったる旗印が、ぽきりと折れましたから、つきしたがう面々はみなみな、あっとばかりに不審に思い、吉凶いかにと顔色かえて、心痛いたしております。

家康公においても、こはいぶかしきこと、不吉なこととはおぼし召されたが、万一ここで引っ返したとあっては、全軍の士気にかかわることと考え素知らぬ顔で馬を進めてまいります。

すると誠忠無二の大久保彦左衛門、ばらばらっとおどり出たかと思うと、馬前に立ちふさがり、がっきと馬の轡をにぎりまして、

彦「上さま、上さま、しばらくおとどまりを願います」　家「なんじゃ、彦左衛門」

彦「ははっ、風もないのにかくは、三つ葉葵の旗印の折れましたること、これぞ、容易ならぬ不吉の前兆と心得ます。こんにちのご巡検、なにとぞお取りやめのほど、願わしゅう存じまする」

と申しあげると、

家「うむ、もっともなる一言、さりながら大将たる者が、かくはいったん出馬をいたしながら、かばかりのことに引っ返したとあっては、わが徳川勢のこけんにかかわる。そのほうの心底はうれしくは思うが、取りやめることまかりならぬぞ。断じておこなえば鬼神もこれを避く、なんの恐れることがあろう」と、聞きいれるようすもございません。彦左衛門は、

彦「いやいや、なにをおおせられます。むかし、唐土の項羽、わが朝の新田義貞の両将も、旗の折れたる不吉の前兆をおかして、出陣におよび、無残な最期を遂げしためしもございます。君にはかかる不吉をおかして、たってお進みにあいなり、万一のことこれあらば、われわれどもの愁傷落胆はいかばかり、……なにとぞ、お思いとどまりのほど願いあげまする」

と、誠心おもてに現わして諫言する。家康公ももっともとは思うが、なにさま全軍の士気にかかわる、大事の巡検、いかがいたしたものかと、とこうの思案にくれております。するとこのときつかつかと、お側へ近寄ってまいりましたのは米倉和泉守、

和「ははっ、わが君へ申しあげます。大将ひとたびご出馬あそばされ、不吉の前兆ありとてご帰陣の儀、いかがとおぼし召しにあいなりますならば、それがし、君の御身代わりとなりまして、巡検いたすでございましょう。もしまた万一のことございますれば、君のご名代となって果てます覚悟……これぞ末代までのわが身のほまれ、家の面目と存じまする。この儀、お許しのほど願わしゅう存じます」と、死を決しての忠諫に、

家「うむ、さようか。そのほうどもがそれほどに申すなら、しからば和泉、そのほうに予の名代を申しつけるぞ」

と、ぱっと羽織れる陣羽織をば脱がれて、和泉守へお渡しになる。

和「はっ、ありがたく存じたてまつります」

と、和泉守はこれを押しいただいて着用におよび、家康公の名代となって静かに馬を進めました。

こちらは大御所家康、大久保彦左衛門、安藤帯刀の両名を引き連れ、こっそり住吉の本陣へと

引きあげました。

さていっぽう、左衛門佐幸村は、淀川べりの芦原に身をひそめ、秘蔵の鉄砲に強薬をこめて、おのれ家康、出て来い。ただ一撃ちにいたしてくれんと、待ちかまえております。するとほどなく、はるかかなたから家康の同勢が、陣屋陣屋を見まわりながら、こちらへやって来るのが見え出しました。しかしどうもその軍勢の、鋭気というものが足りない。

幸「はて、不思議なことがあったものじゃ。大将軍の率いる軍勢が、あのように鋭気足らず、士卒の足並までばらばらに乱れるはずはない。そのうえ馬上の家康を望み見るに、将星の威徳というものが現われていない。さては大御所家康め、わが身にせまる災いをさとり身代わりを立てたに違いない。うーむ、残念千万」

と、左衛門佐幸村、歯がみをして、鉄砲の台尻たたき、無念の涙を呑んだ心のうち、察するにあまりがございます。

幸「うーむっ、さては家康、よほど運の強いやつと見える。よし、かくまで準備いたしたからには、身代わりのにせものを射ち殺したりとも、無益の殺生には近いが、わがねらいの確かさを、敵勢に見せつけて、その肝っ玉を奪ってやらん」

と、一人心にうなずいた左衛門佐幸村、なおもようすをうかがっております。

かくとは知らぬ米倉和泉守、家康公の陣羽織を着用におよび、金の采配をにぎって意気揚々、いましも藤堂の陣屋を見終わり、井伊の陣屋をさして駒を進めまするありさま、げにや和泉守のいのちは、風前の燈火、薄氷をふむのあやうさでございます。

これをながめた左衛門佐幸村、時分はよしとねらいを定めて、ずどんと一発ぶっ放した。なんじょうもってたまりましょうや、ねらいはたがわず和泉守の胸元をつらぬいたから、あっといったがこの世のなごり、どうとばかりに馬から落ちて、そのまま絶命いたしてしまいました。

このありさまに驚いた徳川勢、どこから飛んで来たか、あたりを見まわしたところが、人の気配もさらさら見えませんので、ただぼうぜんといたしておりましたが、いつまたどこから、鉄砲を打ちかけられるかわからないと思いまして、

△「ややっ、曲者だっ」×「油断するな」

と、あわてふためくばかりで、なかなか探しに出る勇気もございませぬ。はては和泉守を引っかついだまま、ほうほうのていで、本陣さして引きあげましたのは、見苦しいとも笑止とも、いおうようなきありさまでございます。幸村はこの騒ぎを尻目にかけ、

幸「うむ、これでよし、家康を討ちもらしたは残念であるが、いずれそのうちのがしはせぬぞ……」

と、ゆうぜんとして芦原を立ちいで、真田丸の出城をさして引きあげました。

無念残念、長蛇を逸す

米倉和泉守が、曲者のために射たれたという知らせは、住吉の本陣へもただちに注進されたから、びっくりしたのは家康公、いまさらのように首をなでてふるえあがり、

家「ああ、彦左や和泉のいうことをきかず、あのところにおいて引っ返さなんだったら、いまごろは予の胸板に、風穴があいているところであった……険呑険呑、いいあんばいに命拾いをしたわい」

これはまことにその通りであるが、大将軍ともなると、情けないことにそんな本音ははけない。

家「ああ忠なるかな和泉守、勇なるかな俊茂、わが身代わりとなり忠死をとげしか、……不憫千万、ねんごろに葬ってつかわせ。なおまた米倉家の跡目は、さっそく加増のうえ、せがれ治右衛門につがせるであろう」

と、ここにすぐさま、嫡子治右衛門俊隆を召し出しまして、

家「そのほうが父、和泉守の忠死をめでて、ここに加増のうえ、そのほうへ家督相続を申しつける。なおまた父同様、そのほうに和泉守の名乗りをつかわすぞ……。このうえながら忠勤をはげめよ」

と、いとねんごろなお言葉。治右衛門にはうけたまわってふかく頭をさげ、涙ながらにこれをお受けして引きさがりました。しかしこのために、きょうの巡検は身代わりの大御所だったということが、陣中に知れ渡ってしまったから、

家「うむ、このまま予が引っこんでしまっては、どうも真田を恐れたように思われ、諸大名への威信にもかかわる。討つ討たるは時の運、真田ごときに命を取らるるとあっては、予が天運もそれまでじゃ。虎穴にいらずんば虎児を得ずのたとえ、わが運命の試しどき、いま一度巡検をやり直さねばならぬわい」

と考えましたから、二日ばかりのちに、またまた巡検を触れ出されました。本多佐渡守、大久保彦左衛門などは、大いに心配をいたし、言葉をつくしていろいろと諫言を申しあげたが、今度は家康、どうしても聞きいれません。

家「うむ、そのほうどもの心配、まことにもっともである。なれども予も深く考え、いったん決心いたしたからには、もはやだれがなんと申そうとも、ひるがえすことはまかりならぬ。二言と申さず準備をいたせ」

という、固い決心のお言葉。そこであくる日の朝まだき、いと厳重にそなえを立て、前に倍する人数をもって、前後左右をばすきまなく固め、住吉の本陣を立ちいでました。それより味方の陣所陣所を、順々と見まわり、例の芦原も、なんのかわったこともなく過ぎまして、伯労ケ淵、江多ケ崎などという、味方の最前線まで押し出してまいり、ここより敵のそなえのようす、地の理などをお調べにあいなり、やがて表島というあたりまでおいでになりましたが、別段なんのかわったこともございません。

つきしたがう者も、大いに安心いたしておりまするとと、こはいかに、またもやズドーンと一発の銃声が、思いもかけぬ、芦の原から響き渡ったかと思うと、つづいて今度は川岸の森の中から、数十挺の鉄砲、筒口をそろえて、ドドンドンドンと、大地もゆるがすばかりに射ち出しました。

○「それ、伏勢だぞ、油断するなっ」

△「踏み込んで打ち取れっ」

と叫んだが、まぢかいところから、ねらい撃ちの一斉射撃を浴びた旗本勢、ばったばったと将

棋倒しに射ち倒され、わっとばかりに崩れ立ちました。

そのとき、弾煙の中から、一度にどっと鬨の声をあげ、現われいでましたその人数、およそ五六百人、さっとばかりに六連銭の旗印をひるがえし、まっさきかけた大将とおぼしき馬上の武者、大身の槍を振りかざしまして、

○「やあやあそれにあられるは、大御所、家康公と見たてまつる。われこそは真田左衛門佐幸村なり、いざ見参見参」

と呼ばわりながら、浮足立った旗本勢のまっただなかへ、馬を乗り入れ、あたるをさいわいなぎ倒し突き倒す。これぞ幸村の影武者、真田家にさる者ありと知られたる、穴山小助安治でございます。するとまた左のかたより、

△「やあやあ、われこそは真田の郎党、海野六郎なり。大御所の御首級をいただかんとて、このところにおいて待つこと久し、いざ尋常にお渡しあれ……」と、三尺無反の大刀を振りかざして、斬りかかって来る。うしろからは、

×「われこそは筧十蔵、いでこの刃を受けられい」と呼ばわって斬りこんで来る。

さあ、あっちからもこっちからも、大音に呼ばわりながら、獅子奮迅のありさまで、おもても振らず斬りこんでまいりましたから、さすがの徳川勢も、あっとぎょうてんいたし、

□「それ、またもや真田の計略にかかったるぞ。おのおのご油断あるな」と、口々にわめくばかりで、だれ一人として、進んで戦おうという者がございません。家康公も大いに驚かれ、

家「うむ、いかにも無念である。者ども打ち破ってまかり通れ……」

と、采配振って下知をなさいますが、なにぶんにも真田という声に、おじけ立ったる徳川勢、

なだれを打って追い立てられてまいります。これを見るより大久保彦左衛門、大御所の轡にすがって、

彦「上さま、君には千鈞の御身をもって、かくあやうきに臨ませたもうは、大将たるものの道ではございませぬ。とく本陣へお引き取りなされますよう……」

と、たっておとめいたしまして、大久保彦左衛門、安藤帯刀、三浦長門守、成瀬隼人ら、側近股肱の面々、手勢三百余人を引き連れまして、家康公を守護いたし、住吉の本陣さして、どんどんどんどん逃げ出してまいりました。

ものの十四五町も逃げ延びて、ほっとひといきつく間もあらせず、またもやさっと、右手のやぶより現われましたる一隊の軍勢、これまた六連銭の旗印をひるがえし、その大将と見らるるは、紺糸縅の大鎧、鍬形打ったる兜をいただき、栗毛の馬にがっきとまたがり、大身の槍をば小脇にかいこみ大音声、

○「やあやあ、そこへまいられしは、大御所家康公と見たはひがめか。かく申すわれこそは、もと信州上田の城主、安房守昌幸が次男、真田左衛門佐幸村なるぞっ。いで尋常に勝負勝負」

と呼ばわりながら、勢いするどく突っこんでまいりましたから、驚いたのは家康、うしろにも幸村、前にも幸村、いまはただあっけに取られて、魂も身にそわず、ぼんやりとしておりますところへ、どっとばかりに、四方八方よりおっ取りかこんでまいりました。これぞ幸村第二の影武者、由利鎌之助でございます。

鎌之助においては、いまこそここに大御所を討ち取らんと、ほかの者へは目もくれず、さえぎる敵をけ倒し突き倒し、眼を八方にくばっておりまするると、大御所家康には、大久保彦左衛門た

だ一人をしたがえ、かなたをさして、逃げ出さんといたしますから、

鎌「やあ、きたなし返せっ、戻せ返せっ……」

と、宙を飛んでかけきたり、えいっと一声突き出す槍先、あわやと見えたその瞬間、手元がくるって無念残念、槍は家康ならで乗ったる馬の尻に、ずぶりとばかり突きささりました。馬はひひーんといないて、どうとばかりにぶっ倒れる。乗ったる大御所家康公、なんじょうもってたまりましょうや、鞍にたまらずその場へどんと、もんどり打って落馬におよばれました。

得たりとばかりに由利鎌之助、槍取りなおして、突きささんといたしましたる折から、このありさまを見て取ったる、大久保彦左衛門、あなやとばかりに打ち驚き、さっと馬を乗りつけざま、鎌之助の乗ったる馬の面上めがけて、えいとばかりに斬りつけました。

馬はひひーんといないて、前足をあげてうしろへたじたじとよろめく。鎌之助は落馬してはあいならぬと、手綱をぐいと引きしめて、馬を立て直さんといたしておりますそのすきに、彦左衛門はひらりと馬を飛びおりまして、

彦「上さま、おけがはございませぬか」

と、老体の家康を抱き起こそうとかけ寄りますと、顔をしかめた家康公、

家「あっ、いたたっ、彦左、予はどうやら足をくじいたらしい。もうひとあしも歩けぬわい。わが天運もここに尽きたと見えるぞ、ここで覚悟をきめて腹を切ろうか」

彦「えっ、なにを申されます。さようなことでお腹など召されては、腹がいくつあっても足りませぬ。これくらいのことで弱音を吹いてなんとなされます。たかが足の一本くらい、彦左がかようにも我慢してさしあげます」

家「これ彦左、ばかを申せ。そのほうは人のことだから我慢できようが、予の身になってみろ」

まさか命の瀬戸際だから、こんなゆうちょうな話しはしていられない。見ると家康公、足をくじいて立ちなやんでおられるから、

彦「さあ、早くわたくしの背にお取りつきなさりませ」

と、大御所を背負いましたなりで、かなたをさしてどんどんかけ出しましたが、この彦左衛門というおやじ、豪胆のうえになかなか剽軽者ときていますから、家康公を背負った手で、ちょいと股倉のあたりをまさぐりまして、

彦「わが君……」家「なんじゃ彦左……」

彦「さすがはわが君、彦左、主君の豪胆には、ほとほと恐れいりました。ただいま彦左ちょいと、主君の睾丸をまさぐりますると、だらりと垂れさがっておられます。これ主君がこの一大事にのぞんで、少しもお心を動じさせませぬ、なによりの証拠……」

いやはや、とんでもないおどけをいっている。これぞ彦左衛門が、少しでも家康公を落ちつかせようとする、気転でございます。しかし家康公は足の自由を失っているから、気が気でない。

家「これこれ、むだ口はやめて早く走らぬか、うむ、早くかけてくれ彦左衛門」

と、からだをもんであせっている。

彦「やあ、ご心配なされますな。人の一生は重荷を負うて、遠き道をゆくがごとし、急ぐべからず……これ上さま日ごろからのお教え、彦左衛門よう心得ております」

と、彦左衛門、口ではばか口をたたきながらも、この寒空に額からたらたら汗を流して、およそ十町ばかりも逃げのび、あとをふり返って見まするると、鎌之助の追いかけて来るようすも見え

ませぬ。ただ味方と敵がいり乱れて、わあわっとあげる鬨の声が、天にとどろき渡るばかりで、このあたりには、ひとっ子一人見えませんから、

彦「やれやれ、これでどうやらひと安心、すんでにあやういところでございました。これと申すもわが君のおしあわせ、もはや大丈夫でございます」

家康公におかれても、ほっと安堵の息をつかれ、

家「彦左衛門、これとてもそのほうの忠誠のいたすところ、予はかたじけなく思うぞ……。さぞや疲れたであろう。ここらあたりでちょっとひといきいたさぬか……」

彦「はは、かしこまりました。なあに大儀も糸瓜もございませぬが、彦左もちょいと一汗かきましたで、ふかせていただきましょう。さるにても主君、幸村と申すやつ、なかなかの曲者ではござりまするが、まだまだこの彦左から申しまするとと、いささか脳足りんのところがござります。かく申す彦左なら、ここらあたりにいま一隊を伏せおきまして、やわかのがしはいたしませぬものを……」

彦左衛門、うまうま危地を脱したと思うから、そろそろもちまえの、大風呂敷をひろげはじめました。するとこのとき、右手の芦原の中より、こつぜんと現われました一人の大将、紺糸縅の鎧を着し、鹿角打ったる兜をいただき、大身の槍をひっさげて、黒毛の駿馬をおどらしながら、こっちへ近づいて来るようす。彦左衛門小手をかざしてながめると、どうやらそのいでたちが、本多平八郎忠勝にそっくりでございますから、おどりあがって喜んだ。

彦「上さま……平八郎でございまする。忠勝でございまする。……おーい、そこにまいらるるは、平八郎殿ではござらぬか、忠勝殿ではござらぬか。わが君には、かく申す彦左衛門守護まいらせて、ここにあらせられるぞ。はやはやまいって守護いたされい……」

と、大声で呼ばわりました。するとかなたの平八郎と覚しき大将、近づくままに、天地にとどろく大音声を張りあげて、

○「やあ、めずらしや大御所、われこそは当大阪城の軍師、左衛門佐真田幸村なるぞ。わが影武者の計にかかって、さざえじりの陣形のどん底へ、追いつめられたるを悟らざりしか。正真正銘の幸村いまぞここにあり、いでいで最後のお覚悟召されよ」と、いわれて驚く彦左衛門、四万八千の毛穴から、ぞっと一時に冷たい風が、針のように突きささった思い……、度胆を抜かれてぎょうてんいたしましたが、かくてはならじと、またもや家康公を背負って、そのままどんどん逃げ出しました。馬を飛ばしてかけよった幸村、

幸「やあやあ、敵にうしろを見せたもうか。逃げるとはひきょうなり、返させたまえ、戻させたまえ」

と、呼ばわりながら追っかけてまいります。さあ、彦左衛門、大御所の心のなかはいかばかり、すでに突き殺されることかと、無我夢中で、どんどん逃げておりまするが、馬上の幸村にひきかえ、彦左衛門は徒歩立ち、しかも、大御所を背負っているのでございますから、かないようがございません。早くも近づいてまいりました、左衛門佐幸村、

幸「えいっ」

とばかりに突き出す槍は、大御所の背中へずぶーりと一刺し、突き通ったかと思う一刹那、このとき早しかのとき遅し、はるかかなたより大御所のあとをしたって、かけつけてまいったのが、横山主膳、稲垣作之丞の両人、このていを見るより大いに驚き、近づく間とてもございませ

ぬから、持ったる槍を両人ひとしく、幸村めがけて投げつけました。
二本の槍は宙を飛んでまいちもんじ、神の助けか仏の加護か、投げたる一本主膳の槍が、幸村の乗ったる馬の尻をかすめて、五寸ばかりがほどを傷つけたからたまりませぬ、馬はひひーんと一声、びっくりぎょうてんおどりあがった。これにはさすがの幸村も手元が狂って、わずかに家康の草摺を、かすったばかりでございます。
幸「うぬっ、なにやつなればじゃま立ていたすっ」
と、振りかえって見まするとと、横山主膳、稲垣作之丞の両人、大刀ずらりと抜きつれまして、左右一度に斬ってかかったから、幸村目を怒らしてはったとこれをばにらみつけ、
幸「おのれ端武者の分際をもって、じゃま立てするとはふとどき千万……」
と、左より斬ってかかった横山主膳を、ただ一槍のもとに突き伏せ、そのすきをうかがって、右より斬ってかかったる稲垣作之丞をば、石突をかえしてどんと胸板鋭く突きましたから、これにたえ得ず稲垣は、しりえにどうと倒れました。
このあいだに彦左衛門は、大御所を背負ったなりに、いまはまったく無我夢中、とても家康の辜丸などを、探っているすきはありません。心臓破りの丘でも走るような思いで、息も絶えなんばかり、無我夢中で走っております。こちらは幸村、またたくうちに横山、稲垣の両人を突き伏せ、
幸「ひきょうなり、返せ戻せっ」
と、なおも追いすがってまいります。さすがの彦左衛門ももはや、背負う力も抜けはてまして、手はなえ腕は折れんばかり、

彦「うーむ、残念至極、……このところにおいて真田のために、われら主従の運も極まったるか。南無弓矢八幡、あわれご加護をたれたまえ……」
と、心中ふかく念じながら、ひたばしりに走っておりますと、川岸にばったりゆきあたった。はっと思った拍子につるりと足を、踏みすべらしたからたまりません。たちまちコロコロッと転がり落ちたのが、川の中の芦の茂みでございます。天の助けとばかりに、喜んだ彦左衛門、またもや家康を背負いまして、膝までつかる水の中を、じゃぶじゃぶごそごそと逃げ出しました。馬をとばしてかけ寄った、左衛門佐幸村、
幸「見苦しいぞ家康殿。いずこへ逃げたもうぞ」
と、土手を水際まで下りて来て、あたりをながめまわしたが、なにしろあたりは、身の丈よりも高い芦が茂っていて、その中へころげこんだ家康と彦左衛門の姿は、どこへ隠れたか見当たりません。
幸「ひきょうなり大御所、未練なり家康、いずこへは逃げたもうぞ。いざ出てまいれ……」
といいながら、槍をしごいて、ここらあたりと思う芦の中を、すかりすかりと突き立てます。生きた心地もない、家康と彦左衛門の両人は、芦の茂みに身をひそめ、じっと息をころして、一心不乱に神や仏を、祈念するばかりでございます。
幸「はて、どこへ隠れおったか……たとえいずこに隠れようとも、やわかきょうこそのがしはいたさんぞ」
と、幸村は、なおも四方八方へと目をくばって、そこここととはげしく槍を突き立てます。このとき彦左衛門は、家康公の耳に口をあて、

彦「上さま、おあぶのうございます。どうぞ、それがしのからだの下へお入りくださいませ」
家「うむ、今度は予がそのほうを背負うのか」
彦「まあそういった工合、これが民主主義でございます」
危急存亡の場合、まさかそんなことはいやあしないが、彦左衛門、自分の下に家康を隠し、身をもって幸村の槍先から、主君をかばおうといたしましたから、風も吹かぬに芦の葉が、ざわざわとゆれ動いた。必死の幸村、なんじょうもってこれをみのがしましょうや……。
幸「はてな、風も吹かぬに奇怪千万。さてはあのあたりにひそんでいるに違いない」
またもや馬を、乗り戻してまいりましたから、彦左衛門、もはやこれまでと眼をつむり、
彦「ああいよいよ今度こそはやられたか、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」
と、生まれて始めて念仏をとなえた。鬼の念仏ということもあるが、この念仏には、さぞやお釈迦さまも、びっくりされたことでございましょう。
こちらは左衛門佐幸村、たしかにこのあたりと思いましたから、持ったる槍を取り直し、えいっとばかりに力をこめ、ぐさりと突きこみましたが、ここが家康公のご運のいいところ、槍の穂先は、わずかに彦左衛門の草摺をかすめたばかりで、からだに当たりませぬ。しかしその気色の悪いこと、ぴかりぴかりと光る槍の穂先が、いまにもぶつりと突き通らんばかりに、鎧をかすめるのですから、ぶるぶるっと身の毛をよだて、
彦「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏……、弓矢八幡大菩薩、なにとぞご加護をたれたまえ……」
と、これぞまったく神仏混淆、一生懸命に祈っております。左衛門佐幸村におきましては、一突き突き通したが、手応えがありませんから、

幸「おやおや、これはどうも不思議だ。たしかにここが、動いておったに相違ないが、はて、これはどうしたことじゃ」
と、なおもあたりを見まわし、小首をかしげて思案にくれておりましたが、
幸「いや、たしかにここに違いない……」
と、またもや槍を取り直して、えいとばかりに二度三度、つづいて七八回も突き試みましたが、さらに手応えがございません。
幸「うーむ、いかにも残念千万なことである。一度ならず二度までもすんでに討ち取るところまで追いつめて、かくは取り逃がしてしまうとは、これぞ大御所の命運いまだ尽きざるところか……、ても運のよい狸爺であるわい。……されどこの幸村が見込んだからには、必ずいつかあの白髪首、討ち取らいではおくべきや……。首を洗って待っておれ……」
ばりばりと歯がみをいたし、天を仰いで嘆息いたしました幸村、なにを申すにも、敵陣の奥深い所ですから、長居は無用とばかりに、馬を土手へと乗り上げて、真田丸さして引きあげました。

城中に秘密をもらす曲者あり

幸村の駒の蹄の音が、はるかかなたへ消え去るのを待って、やっと声の間から頭を持ち上げた

彦左衛門、

彦「ああさては神仏のご加護であったか。ありがたし、かたじけなし……上さま、お喜びくださいませ。幸村め、やっとあきらめて行ってしまいましたぞ」

家「お彦左衛門」とおっしゃったが、無量の感に胸せまり互いに顔をば見合わせて、ほろりとこぼすひとしずく、うれし涙にむせんでおられますのは、げに無理からぬことでございます。

さて、九死に一生を得ました、大御所家康と彦左衛門、もはや大丈夫というところから、彦左衛門は、またもや大御所を背負いまして、難なく住吉の本陣へと立ち帰りましたが、あとで調べてみると、彦左衛門の鎧の背に、五六ヵ所も槍先で突かれたあとが残っている。

しかし鎧の札が厚かったので、彦左衛門にはかすり傷ひとつつかなかった。このため彦左衛門はのちになって、三代将軍家光公をはじめ、若い旗本連中を前にしては、

彦「かく申す大久保彦左衛門、神君のお供いたして十六歳の初陣、鳶の巣文殊山において、敵の大将、和田兵部を討ち取ってよりこのかた、大小幾度の合戦に出陣いたし、身に七十余ヵ所の手傷を負うたが、見られい、うしろ傷は一つもござらんぞ……」

と、すごいたんかをきったと申しますが、どうやらその手柄は、鎧のほうにあったと申せましょうか……、このときの鎧は、のちに大久保の槍摺鎧と呼ばれ、大久保家の家宝として、長く伝えられたということでございます。

さて、こちら左衛門佐幸村、無念の涙を呑んで真田丸へ引きあげ、なんとかいたして、大御所を討ち取らんものをと、いろいろに工夫をこらしておりましたが、このごろの城内のありさまをうち見るところ、大将秀頼公は繊弱にましまして、御母公淀殿の手によって、何事もきめられる

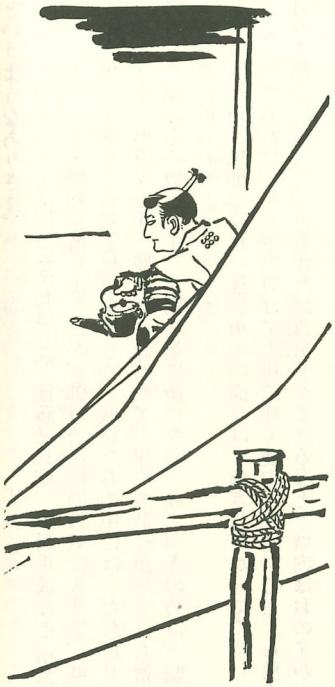
というようなありさま。

こんなぐあいで、左衛門佐幸村はじめ、後藤又兵衛、木村重成など、勇将の向かうところ、大阪方はいたるところ大勝利を博しましたが、御母公淀殿のお気に入りで、城中の権力をにぎる大野道犬、修理、主馬などの親子兄弟をはじめ、城将たちの中には、ただ寄せ手の大軍に怖じ恐れて戦わぬさきから戦意を喪失、臆病風に誘われて、早くも砦や出城をうち捨て、要害堅固な城中へ逃げこんで来るもの数知れず、次第次第に南のかた、陸つづきの砦は、関東勢のために攻め落とされ、奪い取られてしまいました。

幸村はじめ、鬼神も恐れぬ猛将勇士の面々は、歯ぎしりかんでくやしがったが、淀君のご機嫌さえ取っておれば、いくさに負けても得のゆく連中、かえってこれら勇士の面々をうとんじ、淀君や秀頼公に対して、ともすれば讒言をかまえるなど、城内はおのずから二派に別れてまいりました。

さても天の時は、地の利にしかず、地の利は人の和にしかず、と教えられます通り、大阪城という天下無双の要害に立て籠りながら、二派に別れてことごとに争うようでは、もはやその運命は知れたもの、これでは、どんな名城に立て籠っても、しょせん最後の勝利はおぼつかない。

そのうえ、大阪城中には、前にもちょっと申しあげました通り、小幡勘兵衛景憲という、関東方の間者が紛れこんでいて、これがひとかどの忠義顔をしながら、ことごとに大阪方の不利益になることばかりすすめる。淀君や大野父子、織田有楽などは、この勘兵衛の口車に乗せられて、無上の忠臣と信じこんでいるが、後藤又兵衛や木村長門守重成は、とうに勘兵衛の挙動を怪しんで、



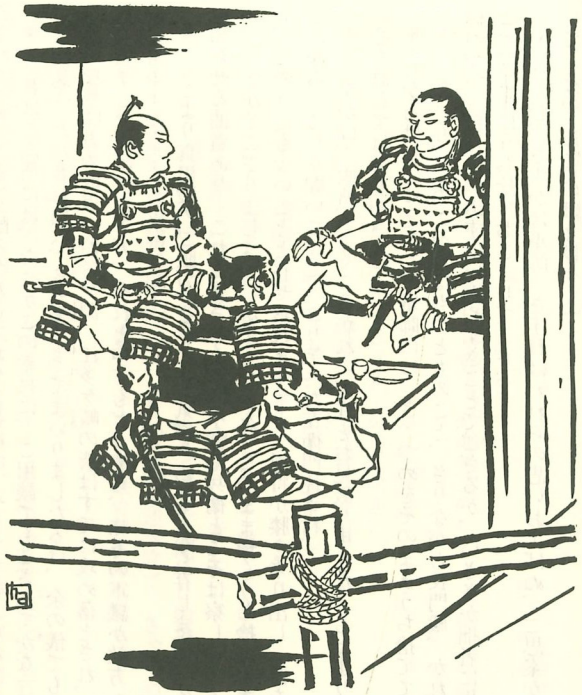
又「木村殿、小幡勘兵衛めの、いつも怪しげなるふるまい、これぞ関東の間者に違いないと覚えるが、貴殿はいかがおぼし召されるな」

重「されば、拙者もとうより目をつけ、用心いたしてはおりまするが、軍師真田殿には、天地を見抜く眼力の持主、よもやこのこと、お気づきなきはずはなかろうと存じまする。しかるになにゆえあって、あのままさしおきまするや、軍師にもにあわしからぬことと存じておりまする……」

又「うむ、いかにも……。まことにかれ小幡のごときは、獅子身中の虫とも申すべきやつ、早く片付けてしまわねば、いかなるわざわいをひき起こすやも計られぬ。ひとつ軍師幸村殿のご所存をうけたまわろうではござらぬか」

重「うむ、それがよろしゅうござる」

と、これから又兵衛と重成の両人、うち連れ立って幸村の



出城、真田丸をさしてやってまいりました。思わぬときに両将の訪問でございますから、幸村公大いに喜ばれ、さっそく一間に招じて、せがれ大助を呼び寄せ、

幸「大助……後藤、木村のご両所、せっかくのお客来じゃ。なにはのうても、そち、粗酒なとおもてなし申せ」

大「はっ、かしこまりました」

と、ただちに用意におよびまして、これより三人、差しつ

差されつ、さかずきを酌みかわしておりましたが、やがて幸村、かたちをただし、

幸「さればご両所には、なにかこの幸村に、ご用談でもござってかな」

又「いや、われわれ両人、うちそろってまいりましたるは、余の儀でもござらぬが、ちかごろふがいなき味方の敗軍、伯労ケ淵、江多ケ崎の砦はすでに攻め落とされ、茶臼山までも敵の手に奪われましたるは無念千万。それと申すもどうやら、味方の軍議が敵方へ、もれ聞こえればこそと心得申すが……」

重「もとより真田殿のご眼力、とうにお気づきのこととも存じまするが、味方の秘密を寄せ手に知らせる曲者あり、これぞまさしくかの小幡勘兵衛とこそは察しまするが、軍師のご所存のほど、いかがでござりましょう。かような者を、このまま長くうち捨ておきましては、味方の不利益、このうえもないことと存ぜられます」と、両将が膝を乗り出し、眼をいからせて説きたてましたから、これを聞いて、にっこり笑った左衛門佐幸村、

幸「さすがはご両所、よくこそかれの本性をお見破り申した。もとより拙者も、とうよりかれに心を許してはおり申さぬ」

重「しからばなにゆえあって軍師には、きゃつめをそのままうち捨ててはおかれまするや……」

幸「いかにも、そのご不審はもっともなこと、さりながら長門殿、かれ小幡のごとき、蛆虫同様のやつ、ひねりつぶすはいとやすきことでござるが、いささか拙者に思う仔細のあって、わざとそのままにうち捨ておきましてござる……」

又「うーむ、さすがは軍師、さすればわれらの思いおよばぬ、ご思案がおありと見える。……して、そのご思案のほどは……」

と、首さしのべて聞き耳を立てました。

毒には毒を、敵には敵をの妙計

幸村はあたりを見まわし、声をひそめて両将に向かい、

幸「ようお尋ねくだされた。ご両所、はかりごとは密なるをもってよしといたすとか、壁に耳あり徳利に口ある世のたとえ、ちこうお進みくだされい」

と、なおも両人を膝もと近く招き寄せまして、

幸「ことわざにも、毒をもって毒を制し、敵をもって敵をはかる、と申すことがござるが、拙者、明日の軍議の席上において、かようかようにいたす考え……」

と、なにやらぼしゃぼしゃささやきまするが、これを聞いた両将、

又「ええっ、さては軍議の席上、いつわりの計略を述べ立て、きゃつめが喜んでそれを、敵方へ注進するを待ったるうえ、その裏をかいて、家康めの本陣へ討ちいり、一挙に勝敗を決せんとするお覚悟……」

思わず声高になりますのを、幸村手をあげて、

幸「しっ、ご両所、お声がたこうござるぞ……茶臼山の砦を敵にわざわざ奪わせたのも、この計略のためでござった。地の理を知ったる茶臼山、ここにこのほど大御所が、本陣をうつしたる

こそ、もっけのさいわい天の助け、油断を見すまし、拙者じきじきにただ一人忍び寄り、奈良このかた、一度ならず二度までも、討ちもらしたる大御所家康、このたびこそはみごと討ち取る所存でござる」

始めて明かした幸村の本心に、後藤、木村の両将も、思わず感嘆のうめきをもらし、はらはらと落涙いたして、

重「ああ感じいったる軍師のご誠忠、一度ならず二度三度、虎穴にひとしき死地に乗りいって、大御所家康をねらいたもうとは……、これぞまことに大丈夫のおこころざし、それにつけても淀殿はじめ倭人輩、かほど誠忠の貴殿のご本心を悟り得ず、秀頼公に対して、さまざまの讒言をいたすとは、憎さも憎し、おろか至極な奴輩でござる」

又「これほどの軍師の妙策も、こんにちまでことごとく倭人輩に妨げられて用いられず、思えば思うほどくちおしいことでござるわい」

と、大豪傑の後藤又兵衛、さざえのようなげんこつで、涙をごしごし押しぬぐっている。

幸「いや、それもこれも、みなわれらが不徳のいたすところ、われらはただ秀頼公の御為に、ご馬前の討死をこそと願うもの、さらさら恨みとは思い申さぬ。ただここに一つのお願いは、拙者首尾よく大御所を討ちたてまつりしその際は、なにぶんにも敵陣ふかきことなれば、とうてい無事に帰られようとは、思いもよらぬことでござる。さればその節は一子大助、いまだ弱年でござれば、よろしくお引き立てを願いとう存ずる」

と、さすが勇士の幸村も、父子の情はまた格別、死後のことまで両人へ、事打ちあけて頼みいりました。うけたまわって後藤、木村の両将、じっと幸村の顔を見つめたままに、言葉もなく、

感にたえいるばかりでございます。ややあって両人、言葉をそろえ、

両人「驚きいったる軍師のご心底、もはやわれわれ、なんとも申しあげませぬ。ご子息大助殿の儀は、必ずご心配くださるな、誓ってお引き受けつかまつります」

幸「いや、それうけたまわって安心つかまつった。もはや心に、思い残すところとてもござらぬ。さればご両所、明日の軍議には、うまうまと勘兵衛めをあざむきおおせ、寄せ手の裏をかき得まするよう、よろしくご助言を願いたい……」

重「いかにも心得ました。できうる限りのお手助けをつかまつりましょう」

又「しからばそれに役立てるまでは、残念ながら勘兵衛の首、胴の上へのっけておくといたそうか。いや、なんとも胸糞の悪いやつでござるが……」

両将も、幸村の胸中を知り得て、いまさらのように敬仰思慕の念をふこういたし、それよりさらにうちくつろいで酒宴に花を咲かせ、やがて夜のふけ渡った九つ（十二時）の頃おい、両将は城内をさして引きあげました。

さて、その翌日になりますると、秀頼公のご出座を願い、城内千畳敷の広間において、大軍議を開くこととあいなり、執権職大野修理をはじめ、大野道犬、同じく主馬、織田有楽斎などの倭臣輩、あるいは、速水甲斐、堀田図書、真野豊後など、七手組の大将から、持場持場の隊長にいたるまで、蟻のはい出るすきまもないほど、綺羅星のごとくに居流れました。

このとき幸村、設けの席へと着座におよび、諸将に会釈いたしましたるうえ、威儀をただして、

幸「いかにかたがた、このたびの味方の敗軍は、実に見苦しきことではござらぬか。取るにも

足らぬ徳川勢に、かくやみやみとひけを取るなどとは、まことになんと申そうか、世の物笑いの種でござるぞ。いったい、守将のかたがたは、なにをいたしておられたか……」

にがにがしげに、あたりを見まわしていい放ちますと、敗戦の責任ある人々は、みな耳のつけ根まで真っ赤にして、さしうつむいて言葉もございません。幸村はなおも言葉をついで、

幸「とは申せ、もとより勝敗は兵家の常、あながち負けたからとて、あえてとがめだていたすわけでもござらぬ。つまるところは百たび敗戦いたすとも、最後の一戦に勝ちを制することこそ、これぞまことの勝利でござる。されば決してかたがたには、ご落胆なさらぬがよろしゅうござる。実はそれがし、その最後の大勝利を得るために、いささか一計を案じ申した」

そういって幸村、一座をずらりと見まわした時には、だれ一人、しわぶき一つする者もなく、さすが千畳敷の広間も、さながら水を打ったようでございます。その中でぺろり真っ赤な舌を出したのは、これぞ小幡勘兵衛景憲、

勘「うむ、面白い面白い。さては幸村、いかなる密計を考え出したかな」

と、ひとりほくそえんで、耳をそばだてております。幸村は静かに言葉をついで、

幸「さておのおの、その計略と申しまするは、こんみょうにちのうちにじゅうぶん士卒を休ませ、矢弾を取りそろえて支度をいたし、みょうごにちの夜明けがた、城門をいっせいに押し開いて、寄せ手の陣の寝込みを襲うのでござる。そのために、ことさらこんみょうにちの二日間は、敵兵攻め近づくとも、城門をとざして相手にならず、城内になにか事ありげに見せかけ、しおれ返ったようすを見せつけねば、あいなり申さぬぞ。かたがたおわかりかな」

諸将はどんな妙計かと思ったら、案に相違して児戯にひとしい作戦でございますから、幸村の

本心を知る後藤、木村の両将のほかは、みな意外そうに幸村の顔を見つめている。なかにも、織田有楽斎や大野道犬などは、目と目を見合わせて、

有「おやおや、軍師も年のせいで、しょうしょういかれてきたのかな、あの勝ち誇った寄せ手のただなかへ、城門を開いて討って出たならば、味方はたちまち、総敗軍は知れているわい」

道「こんな無謀な作戦は、御母公さまや右大臣家に申しあげ、取りやめにいたさねばあいならん」

と、早くもいつもの伝で、幸村のじゃまをしようと考えている。しかし、喜んだのは小幡勘兵衛景憲、こいつ自分が一杯はめられるとは夢にも知らないから、

勘「うむ、こいつはしめたぞ、また例の矢文をもって城外の寄せ手へこの軍議の結果を知らせ、みょうごにちの早駈には、幸村はじめ城内の者ども、さんざんな目にあわしてつかわそう」

どうもたいへんなやつがいたもので、早くも自分のたまりへ引きあげると、せっせと矢立の筆を走らせて内通の矢文をしたため、城壁のあいだから、寄せ手の陣内へひそかに射込んで、なに食わぬ顔で、半兵衛をきめこんでおりました。しかしこのありさまをば、すっかり見て取ったのが、幸村の命を受けて、ひそかに忍んでいた忍者の猿飛佐助、

佐「へへん、おれがこうして忍んでいたとは、お釈迦さまでもごぞんじあるめえ……。知らぬが仏の小幡勘兵衛、これですっかり、みそをつけたらヨカンベエ……」

とんだだじゃれをとばしながら、さっそく幸村にこのことを知らせましたから、幸村も計略まんまと図にあたったりと、おお喜びでございます。

さていっぽう、勘兵衛からの矢文を受け取った徳川勢、城内軍議のありさまが、スパイ小幡の

てがらによって、すっかり手に入ったから、まずはみょうごにちまで、ゆっくり手足をのばして休めるわいと、自然、どの陣屋でも気をゆるめ、油断がありありと見えてまいりました。

ここがどこまでも幸村のねらったところで、みょうごにちといって、実はその晩、ただちに敵の本陣、茶臼山へ忍びいって、大胆不敵にもただ一人、家康をねらおうという、まことに壮烈極まる、大秘計でございます。

ねらいを定めた秘蔵の短筒

さて、その日の夕刻になりますと、幸村はせがれの大助を、わが居間に招き寄せまして、

幸「大助、父は今宵ただ一人、茶臼山の本陣へ忍びいり、怨敵、大御所家康をただ一発で討ちはたす覚悟じゃ。さりながら、敵中深く忍びいってのことゆえ、たとえ、首尾よく家康を討ち果すとも、この父もまた生きてふたたびそちに会うことはかのうまい。父なきあとは父に代わって、粉骨砕身の忠勤をはげめよ……」

別れといえばかりそめの、別れといえど憂きものを、ましてや父子今生の別れと思えば、さすがに猛き武夫も、その胸は張りさけんばかり、ひとしおの思いをこめていいまするが、

大「これは父上、ただお一人にてお出かけとは、あまりと申せばご無謀かと存じまする。おぼしとどまりたもうか、さなければわたくしはじめ、心ききたる郎党をお連れくださりまするよう、……それにてもいかぬとおおせあるならば、せめて大助一人なりと、お供願わしゅう存じまする」

と、父を思うまごころから、赤心おもてにあらわれての大助の心中を察しまして、さすがの幸村、心のうちでは泣いておりまするが、うわべにはそんなようすは少しも見せず、きっと大助をにらみつけまして、

幸「大助っ、弱年の分際をもって、父を見くびるようなただいまの一言、二度と申さば許さぬぞ。父が深き思慮よりいでたる今宵の計略、なんじらごときは黙りおろう」と、言葉するどくしかりつけます。大助は涙をはらはらと流して、

大「さまでのおおせでござりまするなら、ぜひにおよびませぬ」

と、その場へうつむいて拳をふるわせ、わなわなとすすり泣いております。幸村は心弱くてはかなわじと、すっくと立って急いで身支度を整える。

そのいでたちはと申しますれば、雑兵輩の着る鎧を着こみ、陣笠に深くおもてをかくして、腰に帯びたるは徳川家をのろう稀代の悪剣、千手院村正の妖刀。手には秘蔵の種子島の短筒をたずさえ、すっかり雑兵の一人に化けまして、闇にまぎれて真田丸を忍びいで、すたすたと足にまかせて、松屋町筋へと出てまいりました。

幸「やれやれ、だれにも知られず、ここまで出てまいったからは大丈夫……」

と、南をさして、茶臼山大御所の本陣を目あてに、提灯に道を照らし、どんどん急いでまいります。すると南のほうから、これまた提灯をさげてやってまいりまする、一人の雑兵がございますから、天の与えと喜んだ左衛門佐幸村、さりげなくそのそばに近づいて、

幸「もし、ちょっとお尋ね申しますが……」
雑「おおなんだい、こっちは急用で急いでる途中だ、用があるなら早くいえ」
幸「うむ、その用事というのは、これだ、……えいっ」雑「あっ、うーむっ」
目にもとまらぬ急所の当て身、雑兵は目をまわしてぶっ倒れました。にっこり笑った幸村、そばに寄って提灯吹き消し、雑兵のふところから陣門通行の割り符を奪い取ってみると、本多佐渡守の兵卒でございますから、
幸「おお、これさえあれば大願成就……」
と、押しいただいてふところにしまい、なに食わぬ顔して、本多の紋所のついたる提灯を拾いあげ、すたすたとその場を立ち去りました。
これより生玉のあたりまでまいりますと、ここには伊達政宗の陣屋がございます。見ると雑兵五六人が、かがりびをたきながら、なにやら雑談をいたしておりまするから、幸村は大胆にも、
幸「やあ、これはおのおの、お役目ご苦労でござる。今宵はまた、格別にお寒いことで……時に申しかねまするが、途中で提灯を消して、おおきに難儀をしておりましたるところ、ひとつ、火を貸してくだされい」
○「さあさあ、それはおやすいこと、して、そなたはいずれのご家来じゃな」
幸「へい、本多佐渡守さまの手の者でございますが、急用あって、鰻谷までまいっての戻り道でございます」
いいながら、提灯に火をともしたのを見ると、ちゃんと本多の紋所があるから、怪しむようすもなく、

○「うむ、よしよし、早く通れ」
難なくそこを通りすぎて、やがて茶臼山の本陣の前にさしかかりますと、またもや番所がございます。
番「こりゃこりゃ待て、そのほういずれの者で、どこへとおる」
幸「へいっ、本多佐渡守さまの手の者でございます……」
前の通りを申し述べたが、ここは本陣の陣門だけに、なかなか調べがやかましい。
番「ふーむ、本多殿の手の者というか。……しからば、割り符を所持いたしておるであろうな」
幸「へいへい、それはもう、ちゃんと持っておりまする」
こんなことであろうと思ったから、奪い取ったる例の割り符を、ぬからぬ顔で差し出しまする と、手にとってとくとあらためた番士、割り符が本物でも、持ち主がインチキだとは夢にも知りませんから、
番「うむ、なるほど、よしよし通れ」
幸「へへっ、ありがとう存じます」
なるほど、このお礼ばかりは本音でしょう。さて幸村は、そのまま首尾よくも茶臼山、大御所の本陣へと、まぎれこんでしまいました。
幸「やれやれうれしや、こううまくいったからは、首尾よく本望成就の吉兆であろう。あなありがたや、かたじけなや……」
と、心中おおきに喜びまして、人目を忍び大御所の、御座のまぢかく忍びこみましたは、げにも大胆千万のことでございます。

ところがこちらは大御所、こんな恐ろしい大敵が、本陣深くまぎれこんだとは知らぬが仏、この夜は越前家から、寒鱈を送ってまいりましたので、みょうごにちまではと気をゆるし、ここに諸将を集めて、これを肴に酒宴を開いておりましたが、そのうちに家康公、尿意をもよおしてまいりましたので、ずっと席を立ちあがりますと、例の影身を離れぬ、大久保彦左衛門、成瀬隼人、安藤帯刀の三人が、その前後を守ってかわやをさして出てまいりました。

こなたにあって、これをながめた左衛門佐幸村、

幸「うーむ、さては家康じゃな。よいところへ出てまいった。おのれっ、ただひとうちにいたしてくれん……」

と、例の短筒をかまえ、ねらいをつけようといたしまするが、なにぶんにも、彦左衛門が楯と

なっておりまするので、万一しくじっては一生の大事と、ためらっているうちに、家康公には、すっと便所へ入ってしまった。

幸「うむ、残念なことをいたした。よし、帰りを待って討ち取ってくれよう」

と、身をはうようにしてなおも近づき、息を殺して待ち受けます。するとまもなく、大御所には便所を出られ、いましも帯刀が、ひしゃくを取って水をくみ、大御所の手にかけている。その側では隼人が、手拭いをささげ、彦左衛門はこなたにひかえて、じっとあたりに眼をくばっております。

これをながめた左衛門佐幸村、千載一遇の好機、これぞ絶好のチャンスとばかり、心中ふかく弓矢八幡を念じて、ねらいを定めた秘蔵の短筒、千に一つの狂いもあらじと、ずどんと一発、ぶっ放しました。「あっ」と驚くいとまもあらせず、

家「うーむ」と一声、大御所には、しりえにどうとぶっ倒れましたから、なおさらびっくりしたのは、彦左衛門はじめ、帯刀、隼人の三人でございます。腰が抜けるほどぎょうてんいたして、三人ひとしく大声はりあげ、

三人「やあ、曲者あり、かたがた、であいそうらえ」

といい放って、大御所を助け起こして見まするとどうも運の強い人は、どこまで運が強いかわからない。弾はわずかに、家康の頬をかすめたばかりでございますから、三人もほっと安堵の息をつき、急いで奥へとかかえこんで、ご典医、半井路庵が、さっそくのおてあてをいたしましたが、さて、陣中にわかの大騒動でございます。

なにしろ大御所をねらう曲者が、忍びこんでいるというので、いあわす武士どもは、手に手に

大刀をひっさげまして、残るくまなく捜索いたしましたが、早くも曲者の姿はなくて、ただ一挺の短筒が、投げ捨ててあるばかりでございます。

彦左衛門が、その短筒を取りあげてみると、銃身に金象嵌で「左衛門佐幸村、これを所持す」と彫りつけてあるから、

彦「やっ、さてはただいまの大胆不敵の曲者は、またしても真田幸村であったるかっ。まだ陣内のそとへは出まい。探し出して斬ってしまえっ」

きびしく命令いたしました。さあ、敵の軍師幸村が、忍びこんだと聞きまするとと、陣屋の内はいっそうの大騒動、輪に輪をかけた、てんやわんやの騒ぎとなりましたが、天にかけたか地にもぐったか、どこをどう探しても、ついに幸村の姿は見つかりません。

さて、左衛門佐幸村におきましては、ねらいにねらった短筒の一発、たしかに手応えあって、どうと倒れる家康の姿を認めましたから、

幸「うむ、してやったり」

と、こおどりいたさんばかりに喜んで、証拠湮滅、のちの危難をまぬかれるためにと、惜しくも短筒をばその場に投げ捨て、さっと身をひるがえすと、右往左往に立ち騒ぐ、雑兵輩の中にまぎれこみ、なおもようすいかにとうかがいまするとと、大御所家康には、ほんのわずかのかすり傷にて、いのちに別条がないというわさでございますから、

幸「うーむ、残念千万、さては九仞の功を一簣にかいたか……てもさても幸運の家康かな、しかし撃ち損じたるうえからは、なんとしてもこの場をのがれ、捲土重来もう一度ねらってやらねばあいならぬ。はて、どうしてこの場をのがれたものか……」

と、歯がみをいたしながらも、またここをうまくのがれ出ようと、思案にくれております。すると本陣におきましては、どう探しても、曲者が見当らないところから、雑兵どもに不審がかかって、一人一人を呼び出して、割り符とともに合言葉によって、吟味いたすということになりましたから、さすがの幸村も、心中おおいに弱って、

幸「はて、どうしたものであろう。こいつは困ったことになったわい……」と、はたと当惑いたしておりますると、隣りにおった雑兵が、「わーっ」と頓狂声をはりあげたかと思うと、

×「……こいつはえらいことになったぞ、おれは井伊さまの手の者だが、ついうっかりと、肝心の合言葉をどわすれしてしもうた……こいつあたいへんなことになった」とわめき立てた。

○「なに、合言葉を忘れた……そいつは困ったことじゃのう、……なんとか思い出す工夫はござらぬかな……」

×「さればどなたかこのほうの、尻をつねってはくださらぬか。拙者幼少のころより、物忘れが強く、そのたびごとによう母者から、尻をつねられたものでござる。それが習い性とはなって、いまもって尻をつねると、不思議と忘れたことを思い出してござる……」

いやはや、とんだ落語を地でゆく男があったものです。すると一人の雑兵が、

△「わしは本多さまの手の者じゃが、わしのほうは鶴と亀が合言葉じゃ。はて、井伊さまのほうは、なんといいやるのかのう……」

と、ひとり言のようにつぶやいたから、これを聞いておった幸村、なんじょうもって聞きのがすべき、これぞまさしく天佑神助、しめたとばかりこの場を抜け出し、やってまいったのが係り役人の前……。

幸「ええわたくしは、本多佐渡守さまの手の者で、神部弥平と申します。割り符はこれでございまして、合言葉は鶴と亀でございます」

大胆不敵と申しましょうか、顔色ひとつかえずに、よどみもなく申し述べましたから、係り役人においてもさらにうたがう気色もなく、

役「うむ、よろしい……」

といって、お調べずみの札をくだされたから、その場を無事に通りましたは、げにもあやういこの場のありさま。家康公も幸運なら、幸村もまた幸運でございます。

命を芥の人海戦術

さて幸村は、からくもこの場をのがれまして、闇夜をさいわい陣所陣所を通り越し、夜更けてようやく、真田丸の出城へと立ち帰りました。

ところが大助はじめ、家来一同、父はいかがなされしか、主君のご首尾はいかがとばかり、みなみなあいよって心配いたしているところへ、のっそりと幸村が入って来ましたから、一同夢かとうち喜び、なかにもせがれ大助は、はやくも幸村の側へとまいりまして、

大「お父上、ご無事のご帰城、おめでとう存じまする……」

しかし幸村は、なんとなく浮かぬ顔つきをして、

幸「うむ、めでたいようでめでたくないのじゃ。ねらいにねらった秘蔵の短筒、よも狂いはないと思うたに、無念ながらわずかな手傷を負わせたのみで、またもや家康めを討ちもらした、きょうがきょうまでただの一度も、あの短筒のねらいをはずしたためしを知らぬこの腕に、ねらいにねらった家康めを射ちそらすとは、さてさて天命とは恐ろしいもの。しょせん人間の力では、天の定めに勝つことはできぬものらしい。残念至極であるわい」

と、天を仰いで嘆息いたしましたので、大助はじめなみいる郎党、いずれも悲憤のこぶしを、にぎりしめるばかりでございます。

お話しかわって、こなた家康公におかれては、ごくわずかなかすり傷でございますから、まもなく正気に返られて、

家「うーむ、予はすんでにあやういところであった。して、曲者は召し捕ったかな……」

というお尋ねに、大久保彦左衛門、「ははっ」とばかりに頭をさげ、

彦「恐れながら曲者は、真田左衛門佐幸村めにてござりました。残念ながら取りにがしてござりまするが、かような短筒を取り落としまいりましてござります……」

といって差し出したのは、幸村秘蔵の例の短筒、これぞ幸村が父昌幸とともに、苦心に苦心を重ねて発明いたしましたる、縮射筒と申し、火縄を用いずして射つことができます、新兵器中の新兵器。なにさま原子力時代のこんにちと違い、三百五十年からの昔のことでございますから、だれもがこんな短筒は、見たことも聞いたこともないというしろもの。なみいる者もこれには、胆をつぶしてびっくりいたしました。

ここに大御所家康には、左衛門佐幸村を恐れることいよいよ深く、軍師本多佐渡守を召され

て、

家「佐渡、大阪城の備え堅固にして、なかなかに落城いたさぬが、これと申すも畢竟敵方に、左衛門佐幸村めがひかえているからだ。かれめを討ち取るか、あるは利をもって味方につけるかいたさねば、大阪城を乗っ取ることは、よもできまいと思うがどうじゃ。そちなにかうまい工夫はないかな」

さすが智謀の大御所、狸爺の元祖といわれ、こんにちの政界狸などとは段違いの家康も、よっぽど幸村には手を焼いたものとみえまして、智恵袋の佐渡に意見を求められました。佐渡守正信は一膝進めて、

佐「されば、天下の大軍を集め、かく四方八方より大阪城を取りつめたりとは申せ、このままにては、いつ落城やも計られませぬ。よろしく攻撃を一カ所にあつめ、かの幸村の立て籠る出城、真田丸へ向って全軍攻め寄せなば、幸村いかに楠木、孔明の智略ありとも、やわか攻め落とせぬこととてはございますまい。おおせの通り、真田なき大阪城は、大工の符牒ではござらぬが、への三でござる。正信、真田丸の力攻めをこそと存じまする」

家「うむ、予もそれを考えぬではなかったが、なにさま幸村が立て籠る出城、ここを攻めるとあいなれば、味方の損害もまた、よほどの覚悟をいたさねばならぬところ……譜代はともあれ、外様大名どもの思惑も考えねばならぬでのう」

佐「ははっ、おおせごもっともにはござりまするが、ただいまはさようなことを、恐れている時ではござりませぬ。かえって落城長引きまするにおいては、豊臣家に恩顧の大名ども、いかなる逆心をさしはさむやもわかりませぬ。このところよくよくご賢慮のほど、願わしゅう存じます

る」

家「うむ、しからばそのほうに、なんぞ力攻めについての思案もあるかな……」

佐「されば味方の総勢を、十段、二十段に備えて、これを番手と名づけまして、ひたすら南のかたより攻め立てます。もし一番手、残らず討死いたしますれば、二番手かわって攻め立て、二番手残らず討死いたしますれば、三番手がかわるというようにいたし、先手の三段や四段は捨て殺しにいたして、その死骸の山をもってほりをうずめ、五段六段七段と、次から次へ新手を繰り出し、息をもつかせず攻め立てまするならば、いかに幸村、鬼神をあざむくほどの智謀ありとも、わずかな小勢をもって、休む間もなき防戦ゆえ、兵は疲れ、矢弾は尽き果て、防戦も思うにまかせずあいなりましょう。そのとき、いよいよ八段九段十段と、総軍勢を繰り出して、無二無三に力攻めをいたしますれば、味方の勝利うたがいなしと心得ます」

本多佐渡守、どうもたいへんな計略を考え出したもの。これがこんにち、北鮮、中共軍などに伝わった、人海戦術のはじまりだなどといいますが、あまり当てにはなりません。

家康公もさすがに、眉をひそめ眼をとじて、しばらくは考えに沈み、なんの返事もございません。それもそのはず、死骸の山を築き、人間の楯を用いて、敵城を乗っ取ろうという、聞くさえ無残なこの計略では、二の足踏まぬわけにはまいりません。

しかしこのほかに真田丸を攻め落とす……いや、ただ一人の真田幸村に打ち勝つ方法は、どう考えてみてもございません。そこで家康、

家「うむ、しからば早々に、軍議を開き、手配におよべ」

と、とうとうここに、最後の決断が下されました。これによって、関東の総軍勢に触れがまわり、譜代外様の大小名をはじめ、各軍勢の大将分、ことごとく家康の本陣、茶臼山に集まって、ここに大軍議が開かれました。

正面には大御所家康、新将軍秀忠、そのそばには、軍師本多佐渡守正信が厳然と威儀をただしてひかえております。集まってまいりましたる大小名達、

大「おやおや、本日の軍議は、ばかにものものしいぞ。いかなる軍議が始まるのかな」

小「大御所のそばにひかえたる、本多佐渡殿、こんにちはなにやら、よほどの決心覚悟のようにみうけられるぞ……」

などと、思い思いに心のうちで考えている。そこへ家康公口を開いて、

家「さて、本日は余の儀でもないが、かく大阪城を取りかこんでより、すでに二十日にあいなるが、なかなかに城攻めもはかばかしくまいらん。かくては諸将、軍陣の苦労もさることながら、天下万民の辛苦も察せねばならぬ。ついては一日も早く落城いたさせ、この苦労辛苦を取り除きたいものと思う。諸将におかれては城攻めにつき、なんぞよき方略もござれば、腹蔵なくご披露願いたい」

と申し述べた。ここらがいかにも家康の家康らしいところ、腹はちゃんと決まっていて、しかもかるがるしく口にしない。しかし諸将といえども、格別によい智恵があるわけではない。かてて加えて智恵者の本多佐渡が、大御所の側にひかえているのだから、うかつな口はきけない、みなみな顔を見合わせて黙りこんでおります。すると横紙破りといわれた、独眼龍伊達政宗が、

政「大御所のお言葉、まことにごもっともに存じます。天下の大軍をもって、いかに難攻不落の要害とは申せ、たかが大阪城一つを攻めあぐむとは、全軍のあいだに、決死の勇気が足らぬか

らでござる。人間、命を投げ出したあかつきには、どんなことでもできるものでござる。ましてや人間の築いた城を、人間の力で攻め落とせないなどと申すは、笑止千万のちの世の笑いぐさともあいなりましょう。なんとおのおの、こんにちすぐにも城攻めをいたし、われら一同、城壁のもと、討死つかまつろうではござらんか」

いやはやなんともえらい勢いで、一つしかない目玉を、ぎろりと光らせながら、だれはばからずわれ鐘のように申し述べたから、諸将はこれを聞くと、

□「ふーむ、どうもあの横紙破りの片目将軍、とんでもない無茶をいい出しおったものだ。もし大御所が、それではさよういたせ、などと申されようものなら、いやでも討死をいたさねばあいならぬわい」

と、早くもまっさおな顔をして、ぶるぶるふるえている者がある。すると家康公、これを聞かれてにこっと笑われ、

家「さてもさても、いつもながらお勇ましき伊達殿のご一言、われらも目のさめし心地がいたす。諸将方にそのお覚悟あるからは、なんの天下の要害たりとも、恐るることやあらん。一挙に攻め落とさんこと、火をみるよりも明らか、いや、頼もしいことでござる」

冬だというのに大御所、さっと日の丸の軍扇を開いて、あおぎたてたから、

○「おやおや大御所、いやにおだてあげるぞ。さては政宗と腹を組んでのはかりごとかも知れん……こいつ、とんだことにあいなったわい」

と、顔見合わせております。このとき得たりとばかり、本多佐渡守正信、

佐「いかにもいさぎよい伊達殿のお言葉、定めし諸将方のご心底も、伊達殿と符節をあわせたごとく、ご同様のことと拝察いたす。かくあるうえは城攻めの目安もついて、かく申す佐渡も、なによりも心強く存じまする」

と、ぐいっと一座を見まわしたうえ、立板に水を流すごとく言葉をつづけ、

佐「さりながら無謀の城攻めは、損害多くして効果とぼしく、策の得たるものではござらぬ。それがしつらつら考えまするに、諸将方それほどのご決意とあらば、そのお力によってまず第一に、敵方の軍師真田左衛門佐幸村のこもれる、真田丸の出城を攻め落とし、まずもって幸村を討ち取ることこそ、最上の良策と考えまする。さよういたせば、残るは烏合の衆にもひとしき大阪勢、たとえいかなる名城にこもればとて、これを攻め落とすこと、さまでの困難はござりますまい」

政「うーむ、なあーるほど、さすがは佐渡守殿、またなきご思案でござりまするぞ」

伊達政宗、さきほど家康にほめあげられたから、いよいよ気をよくして、ここを先途とまくしたてる。大御所におきましても、

家「うむ、伊達殿のご一言といい、またただいまの佐渡が申すところ、まことにもっとも至極である。しからば早々にその用意におよべ。……佐渡、しからば城攻めの陣立て、方略、このところにおいて申し述べるがよかろう……」

佐「ははっ、しからば佐渡の考えるところを、申し述べるでござりましょう。まずその陣立ては、干支にちなんで十二段の陣備えといたし、かくかくかような方略をもって、次から次へ、新手新手と攻めかかります」

と、かねて大御所と打ちあわせたとおりの、人海戦術を披露におよびましたから、いよいよ

もって驚いたのは、一同の大将方でございます。互いに目と目を見合わせて、政宗と佐渡守をうらめしげにながめながら、心のうちで、

○「てもさても、あの片目おやじの政宗めが、いらざることを申し立てたるがゆえ、かようなことにあいなった。命を投げ出してなんの楽しみがあろう。畢竟、かくは働くのも、末の楽しみを思えばこそである。しかるをいともたやすく、命を捨ててなどと、ばかばかしいことを申し出る政宗、この政宗の言葉をよいことにして、いまいましい軍略を打ち出した佐渡守正信、どうで後生はよろしくないぞ……」

と、一同政宗をうらみ、佐渡守をうらんでいる。けれども大御所の台命とあってみれば、いたしかたがない。一同の大将方、しぶしぶながらも用意におよんでおります。しかしだれ一人として、一番手を名乗って出る者も、二番手を名乗って出る者もございません。するとこのとき、また佐渡守が、

佐「さてその番手の順序でござるが、先陣争いなどのこれなきよう、くじびきをもってきめることといたしたい」といったかと思うと、ふところから手まわしよく、人数だけのくじを取り出して、諸将の前へ持ち出しました。

△「なんだ、くじまで用意してあったのか。こいつは否応なしだ……。それにしても、どうか一番くじなどに当りませぬよう……顕現功利顕現功利」

このくじばかりは、年末売出しやたからくじのちゅうせんとは違うから、だれもが当らないようにと祈っている。しかし、まさか弓矢八幡を拝むわけにもいかないから、なんともわけもわからぬ、呪文めいたことをとなえながら、みなみなおっかなびっくり、くじびきをいたします。

その結果、第一番のくじを引いたのが安藤対馬守、次は太田原備前守、三番が丹羽勘助で、四番が本多佐渡守、五番大久保新八郎、六番六郷伊賀守、七番安部物太郎、八番松平周防守、九番菅沼新八郎、十番井伊掃部頭、十一番森山城守、十二番松平対馬守と、十二段までそれぞれの大将がきまりました。

四番手のくじを引き当てました、発頭人の本多佐渡守は別といたしまして、その他の大将方には、自暴度胸を決めまして、おのおの干支にちなんで、虎や兎のかいてある旗を押し立て、その勢およそ二十万、十二月六日の早朝より、真田丸総攻めということにあいなりましたが、ここに智謀の真田がいよいよその真骨頭を発揮するというお話し、ちょっとここらでひといき、あらためて申しあげます。

敵をはかるはまず味方から

さて、こちらは左衛門佐幸村、茶臼山の軍議によって、敵が十二段備えの陣立てをもって、わが真田丸へ押し寄せるということは、かねて敵陣へ忍びこませたる、忍びの名人、霧隠才蔵によってすっかり調べあげ、委細その報告を受けておりましたところから、きょうもきょうとて、櫓の上より関東勢の動きをながめ、

幸「うむ、さてはいよいよたびたびの敗軍に閉口いたし、かねて聞いたる十二段備えをもって、

番手攻めをいたすと覚えたるぞ。面白し面白し。さればいちばん驚かしてやろう」

と、かえって勇み立ったのは、まことに智謀智略の神ともいうべき、古今無双の名将でございます。そこでさっそくわが居間へと立ち帰って来まして、

幸「やよ大助……、大助はおらぬか、幸昌はおらぬか……」と呼ばわりまするとと、

大「はっ、お父上、なにご用にござります」

と、大助幸昌には、父幸村の前へ出てまいりましたから、

幸「おお大助、こちらへまいれ……」と、大助を側近く招き寄せまして、なにか耳元でひそひそとささやきまするとと、大助は目をかがやかせて、

大「えっ、さてはお父上、またまた小幡勘兵衛をたぶらかし、関東勢の裏をかこうという、ご計略でござりまするか……」

幸「うむ、ちょうどいい折だ、ここらでいま一度、かれめを出汁にいたし、関東勢に目にもの見せたうえ、かれめの化けの皮をばひっぺがし、わざわいの根を除いてくれようと思う……」

と、早くも敵の間者小幡を使って、関東勢を取りひしがんと、思い定めた左衛門佐幸村、しかしそんな計略があるとは、夢にも人に知らせず、父子うち連れ立って、秀頼公のご前、本丸さして出てまいりました。見ると一同の大将方には、秀頼公の左右へ、威儀をただしてひかえております。そのところへ真田父子は、いかにもあわてたようすをいたし、はっと平伏におよびましたから、一同も父子のありさまを不審に思い、何事の起こりしかと、かたずを呑んで、ようすいかにとうかがっております。やがて幸村は頭をもたげ、

幸「恐れながら、わが君に申しあげます。このたび関東勢、たびたびの敗軍におおいにいきどおり、覚悟をきわめ必死となって、わが真田丸を十二段備えをもって、番手攻めにいたすてはずを、調えおりまする由、それがしが郎党、忍びの者のしらせによって、承知つかまつりました。もとより幸村、秘術をかたむけて、防戦いたす覚悟にはござりまするが、なにぶんともに必死の徳川勢、幸村いかに秘術を尽くして防ぎ戦うとも、しょせんは多勢に無勢、このたびこそはなかなか勝つこと思いもよりませぬ。よって父子ともども、真田丸を枕に討死の覚悟、されば今生のおいとまごい、わざわざ推参つかまつりましてございます」

と、父子ともども、はらはらと涙をこぼし、いと哀れげに言上いたしました。これが計略とはごぞんじない秀頼公をはじめ、なみいる城内の諸将の面々おおいに力を落とし、言わず語らず互いに顔を見合わせて眼中をうるませ、真田父子が討死いたしなば、われらなにをもって、大阪城を守ることができようかと、痛恨嘆息をいたしております。秀頼公も曇りし眼元をぬぐわせたまい、

秀「いかに軍師、予はなによりもそのほうを、心頼みにいたせしものを……、なんなればとてかくは、討死を急がれたもうや。このうえは予もともどもにいさぎよく、真田丸にて関東勢を迎え討ち、なんじら父子と死出の道連れ、黄泉の旅にいで立たん」

と、声曇らせておおせいだされたから、忠心無二の左衛門佐幸村、

幸「ああありがたき主君のみ心、赤心割って、申しあげたいのはやまやまであるが、これぞ狂瀾を既倒にかえさんとする、幸村苦肉の計略……、ぜひなき次第、許させたまえ……」

と、心中ふかく伏し拝みながらも、これぞ大事の瀬戸際と思いましたから、心を鬼にいたして、

幸「ははっ、こはまことにもったいなきお言葉、幸村肝に銘じて、生々世々に忘却はつかまつりませぬ。幸村たとえ討死いたせばとて、城内には大野御親子はじめ、織田殿または七手の頭、あるいは後藤、木村、長曾我部などの猛将勇士、まった小幡勘兵衛殿などの軍略たくみなかたがた、雲のごとくにおいでございます。たとえ幸村父子、討死いたしませばとて、君にはなにとぞ、お心安うおぼしめされ、天下回復の日をお待ちくださりまするよう……。

しかし、かく申しあげますればとて、幸村、むざむざと犬死はつかまつりませぬ。敵の備え十二段のうち、七段まではみごとにこれをうち破って、ご覧にいれたてまつります。ただくちおしくも残りの五段、幸村がいまの手兵をもってしては、まことにこころもとなく、それゆえに、かくは申しあげる次第でございます」

といいも終らぬそのうちに、ぐっと一膝乗り出しましたのが、これぞ関東の間者、小幡勘兵衛景憲でございます。

勘「ははっ、わが君に申しあげたてまつります。多くの大将方を差しおきまして、おこがましくかようなことを申しあげまること、まことに僭越至極とは存じまするが、味方、危急存亡の場合と存じ、失礼をもかえりみず所存のほどを申しあげます。

なるほど軍師のおおせ、いちいちごもっともに存じまするが、残るところ五段の軍勢を打ち破りますには、城将のうち武勇ことにすぐれたる、後藤又兵衛殿、木村長門守殿の両将をば、さしぞえとして真田丸へおつかわしにあいなり、軍師をご助勢いたさせたまわば、十二段ことごとくを打ち破って、関東勢を追いしりぞけること、いとやすきことと存じまするが、この儀いかがでござりましょう」

と、忠義めかして申しいでました。幸村はこれを聞いて、さてはおいでなすったと、心中会心の笑みをもらしながらも、わざと残念そうな顔をして、

幸「うむ、いかさま、小幡殿のおおせのごとく、後藤、木村の両将さえ、おさしぞえくださらば、十二段ともに打ち破らんこと、いとたやすきことでござる。しかしながら両将には、それぞれ本城の要害たる、黒門口を固めておられますゆえに、その持場を捨てて、それがしにお力ぞえを願うこと、思いもよらぬ儀にござりまする」

と、いわれて小幡勘兵衛、いと面白からぬおももちにて口をとがらし、

勘「あいや軍師、その儀ならばご心配にはおよびませぬぞ。かく申す小幡勘兵衛、入城以来こんにちまで、いまだいささかの功を立てる機会にも恵まれませぬが、それがしも軍学兵法をもって、少しは人にも知られたる者、後藤、木村の両将にかわってそれがし、黒門口を固め、寸功を現わしたく存ずる。この儀いかがでござりましょうや」

と、ついに本音を吹き出しましたから、幸村はようこそおいでなすった、待っていましたとばかりに、

幸「いかにも小幡氏のおおせ、ごもっとも千万。貴殿が黒門口をお固めくだされば、おおきに安心と申すもの。……さればわが君、小幡氏に黒門口の固めをおおせつけくださりまして、後藤、木村の両将を、真田丸へおさしぞえくださいまするならば、ありがたきしあわせに存じまする」

と、心のうちでは、「おのれ勘兵衛、うまうまとわがわなにかかりおったな。いまに化けの皮をはいでくれるぞ」と思いながらも、さりげなく申しまするると、秀頼公には一も二もなく、

秀「おお軍師さえ、あやうき難をのがれ得ることなれば、その儀決して苦しからず、ただただわれをはじめ将士一同、軍師の身を案じおることを忘れず、無謀に命を捨てぬよう自重いたせよ……」

とのありがたいおおせでございますから、幸村父子もおおいに喜び、

幸「ははっ、これはかさねがさねのありがたきお言葉。……やれやれこれで、幸村父子も助かり申した、木村殿、後藤氏、なにぶんともによろしくお頼み申す。……いざ、なにかとご相談なつかまつりとうござれば、ご同道くだされたい。……ははっ、わが君には、これにてごめんこうむります。なにとぞお心安うおぼしめしてくださいませ」

と、ご前をさがって幸村父子、真田丸へと引きあげました。すると後藤、木村の両将、心中不審に思いながらも、この場でとかく問いただすわけにもまいりませんので、幸村父子のあとを慕って、真田丸をさしてやってまいりました。

又「真田殿、こんにちの貴殿のお振舞い、われら、いっこうに合点がまいりませんぞ」

重「勘兵衛が関東の間者たることは、百も二百もご承知の幸村殿が、かくも大切なる要害、黒門口の固めを、なにゆえあってかれめに、おまかせにはあいなりました。これかならず敵に内通して、一大事をひき起こしますること、火をみるよりも明らかでござりまする、この儀、いかがおぼしめされまするや……」

と、言葉をそろえて問いつめますと、にっこり笑った左衛門佐幸村、

幸「はっはっははは、おおせ逐一承知いたしており申す。じつは幸村、かく申しいでましたるは、これぞ敵をあざむく、秘中の秘計でござる。なんの十二段備えの総攻めなど、少しも恐れるところではござらぬが、おおいに恐れた体に見せかけ、かれ小幡勘兵衛めをあざむいて、家康を討ち破る反間苦肉の策でござる。いまにかれめが間者たる、のがれぬ証拠を手に入れて、みごとかれめを取りひしぎ、そのうえ、かれめの内通を逆に利用いたして、関東勢を木端微塵に、打ち砕いてお目にかける所存……」

はじめて本心を打ち明けられて、あっと驚いた両将、

重「おお、いつにかわらぬ軍師の奇計、ただただ恐れいってござる」

幸「いや、敵をあざむくにはまず、味方をはかると申すことがござるによって、ご両所へもとんだご心配をあいかけ、まことに申しわけなかった次第……」

又「なんのなんの、われらはいかほどだまされるとも、決して心にはかけ申さぬ。ただ願うところは、豊家の御事のみでござる……」

と、これより三将、快く酒をくみかわして、互いに心のたけを語り合い、しばし戦塵の憂さも忘れて、打ち興じたのでございました。

知らぬが仏の大御所家康

お話しかわりまして、こちらは小幡勘兵衛、真田丸で三将のあいだに、自分のことが笑い話しになっているとは、神ならぬ身の露知らず、

勘「真田もそろそろ、焼きがまわってきたわい。皮膚感覚が、にぶくなってきたというところかな……つまり、それその、ゼネレーションの違いというところじゃ……」

まさか、こんな現代語などは使わなかったでしょうが、心中おおいに喜びながら、黒門口の副将、山口左馬助のところへやってまいり、

勘「これはこれは、山口氏……」

左「おお、これは小幡殿、なにかごようでござりまするか」

勘「されば、余の儀でもござらぬが、このたびかようかような次第にて、木村、後藤のご両所には、真田殿のほうへご助力にまいられた。ついては拙者、ご両所の名代として、ここしばらくのあいだ、当黒門口の固めにまいってござる……」

聞いて山口左馬助、心中ははだ不審に思ったが、左馬助なかなか思慮ある人物でございましたから、早くもこれには、深き仔細のあることと察しまして、

左「いや、それはご苦労千万でござる。両将おいで御座なくとても、貴殿お越しくださるとあれば、まことに鬼に鉄棒、拙者もおおいに心強いことでござる……」

と、うまく調子を合わせましたから、さあ、小幡勘兵衛いよいよお喜び。さっそく自分の部屋へと取って返して、こまごまと大阪城内、こんにちの軍議の模様を書きしたため、腹心の家来、小野喜兵衛を招きまして、

勘「喜兵衛」　喜「ははっ」

勘「そのほう、ご苦労ながら、この書状を持って、城内の者どもに気づかれぬよう、茶臼山の本陣へまいり、大御所家康公へ差し上げてまいれ。ずいぶん大切なる用事じゃによって、必ずぬかりなきよう、きっと申しつけたぞ……」

喜「ははっ、かしこまりましてございます」

と、小野喜兵衛、書状をばしっかと懐中におよびまして、宵闇にまぎれ、城内をばそっと抜けいだしました。もとより勘兵衛から割り符をもらっておりまするから、城内固めの場所は、うまく通り抜けまして、生玉のあたりへ差しかかろうといたしますと、折しもうしろからすたすたと、だれかついて来る者があるようす。すねにきずもつ喜兵衛、うすっ気味が悪くてたまりません。恐る恐る振り返ってみると、

○「これこれ、そこへまいられるは、小幡勘兵衛殿の輩下、小野喜兵衛殿ではござらぬか。この夜更けにどこへゆかれるな」

といいながら、ぬっと近づいて来たのは、かねて顔見知りの真田の郎党、忍者として知られた、猿飛佐助でございますから、喜兵衛思わずぎょっとして、悪いやつに見つかったとは思ったが、いまさら逃げるわけにもまいりません。

喜「へっ、へっ、実はその、てまえ主人がこのたび、黒門口の固めをおせつかりましたについて、城外敵陣の模様を、探りまいれとのお申しつけを受け、あちこちと、探索いたしておるところでございます」

佐「おおさようか。それはちょうどさいわい、拙者も敵の備えを探りにまいったもの、いざ、ご一緒にまいろうではござらぬか」

と、いい相棒ができたといわんばかりに、どこまでもついて来そうですから、喜兵衛は考えた。

喜「うむ、こいつどこまでも一緒に来る気だな。ええい、面倒っくさい。いっそひと思いにやっつけてしまおう。そうじゃそうじゃ……」

と、芝居がかりで小手をかざし、

喜「あっ、猿飛氏、あれはなんでござろう。かしこに燈火が、ついたり消えたりしておりまするぞ……」

佐「うむ、どこに……」

と、佐助が指さすかたをながめるところを、得たりや応と小野喜兵衛、いきなり大刀すらりと引き抜き、「えいっ」とばかりに横にはらった。佐助の横っ腹、ばらりずーんと、みごとにしてやったりと思ったのは、喜兵衛のいささかおめでたいところ、なにしろ相手は天下に名だたる、忍術の権威、猿飛佐助、なんじょうもって油断やすきがございましょう。ひらり

とばかりに身をかわして、

佐「おのれ、しっぽを出しおったかっ。観念いたせ……」

というやいな、「えい」とばかりに喜兵衛のえり髪ひっつかんで、二、三間かなたへ、犬ころ投げに投げ飛ばしました。あっという間もあらばこそ、喜兵衛はころころっと転げまして、早くも立ち直り、逃げようとする一刹那、飛びこんでまいった佐助幸吉、「えいっ」と突き出す手練の当て身。小野喜兵衛は、もんどりうってうしろざまにぶっ倒れる。そいつを起こしも立てず、かねて用意の細縄を取り出し、苦もなく喜兵衛を召し捕ってしまいました。

佐「さあゆめ、このばかものめ、ようも敵陣探索などと、そらぞらしいことを申しおったな。まことは小幡勘兵衛めの密書を持って、茶臼山本陣への使いであろう。われこそは、かねて主君

のおおせを受け、城中よりなんじのあとをつけてまいった者だ……どうだ喜兵衛、おそれいったか」

いわれて驚く小野喜兵衛、「えーっ」とばかりに、ぎょうてんいたしております。そいつを追い立て引っ立てて猿飛佐助、真田丸の出城へと立ち帰りまして、

佐「ははっ、おおせによって曲者、ご覧のごとく生け捕って帰りました」

と、幸村公の面前へ、小野喜兵衛を引きすえました。左衛門佐幸村においては、じっと喜兵衛を見くだしておられたが、

幸「ふーむ、あんのじょう、さては密書を送るところであったか。どれどれ」

というなり、つと立ち寄って、小野喜兵衛の懐中へ手を入れ、書状を取り出してもとの座へ立ち帰り、木村、後藤の両将にむかわれて、

幸「これぞ小幡勘兵衛めが、大御所にあてたる密書でござる。いざ、ご覧くだされい」

と、さっと開いて見まするると、

密書をもって申しあげそうろう。このたび真田丸の出城をば、番手攻めをもって攻め落とさんとのご軍議、あい定まりそうろうについては、さすがの幸村も、おおいに当惑いたしたるむね申しいでてそうろう。よってそれがしこの機をはずさず進みいで、後藤、木村の両人をも、真田丸へつかわして、防戦せらるることよけれといつわり、両人にかわってそれがし、こんにちより黒門口を固めることとあいなり申しそうろう。

ついては、明朝寅の一点を期し、朱引の提灯をもって合図とし、城門を押し開き、御勢を引き入れ申すべくそうろう。

匆々

としてございますから、幸村は両将にむかって、

幸「いかがでござる。きゃつめとうとう、尻尾を現わしたではござらぬか。このうえはこの密書を、敵陣へ送り届け、家康をあざむくはいとたやすきことでござる」

と、これより小野喜兵衛を一間にとじこめ、家来の中より、偽筆の巧みな者を選んで、密書をそっくり写し取らせ、それをば穴山小助に持たせて、茶臼山の本陣へと差し向けました。

こちらは大御所、いよいよ明朝は必死の覚悟をもって、真田丸の出城を、番手攻めにしようと、それぞれ用意におよんでおりますと、そこへ小幡勘兵衛からの密書でございますから、取る手遅しと開いてみると、前申しあげたような文面でございます。大御所には小膝をはたとたたいて、

家「うーむ、さてはこのたびの番手攻めには、さすがの真田も閉口いたし、木村、後藤の両人をさしそえに頼み、間者と知らず小幡勘兵衛をもって、大切なる黒門口を守らせしか。あなありがたやかたじけなや。このたびこそは、うまく真田をあざむき得たり。されば明朝寅の刻（午前四時）に、黒門口より攻めいって、一気に大阪城を乗っ取らん……。それ、番手の大将どもへは、戦略変改のむねを伝えよ……」と、これまた知らぬが仏の大御所、手をうち、鼻唄なんぞも唄わんばかりの喜びかた……。近侍の者は、さっそく右の趣きを、諸将に通知におよびましたから、一同の諸将は、

○「あーあ、明朝こそいやでも真田の出丸へ押し寄せねばならぬ。しかるときは真田の計略にかかって、討死いたすは知れたこと……。捨つべきものは弓矢の道……」

と、熊谷蓮生坊ではありませんが、とんだ発心めいた嘆息を、もらしているところへ、右のお沙汰でございますから、一同生き返った心地とあいなり、はじめの発心めいた考えとはうってかわり、われこそ一番乗りをいたさんものと、勇みに勇んで、夜の明けるのを待っております。

さて、お話しかわって、黒門口の大将となった小幡勘兵衛、さあどうも、愉快でたまりません。

勘「うむ、今度こそはうまくいったぞ。この合戦の手柄は、なんといっても拙者が第一番、いずれほうびは、十万石かな。いやいや、黙っていても、五十万石はまちがいあるまい。待てば海路の日和とやら、どうもたいした出世だわい」

にわかに大名にでもなったつもりで、一人悦にいっているところへ、やってまいったのが真田の家来、由利鎌之助でございます。

鎌「小幡殿、軍師よりの使者としてまかり越した」

と申しいれましたから、勘兵衛は心のうちで、さては軍師より心づけのため、陣中見舞いをつかわされたに違いないと合点いたし、さっそく一間へ案内におよび、下手にさがって両手をつかえ、

勘「ははっ、軍師よりのお心づけ、千万かたじけなく存じまする。当方は大切の場所、ずいぶんと心を配り、油断なく固めおりますれば、ご安心をくだされたい……」

と、にこにこ顔で申しますると、鎌之助はからからと笑って、

鎌「いやいや、さようなことでまいったのではござらぬ。軍師には貴殿に対して、なにか尋ね問うべきことがあるにより、同道いたしてまいれとのおおせ。いざ、お立ちなされい」

と、いわれて驚く小幡勘兵衛、はっと肚胸をつかれ、さては密使露見におよんだか……と早くも顔色をかえまして、

勘「こはけしからぬお使者のお言葉、一刻もゆるがせにはならぬ、大事な要害をあずかるこの身、持ち場を捨てていっときたりとも、この場を離れることはあいなり申さぬ」

小幡勘兵衛、心のうちではぎょっといたしながらも、どこまでもふてぶてしく装っているから、気の短い由利鎌之助、大目玉をかっとむき出して、はったと勘兵衛をにらみつけ、

鎌「やあ、なんといわるる。軍師の命にしたがわれぬとあれば、ぜひにおよばぬ。さればかく申す由利鎌之助、腕ずくでも引っ立ててまいるぞ」

と、なおもいわんとする勘兵衛を、大力の鎌之助、飛びかかって取って押え、刀の下緒をもって、苦もなく高手小手にしばりあげてしまった。勘兵衛は必死の場合。

勘「な、なにをする、無礼者めっ。なんじ陪臣の分際をもって、大将分たる拙者に対し、無礼を働くとはなにごとだ。放せ放せ」

と、おめき狂うのを鎌之助、うむをいわさず、かねて用意の乗物へ押しこめまして、真田の出丸へとかつぎこみ、すぐさま、幸村の面前へと引き出しました。勘兵衛は怒りの形相ものすごく、幸村はじめ、一座の者をぐっとにらみつけ、

勘「やあ、軍師にはなにゆえあって罪なき拙者に、いましめの恥辱をばあたえたもうぞ。早々この縄目をお解きくだされい……」

と、大音に叫ぶを聞いて幸村公、にっこと笑って、

幸「見苦しいぞ勘兵衛、かりそめにも軍師の大任を帯びる真田幸村、罪なき者に、なんじょう

もって縄を打とうや。なんじが関東の間者たることを、こんにちまでこの幸村が、心づかずにおったと思いおるかっ。間者と知ってこんにちまで、そのまま城中に差しおきたるは、これ幸村に深き考えあってのこと……。ここなうつけものめっ……」

と、大喝一声きめつけられ、さてはいよいよ露見いたしたか。しかしながら、のがれられるだけはのがれてみんと覚悟をいたし、

勘「うーむ、これはまた、軍師のお言葉とも覚えませぬ。さては畢竟、拙者をねたむ者のあって、さような讒言を申したに違いない。拙者においては、もうとう身に覚えのないことでござる」

と、さも殊勝げに申し述べるにくにくしさ。幸村これを聞いて、

幸「黙れ勘兵衛、なんじ、弁舌をもっていいのがれんといたすとも、いかでこの幸村をあざむき得んや」

勘「されば軍師には、なにをもって拙者を間者とはいいたもうや……」

幸「きたなし勘兵衛、まことの武士は、終りをいさぎよくこそいたすものぞ。証拠を出さぬは武士の情けじゃ。それともたって、強情はるにおいてはぜひにおよばぬ。……やあやあたれかある、小野喜兵衛をこのところに引いてまいれ……」

という言葉の下から、はっと答えてにわさきに引き出されたのが、例の小野喜兵衛、勘兵衛はこれを見るより、顔色変じて土のごとく、ぎっくりといたしましたが、あくまで奸智にたけたやつでございますから、たちまち一計を案じて、喜兵衛をはったとにらみつけ、

勘「やあ、おのれは小野喜兵衛……なんじ、今朝、思いもよらぬ不調法をしでかし、手討ちにもいたすべきところを、助命いたしていとまをつかわしたるに、それをばさかうらみして、軍師に讒言いたしたな。かえすがえすもにっくいやつっ……」

と、さも腹立たしげに、はったとばかり喜兵衛をにらみつけました。左衛門佐幸村はこれを聞いて、でも卑怯きわまる小幡勘兵衛とおぼしめされたが、さあらぬていにて、

幸「や、や、さようでござったか。こやつめが小幡殿を恨んで、人騒がせな讒言をしたのでござるか。いや、そうとあれば、まったく拙者の心得ちがい、小幡殿にはあいすまぬことをいたした。しかし拙者はともかく、ここにひかえられたる、木村、後藤のご両所をはじめ、城中一統の大将方のうちには、貴殿を間者とのみ思いつめられるかたがたが、数多くおいでござる。これらのかたがたに、証を立てられるためにも、貴殿ここで神文誓紙をしたため、秀頼公への忠誠を、神に誓っていただきたい。この儀いかがでござる……」

勘「いやいや、誤解さえお捨てくだされば、おわびにはおよび申さぬ。しからばさっそくに神文の儀は、したためるでござろう。さりながらわが君第一と、誠忠をはげみおる拙者に、あられもなき汚名をきせられたること、はなはだ心外千万でござる……」

勘兵衛、口先ではもっともらしいことをいっているが、心のうちでは、

勘「ふん、軍師なんていっても甘いものだ」

と、ぺろりと赤い舌を出しております。幸村これを聞いて、

幸「いや、それうけたまわっておきに安心いたした。それ、者ども小幡氏の縄を解けい……」

と、お命じになりましたから、側にひかえた由利鎌之助、すぐさま立って縄を解きまして、

鎌「これは小幡殿、はなはだお気の毒をいたしました。ご無礼の段、主命とおぼしめして、お

許しのほどを願いまする……」

勘「やれやれ、とんだひどい目に会ったぞ……」

と、腕をなでまわしております。

幸「それ、料紙、硯も持て……」

と、勘兵衛の前へ、料紙、硯を持ち出しましたから、勘兵衛、しかつめらしい顔をして筆を取り上げ、心中においては、あすの朝まで待っておれ、おのれ左衛門佐、十倍増しにしてこのあだは討ってやるぞと、心中ひそかにほくそえみながら、神文をばさらさらと書きしたためて、幸村の前に差し出しました。

屍の山、血汐の河の負け戦

さて、勘兵衛が差し出した神文、左衛門佐幸村は受け取って、ふところから取り出した、一通の書面と、じっと見くらべておりましたが、にわかに大声を張り上げて、

幸「やあやあ小幡勘兵衛こそは、敵方の間者にまぎれなきこと決まったり。すみやかに縄打てっ」

と、ふたたび下知いたしましたから、勘兵衛の側に見張っていた鎌之助、またもやおどりかかって、今度はぎりぎり巻きに、しばりあげてしまいました。驚いた勘兵衛景憲、満面朱のごとくに顔色をかえまして、

勘「やあやあ、狂気めされたか真田殿、神文までしたためたる拙者に対し、なにゆえあってまたもや縄をかけたもうぞっ」

と、いわせもはてず左衛門佐幸村、

幸「あっははは、愚かなり勘兵衛、いま疑い晴れしと油断させしは、これわが計略、なんじ、性根をすえてよくこれを見よ。いまなんじがしたためし神文の筆蹟と、茶臼山の本陣へ送ったる、これなる密書の筆勢運筆、寸分たがわぬ同一人の手蹟たること歴然なり。これぞまことに動きの取れぬ証拠とやいわん。さあこのうえに、なおも陳ずる言葉があるか……」

と、例の密書を突きつけられて、さすがの勘兵衛、言い解く言葉もなく、首うなだれて恐れいっております。幸村はさこそあらめと、鎌之助へ下知をいたし、さっそく城内の牢へ、つながせることといたしました。ところへ、茶臼山の本陣へまいったる、穴山小助が立ち帰りまして、家康のしたためた、密書への返事を差し出しましたから、取る手遅しとご覧になると、

密書の趣きまさに承知いたした。明朝は約束の時刻に相違なく攻め寄せるによって、黒門口を開いて案内いたすよう……落城のあかつきは、なんじの手柄をあつく賞するであろう……うんぬん。

という意味の文言でありますから、さっそくこれを秀頼公のご前に報告いたし、すぐさま黒門口には、一子大助幸昌、穴山小助安治の両人に、八千余騎を授けて固めさせ、また別に後藤又兵衛、八千余騎を率いて、郭の内に伏せ勢となり、関東勢の攻め寄せるを、いまや遅しと待ち受けました。

さてもこちらは関東勢、命を的の番手攻めから、勘兵衛の内通によって、棚からぼたもち、濡

手で粟の黒門口から、城中へ攻め込むということになりましたから、さあうれしくってしかたがない。心もはずみ身も軽く、闇にまぎれて城門まぢかに、潮のごとくにひくひくとつめかけ、時刻の来るをいまや遅しと待ちかまえております。

やがて夜明けも近づき、寅の一点、かねて合図の黒門口の櫓の上に、朱引の提灯が現われて、くるりくるりと輪を描いて、振り動かすのが見えましたから、

○「それ、合図だ。攻めいれっ」

とばかりに、全軍一時にたって、開け放したる黒門口より、どっと城内へ乱れいり、二の木戸へとむかいましたが、こはそもいかに二の木戸は、ぴたりと門がかけられて、押せども突けども動かない。しかも、城内は森閑と静まり返って、敵もいなければ、味方のはずの、小幡勘兵衛の手勢も見えません。先手の大将、本多出雲守忠朝はあっけにとられ、

出「これこれ、小幡勘兵衛殿はおらぬか、景憲殿はおらざるか。われら、約束通りにまいったるぞ」

と呼ばわりながら、きょろきょろとあたりを見まわしたが、だれも答える者とてはありません。忠朝ははっと心づいて、

出「さてはまたもや、真田の計略にかかったか、早くひかぬとたいへんだぞ」

と、士卒に下知して、引きあげようといたしましたが、なにしろ勇みに勇んだ味方の軍勢が、あとからあとから掛橋を渡って、どんどん押しこんで来ますから、引きあげることもできない。わあわあと、芋を洗うような混雑でございます。これを見すました大助幸昌、

大「それ、橋を切って落とせっ」

と、下知すると、ガラガラドーンと、すさまじいひびきを立てて、あっという間に、堅固そうにみえた掛橋が、お堀の中へ崩れ落ちてしまいました。わーっという悲鳴叫喚、何千という軍勢が、見る間に水葬礼となって、この世の地獄かと思うばかりでございます。

城内へ攻めいった軍勢、こうなってはしりぞくことも進むこともできない。あれよあれよと騒ぐところへ、どこに潜んでいたか大助幸昌と、穴山小助が指揮する八千余騎、わっと鬨の声を挙げて打っていで、袋の鼠を刺すように、かたっぱしから斬り倒し突き倒す。さあ徳川勢、驚いたの驚かないのじゃございません。

○「それ、計略にかかったぞ」

△「逃げろ逃げろ」

と、右往左往、大将の本多出雲守も命からがらお堀へ飛びこみ、やっと泳ぎ渡って逃げ帰るというありさま、目もあてられぬ敗戦でございます。

するとこのとき、黒門口のかたわらより、またもや一発の砲声、天地にとどろくとみるまに、さっと畳橋を繰り出して、お堀の上にかけ渡し、後藤又兵衛、木村長門守の八千騎、

又「それこのときぞ、ひといきに攻め崩せっ」

と、槍先そろえて突っこんで来ましたから、徳川勢もう生きている心地はない。うろたえさわいで、味方討ちをいたすやら、逃げる方角にとまどって、こまねずみのようにくるくるまわるやら、一大修羅場となってしまいました。

こちらは大御所家康、茶臼山の本陣を立ちいで、後陣にあって味方の勝利を思い、やがて城へも乗りこまんものをと、待ちかまえておりますところへ、注進の者どもが、味方の大敗北を知ら

せてまいりましたから、

家「うーむ、またしても真田の計略に乗ったかっ、残念千万……」

と、無念ながらも茶臼山の本陣さして、すごすごとお引きあげにかかりました。

ところがいつの間に、どこから忍び寄ったか、こつぜんと現われた一隊の人馬、おっとおめいて来かかるようすに、さては味方か敵かと、小手をかざしてすかし見られますると、こはそもいかに、六連銭の旗印をまっさきにひるがえし、その勢およそ八千余騎、どっとばかりに押し寄せてまいりましたから、

家「ややっ、またしても真田かっ」

といったが、続く言葉もなく、茫然自失、ぽかんとしておられます。このありさまに前田加賀守、大御所の御身に、万一のことがあってはならぬと、手勢をひきいて真田勢を迎え討ち、ここを先途と、食い止めようといたしまするが、勇みに勇んだ真田勢、なんじょうもって恐れましょうや、当るをさいわい、四角八面になぎ立て、斬り倒しますから、浮き足立ったる前田勢、風に木の葉の舞うごとく、あれよあれよと、かけ散らされてしまいます。たけりにたけった真田勢、一気に前田勢をばけ散らしてしまいまして、

○「それっ、本陣へ斬りこめい……」

と雪崩をうって本陣に押し寄せましたから、またたくうちに、関東勢の討たるる者数知れず、屍は積んで山をなし、血汐は流れて河をなすというありさま、みな一様に浮き足立ってうろたえさわいでおります。この虚に乗じて左衛門佐幸村、三歳栗毛の逸物に打ちまたがり、大身の槍をばひっさげまして、

幸「大御所、いずこにましますぞ。真田左衛門佐幸村これにあり。こんにちこそ天の与えたもう吉日、御首級ちょうだいつかまつらん」

と、大音声に呼ばわりながら、大御所目がけて乗りこんでまいりました。大久保彦左衛門をはじめ、側近守護の旗本の面々、これぞ大御所、危急の場合とばかり、みなみな命を投げ出して、前後左右をおっ取りかこみ、必死となって応戦いたします。左衛門佐幸村には、

幸「なにをこしゃくなっ、面倒なり」

と、右から斬りこんで来るやつを田楽刺し、左から来るやつをば、石突ではね飛ばし、うしろから来るやつは馬足をもって蹴倒し、前なるやつは鼻息をもって吹き飛ばし……まさかそれほどではありませんが、縦横無尽に突き立て、はねのけまして、大御所目がけて、突いてまいりました。

あわを食ったのは家康公、びっくりぎょうてんいたしまして、一鞭ぴしゃりと馬腹にあてるとみるや、茶臼山の本陣目ざして、一目散に逃げ出しました。のがしはせじぞと左衛門佐幸村、

幸「やあやあ、きたないかな大御所、敵にうしろを見せたもうか……。その昔、一の谷の合戦に、花の顔、十六歳の若さをもって、あっぱれ馬を乗り返し、熊谷次郎直実と、一騎討ちの勝負におよんだる、無冠の大夫敦盛を知らざるか……、戻せ、返せ」

と、呼ばわり呼ばわり追いかけますので、大御所には生きたる心地もなく、ガチガチ歯の根がふるえて、馬の背から転げ落ちようとするのを、必死に鞍壺へつかまり、むやみやたらに馬の太腹を蹴り、鞭をばぴしぴしと尻にあてて、うちたたきますから、災難なのは馬でございます。

馬「あっ、じょうだんじゃない。痛いよお前さん、いくら蹴ったって殴ったって、これが精一

杯、ありったけの力は出して走っているんだ」

といったかどうだか、そのへんはわかりませんが、馬も痛さに必死のかけ足、ところへ幸村、駿足駆って追っかけてまいり、

幸「ご運つきたる家康公、いざすみやかに首級を渡したまえ」

と、いましも槍を取り直し、家康公の馬をば突き刺さんとした一刹那、幸村の乗ったる馬が、ぱっと小石につまずいたからたまりません、蹄が破れてにわかに速度が落ちてしまった。

幸「うーむ、残念至極、またもや大御所を取り逃がしたか。よし、さらばこうよ」

と、まなじりを決し歯がみをなしたる左衛門佐幸村、馬上からねらい定めて、持ったる大身の槍、「えいっ」とばかりに勢い鋭く、家康の背をば目がけて投げつけました。ぶーんと風を切った槍は、宙を飛んで四五十間、ねらいたがわず、家康の腰のあたりに、はっしと当ったが、惜しいかな距離のへだたりがありすぎた。槍は鎧の草摺を貫いただけで、肉を刺す力はすっかりそがれ、わずかに槍先がちょっぴり、家康のひからびた腰の肉を傷つけただけとは、これまったく天運のいたすところ、ぜひもなき次第でございます。

家康は、夢中でこの槍をかなぐり捨てて雲を霞、一目散に逃げのびます。あと見送って幸村公、地に落ちた槍をふたたび取りあげ、わずかに穂先ににじむ、怨敵家康の血汐を、あかつきの光のもとにしみじみとうちながめて、

幸「ああまたも取り逃がしたか、惜しいとも無念とも、残念千万じゃ」

と、血を吐く思いに悲憤慷慨、その心中は思いやるさえ、一掬、同情の念にたえぬものがございます。

さて、虎口を脱した家康公、ほうほうのていで、茶臼山の本陣へと逃げ帰りましたが、真田の智計に、いよいよ舌を巻いて驚かれますとともに、にっくきやつは小幡勘兵衛、八つ裂きにしても飽き足らぬやつと、たいそうなご立腹、これぞごまめの歯ぎしりならぬ、狸の歯ぎしり、ぽんぽこぽんのぽん、というところでございます。

三十六計逃げるにしかず

小幡勘兵衛の密書をまに受け、みごと幸村にその裏をかかれて、数千人というものを討死させ、総敗軍となったる関東勢、いまはもはやはじめの軍略通り、番手攻めの陣立てをもって、真田丸を攻め落とすよりほか方策はないということにあいなりました。すると軍師本多佐渡守が、

佐「てもさても、恐るべきは幸村の智謀。このうえは、あと十万人の人数をふやし、十段の備えをつけ加えて、十千、十二支の二十二段の軍勢をもって、息をもつかせず攻め立てるこそ、しかるべくと存じます」

と申しあげましたから、ここにまた、諸将のうちより、前田利常、伊達政宗など、ゆびおりの名将を選び出し、十段の軍勢を追加いたして、いよいよ十二月十一日をもって、真田丸の総攻めとは決定いたしました。そこで諸将にたいし、軍師佐渡守より、

佐「総攻めは十一日である。ついてはそれまで、ぬけがけの功名にはやり、勝手ないくさをし

でかしてはあいならんぞ」

と、厳しく軍令を発し、この軍令に基いて寄せ手の面々、このたびこそはただひともみに真田丸をば乗っ取らんと、幾流れもの旗を木枯の風に吹きなびかせ、甲冑の光をあさひにかがやかせ、駒のいななき、轡の音、太刀、打物のいかめしき、堂々として繰り出しましたは、げに真田勢の全滅は、まのあたりとぞ思われました。

こなた真田丸におきましては、左衛門佐幸村、大助をしたがえて櫓に登り、小手をかざしてはるかにこれを望み見て、

幸「あれ見よ大助、寄せ手はこの小城一つを攻め落とすため、あの大軍をもって押し寄せたるぞ。この出城一つに、あの大軍を迎え討つこそ、これぞ武門の面目、身のほまれ。われらにとって不足なきいくさじゃ」

大「ははっ、十二段をさらに十段増したる、あの陣備え……大助たりとも父上の子、やわか目にもの見せずにおきましょうや……」

獅子の子は三つ子たりとも、これぞ獅子の子、弱冠十五歳の花の若武者大助幸昌、寸毫の驚く色も見せない、大胆不敵の武夫ぶり、幸村はたのもしげにこれをうちながめて、

幸「お勇ましいかないまの一言、されば大助、あの向うに陣取ったるは、前田の家老、奥村摂津の軍勢とはみうけるぞ。さればこのたびのいくさの手はじめ、かれの陣前に、たけやぶがあるこそもっけのさいわい。そのほうこれよりそっと忍びいで、かようかようにして夜討ちをしかけ、かれめの胆っ玉をつぶして来い。必ず深入りいたすでないぞ、かくかくのうえは、そのまま出丸へ引っ返してまいれ」

大「ははっ、かしこまりました」

と、大助幸昌、やがて櫓をくだって日暮れを待ち、火術にたくみなる足軽三十人ばかり、それに打物業にすぐれたる勇士五十人を引き連れ、折からの夕闇を利して、そっと出城を忍びいでました。一同は足音をひそめ息を呑んで、たけやぶのこなたまでたどりつき、その中をばごそごそとはいながら、奥村の陣のまぢかに忍び寄り、時をはかって時分はよしと、一度にどっと鬨をあげ、ドドドッ、ドーンと鉄砲を打ちかけますれば、なにしろ目と鼻のあいだだからたまりません、一発の無駄弾とてもなく、たちまち二三十人の軍兵ども、ばったばったと、将棋倒しに射ち倒される。時こそきたれと、てぐすね引いたる抜刀隊の面々、おっとおめいて、時はいまぞと斬りこみましたから、

摂「それ、夜討ちだ、者ども防げ……」

といったが、案にたがわず、すっかり気を許していた奥村勢、右往左往にあわてふためき、富士川の維盛ではないが、一つの兜を引っ張り合うやら、つないである裸馬に飛び乗って、しきりに鞭で打ったりしているから、馬もたまったものじゃあございません。

馬「おい、ばかをするない。つないでおいて、ぴしぴし殴るやつがあるかい」

ともなんとも、申しはいたしませんが、馬は痛いから、後足をあげて、ぴんぴんはねかえっております。どうもそのあわてかたというものは、見られたものじゃあございません。大助幸昌、時分はよしと、総勢をまとめて城中へ、さっとばかりに引きあげました。

さあ、納まらないのが奥村摂津守、頭からぽっぽと湯気を立て、怒りの顔色すさまじく、

摂「やあやあ、見苦しき味方の振舞い、敵はわずかの勢なるぞっ、引っくるんで討ち取れいっ」

と、大音声に呼ばわったから、これに気を得てやっと落ち着きを取り戻し、あたりをながめてみますると、敵兵の影もかたちも見えません。

○「おやおやどうしたことだろう。たしかに敵が斬りこんで来たに相違ないが……さては前のやぶから、狐どもがいたずらでもしかけたかな……」

と、みなみなあっけに取られておりますと、いよいよやっきとなりました、奥村摂津守、

摂「こりゃ、なにをぼやぼやいたしておる、敵はやぶの中へ隠れこんだに相違ない。それ、探し出して討ち取ってしまえ……」

と、それより手に手に、炬火(たいまつ)をともした軍兵どもを繰りいだし、大たけやぶの中をあちこちと尋ね探させましたが、影もかたちも見えません。

摂「うーむ、さては早くも城中へ逃げこんだか。これというのも、かようなところにたけやぶ

があるからだ。者ども、すみやかにこのたけやぶを切り払ってしまえっ」

そこで、にわかに鋸や鉈を手にした軍兵が、あちらこちらにかがりびをたきたて、たけやぶの竹を切り始めました。このありさまをながめていた真田十勇士の一人、海野六郎、櫓の上から大音声、

六「やあやあ、寄せ手の大将に物申さん。尊公は、合戦のためにまいられたのではござらぬか。見受けるところたけやぶを狩り立て、狸狩りでもいたすと覚えたり。由なきやぶ狩りなどをなさるより、狸がご入用とあらば、茶臼山の本陣へまいられよ。かしこには、下腹に毛のない古狸めが、白髪頭をふり立てておるはずじゃ。あれでも射とめて、狸汁などいかがでござる。それもできぬとあれば、ちと城攻めなどはなさらぬか。退屈しのぎにお相手申そう。あっははははは」

と、大声あげて、からからと笑ったから、さあ怒ったのは摂津守、

摂「おのれっ、にっくきその雑言……者どもあの櫓をひともみにもみつぶせい。かかれやかかれ」

途方もなく短気な男もあったもので、髪の毛を逆立てた摂津守、いまは厳しい軍令も忘れはて、まっさきかけて馬を乗り出し、総勢三千余騎をもって、えいえい声を挙げて、攻めかかってまいりました。このようすを見て驚いたのは、次から次とうち並んで陣取った、徳川方の諸将、いずれもおおあわてにあわてて、

○「さてはもはや、合戦が始まったか。それともまたはぬけがけかっ」

△「なにはともあれ、遅れては一大事……」

と、大急ぎで鎧を着ると、槍をおっ取り同勢率いて、真田丸目ざして押し出してまいります。

このありさまを城中よりながめた、左衛門佐幸村は、

幸「あれ見よ、あわて者の関東勢、みんごとわが計略に乗って攻め寄せるぞ。いざ、じゅうぶんに引きつけて叩きつぶせ」

と、にっこり笑って士卒に下知し、静まり返って待ち受けます。ところが徳川方の軍勢は、互いに功名をあせり、夜霧に乗じて城壁まぢかに押し寄せたが、出丸の中はひっそり閑として、防ぎ矢一筋、射出す気配も見えません。摂津守は鞍壺につったちあがり、

摂「それ、者ども、城壁を乗り越えて討っていれ」

と、はげしい下知をくだしますから、寄せ手の者ども、用意の長梯子を城の石垣に立てかけ、さきを争って登り始めます。このとき幸村、時分はよしと、

幸「それ打ち払えっ」

と、下知をくだすと、かねて待ちかまえたる勇士の面々、巨石、大木をずしんどしんと、投げかけ投げおろしますから、あっという間もあらばこそ、またたくうちに四五百人の軍兵は、木に打たれ石におされて、即死する者数知れず。

○「それ、気をつけろ、木や石の雨が降る……」

×「原爆のおかげで、天気が狂ったぞ……」

そんなべらぼうなことをいっているひまはない。それ逃げろというので、どっとうしろへ引きさがりました。これをながめた三好清海、同じく伊三入道の兄弟、城門さっと押し開いて、二千余人を引き連れ、おっとおめいて奥村の本陣目ざし、潮のように押し寄せました。おじけのついた奥村勢、なんじょう刃向う勇気がございましょう。

○「それ、真田が乗り出したぞ、三十六計逃げるにしかず」と、雪崩を打って逃げこんでまいりますから、大将摂津守は歯がみをいたし、

摂「返せ返せ、なんたるざまぞっ、加賀武士のもの笑いであるぞっ」

と、鐙(あぶみ)ふんばりつったちあがり、目玉をむき出して下知をいたしまするが、臆病神に見込まれた軍兵ども、命あってのものだねと、さきを争って逃げてまいりますから、摂津守も押され押されて、さんざんな大敗北におよびましたは、ぜひなきことでございます。

いや、これを聞いて怒ったのは、関東方の軍師、本多佐渡守正信でございます。

佐「おのれ、あれほど厳しく軍令を申し渡し、ぬけがけの合戦、かたく無用と申しつけたるに、このありさまはなにごとじゃ」

やかん頭をふり立てて、家康公にたきつけたから、大御所にはもってのほかのご不興。ただちに前田加賀守を面前に呼び出しまして、はったとばかりにらみつけ、

家「なにゆえあって軍法にそむき、ぬけがけをいたして、かくは見苦しき敗れを招いたか。ふらち者め……容赦はならんぞっ」

と、きついおとがめ。加賀守はようやくおわびをして、事なきを得ましたが、これがためとうとう摂津守はながのおいとま、だれを恨まん由もなく、ついに浪々の身とあいなってしまいました。

敵の本陣に通じる秘密の間道(かんどう)

さても関東方におきましては、戦うたびに左衛門佐幸村の奇計にかかり、敵に数十倍する死人手負が出るというありさま、これではならじと軍師の本多佐渡守正信、いっそうに軍令を厳にいたして、

佐「総攻めの日までは、いかに敵がしかけるとも、必ず相手になってはあいならぬ」

と、二十二段備えの大将方に、あらためて申し渡し、それぞれ十干十二支の印の旗を用意におよび、十一日の総攻めの日まで、ひたすら準備を整えます。

こちら城方においては、早くも忍びの者によって、十一日の早朝を期し、十二段に十段を加え、二十二段をもって、攻め寄せるということが知れましたから、秀頼公はじめ大将方の心配は、ひととおりでございません。

十二段でさえも幸村は、七段まではよく破ることができるが、残る五段を破ることは、できないといったくらいだから、十二段に十段増えた、二十二段の番手攻めときては、いかな幸村とてもせんかたあるまい。こりゃあどうもたいへんだと、色を青くして心配いたしております。

そこでともかく、幸村公について、万事を聞きただそうというので、木村長門守、後藤又兵衛、長曾我部盛親の三大将には、うち連れ立って、真田丸へとやってまいりました。すると幸村

には大助幸昌を相手に酒宴をもよおし、にこにこ笑っておりますから、三将は意外に思いまして、互いに顔を見合わせながら、

又「軍師にはこのたび、寄せ手の軍勢、二十二段の備えをいたし、番手攻めをいたさるるということ、すでにご承知のことと存じまする。先般はいかに計略とは申せ、七段までが精一杯、残る五段はおぼつかなしとおおせられましたに、このたびはまた、十段増して二十二段、これ容易ならざる儀と存じ、一段のご工夫、ご思案を、こらしておいでのことと存じましたるに、思いのほかのお酒盛とは、われらいっこうに合点がまいりませぬ。なにとぞご心底のほど、うけたまわりとう存じまするが……」

と、いぶかり問うと幸村には、

幸「いや、そのご不審はごもっともではござるが、実はそれがしかねてより、関東勢、大軍をもって攻め寄せきたるを、待ち受け申しておったる次第、……このたびこそはこの大軍を討ち取るか、または大御所の首級をあげるか、いずれにしても大勝利でござるから、ご安心をくだしおかれたい……」

と、傍若無人の返答に、三将はなおさらわけがわかりません。さては軍師には打ちつづく激戦に、神経障害でも起こしたかな、と思っていると、早くも事のようすを見てとった幸村公、

幸「あっははははは、さてはかたがたには、この幸村が、からいばりの大言とでもおぼしめされるか。実はこの幸村には、必勝不敗の妙計が、ことごとく胸にあればこそ、かように前祝いの酒をくんでおるところでござる」

又「ほほう、してその妙計とは、いかなるものでござるか。おさしつかえなくば、おもらしを

願いたいものでござる」

幸「ささそこでござる。その理由を申さねば、ご納得のまいらぬが当然、実はそれがし、当城へ入城いたしてこのかた、名にし負う天下の名城、必ずどこかに間道があるはずと心得、かねてより心がけて探したるところ、案にたがわず、この真田丸より未申（南西）のかたにあたって大きな石がござるから、さてはここぞとその大石を引き起こして見ると、一つの大穴がござって、これが茶臼山のほとり、かの沼地の土手の芦の茂みにまで、ちゃんと掘られてござった」

又「ええっ、さてはそのような抜け道が……」

と、はじめて打ち明ける大密事に、三将もただただ驚きいるばかりでございます。

幸「されば、この十一日、関東勢が当出城、総攻めの最中、それがしはこの間道よりひそかに忍びいで、茶臼山の本陣を、火打ちにかける所存。さすれば大軍これに驚いて、あとへ引っ返してまいるは、火をみるよりも明らか。……その折、城中一丸となって打っていでなば、勝利を得ること必定、うたがいなしとこそ信じておりまする」

といわれて三将は、あっと感嘆いたし、

盛「げにもさようでござったか。いつもながら恐れいったる軍師の計略、われわれどもは、さようなところに気がつかず、おおいに心配いたしておったる次第、それうけたまわって安堵つかまつりました」

と、大いに喜び勇みまして、おのおのおのれの詰所へと引き取りました。

さて幸村は、いよいよあすが総攻めという、前日の十日、秀頼公のご前に伺候いたし、

幸「恐れながらあすこそは、関東と大阪、最後の雌雄を決する日にござりまする。もとより二

十万、三十万の関東勢、幸村これを縦横に、打ち破る計略もございまするが、なにぶんにも、日あし短いこの節のことでございますゆえ、合戦は夜におよぶこと必定と心得ます。そのときこそは幸村、出丸をうって出て敵の本陣、茶臼山へ攻めかかり、敵陣に火を放って、大御所家康を討ち取りまする考え。なにとぞ明夜、茶臼山のかたにあたって猛火の起こるを見たまわば、君にも城中七手組の猛将どもをはじめ、全軍をお率いあそばして、城外へご出馬にあいなり、千成瓢箪のもと、勝敗をいっきょにお決しくださりまするよう、お願い申しあげたてまつります。

御大将ご出馬あるときは、味方の勇気百倍いたし、目にあまる関東勢を打ち破って、家康、秀忠の首級を得ることも、いといとたやすし。必ず時機を失せずご出陣のほど、幸村、一生一期のお願いでござります」

と、赤誠おもてに現わして、願いいでましたから、弱年とは申せ、さすがは古今の大英雄、故太閤の血を受けつがれた秀頼公、幸村の言葉を聞かれて勇気りりしく、

秀「うむ、いつもながら、あっぱれなる軍師幸村、さらばなんじの申すとおり、茶臼山の本陣に火の手あがるとみれば、ただちに全軍を率いて打っていで、関東勢をいっきょに踏みくだいてくれようぞ」と、聞くだに勇ましいお言葉。幸村これをうけたまわって、

幸「ああありがたしかたじけなし……。幸村、勇ましきただいまのご諚をうけたまわり、百年の苦難も、夢と消え失せし心地がつかまつります」

と、その喜びは手の舞い足の踏むところを知らず、天にも昇るがごとき心地をもって、ご前を退下におよびました。

そこは泣く子と地頭の権力

さて、あくれば慶長十九年、十二月十一日、木枯らしの風はごうごうとして吹きすさみ、いまにも雪をともなわんかといたして、その寒気というものは、肉をつんざき、骨を刺し通さんばかりでございます。

いよいよあけがたのころおいともあいなりまするに、まず第一番手をうけたまわったる、安藤対馬守には、輪宝の旗印に子の差し物を押し立て、きょうを死日と覚悟をいたし、陣鉦、攻太鼓、法螺貝の音も高らかに、ドドン、ブーブー、ジャジャン、ジャンジャンとばかりに、勇気りりしく進んでまいります。

つづいて第二陣は、丸に釘抜きの旗印に丑の差し物、これぞ太田原備前守、第三番手は丹羽勘助と、十千十二支の総軍勢、一時に前進をはじめて、わずかにこだかい丘の上に築かれた真田丸を目ざし、ひともみにもんでつぶさん勢いもて、どっとばかりに潮のごとく押し寄せてまいりましたは、いかに明智の左衛門佐幸村とても、とうてい支うべきとも見えませぬ。

さて、関東勢の先手たる、安藤、太田原、丹羽の面々は、このたびこそ真田を討ち取り、厚き恩賞にあずからんものと、必死の覚悟でわれ劣らじと、出丸をさして押し登ってまいります。なかにも安藤対馬守の郎党、中山一馬、富田伝八、山崎大六の三勇士は、われこそ一番乗りをせん

ものと、石垣へ手をかけ、猿のごとく登ってまいりましたが、いっこう城中からは、防ぐ気色が見えませんから、不審に思って顔を見合せ、

一「いったい、どうしたことでござろうなあ」

伝「まことに不思議千万、……さてはなにか、計略があるのではござるまいか……」

大「なんの、さようなことがあるものか。さすがの真田も、このたびの番手攻めには閉口いたし、いち早く風をくらって、本丸へ逃げこんだのでござろう」

と、なおもぐんぐん登ってまいりますから、つづく大勢の軍兵ども、われもわれもと蟻のごとくに、ぞろぞろとあとにつづいて登ってまいります。城の内では大助幸昌、鳴りをひそめて、待ちに待っておりましたが、時分はよしとすっくと立ちあがり、

大「それ、玉子弾を食わせろ」

と、下知の一声に、数百人の城兵が、手に手に卵をつかんで投げつけた。これを飲んで、元気をつけるとでも思ったらおおちがい、この卵は中身を兵糧に使ったからで、そのからの中に、煎砂ととうがらしの粉を混ぜたものをつめ、紙ではりつけてあるという、まことにやっかいきわまるやつ、こいつを顔を上へ向けて、えっさえっさとよじ登ってくる寄せ手を目がけ、はっしはっしと投げつけたから、たまったものじゃあございません。おでこ、鼻の頭といったところへ、遠慮なく命中して、ぱっと割れると中から飛び出す煎砂ととうがらしの粉が、眼、口、鼻へ容赦もなく飛びこんでくる。

○「わっ、眼をやられたっ」

と、焼けつくような痛さに、涙がぽろぽろ、眼を押さえようとうっかり手を放すから、あっという間に転がり落ちる。鼻の頭をやられたやつが、「はっくしょん」とくさめをしたとたんに、つるりと手がすべったから、これまたずでんと転がり落ちるというありさま——。下からつづいて登ってくるやつがまた災難で、大きなお尻をおでこにぶっつけられて、わっといって落っこちる。そいつがまた下のやつの上に降ってきて、その下のやつが……というわけで、へいや石垣に取りついていたあまたの人数は、この思いがけない目つぶしにあって、面白いように、ばたばたと転げ落ちます。

また遠方のやつに対しては、

大「煎砂をまけっ、筒を投げろっ」

というので、長い柄の柄杓や竹筒へ、この煎砂、とうがらしを入れて、ぱっぱっとふりかける。これが風に乗って、あたり一面に飛び散るから、

○「うーむ、眼が見えぬ。あまりの痛さに鼻が曲ったわい」

などと、まるで鮎や鮭みたいなことをいいながら、めくらさぐりにはいまわるやつもいるといったしまつ。いやもう、寄せ手の大軍は大騒動とあいなりました。そこで引きしりぞこうといたしましたが、なにしろ軍師佐渡守から、二十二段備えの総攻めは、先陣、二陣、三陣、四陣、たとえ皆殺しになろうとも、屍を踏み越えて敵に迫れと、厳しい軍令でございますから、あとからあとからと押し寄せる四陣、五陣の連中、前のほうでどんな大騒動が起こっていようと、おかまいなしにぐんぐんと、押しつめてまいります。ここに進むこともしりぞくこともできなくなった数千のめくら軍勢、味方の軍勢のために、押しつぶされるやら、踏み殺されるやら、目もあてられぬ修羅場となってしまいました。

はるか後陣でこれをながめた、独眼龍将軍の伊達政宗、さすがに戦場往来の古強者だけに、少しも騒がず、例の片目をかっと見開きまして、

政「やあやあ、真田は目つぶしの計を用いるとはみえたるぞ。それ者ども、用意の竹の楯を持ち出せい」

と、竹をたばねてわらで包んだ、早造りの楯……、たちまちこれをば軍兵残らずに持たせると、

政「それ、目つぶしくらいに恐れてなんとする、かかる出丸一つを攻め落とすに、うかうかと時をついやさば、なに面目あって将軍家にまみえんや。死ねや者ども、われにつづけっ」

と、まっさきかけて、はげしい下知をくだしましたから、伊達家の軍勢どっとおめいて、城壁の下へ押し迫ります。これに勢いを得た、井伊掃部頭はじめ、寄せ手の軍勢、

○「うむ、なるほどあの片目殿は頭がいい。わが軍勢にもあれを持たせろ」

これは簡単な防具だから、すぐできる。われもわれもと、竹束とわらの楯をかざした軍勢が、城壁目ざして押し寄せます。幸村櫓の上よりこれをながめて、にっこと笑い、

幸「うーむ、こは面白し……、大助、しからばこのたびは、火攻めにいたせっ」

大「はっ、心得ました。……それ者ども、今度は油をぶっかけろっ」

×「はっ、かしこまりました」

とばかり、軍兵どもは面白がって、長柄杓に油をくみこみ、寄せ手の面々の頭から浴びせかける。

○「おやおや、今度は油だぞ」

×「おのれ、われらを、フライかてんぷらと心得ているな」

まさかそんなことはいわないが、今度は真田め、なにをするかとためらっているうちに、油が竹とわらにたっぷりしみこんだころ、

大「それ、炬火を落せっ」

という大助の指図。待っていましたと家来ども、火をつけた炬火を数知れず、ばらばらっと、ひしめきたった寄せ手の上から投げ落としたから、油と火とは大のなかよし、たちまち油に燃えついて、炎々と燃えあがるものすごいほのおの勢い。これぞまことの焦熱地獄……。またもや寄せ手の面々は、身を焼きこがして死ぬ者数知れず、さんざんの大敗軍でございます。

総攻めを始めて、わずか一刻（二時間）足らずのあいだに、目つぶしと火攻めのために、命を落としたもの一万五六千人、さんざんなていに大御所家康も、歯がみをなしていきどおり、

家「ええ、言い甲斐なき味方の者どもかな。たかの知れたる左衛門佐幸村ただ一人に、かくも見苦しき敗れをとるとは、なんたることぞ。一刻も早く攻め落としてかれめを討ち取れ」

いい気なもので、自分みずから幸村には、ぎゅうぎゅうという目にいくどもあわされて、命からがら逃げのびながら、よくも勝手な口がきけるものだが、そこは泣く子と地頭の権力、ましてや大御所の一声ときているのだから、道理も糸瓜も、ワンマンも友愛精神もあったものではない。家康のこの怒声を聞いては、諸将もじっとしてはいられません。

□「敵に火攻めの計略あれば、その裏をかいて、じゅうぶんにからだを濡らしてまいれ」

と、木枯らし吹きすさび、雪もちらつかんというにもかかわらず、ご苦労千万にも軍兵一人残らず水を浴びせ、敵の裏をかいたつもりの大将分もいるというありさま。しかしこれとても六萬

十菊、あとの祭りで追っつかない。かようにいたして、九陣、十陣……十二陣、十三陣と、二十二段備えのなかば以上をとうに繰り出し、倒れた味方を踏み越え乗り越え、息をもつかずに攻めかかりますのは、さすがに関東勢も決死の覚悟とあいみえました。

なかにも、森山城守という勇将、まっさき駈けに石垣をよじ登り、城のへいにと手をかけて、

山「やあやあ真田丸の一番乗り、かく申す森山城守がいたしたり、後日に功を争うなっ」

と、声高々と呼ばわりましたから、

×「それ、森に遅れるな、山城につづけっ」

と、同時に石垣をよじのぼった、数百千の関東勢、えいえい声でへいへはいあがる。ちょうどへいの八分目までものぼったと思うと、

大「それ、千鳥べいを切って落せ」

大助幸昌、この時なりと叫びまするとと、たちまち、兵卒どもが駆け寄って、へいを支えたひもをば、ばらりずんと切って落としたからたまりません。メリメリメリッという大音響とともに、数百人をつかまらせたまま、あっという間に高べいは、ガラガラドシンと崩れ落ちました。この千鳥べいというのは、二重に作ったへいで、落ち崩れたあとからすぐに、もう一重の新しいへいが押し出されるというしかけ。

なにしろ頭の上から、へいと人間とが、ごっちゃになって落ちてきたから、下にいた連中はとんだ災難でございます。

△「それ、危いぞっ」

○「やれ、気をつけろっ」

と叫んだが、危いぞも気をつけろも、あったもんじゃあございません。あっという間におしつぶされて、人間せんべいができあがってしまった。いやもう、城壁のまっ下は、屍の山、血汐の河、目も当てられぬ惨状でございます。

三十万の大軍をもって、攻め寄せた関東勢、神算鬼謀、泉のごとくわきいづる幸村の智略にあたりかね、二十二段、番手攻めの総攻めも、すんでになかば以上は打ち破られたありさまこそ、その昔千早の城に立て籠り、雲霞のごとき大軍を、縦横無尽に駈け悩ましたる、大楠公の武者ぶりも、かくやとばかりにめざましく、はなばなしいかぎりでございます。

屍山血河、攻めあぐんだる関東勢、さすがにここでひとやすみするようすに、城内でも守りを固めながら、軍兵どもを休息させる。そのうちに、日あし短い冬の日は、早くも西に傾いて、暮れ方近くとあいなりました。

ああ予の首は無事であったか

かほどの大軍をもってして、朝から晩までの総攻めをいたしても、敵の出城一つを攻め落とすことがかなわぬばかりか、味方はさんざんの敗北つづき、さすがの大御所家康も、これにはすっかり業を煮やし、いまやここに全軍を励ますため、茶臼山の本陣をば立ちいでて、馬を生玉のあたりに進め、かねて物見にと、しつらえおいたる高櫓に登り、戦いの模様を検分なさらんといた

しました。

このとき左衛門佐幸村には、出丸の櫓の上にあって、遠眼鏡をもって、しきりと敵陣を見まわしておりましたが、ふとこの生玉の高櫓に目をつけると、そのままぴたっと、遠眼鏡に吸いつけられてしまった。

幸「ややっ、あの生玉の高櫓のほとりに、大将軍の気が漂うているぞ。さてはあの高櫓に、大御所家康、あるいは新将軍秀忠のうち、いずれかが登って、観戦いたしておるに違いない。ふーむ」

と、なおもひとみを凝らして、見さだめております。じたいこの左衛門佐幸村、幼少のころより、父安房守昌幸について、天文の学もその奥義を極めておるという人物――。どうもたいへんな人物に、たいへんなことを気づかれたもの……。そこで幸村、ひとみをこらしてよくよく見ると、遠眼鏡にうつる旗や指物から察して、

幸「ふーむ、あの旗本勢は、新将軍秀忠の旗本にてはあらず、まさしく茶臼山の大御所家康、あのところまで陣を進めたものと思われる。しからばこのほうにも考えがある……」

と、急いで櫓を駆けおり、三の木戸のほとりに備えつけたる、張り抜きの大筒、この大筒に強薬をばこめて、みずから火縄を手に取って、じゅうぶんにねらいを定め、生玉の高櫓をばまとにいたして、ズドンとばかり火蓋を切って落としました。

ゴゴーッと、天地にとどろく大音響とともに、火焔をはいて飛び出した大筒の弾、ねらいはたがわず、みごと生玉の高櫓に命中して、ガラガラガラッと見る見るうちに、木っ端微塵にけし飛ぶものすごさ……。

幸「うーむ、してやったり。このたびこそは大御所家康、天運つきて木っ端微塵に、吹き飛んだに違いない」

左衛門佐幸村、ここに会心の笑みをもらして、ふたたび櫓にとって返し、遠眼鏡をのぞいてみると、生玉のあたりはただもう、かなえのわくような大混雑、まるで煮え湯をぶっかけられた蟻のように、うろたえきった敵勢が、右往左往と駆けまわっておりまするから、

幸「うむ、やったりなやったりな」

と、なおもひとみを凝らしてながめまするに、こはそもいかにこはいかに、天に漂う大将軍の気は、いぜんといたして消えもせず、これが南へ南へと移ってゆく。早くも砲撃の失敗を悟った幸村、にぎりこぶしでわれとわが胸をたたき、

幸「うーむ、どこまでも武運高大なる大御所。またしても討ちもらしたか。残念千万……」

と、歯がみをいたしましたが、なるほど幸村の明察の通り、家康公には高櫓に登ろうといたしたところ、にわかに寒気をもよおして、五体ぶるぶるとふるえ、はしごに足を踏みかける力もなくなりましたので、近侍の者ども、おかぜでも召されてはと、無理におすすめいたし、輿に乗って茶臼山へ引きあげようと、小一町ばかりもここを離れましたるとき、轟然一発、高櫓が微塵に打ち砕かれて、けし飛んだとは、まことに武運めでたきおかたと申さねばなりませぬ。

さて、朝からのおやみなき戦いに、日暮れとはあいなって、しばらくは休戦の形とあいなっていた城攻めも、この砲声一発をきっかけといたし、新しく入れかわった寄せ手の軍勢、最後の二十二番手までも押しいだし、夕闇に乗じて無二無三、ひた押しにと攻め寄せてまいりました。

このとき左衛門佐幸村には、腹心の郎党、穴山小助をさし招き、わが鎧兜を小助に着させ、

旗差物を与えて櫓の上に立たせましたは、これぞ穴山小助をば、わが影武者に使い、幸村はあくまで、この出丸を守護いたすぞと見せかけ、みずからはかねての計略をおこなわんとの考え……。

かねての計略とは、前にも申しあげました通り、故太閤が掘り残したる間道伝い、茶臼山の本陣へと迫って、いっきょに旗本へ斬っていり、大御所家康を討ち取らんという、幸村一世一代の大秘計でございます。

ここに留守をあずかる穴山小助安治においては、なんといたしても、寄せ手を残らずこの出丸へひきつけ、幸村の秘計を、都合よく運ばせようという考えから、

小「やあやあ、寄せ手のやつばら攻めあぐんでみえたるぞ。いまこそ筒先そろえて射ち落とせっ」

と、いままであまり用いなかった、張り抜きの大筒はじめ何百挺もの鉄砲を、一時にどっと射ち出しましたから、百雷一時に落つるがごとく、天にこだましてものすごいばかり、黒煙は渦を巻いて地をおおい、この世ながらの地獄と、いわんばかりでございます。

こちらは左衛門佐幸村、時分はよしとえりすぐったる勇士四五百人を引きつれ、例の間道づたいに抜け出たところは、家康の本陣まぢか、茶臼山のふもとなる古沼のかたほとり、丈なす芦の生い茂ったるところでございます。

はるかに出丸のかたを振り返ると、いまや夜戦のまっ最中と見えて、かがりび、たいまつの光は、天をこがすばかり、鬨の声、矢たけび、銃砲の響きは、地もどよめくかと思われるありさまでございます。

幸「おお佐助、才蔵、その他、忍びの者どもはおるか」　佐「はっ、これにひかえおります」

と、進みいでたるは、覆面黒装束の猿飛佐助、霧隠才蔵、そのほか屈強なる忍びの者ども二十

余人、

幸「おおかねての手はず通り、そのほうどもてわけいたして、敵の陣へ火をかけてまいれ」

佐「ははっ、かしこまりました」

才「うむ、いよいよ面白くなってきたわい」

ぶっそうなことを面白がっている者ども、……一同ばらばらっと飛び出したかと思うと、闇に吸われて、たちまちその姿をかくしてしまいました。やがてしばらくすると、陣中いたるところへ火をかけたものとみえ、おりからの北風にあおられて、焔は炎々と燃えあがり、たちまち八方へ燃えひろがったから、時こそよけれと、わっとばかりに鬨をつくって、本陣目がけて斬りこみました。

さあ、驚いたのは大御所でございます。

家「やあやあ、夜討ちなるぞ。さてはなんぴとが夜討ちにまいったか、ただしは味方の裏切りか」

といって、ひょいとかなたをご覧になりますると、こはそもいかに六連銭の旗印が、燃えさかる火影にうつって、一人の大将槍をひっさげ、こなたを向いて大音声、

○「やあやあ、真田左衛門佐幸村、大御所殿の御首級を申し受けんと、わざわざここまでは推参いたしたり、このたびこそは逃げたもうことなかれ……」

と、槍取り直して突いてまいりましたから、

家「やあ、またしても真田なるか。天から降ったか、地からわいたか、いかにしてここまではきたりつるか……」

と、あっけに取られ、あわや腰をば抜かさんばかりのありさまでございますから、側にひかえた大久保彦左衛門、とっさにこれをお支えいたして、つなぎあったる馬上に押し上げ、大刀一閃、さっと手綱を切り払うと見るや、峰を返してぴしりとばかり、馬の尻を殴りつけた。びっくりしたのは馬で……、

馬「じじい、斬りゃあがったな……」

と、思ったかどうだか知らないが、一目散に駈け出した。旗本勢は踏みとどまって、幸村やるなと必死となって駈け向かっております。大御所には、馬の首にかじりつくようにいたし、わずかの手勢を供に連れ、住吉さして、一生懸命落ちてまいりますと、かなたよりは新将軍秀忠の手のものが、わあわあといって逃げてまいりますから、なにごとの起こったるかとたずねてみますると、こはそもいかに驚くべし、新将軍のほうへは、真田大助が夜討ちをしかけ、不意をつかれて将軍はじめ、上を下への大騒動、ということでございます。

これを聞かれて大御所家康、もう魂も身にそわず、どうとばかりに落馬をいたされた。ここにおよんで大久保彦左衛門、

彦「上さま、かえってお徒歩のほうが、目につきませぬ。このままにてお落ちあそばせ……」

と、家康の手を取って、これより道をかえ、どんどんどんどんと逃げさりまして、富田の豪商、紅谷市右衛門方へと、お忍びにあいなりました。

こちらは左衛門佐幸村、ちまなこにあいなりまして、支える者どもを突き殺し、蹴倒しいたしまして、大御所はいずこにあるぞと、あなたこなたを探しましたが、残念にもはやその姿は見えませんので、

幸「ああ五度六度、ねらいにねらえども、間一髪にしてその意を果さず、てもさても、天運高大なる大御所家康……」

と、いまはおのれの不運をかこたんよりは、大御所家康のご運の強さに驚きいっております。さて、お話かわって、こちらは一子大助幸昌、父幸村と前後いたして、同じく手勢を引き連れ、例の間道から忍び出まして、住吉なる新将軍、秀忠の本陣さして近寄ってまいり、

大「やあやあ、新将軍秀忠公にもの申さん。わが父、真田幸村、茶臼山において大御所、家康殿をば討ち取ったるぞ。よって新将軍の首級をも申し受けんと、かく申す幸村が一子大助幸昌、ここまで推参いたしたり。いでやその首級、いさぎよくこの大助にお渡しあれ……」

と、大音に呼ばわりながら、どっとばかりに斬りこみました、さあたいへん、秀忠公にはあっとぎょうてんいたされて、

秀「ああわが父君には、真田のために討たれたまいしか……」

いかがはせんとためらうところへ、近侍の武士が、ここぞと駒をすすめましたから、父子ともども、そういさぎよく首を渡してなるものかと、すばやくこれに打ち乗られ、父より早い逃げ足で、ゆくて定めず逃げ出しました。大助はこれを見るより、

大「やあ、きたなし新将軍、返させたまえ、とどまりたまえ……」

と、追いかけてまいり、いましも槍を取りのべて、ぐさっとばかりに突かんとしたる間一髪、そうはさせじと横あいから、飛び出したのが秀忠の近侍、大久保治右衛門という勇士、さっとばかりに、大助目がけて斬りつけました。大助幸昌大いに怒り、

大「おのれこしゃくな、じゃまだてするかっ」

と、槍をかえして石突もて、胸板どんと突きましたから、治右衛門どうとしりもちをつく。そのすきに秀忠公には、一三十間がほどを逃げのびましたから、大助、無念の歯がみをいたし、

大「ええい、残念千万なり」

と、槍をば投げ捨て、負うたる半弓をおっ取りまして、夜のこととて、姿はさだかにわかりませぬが、きらめく兜の飾りを目あてに、これぞ将軍秀忠ならんと、よっ引いたる半弓、ひょうとばかりに切って放てば、矢は勢い鋭く、風を切って飛んでまいり、秀忠公の兜の忍緒を、ぷつりとばかりに射切り、勢いあまって、秀忠の馬側につきそう若武士、松村治郎兵衛の首筋に、ぐさりと突きささった。治郎兵衛、「ぎゃっ」といったがこの世の名残、あわれ主君の身代わりとなってあいはてました。秀忠公は兜を射落とされて、夜風が脳天にしみこみ、ぞっとみぶるいいたして、

秀「ああ予の首は無事であったか、首よでかした……」

つまらないところで、つまらぬところをほめたものだが、気がどうてんしているから、これも無理からぬお話、首をたたいて雲霞と逃げのびました。大助は舌打ちをいたして、

大「うむ、無念ながら、いまは深追いするときでない。それ、引きあげよ」

と、人数をまとめて、ゆうゆうと真田丸へと引きあげましたが、なにしろ上を下への大乱軍、徳川方のだれ一人として、あとを追う者とてもございません。

さてこちらは真田丸を攻め落とさんと、城壁まぢかに押し寄せて死に物狂いの戦いをつづけていた二十二段番手攻めの同勢、にわかに茶臼山本陣のかたにあたって、火の手があがり、時ならぬ阿鼻叫喚が聞こえてまいりましたから、さては本陣になにごとか起こったりと、思わず城攻めをやめて、引きしりぞこうとしました。

これを見るより幸村が影武者となって、櫓にがんばっていた穴山小助、このときとばかりに、

穴「それ、敵は引きしりぞくと見えたるぞ。この機をはずさず追い討ちいたせっ」

と、六連銭の大旗をひるがえし、城門さっと八文字に押し開いて、どっとばかりに八千余人、群がる寄せ手のまっただなかへ斬りこみました。これを見るより後藤又兵衛、

又「それ、真田の勢に遅れるな、進めや進めっ」

と、これまた乾の門を開いて六千余騎、潮のごとくに討っていで、当たるをさいわい突き崩し、なぎ倒します。また木村長門守は又兵衛としめしあわせ、早くより間道伝いに城外へいで、闇にまぎれて兵をば伏せておりましたが、寄せ手がどっと崩れ立つのを見すまして、

重「それ、敵は浮き足立ったるぞ、いまこそかかれっ」

と、ドドンドドンと釣瓶射ちの鉄砲を、敵の横あいから射ちかけ、これはと驚くそのすきに、弾煙の下をかいくぐり、槍先そろえて、いっせいに突いてかかったから、寄せ手の軍勢は支離滅裂、もはやおさまりのつかぬ、大混乱へとおちいってしまいました。

牝鶏暁を告げてその家滅ぶとか

さて、城内においては右大臣秀頼公、かねて左衛門佐幸村から、委細申しあげてございますこ

とゆえ、その時刻をあいまっておられましたるところ、案のごとく暮れ六つ過ぎとあいなりまして、茶臼山のかたにあたって炎々たる火の手があがり、寄せ手の同勢ことごとく、総敗軍の模様でございますから、さっそくご出馬の用意におよばれ、緋の綾の大吹貫、五色の小旗、千成瓢の馬印、太閤ご在世のごとく威風堂々、城内七手の組頭を先手といたし、繰りいださんといたされました。

ところが秀頼公ご出馬ともあいなれば、執権職大野修理をはじめ、大野道犬、織田有楽斎などもまた、ご馬前に立って出陣しなければなりません。しかるにこの大野父子、織田有楽などという佞臣輩、甘言をもって婦女子をなで斬ることは得意だが、打物取ってのいくさときては、女子供にも劣るという腰抜け、いざ出陣ときまると、ぶるぶるがたがた、生きた心地もございません。

有「やあ、道犬殿、どうも困ったことになりましたな。いかがいたしたらよかろうのう」

道「うむ、ご同様、命あってのものだね、なんとかして、出陣いたさぬ工夫はござるまいか」

有「さればさ道犬殿、ちょっとお耳をお貸しあれ……かようかようにいたしてはいかがでござる」

道「うむ、それはすこぶるご名案……」

ところで、織田有楽と、大野道犬の両人、手をたずさえて、御母公淀君のご前へとまかりいでまして、

道「ははっ、御母公さまに申しあげます……。ただいま右大臣さまには、軍師左衛門佐幸村よりの進言により、ご出馬あそばされまする由にて、すでにお支度ずみのごようす、はなはだもってあやうきことと存じまする。ことに夜中と申し、かような乱軍の中へ、かるがるしくご出馬

あって、いかなる異変あるやもはかりがたく、まことに心もとなき儀にござりまする……」

と申しあげると、その尾について有楽斎、

有「およそ大将と申しまする者は、いながらにして敵を破る、これをこそ良将とや申すべく、昔、源氏の大将頼朝公におかせられては、その身鎌倉にありながら、さしもの平家を滅ぼし、天下を治めましたるためしもござりますれば、かるがるしくご出馬なぞとは、もってのほか、それともご出馬なくてはかなわぬことなれば、よろしくご名代を差しつかわされるが、しかるべくと存じまする」

と、両人口をそろえて申しあげましたから、淀君におかれてはびっくりぎょうてん、顔色蒼白とあいなりまして、

淀「えっ、そりゃまことか……、お身方老巧の者がお側にはべりながら、なんたることをいたされます……」

と、柳眉をさかだて、言葉も鋭く問いつめましたから、両人心のうちでは、しめたとばかりほくそえみまして、

道「ははっ、恐れながら、われらの申しあげまることにては、とうていお聞きいれもこれなきみ気色、このうえは御母公さまのみ袖にすがり、ぜひとも君のご出馬、思いとどまらせたもうよう、ご意見のほど願わしゅう存じまする……」

両人、自分の臆病を棚に上げて、しきりに淀君をたきつけました。雄々しいようでもそこは女のあさはかさ、ことにわが子かわいさの親心、いかに軍師とはいえ真田もいらざることを進言いたし、わらわの心をば苦しめるものよ、にくいやつじゃと、とんださかうらみをいたしまして、

淀「さ、さ、両人とも、一緒に来てたも。秀頼殿のご出陣、思いとどまらせて来ようわいな……」

どうも、とんだ御母公さま、牝鶏晨を告げてその家滅ぶとは、よくぞ申したものでございます。淀君には二人のおべっかじじいをしたがえまして、まろぶがごとく秀頼公のご前へと来てみれば、鎧兜の武者振りも勇ましく、黄金作りの太刀をはき、金の采配持ったる秀頼公、威風あたりをはらうばかり、早くも連銭葦毛の逸物に、ゆらりがっきとうちまたがり、城門さしていで立たんとするところ。

淀「秀頼殿、待ってたもっ」

金切声をふり絞って呼び止めたから、振りかえった秀頼公、馬上ながらに会釈をいたし、

秀「おお母君、これより秀頼出陣いたし、関東勢をば木っ端微塵に打ち砕き、豊家のもといを定める決心。母君には、そを楽しみにお待ちあれ、さらばごめんっ」

と、言葉も涼しくいい放って、打っていでんといたしますから、裳裾を乱して駆け寄ったる淀君、

淀「ええなんたることを秀頼殿、そなたはこの母をば振り捨てたもうて、討死なさるお覚悟か……」

と、泣き声出してかきくどく。孝心ぶかい秀頼公、乗ったる馬より下り立たれ、なだめつすかしついたしまするが、淀君いっかな聞きいれません。さすが秀頼公も、おもわずどっかと庭先に腰を落として、

秀「ああぜひもなし、ぜひもなし、軍師との約を破るは心苦しきことではあるが、母君のおいいつけにはさからえぬ。母君、秀頼は出陣、思いとどまりましたるぞっ」

と、天を仰いで長嘆息をいたされました。かくて豊家の末路悲惨、千載の恨事をとどめるにいたりましたは、くやみてもまた、残り多きことでございます。

さて左衛門佐幸村には、手勢をまとめて息を入れ、このうえは秀頼公のご出陣をあいまって、勝機をつかむ最後の一戦、はなばなしくも打っていでんと、いたしておりますところへ、駒を駆ってかけつけたのは、七手組大将の一人、速水甲斐守、さっとばかりに駒を乗りつけまして、

甲「真田殿、上使でござるっ」　幸「ははっ」

甲「ただいま秀頼公、ご出馬あらせらるべきところ、御母公さま、たってのお差し止めによって、にわかにお取りやめとはあいなった……。このむねお伝えのための上使でござる……」

という、思いも設けぬ甲斐守の言葉。幸村これをうけたまわって、一度は怒り、一度は嘆き、

幸「ああぜひによばぬ天運かな。かばかりに勝機をつかんだる戦いに、君ご出馬あらせられなば、故太閤旧恩の諸大名、やわか秀頼公に向かって弓を引くことよもかのうまじ、ことに味方の勇気百倍いたして、まったく勝利とあいなるべきところ、ご運のすえこそぜひによばぬ。さてさて残念千万」

と、ぎりぎりっと歯がみをいたし、天を恨み地をいきどおるありさま、この無念の形相をば見てとったる、速水甲斐守、はっと肚胸をつかれて、いうべき言葉もございませぬ。やがて幸村、気を取り直し、

幸「いや速水氏、見苦しいところをお目にかけて、幸村恥じいり申す。なにもかもすべては天命でござろう」

甲「いや、軍師のご胸中お察し申す」

甲斐守もたまりかねたか、幸村の両手をひしとにぎりしめ、あつい涙をはらはらと落としましたは、まことにもっとも至極のことでございます。

とこういたすうちに、後藤又兵衛、木村長門守なども、ぞんぶんに敵を駆けなやまし、手勢をまとめ、おいおいと幸村のもとへ集まってまいりましたが、秀頼公のご出馬取りやめを聞いて、いずれも落胆ひとかたならず、「ああやんぬるかな」と、嘆息いたすばかりでございます。左衛門佐幸村は、

幸「かたがた、すべては天命じゃ。敵のもりかえして来ぬうちに、さらばひとまず、城内へ引きあげるといたそう」

あきらめきった幸村、諸将をうながして備えをたて、ようようとして引きあげるありさま、関東勢はこれを見て、ただ目を驚かすばかり、城兵の武勇に恐れたものと見え、あえて追い討ちいたす者とてもございません。

哄笑微笑の平和攻勢

二十二段備え、番手攻めの真田丸総攻めも、さんざんな大敗北、これにはさすがの大御所家康も、すっかり首をひねって、考えこんでしまいました。そこで腹心の本多佐渡守正信と額をあつめ、

家「いかに佐渡、左衛門佐幸村ある限り、大阪城を力攻めにいたすとも、容易に落ちることとは思われぬぞ……」

佐「ははっ、さようにござります。このうえは気長に遠巻きにいたし、兵糧攻めにてもつかまつりましょうや」

家「いやいや、あまりにてまどっては、太閤恩顧の大名ども、向背のほども気づかわれる。さればこの合戦、てっとり早く片づけたいと思うのじゃ」

佐「して、上さまには、なにかよきご思案にても……」家「うむ、さればそのほうには……」

佐「ははっ、一つだけ考えつきましてござりまする……」

家「うむ、さようか。しからばかようにいたそう。そのほうと予と、双方の思うところを書きしたため、照らし合わせてみようではないか」

佐「ははっ、かしこまりました」と、ここに智謀の主従両人、硯を引き寄せ、なにやら紙に書きしたためて、

家「佐渡、できたか……」佐「ははっ」

と、両人、同時に開いた二枚の紙片、見ると、「和睦」「和議」と符節を合わしたごとく、いずれも講和を意味する文字でございますから、思わず顔見合わせた大御所と佐渡守、

家「あっははははは」佐「うっふふふふ」

と、哄笑、微笑いたしましたは、これぞまことに平和攻勢、微笑政策のはじめとぞあいみえました。

さて、智謀の主従が、なにゆえにかようなことを考えたかと申しまするると、難攻不落の大阪

城、このまま力攻めをもってしても、なかなか落城はおぼつかない。このところはひとまず和睦をいたし、これを機会になんらかの手をもって、城の守りを崩すなり、あるいは城内の結束をみだすさんという、魂胆からでございます。

ここにおいて家康は、ひそかに京都へ使者をつかわし、寵愛の側室、阿茶局を呼び寄せまして、裏面から和睦の工作に、あたらせることといたしました。

阿茶局は本多佐渡守とともに、家康の懐刀といわれた婦人、ここに局は家康の意を受けまして、淀君の妹で、京極高次の夫人となられた、常高院とおおせられるおかたが、大阪城内におられまするところから、この常高院に渡りをつけ、東西和睦のことを相談いたさせました。

ご案内のごとく淀君は、三人姉妹でございまして、すぐの妹がこの常高院、末の妹は新将軍秀忠の奥方になられたという、戦国のならわしとは申しながら、まことに数奇な運命のもとに生まれた姉妹、ここに常高院といたしましては、姉を思い妹を思い、一日も早く和平をと願うその心中、まことに察するにあまりがございます。

ここで阿茶局と常高院とが、いろいろと話し合いました結果、和睦のことを淀君に申しあげまするると、いったんはくやしさ腹立たしさに、この和議をしりぞけようとはいたしました淀君も、日ならずして関東勢の打ち出した大筒が、お居間近くにさくれついたし、ぞっと臆病風が身にしみたところへ、例の大野道犬、織田有楽などの臆病どもが、またぞろそのお袖にすがって、

有「御母公さま、関東勢が当家の武威に恐れて、和議を申しこんだるこそさいわい、和睦の儀、なによりのことと存じまする」

道「かようにいたして、一年二年との籠城ともあいなれば、兵糧も尽きはてて、自滅のほかは

ございますまい。敵方よりの申しいでこそもっけのさいわい、お家の名誉とあいなっても、決して恥辱ではござりませぬ。和議の申しいで、お聞き入れあそばされますよう……」

と、ここを先途とたきつけましたから、淀君におかれても、すっかり和睦に、考えがかわってしまわれました。

いっぽう家康においては、このような裏面工作をつづけますとともに、京都所司代、板倉伊賀守勝重に命じて、禁裏をうごかし、勅命をもって和睦の儀をおおせいだされましたから、秀頼公におかれても、このことにそむきますれば、違勅ということになりますので、かしこまってお受けをいたし、ここで秀頼公、一同の大将をば千畳敷きの大広間に集め、ご評定にとあいなりました。このとき左衛門佐幸村進みいでまして、

幸「幸村つらつら案じまするに、寄せ手の軍勢しばしば敗軍いたしまするによって、力攻めをもってしては、当城を落城いたすことかなわず、よって朝廷を動かしたてまつり、詔勅をかさにきて、和議をととのえんという、大御所の奸計とこそは存じまする。必ず和議については、難題を申しきたること必定、このうえは和議の談判、ひとしおのご思案を願いとう存じまする」

と申しあげたから、秀頼公におかれても、

秀「うむ、軍師の申すところもっとも至極、このうえとも思うところを申し述べ、よきに計らいくれるよう……」

というおおせ……。するとまもなく関東の陣から、京極若狭守が使者として乗りこんでまいり、

若「このたび詔勅によって、和議つかまつるについては、そのあかしとして、これより申し述

べる三ヵ条のうち、いずれの一ヵ条かをご承知願いたい……」と、かさにかかって、まるで敗者に対するような無礼な口上、秀頼公もむっといたして、

秀「うむ、さればその三ヵ条とは、いかなることぞ……」

京「まず第一は、御母公淀殿、関東へ下向いたしてながくとどまり、和睦のあかしを立てられること。第二は、新たに召しかかえたる諸国の浪人をば、一人残らずいとまをつかわされること。第三は、城の外濠を埋めること。右三ヵ条のうち、いずれか一ヵ条をお受けいたすにおいては、大御所ならびに新将軍におかれても、すみやかに和睦を承知いたされ、長くご当家と、むつびを結ばんとのおおせでござる……」

と、こいつはとんでもない平和攻勢、家康と本多佐渡守とが、たくみにたくんだる難題でございます。秀頼公さすがに歯を食いしばり、その手をわなわなとふるわせましたが、御母公はじめ、大野父子、織田有楽など、戦意をことごとく喪失いたしておりますことゆえ、いまはいかんともせんすべなく、思案に窮されまして、

秀「ううむ、いかなればとて子たる秀頼が、現在の母上を、関東へ人質に送ることができようぞ。また予がためにこんにちまで、忠誠を尽くしくれたる勇士の面々に、なにとていとまをつかわすこともできようぞ。さればというて、父太閤が築きたる、この要害の外濠を埋めることもできぬ。いかがはせん……」

と、思いまどうておられますとき、幸村が静かに膝を進めて、

幸「ははっ、恐れながら、ここに幸村の存念を申しあげまする。このうえはなにとぞ、われら新参の者どもに対し、おいとまをくださってこそ、しかるべくと存じまする。われら、よしおい

とまをたまわり、たとえ野に臥し草に寝ね、水をすすり塩をなめるとも、などか故太閤のご恩を忘れましょうぞ。ふたたび合戦ともあいならば、大御所はじめたかの知れたる関東勢、ひとあわ吹かせる覚悟にござりまする」

と、忠魂おもてに現わして申し述べました。左衛門佐幸村においては、奸智にたけた大御所家康、難題にことよせ、難攻不落の称あるこの大阪城、外濠を埋めてしまえば、あとはたやすいと見て取ったるうえ、いやでもこの計略を受けいれるよう持ちかけたと、早くも見抜いた結果でござります。後藤又兵衛、長曾我部盛親の面々も、

又「真田殿のお言葉、われらもまったくその通りでござる」と、口々に申しあげたから、秀頼公には涙を流させたまい、

秀「いやいや、われを助けて大功を立てくれしなんじら、いかでかそのようなことができようぞ。たとえ和議破るるとも、このことばかりはあいならん」

というありがたいおおせ。これを聞いてびっくりしたのが、織田有楽や大野父子の者ども、和議が破れてはたいへんと思ったから、そっと淀君の袖を引き、なにやらその耳元にささやきますると、そこはあさはかな女心。

淀「秀頼殿、関東の難題、いずれものことながら、合戦もすでに和議ととのうえからは、外濠埋め立てのこと、さまで惜しむにはあたらぬことと思われる。ご承知あって、およろしきかと思いまするぞえ……」

と、これぞまさしく鶴の一声、幸村はじめ諸将の反対を押しきって、とうとう和議のあかしとして、ここに天下の要害、大阪城の外濠をば埋めることを承諾して、和睦をいたすことにあいなりました。

一説には、この大阪城の外濠埋め立てについては、太閤在世のみぎり、家康公に向かわれて、大阪城はいかにせば落城いたすとおぼさるるや、とお問いあそばされしとき、家康その返答に窮したるさまを見て、秀吉公には声高らかに笑われ、「外濠を埋めさすことじゃよ」とおおせられたのを、家康ふかく心中に秘めおきて、今回の和睦に、これをおこなわしめたとも伝えられておりまするが、それはさておき、これをもって天下の要害も、単なる裸城とあいなって、しまうこととなりました。

使命は重し血判見届けの使者

さてそのころ、茶臼山の本陣においては、大御所家康と、本多佐渡守正信、たがいに膝をつき合わせまして、

家「どうじゃ佐渡、細工はりゅうりゅうというところであろう」

佐「ははっ、いかにも上さまおおせられまする通り、三ヵ条のうちの一ヵ条、御母公淀殿の人質、新規召しかかえの浪人ども、召し放しということにては、よも承諾はつかまつりますまい。さすれば残るところは外濠の埋め立て……、かくあいなりますれば、難攻不落の要害も、攻めるにたやすく守るにかたき裸城、埋め立てののちには、すぐにもことをかまえて、ひともみにもみ

つぶさんこと、朝飯前のお茶の子でございますわい……」

老獪きわまる大狸と古狸、してやったりと腹鼓ならぬ、額をたたいて喜んでおります。ところへ京極若狭守立ち帰って、外濠埋め立ての儀を、おうけのむね披露におよびましたから、わがことなれりと両将、ほくそえんでおります。

かようにいたして、和平のための和睦でなく、合戦のための和睦ともいうべき、家康公思う壺の和議が取りきめられまして、いよいよここに十二月二十一日、神文誓紙の取りかわせをおこなうこととはあいなりました。

ところがこの神文誓紙には、おのおの相手がたの大将が、血判をすることになっているならわし、この血判の見届け役こそ、大役中の大役でございます。万一、敵方から、ごまかしの神文や血判を、つかまされるようなことがあっては一大事。この使者こそは、よほどの智略と勇気があり、しっかりと、腹のすわった人物でなければなりません。

ここにおいて大阪城中では、さっそくに評定を開き、なんぴとをこの血判見届けの使者に、選ぶかということになったが、軍師幸村や後藤又兵衛なら申し分ないが、いずれも新参お召しかかえの人々。さればといって大野父子や、織田有楽のごとき人々では、古参譜代といえども、とうていこの大事を託するわけにはまいらない。

そこでいろいろと評定論議のうえ、年歯わずかに二十歳の弱年ながら、武勇にすぐれ、才智にたけ、思慮分別もじゅうぶんにして、しかもその家柄からも申し分なき、木村長門守重成こそ、最適の人ということにあいなりました。

長門守重成はごぞんじのごとく、木村常陸介重茲の嫡男でございまして、父常陸介は、故太閤

の命によって、その養子関白秀次の附家老となられ、秀次のあいつぐ悪逆を、いさめにいさめましたが、ついに聞きいれられず、のちそのせめを負うて、いさぎよく自刃をとげたというおかた、この忘れがたみ重成も、幼少のときから秀頼につかえ、時の大阪城内の執権職、片桐且元に師事いたして、軍学兵法、武術などのいっさいを授けられ、その美貌とともに、早くより大阪城内の麒麟児と、たたえられた勇士でございます。

ここで秀頼公より、あらためて長門守重成に、この趣きをおおせつけられまると、重成にはほっとばかりに平伏して、

重「身にあまる面目、重成身命を賭して、この大役あいつとめまするでございましょう？……」

と、決心の色をおもてに現わしてお受けにおよび、ご前をしりぞくとその足で重成、真田丸へと幸村を訪れました。

幸「おおこれは長門殿、このたびのお使者のお役目、まことにご苦労千万でござる」

重「されば軍師殿、実はそのことにつき、お耳をけがしたいことのござって、おたずねつかまつりました次第……ちと他聞をはばかる儀にござりまするが……」と、なにやら深い仔細のあるようす、幸村心得まして別室に案内いたし、

幸「してまた長門殿、なにごとでござるかな」

重「されば、それがしつらつら考えまするに、このたびの和議、たとえ首尾よくあいととのいますとも、奸智にたけたる大御所、必ず腹に一物あってのこととしか考えられませぬ。いずれはこれにつづいて、容易ならぬ無理難題を持ちこむこと必定。そのとき、将軍秀忠のみなりせば、あえて恐れるところはござりませぬが、煮ても焼いても食えぬのは、かの大御所家康。

よってそれがし、血判の手元見届け、誓紙取りかわせの大役をおおせつかりましたをさいわい、大御所に近づき、あわよくばただ一刀に大御所を、刺し殺さんの覚悟にござります。さすればたちまち和議は破れ、ふたたび合戦とはあいなりましょう。その時にこそ軍師の智謀をもって、関東勢をただ一戦に、お討ち破りくだされたく、このことをお願いに、参上いたした次第でござりまする」

と、長門守が悲壮な決心覚悟。大御所ならびに本多佐渡に、胸中ふかく蔵する秘策があれば、大阪城内にもまた、これにかけ向かう智謀の士があったもの……。

幸「ああっぱれお覚悟かな長門殿、よくぞ申された。天定まって人に勝ち、人定まってよく天に勝つ。なすとなさざるは人にあり。いま御身が豊臣家のために一命をなげうって、大御所だに亡き者にいたさば、関東の大軍いかほどあればとて、その時にこそこの左衛門佐幸村、さらに肺肝を砕いて必死の奮戦におよび、天下をふたたび、豊臣家のものにいたさんこと、たなごころのうちにござる」

と、左衛門佐幸村、大いに長門守の忠誠に胸を打たれ、それよりなおも誠忠無類の両勇士、ひそひそと密談をかわしましたるうえ、互いに手を取り合って涙をふるい、今生の別れを惜しみました。

さて、明くればいよいよ十二月二十一日、神文取りかわせの当日とあいなりますと、長門守重成には、こんにち、茶臼山本陣におもむくうえからは、生きてはふたたび、帰らぬという考えでございますから、よそながらわが母にも、いとまを告げんものと心得、淀君のおそば近くつかえる母人、宮内卿局の許へまいり、案内をこいまするると、母は大いに喜び、

母「おおさっそくこれへ……」と、居間へ通される。重成はうやうやしく母の前に両手をつかえ、

重「母上にはうるわしきおかんばせを拝し、恐悦を申しあげまする。このあいだじゅうより合戦に引きつづき、御和睦のご評定について、かれこれといまとてもこれなく、存外のごぶさたをつかまつり、なんとも申しわけござりませぬ」

母「いやいや、この母はかげながら、そなたの武功、手柄話しをうけたまわり、そなたの顔を見るよりは、うれしゅう楽しみにいたしておりました。うけたまわればまたこのたび、関東関西の御和議もととのい、それについてそなた、こんにちは大御所公のご血判、おてもとお見届けの使者として、茶臼山本陣へまかり越されるとのこと、まことでござるかの？……」

重「ははっ、御意にござります、身の面目と存じ、母上にもおよろこびいただきたく、ご挨拶にはうかがいました。これより身支度をば整えまして、乗りこみまする心組みにございます」

母「ああそれは喜ばしいこと、城中古老のかたがた、あまたあるのを差しおいて、弱年のそなたにかかる大役を、おおせつけ願われましたること、まことに家門のほまれ、ついては晴れのお使者とあれば、いずれ衣類も礼服、大紋長袴のことと考え、見苦しきいでたちにて人にうしろ指さされるも恥辱と思い、母が手ずからきょうのいでたちをば、仕立ておきましたぞ。これをば召されて、晴れのお役目、首尾ようあいつとめられませよ……」

と、広蓋の上にのせたる品々を、重成の前に差し出しました。重成は押しいただいてよくよく見れば、礼服一式を取りそろえましたるそのうえに、錦の袋に納められたる、ひとふりの短刀がそえてございます。

重「こはまことにもって、ありがたき母上のお心入れ、さればこのおなさけの品々を身に着けて、首尾よく大役を、勤めまするでござりましょう。しかし母上、解せぬはこれなる短刀……、こはいかなる仔細でござりましょうや……」

と問いかけますと、母なる宮内卿局は、あたりを見まわし、声をばひそめまして、

母「いかに重成、こんにちのご血判お見届けの大役こそ、願うてもないさいわい、そなた徳川殿のご前へ近づき、折よくば飛びかかって、ただ一突きに大御所を刺し止めよ。この一刀はそなたが父、常陸介が秘蔵の品にして、信国の作、ただの一度も不覚を取ったことなき名刀でありますぞ。

しかし、その大紋長袴にては、飛びかかる際の、さまたげにもあいなろうかと心得、心をこめて縫いおきました。よく手に取って見られよ。袴は紐付けの糸をあらくくけ、ひとたびこれを踏めば、すぐさま紐だけ残して脱ぎ捨てられるようにいたし、また大紋の両袖は、脇を深くあけ、あらくとじて糸の端は結ばず、よってひとたびこれを引けば、袖はおのずからちぎれ落ちるよう仕立ててありまするぞ。これみなそなたが、飛鳥のごとく身軽に、働くことのできるようにとの心からじゃ。母のこころざし、くみ取ってたもれよ。草葉のかげの父上も、照覧ましますことと思いまするぞ……」

と、言葉のはしばし勇気をふくみ、涙一滴こぼしもやらず、重成をはげましましたるは、さすが勇将、長門守の母御でございます。重成は母の言葉をうけたまわって、大いに心を打たれ、昨日左衛門佐幸村と、深く約しましたることなど、ひとこと語りはいたさんかと思いましたが、しかし母子の間といえども、容易ならぬ大事、うかつに口外してはと、慎み深い重成、くだんの

品々を押しいただいて、

重「あああありがたし、かたじけなし、さらば母上、このたまわりものを身につけて、必ず目ざす大御所を……いや、大御所公の血判を、みごと見届け、神文誓紙取りかわせの大役、かならず果たしてまいります」

母「おおさらば別れの……いやさ、門出のさかずきをいたすであろう」

と、かねて用意いたしましたる、銚子土器を取りいだし、ひとくち干して重成へ与える、長門守重成、これをば押しいただいて飲み干し、ふたたび母にお返ししたうえ、容をただして、

重「さて母上、ただいま胸に浮かびましたる一首、はなはだつたなき腰折れではございまするが、母上朝夕のおなぐさみまでに……」

と、筆取り上げてさらさらと、したためましたる三十一文字、宮内卿局が取り上げてご覧になると、

うまれいでまたうまれいでうまれいで
君に三世の忠をつくさん

としてございますから、母宮内卿局も、深く重成の胸中を理解いたし、

母「いかに重成、御身のこころざし、母もうれしゅう思いまするぞ。この三十一文字、母が生涯の記念といたし、肌身離さず所持いたしまするぞ。なにはともあれ、こんにちは大事のお使い、心してわらいをあとに残されますな……」

重「ははっ、お言葉、肝に銘じましてございまする。しからば母上、ごきげんよう、百年のことぶきをこそ祈りあげまする……」

と、名残はいとど尽きませねど、心弱くてはかなわじと、気を取り直して重成は、母に別れを告げて立ちいでまする。うしろ姿を見送る母、口には強く申せども、みずからすすめて死地にやる、心のうちぞいかばかり、うたてき武士の、さだめとこそは覚えまする。

さて長門守重成は、おのれの詰所へ引き取りまして、身を清め、これぞ最期の晴れ衣裳、母からたまわりましたる、大紋長袴、右の礼服を着用におよんで、父の記念の信国の一刀を懐中にいたし、供まわりかれこれ百人ばかり、副使の郡主馬と打ち連れて、大阪城を立ちいで、茶臼山の本陣さしてやってまいります。すると途中、通りかかったのが藤堂和泉守高虎の陣屋の前、ここまでまいりまするとと、陣中からばらばらっと立ちいでました、藤堂家のさむらいども、

○「あいや、いずれへお通りめさる」

重「されば茶臼山、徳川家ご本陣へまかりとおる者である」

○「なに、ご本陣へ通らっしゃるといわれるか。しからばもはやご本陣はすぐ目の前、すみやかに下馬をなされい」

という声の下から、「下乗下乗」と、右左から声をかけますから、副使の郡主馬においては、あわてて馬から飛びおりようといたしたが、長門守重成、じろりと主馬をにらんで、

重「あいや郡氏、下馬にはおよばん、そのままそのまま」

といったかと思うと、今度は目を返してはったと藤堂の軍兵をにらみすえ、

重「なにを申す。われらに下馬いたせとは、そもそもわれらをなんと心得る。あいや藤堂家の者ども、よっくうけたまわれ、われこそは恐れ多くも、豊臣右大臣家の正使として、このたびの和議につき、徳川殿より誓紙血判を受け取りにまいったる者、藤堂家の指図を受けて、下乗いたすいわれはない。身のほど知らぬ、もってのほかの一言、無礼であろう。ひかえさっしゃい……」

と、大の眼を見開いて、うんとにらんだその勢い、威風あたりをはらうばかりでございますから、はっと気を呑まれて藤堂家の面々、おしが芥子をなめたような工合で、ほおをふくらし口をもごもご、目を白黒させています前を、とうとうとうと難なく馬を乗り進めまして、やがて本陣の陣前近くまいりますると、ご本陣前には、井桁に橘の定紋打ったる幕張りをいたして、これを守るは、井伊掃部頭直孝でございます。ところへ長門守、主馬の両人が乗りこんだから、井伊家の武士、それへ立ちいでまして、

○「やあやあ井伊掃部頭の陣前を、乗り打ちするはなんぴとぞ……、下馬さっしゃれ、下乗下乗」

と呼ばわった。うしろにひかえた郡主馬は、

主「木村氏、もはやご本陣前でござる、下馬いたしてはいかがでござろう」

といったが、重成耳にもかけず、

重「あいや郡氏、関東百万の大軍の中にても、恥を知ったる者はまことに少ない。わが空耳かは知らねども、たしかただいま、井伊とか掃部とかいうような声が聞こえおったが、はたしてさようか。すぐる日の合戦に、後藤又兵衛殿に打ち破られ、馬印、旗印、差物などをば、深田の中へ投げ捨てられ、井伊とも掃部とも、また直孝とも、ぐっともすっともいわず、見苦しき敗走におよんだるやつも、やや泰平になるにしたがい、大きな声にて井伊だの掃部だなどと、呼ばわりおるとは片腹いたいきわみじゃ」

と、大音あげてあざけりましたから、井伊直孝はこれを聞き、おのれにっくきその雑言と、す

でに立たんといたしまするを、近侍の面々、まずまずと押しとどめまして、そのうちの一人、やおら陣前に立ちいでて、

○「あいや、秀頼公お使いとは申せ、いささか雑言が過ぎたるように覚え申す。しかも、もはやご本陣門前である。本陣までの乗り打ちは無礼でござろう。すみやかに下馬をさっしゃい」

と、言葉鋭くつめよった。重成はうけたまわって、

重「なに、下馬をいたせと申すか。それがしは木村長門守重成、このたびの御和睦につき、豊臣右大臣家の正使として、神文誓紙の血判の見届けにはまいったる者ぞ。本陣玄関さきまでは、決して下馬いたすことまかりならん。なんじ聞かずや、四方に使いして君命をはずかしめざるをもって、まことの士という。不肖なれども重成をなんと心得る。たって下馬いたせというにおいては、これより大阪城へ引っ返し、右大臣家のご下知をうけたまわり、ふたたびまかり越すによって、さよう心得ろ……」

と、馬の頭をぎりぎりと、立て直さんといたしましたから、びっくりしたのはこの近侍、ここで秀頼公の使いに帰られてしまってはたいへんですから、へどもどいたしておりますところへ、心利きたる老臣が立ちいでまして、

老「こは心得なき者どものご無礼、いくえにもご容赦をなしくだされ、このままお通りを願いたい……」

と、ていねいにわびいりましたから、ここに長門守、

重「いや、あやまってあらたむるにはばかるなかれ、わびいるとあらば、おとがめはつかまつらん……」

というと、大風に乗りこんでまいったのが茶臼山本陣の玄関、ここで馬よりひらりと飛びおりました。すると玄関の式台には、かねて接待ときまっていた、安藤帯刀、本多上野介の両名、いとていちょうに出迎え、やがて大御所、家康公の御前へと案内いたしました。

見ると正面には、家康公泰然とひかえ、左右には徳川恩顧の、譜代外様の諸大名をはじめ、旗本の面々、綺羅星のごとくに居流れまして、威儀厳然たるありさま、副使の郡主馬においては、周章狼狽、にわかにそこにすわって、平伏いたさんといたしますから、長門守はこれを尻目に、はったとにらんで、

重「郡氏、そこつのふるまいをさっしゃるな。いまだ礼をいたすにはおよばん。そのままひかえて召され」

といって、悠揚せまらず泰然とひかえましたる時に、家康公、じっと長門守の顔を打ちながめて、

家「おお長門殿、ひさしゅう逢わんうちに、あっぱれ成人いたされたな。そのもとの父、常陸介殿とは、親しゅうまじわりを結んだものであるが、その忘れがたみたるそのもとが、かくもみごとに成人いたしたること、予も喜ばしゅう思うぞ。何歳にはあいなられたな……」

と、にっこり笑って話しかけた。天下の大御所家康から、まったくもって文字通りの、微笑政策をもちかけられては、たいがいの者ならば、イチコロにまいってしまうところだが、そこは選びに選ばれた長門守重成、大眼を見開いて、大御所をはったとにらみ、

重「あいや徳川殿、さようなわたくしごとはうけたまわる場合でござらぬ。それがし、こんにち当御陣へまかり越したるは、私用にあらず、勅命によって大阪関東、御和睦とあいなり、そ

れがための神文誓紙の血判を、主人秀頼の名代といたして、ちょうだいにまいった者でござる。わたくしの言葉をもって、おおやけの用を欠く、これもってのほかのふるまい。役目あいすむまでは、さようなお話し無用でござる」

と、だれはばからず大音に呼ばわったから、肝っ玉をつぶしたのは副使の郡主馬、どんなことになるかと、どきどきはらはら、生きた心地もございません。なみいる徳川家の家臣も、さてこそ無礼なる長門守、何事をしでかすかも知れんと、手に汗をにぎって、重成のほうをきっとにらんでおります。

しかしさすがは、海千山千のしたたか者の大御所、またもやにっこり笑うと、

家「いや、長門殿の一言、もっとも千万である。いかにも予があやまりであった。これよ、たれかある。用意の手箱をこれへ持て」

あっさりとそういって、家来のほうを振り返りました。「はっ」と答えてうやうやしく持ち出された、黒塗り蒔絵のりっぱな手箱、家康公手に取って蓋を開き、中から一通の書面を取り出されました。

天なり命なり、千秋の恨事

長門守重成においては、いまこそ家康を刺して、わざわいの根を刈り取らんと、ぐっとみがまえましたが、前にも真田大助でこりている大御所、本多佐渡守正信のはからいによって、重成の前には火鉢などをことさらに置きならべ、しかもそのうえ、すわといえば取って押さえんとばかりに、旗本指折りの勇士の面々を、重成の席近く、数人詰めさせている。

重「うーむ、かれらを恐れるわけではないが、このありさまでは、必ずこの者どもに妨げられ、しそんじるに違いない。よし、さらば最後まで機会をねらい、より近づいてことをなさん」

と、はやりにはやる胸をじっと押さえて、時のいたるを待っております。大御所には手箱から取り出した書面をば、

家「お使者、長門殿、これを見られよ」

と、本多上野介の手から、重成に取り次がせた。重成これを受け取って見まするに、

一、このたび勅命によって、和睦あいととのいそうろうえからは、そのあかしとして、大阪城の外郭を取りこわし、総濠をうずめるにおいては、互いに異心あるまじく、このうえいずれにても兵を動かすにおいては、違勅の大罪を犯すものなり。よって神文かくのごとし。

慶長十九年十二月二十一日　　家康

秀頼殿

といたしてございます。これを見た長門守重成、かっと目を怒らして、

重「これはしたり、かような子供だましにも似たる、反古紙同様のものをもって、なんとは和議のあかしとはいいたもうや。徳川殿に和議の誠意これあらば、すみやかにまことの神文をお示し願いたい」

といったかと思うと、すっくと立ちあがり、大御所の側近く、詰め寄らんといたしましたから、このていを見た徳川家の面々、すわ一大事と、家康公の前に立ちふさがり、長門守を押しへだてんといたします。大御所はこれをご覧にあいなって、

家「いや、待て待て長門殿、ひょっとすると予が老眼の見あやまり、下書きのほうをまちがえたかも知れん……」

といって、ことさらに懐中から、眼鏡を取り出し、もったいぶっていまの誓紙に目を通すと、

家「……やれやれ、これはまちがったわい……」

抜け抜けといいこしらえて、別の一通を取り出したが、なかなか横着なやりかた。いい加減で持ってゆけば、それでごまかそうというわけ……。ところがこっちが重成だから、なかなかだまされない。ふたたびお出し

になったのを、取り上げて見ると、

敬白起請文のこと

一、このたび勅命により、東西和睦のうえは、双方長く永魚のまじわりをいたすべきこと。

一、秀頼殿には、外濠を埋められしうえは、紀伊、和泉二ヵ国をば領地として、きたる正月にあい渡すべきこと。

一、血判誓紙あいすむうえは、寄せ手陣払いして、おのおのの軍勢は帰国いたさせるべきこと。

右の条々にあいそむく者は、神罰をこうむり違勅の罪軽からず、よって神文くだんのごとし。

慶長十九年十二月二十一日

家康

秀頼殿

と、りっぱにしたためてあります。紀伊と和泉の両国を、秀頼に贈るということは、外濠を埋める代償の条件であったのが、前の誓紙には、わざと書きもらしてあったというわけ。長門守重成、とくとこれを披見いたしまして、

重「うむ、これなれば異議はござらぬ。このうえは大御所公のご血判、ちょうだいをつかまつりましょう。ついてはそれがし、血判のお手元、見届けの役にござりますれば、御座近く推参のほどごめんを……」

と、じりじりと畳二畳ばかりも前へにじり出て、右の誓紙を差し出しました。これにつれて徳川の諸将、これまたじりじりと、重成におおいかぶさるように、進み寄ってまいります。大御所には、やがて神文誓紙を手に取り上げ、さっそく用意の小柄で、小指を突いて血判しようとされ

ましたが、なにぶんにも七十三歳という老齢のこと、血の気も少ないものと見え、なかなか血が思うように出て来ません。なみいる諸大名は、ただもう、はらはらと心配顔。

○「長門という男も、ずいぶん強引なやつであるわい。大御所さまあのようなお苦しみ、ほどほどのところで、よろしいといいそうなものじゃ」

などと思いながら、重成の顔色を見ているが、重成においてはさらにわきめもふらず、お手元をじっと見つめたまま、なんともいわない。いや、この一瞬をのがしては機会は去ると、息を殺してうかがっているが、まわりの警護厳重にして、いかんとも手の出しようがない。まさに流星光底、長蛇を逸して、千秋の恨事たる場面でございます。

このときうしろにはべった阿茶局が進みいでまして、

阿「上さまお介添え申しあげまする……」

と、小柄をもって、大御所の指を突くふりをして、自分の小指を、ぐさりと刺しましたから、なにさままだ年若い阿茶局のこと、見る見る血汐が真っ赤に吹き出しました。

阿「おお上さま、お指から血が……」

と申したのは、これでごまかしてしまえという気持ち。ところが長門守重成、そんなことで瞞着されるような者ではございません。

重「はばかりながら、大御所公、血判はご自身の血汐でござらぬと、神文のあかしにはなりませぬ。重成、念のため申しそえまするぞ」

と、千秋の恨みを呑んだ長門守重成、いまはこの血判に、家康の性根のほどを、たしかめんといたしております。大御所は苦笑にまぎらして、ついに小指を深く斬り破り、薄くにじみ出た血

汐を、誓紙にしたためたわが名の下へ、ぴたっとおして、

家「どうじゃ、これにてよろしいか」

といいながら、誓紙をぽんと投げ出しましたは、よくよくいまいましかったものと見えます。これをば本多上野介が拾い上げまして、重成に手渡しまするとと、静かに受け取った長門守重成、つくづくとこれをうちながめたうえ、この神文をば、かたわらにございましたる火鉢にかざし、しばしのあいだすかして見ておりましたが、にっこりと笑い、うしろにひかえたる、郡主馬をば顧みまして、

重「いかに主馬殿、世の中には血判の際、指の裏に紅をつけ、血汐といわる者が、ままあるものでござる。なれども紅は火にかざせば、その色青味をおびて輝き、血汐は、黒味を生ずるものでござる。この御判はまさしく大御所公の御血汐、たしかなものでござる……」

と、とんでもない講釈をはじめた。なみいる大名はじめ旗本の面々、こいつどこまで念のいった男かと、舌を巻いて驚いていると、やがてつつつっと、畳二三畳がほどを飛びさがった長門守重成、はっとばかりに平伏いたして、

重「ははっ、ご血判のすわりましたる、神文誓紙、しかとちょうだいつかまつりました。これにて和睦もめでたくととのい、恐悦至極に存じたてまつります。ただいままでは、敵味方のあいだがらでござりますれば、少しの礼儀にもおよびませず、かずかずのご無礼の段、これも役儀とおぼしめして、ひらにおゆるしをたまわりたく、かつはご陣門乗り打ちの罪、これまた、ご海容にあずかりたく存じまする」

と、さっきとはうってかわった、慇懃なあいさつをいたし、誓紙をばていねいに折りたたんで、首よりかけたる錦の袋に納め、静かに退席におよばれました。大御所を刺さんとして、ついにその意を果たさず、無念残念さこそと思われまするが、しかれども、平常心を失わざるが勇士の面目、礼といい智といい、勇といい弁といい、まことにもののふ中のもののふ、ことには美男、水際立った殿御ぶりでございます。

それにひきかえて、副使の郡主馬、うんともすんともいわない、なんのことはない、大紋長袴をつけたロボットみたようなもの、まことに見苦しいきわみでございました。このときこの場にあった独眼龍政宗侯が、

政「うーむ、わしは娘が一人欲しい」

と、思わずつぶやいた。武士は、男の子が欲しいというのはわかるが、娘が欲しいというのは、まことに解しかねる一言であるから、隣にひかえた榊原康政が、

康「伊達殿は異なことを申される。お娘御が欲しいとは、何事でござるか……」

政「されば、われに娘がござれば、無理にも長門の嫁に、つかわしたいと存じたところ……あどうも、惜しいことであるわい」と、大いに感嘆、また残念がったということでございます。

さて長門守重成は、茶臼山の本陣を立ちいで、城内へ立ち帰りましたが、考えると残念でたまらない。さっそく左衛門佐幸村のもとを訪れて、

重「軍師、まことに無念千万でござった。大御所家康、すきもあらばただ一刺しとねらい申したが、なにぶんにもまわりの用心きびしく、千秋の恨事、ついに機会を失しましてございます」

幸「いや、長門殿、これとても天運、天運の盛んな時には、いたしかたのないものでござる。むしろこの大役を、みごと果たしてお帰りにあいなったことこそあっぱれお働き、幸村、祝着

申しあげまするぞ」

重「いや、お言葉いたみいりまする。しかし軍師には、この和睦、長く続くものと思われまするか……」

幸「なんの、いつわり多き大御所家康、このたびの和睦こそは、きたるべき合戦の、準備のための和睦でござる。近くまた、たえがたく忍びがたき難題を持ちかけ、合戦の始まること、火をみるよりも明らかでござる」

重「されば、それがしの憂慮いたしましたる通り、外濠残らず埋めたるのちは……」

幸「いかにも、……このたびの和睦のねらいは、この一点にこそござろう。ここに思い至れば、いまこのほうよりさかよせして、敵の油断を討つにしかず、さすれば勝利は必ずわが手にあり。ああさるにても惜しきこと……」

天地も見抜く大軍師、左衛門佐幸村が、いかでか関東の計略にあざむかれましょうや。いまここに和議なって、関東の総軍勢、ほっと一息ついたる油断を見すまし、すかさず討っていでしなば……と思い至って、思わず長嘆息をもらしましたから、

重「軍師には、なにを嘆息あそばされますや。ただいまの妙計、すみやかに秀頼公に申しあげ、ご出陣の儀いかがでござりましょう」

幸「いやいや、この計略をお取り上げにあいなるほどなれば、あのような和議はいたさぬはず、わが君お覚悟あそばすとも、それ例の……」

ここまでいって左衛門佐幸村、さびしい笑みをもらして、きっと口を閉じましたるは、淀君はじめ織田、大野など、合戦のかけひきも知らぬ小人輩（しょうにんばら）、大事の瀬戸ぎわに口出しいたして、秀頼公を妨げいたし、ことの成就のおぼつかなきを、みきわめたるがゆえでございましょう。

重「ああ思えば無念千万でござる。やみやみと手をむなしゅうして、敵のかけたるわなを待つとは、軍師、この重成は腹の煮え返る思いでござります」

幸「いやいや長門殿、これも天命、われらはただ、哀楽喜怒のいっさいを乗り越えて、秀頼公の御為（おんため）に、はなばなしき最期をこそと念ずるのみじゃ」

なんたる悲壮、なんたる誠忠、死生を越えた幸村のこころざしに、さすが長門守重成もいまさらのように、心うたれるばかりでございます。

翼をもがれた鳥も同然

さて、神文誓紙の取りかわせにつきまして、関東がたにおいては、はじめ老巧の者を、大阪城内に差しつかわす考えでありましたるところ、弱年の長門守重成のために、一同の者、度胆を奪われましたるところから、老巧の者が乗りこんで、かえって重成に、見劣りするようなことあっては恥辱と、ここにあらためて評定を開き、重成と同年なる、板倉内膳正（いたくらないぜんのしょう）重昌（しげまさ）を、差しつかわすこととあいなりました。

そもそも内膳正重昌は、京都所司代、板倉伊賀守勝重の次男でございまして、関東を代表する、智勇兼備の若武者、後年天草の乱に際しましては、これが追討の大将をうけたまわり、はな

ばなしき戦死をとげたという、これまた、史上かくれなき人物でございます。この重昌が、あくる十二月二十二日、大阪城中へ乗りこんでまいり、秀頼公のご前にすすみましたるとき、秀頼公より、

秀「神文のあてなは、大御所といたすべきや、それともまた、将軍家といたすべきや……」

というお尋ね。内膳正このことについては、なんらのお指図をも、受けてはおりませんでしたが、とっさのあいだに、

内「ははっ、あてなは大御所家康公として、お願い申しあげまする」

と答えて、その通りの神文誓紙を受け取り、立ち帰ってその趣きを、大御所に申しあげまする と、

家「おおよくぞいたした……」

と、家康公にも、ことのほかお喜びあそばされましたる由。両々あいゆずらざる使者の花と、伝えてこんにちの、語りぐさとはあいなっておりまする。

かようにいたして、とどこおりなく神文誓紙の取りかわせも終わり、まがりなりにもここに和議がととのい、大御所はじめ関東の諸軍勢、陣払いをいたして引きあげまするとと、関東方におきましては、いよいよ総勢八万という人夫をもって、大阪城の外濠をば、どしどし埋めはじめました。

いかに約束とは申せ、豊太閤が精魂を傾けつくして築いた名城、天下無双の要害たる大阪城の外濠が、みるみる石や土で埋められてゆくありさま、左衛門佐幸村はじめ、諸将の面々、ただただ断腸の思いがいたすばかりでございます。やがて外濠は、全部埋めつくされ、角櫓や城門など、みるまにどんどんとこわされてしまう。ところが、この埋め立て取りこわしの工事が終わると、今度はぴしぴしと、内濠までも埋めにかかったから、驚いたのは城方で、

○「これは大きに約束が違う。和睦の神文誓紙には外濠だけとなっているではないか。内濠までも手をつけるとは何事である……」

といって掛け合ったが、埋め立ての総奉行、松平下総守は聞きいれない。

下「いや、われらは総郭をこわせと申しつかっている。総郭というからには、内濠も入っているはず、これは関東将軍家のご上意だ」

といって、なおもどんどんと内濠まで埋めにかかったから、城方ではかんかんになって怒ってみても、暖簾に腕押しで話しにならない。

○「しからば関東へ使者をつかわして、掛け合うよりほかに道はない」

と、ここに急いで秀頼公の使者、伊藤丹後守、青木民部少輔を、関東へつかわすことになったが、なにしろこんにちと違って、それ飛行機、新幹線ひかり号だなんていうわけにいかない。えっちらおっちら、東海道を早駕籠で飛ばすのだから、日数がかかります。使者が関東へつかないうちに、すっかり埋め立てられてしまって、大阪城は丸裸になってしまう、というありさまでございます。

いっぽう、大御所のもとへたどりついた、伊藤丹後守、青木民部少輔の両人、お目通りへまかりいでまして、丹後守より、

丹「このたびの外濠埋め立ての儀、いかなればこそ神文と違って、内濠にまではおよばれませしぞ。これ畢竟、違勅の罪はまぬかれませぬぞっ」

と、厳談におよばれましたるところ、大御所には、まことに狸の面目をやくじょとせられて、

家「ほほう、それは困ったことにあいなったわい。定めし奉行の者ども、外濠を総濠と、聞き違えてのことであろう。よしよし、されば埋め立てたる内濠は、やがて予が昔のごとく、普請いたしてつかわすであろう……」

と、まことに人を食ったあいさつ……。誓紙の血いまだ乾かざるに、早くもこのありさまでございますから、豊臣家の末路、燈火のまさに消えなんとして、わずかに残光を保つとでも申しましょうか、哀れはかないきわみでございます。

伊藤、青木の両使者においては、歯ぎしりかんでくやんでみたが、大木に取りついた蟬のようなもので、いっこうに相手は動ずる気色もない。せんすべなく、空手形にも等しい言葉を頼みに、すごすごと大阪へ立ち帰りましたが、いまさら埋めた内濠がどうなるものではなし、まんまと家康の術中におちいって、両の翼をもがれた鳥も、同然とあいなってしまいました。

かれこれいたしまするうちに、正月もすぎ二月となりましても、かの誓紙の上で約束いたした、紀伊、和泉の二ヵ国を、大阪方へ引き渡すという件については、なんらの沙汰もございませんから、さあ、淀君や、大野父子などの欲張り連中、もういても立ってもいられなくなりました。そこで淀君の妹たる常高院をはじめ、大野道犬の妻なる大蔵卿などを、催促の使者として、駿府へ送りまするとと、大御所には蛙に水のごとく、まことにしゃあしゃあといたして、

家「うむ、いかにも、そのような約束は結んだが、そのために予はあとで、新将軍からさんざんにしかられ申した。秀頼殿は関東へ、弓を引いたる謀叛人でこそあれ、なにも二ヵ国をわかち与えるほどの手柄はない……、なんと、こういう言葉じゃ。なるほど予はいま隠居の身、老いては子にしたがう。万事はせがれながら、将軍の心にさからうわけにはいかん。気の毒ながら立ち帰って、淀殿はじめ秀頼殿へ、この段を申し聞けていただきたい」

なるほどここに至って、神文誓紙の取りかわせも、家康の名をもっていたしたる、板倉内膳正の取り計らいを、お賞めあそばされたことなぞ、さこそとうなずかれる次第でございます。常高院におかせられては、このたびの和議に、関東、大阪の間に立って、ひとしおのお骨折りをなされましたることとて、さっとお顔の色を変えられまして、

常「恐れながらただいまのお言葉、もってのほかと思いまする。昨年、神文お取りかわせのときに、固くお約束あそばし、これにそむきまするにおいては、天地八百万の神々の、お罰もこうむるべきところ、こんにち、ただいまのようなお言葉は、まことにその御意を得ないところと存じます……」

と、まなじり逆立てて申しまするると、家康公、大口開いてからからとうち笑い、

家「あははは、たわけたことを申されるな。あれは大阪方のばかものどもを、あざむくために取りかわしたのだ。毎度、左衛門佐幸村のために不覚を取り、残念であるによって、そのはらいせにこの家康が、一杯食わしてつかわしたのじゃ。立ち帰ってしかと秀頼に申せ。もはや用事はないによって、早々この場をまかり立て……」

という、取ってもつけぬあいさつ。ここで常高院さまはじめ、使者の者どもは、すごすごと立ち帰って、このことをば、淀君へ申しあげましたによって、ここにはじめて家康に、すっかりだまされたことを知り、足ずりしてくやしがるとともに、いまさらながら左衛門佐幸村の言葉が、思い合わされてならないが、いまとなっては六日の菖蒲、十日の菊、いかんとも詮方ございませ

ん。ここに淀君、むらむらと腹を立てて考えついたのが、

淀「おおそうじゃ。かの中井大和は、故太閤の恩をいただいたることをうち忘れ、徳川へ寝返って、無二の忠義をつくすにくいやつ。早々あの男を軍門の血祭りにあげ、このはらいせをとげてやろう」

と、とんでもないめちゃなことを思いつき、大野主馬を大将として、中井大和を討ち取るための軍勢を、さしむけることにいたしました。それを聞いた左衛門佐幸村は、

幸「それは無益なこと、お捨ておきあってしかるべく……」

と申しあげたがお聞きいれがない。この中井大和というのは、秀吉の寵遇を受けた、大工の棟梁でありますが、それが昨年、茶臼山の大御所の本陣をしつらえたというので、淀君の非常なにくしみ……。

いよいよ大野主馬を総大将として、中井大和を討つために、大和へ出陣ということになりました。するとこのときのいっぽうの大将、塙団右衛門直之が、幸村をたずねてまいりまして、

団「軍師、このたびの出陣は、いかにもばかばかしくて、腹が立ってなりませぬ。腹の虫押さえに、なにかよきお考えにてもござりますれば、お授けを願いたい」

という申しいで……。

幸「うむ、まことにごもっともなお説、しからば、かようかようなされてはいかがでござる」

団「おおそれはまことに面白き計略、では、それにて溜飲を下げてまいりまするぞ」

と、幸村からなにごとをか、計略を授けられた塙団右衛門直之、途中大野主馬の本隊と別れて、法隆寺へとやってまいり、いきなりその近くへ火を放ちました。

本隊の大野主馬は、中井大和の屋敷へ攻め寄せたが、かねてかくもあらんと悟った中井大和は、早くも風をくらって、京都へのがれ去ったあとでもぬけのから、主馬の本隊、ただぽかんとして、なすところを知らないありさまでございます。ところがいっぽう、法隆寺のかたにあたってもうもうと立ちのぼる、火の手を見て驚いたのが、郡山の城主筒井主殿助、

主「それ、たいへんだ。万一、法隆寺を焼き失っては、将軍家へ対して申しわけがない。さっそく出馬におよんで、暴兵どもを追い払え」

とあって、大急ぎで兵をくり出し、法隆寺をさして、どんどんと乗りこんで来る。これをながめて塙団右衛門、計略図にあたったとばかり、引き違って郡山の城へと乗りこんでまいり、

団「城門警護のかたがた、殿のお帰りにそうろうぞ。すみやかに開門開門」

と呼ばわりながら門をたたいた。夜分のことで、うっかり門を開ける途端に、たちまちどっと躍りこんだ塙団右衛門の一隊、当たるをさいわい七八名を東西へ斬って落とし、あっという間に城内へ乱れいって、あちらこちらへと火を掛けましたから、城は一時にどっと燃えあがりました。しすましたりと団右衛門は、人数をまとめて引きあげる。筒井主殿助は、法隆寺の近くまでまいって、うしろのほうを振り返って見まわると、わが郡山の城が炎々と燃えあがっている。

主「南無三、さては敵の計略にかかったるぞ。それ者ども引っ返せ……」

と、あわてふためいて、引っ返してまいりまするが、かたわらの森かげより、どっと団右衛門の同勢、このところに現われまして、当たるをさいわい、無二無三に斬りこんでまいりましたから、びっくりぎょうてん、魂天外に飛び去った主殿助、一戦にもおよばず逃げ去ってしまいました。

虎の威を仮る狐の勢い

さてこちらは大野主馬、中井大和を討ちもらして、まごまごしているところへ、法隆寺の火の手を見ましたによって、寺沢兵庫頭、松倉豊後頭、岡部内膳正なんどという大和の国の大小名、軍勢を率いて押し寄せましたるため、この同勢のために散々に打ち破られ、あわや討死とも見えましたるとき、筒井の軍勢を微塵に打ち砕いて、その勢いに乗って塙団右衛門、まっしぐらに馳せつけ、打ってかかりましたから、さすがの大和勢も支えかね、支離滅裂、八方へ敗走いたしま

した。

大野主馬においては、団右衛門のおかげをもって、あやうく勝利を拾い、ここで討ち取ったる首を持たせて、意気揚々として、大阪の城内へ立ち帰り、都合よく取りつくろって、戦いの趣きを言上におよびましたから、お気に入りの主馬のこととて、淀君にはたいそうなお喜び、

淀「このたびの主馬の大功は、あっぱれ至極でありますぞ。皆にもよく、主馬に見習うがよいぞよ……」

と、とんでもないご賞詞、最も手柄のあった団右衛門には、なんのご沙汰もございません。どうもこの贔屓というやつは困ったもので、賞罰正しからずんば、その国あやうしとは、いにしえの聖賢のおしえでございますが、大阪の落城も、まことにむべなるかな、もって至言と申すことができましょう。

ところが大野主馬というやつ、この当らざる過褒に、恐懼戒慎でもいたせばよろしいが、こやついささか、脳足りんと来ておりますから、自慢の鼻を高々として、

主「いやおのおの、このたびの合戦は、おのおのにもお目にかけとうござった……。なにさま敵は目にあまる大軍、その中へかく申す大野主馬、どっとばかりに割っていり、右より来るやつをば取って投げ、左から来るやつをばちぎっては投げ……」

いやはや、鼻持ちのならぬような、自慢をはじめたから、いかに忍耐強い塙団右衛門も、これには黙っておられない。大いに怒りまして、

団「大野殿、おひかえ召され。このたびの功はまず第一に、左衛門佐幸村殿でござりまするぞ。実はこのたびの出陣にあたって、それがし、真田殿より計略を授かり、その計略がみんごと、功

を奏したからではござらぬか。貴殿などは、寺沢、松倉、岡部の軍勢に、八方から取りかこまれて、あわやその細首を、取られようとしていたところ、かく申す団右衛門、郡山の城を焼き払ったうえ、まっしぐらに馳せさんじて、お救い申したのではござらぬか……」

ぴしりと一本、真っ向からやりこめられて大野主馬、二の句がつげません。居ならんだ心ある将士の面々も、それ見たことかと心地よげに嘲笑っておりますから、主馬すっかり男を下げてしまいました。そこで主馬は、なんとかこの不名誉を、取り戻したいという考えから、またもや淀君をたきつけまして、

主「関東において、紀伊、和泉を当方へ渡さぬと申すからには、力をもって攻め取るほか、道はこれなきかと存じまする。まずその手はじめとして、岸和田の城を攻め取り、しだいに和泉、紀伊を斬りしたがえんこといかがかと存じまする」

と申しあげると、淀君またもや大喜び、さっそくにお許しとあいなりました。しかしかような、無益な合戦ばかり起こされては、軍師幸村も、黙ってはいられない。淀君のご前にまかりいでまして、

幸「さきごろの大和征伐に、わずかに勝利を得ましたるは、大野殿の手柄にてはこれなく、塙氏はじめ部下の勇戦にあずかるところ、しかるに今また大野殿を大将として、岸和田を攻めるとも、この城、容易には落つべきにあらず。無益の合戦に軍勢をそこねること、まことによろしからず、この儀、思いとどまられますよう……」

と、おもてを犯して諫言いたしましたが、

淀「軍師には、わらわを女とあなどりたもうてのお言葉か。主馬とても立派なる武将、わらわ

が許しましたるものを、さしで口はおひかえあれ……」

と、寄ってもつけない見幕、大野主馬もまた、

主「軍師にはややもすれば、われらをかれこれと申されるが、主馬まかり越すにおいては、きっと攻め取ってご覧にいれる。しからざるときには、生きて貴殿にはお目にかからん……」

と、これまた虎の威を仮る狐の勢い、左衛門佐幸村、いまさらながら開いた口もふさがらず、

幸「これはまた、お勇ましいご一言……」

といったまま、あとの言葉もつづきません。主馬は「いうにやおよぶ」と大見得を切って、塙団右衛門以下をしたがえ、岸和田攻めにかかりましたが、しかし、幸村の先見はすこしもたがわず、大野主馬ごとき者の武略で、いかでか攻め落とされましょう。むなしき対陣に日を過ごすばかりですから、ここに塙団右衛門直之、

団「大野殿、かようにいたしているうちに、いまにも紀州和歌山より、浅野の同勢援軍にまいり、うしろを断たれては一大事にござります。それがしに軍勢、少々をお貸しくだされば、これを食い止めまするが……」というと、主馬はこれを聞いて、

主「ばかを申せ。いまだ浅野の軍勢、来るべきはずがない。よし来ればとて、たかの知れたるひょろひょろ武士、一駈けに駈け散らして見するわい」

団「いやいや大野殿、口前ではいくさはでき申さぬぞ。大言には似たれども、大地を打つ槌ははずれるとも、団右衛門の目に狂いはござらぬ。この儀お聞き届けを願いたい」

といったが大野主馬、この前満座の中で、はずかしめられた恨みがあるから、どうしても聞き入れない。団右衛門もここにいたって、こんなばかな大将についていては犬死にするばかりだ

自分は勝手に、自分の軍勢だけを率いて、浅野の大軍を食い止めようと、すっかり愛想をつかした団右衛門、さっさとここを引きあげてしまいました。

ところが岡部大学という、これまた一手の大将が、

大「大野殿、塙氏の申すところ、もっとも至極と思いましたに、なにゆえ御大将には、この建言をばお用いになりませんぞ」

すると、大野主馬が、

主「ほほう、これは不思議じゃ。日ごろ塙と犬猿もただならぬそのほうが、なにゆえにまたきょうに限って、塙の言い分に味方いたすぞ。はなはだその意を得んではないか」

大「いや、これは御大将のお言葉とも存ぜん。仲のよい悪いはわたくしごと、戦いの善悪は、兵士一同の死生にかかわり、国の存亡、容易ならざる大事、なんぞわたくしの恨みをもって論じましょうや。すみやかに塙氏の方策を、お用いあそばしてしかるべきと存じまする」

と申し述べたが、小人の大野主馬、どうして、この勇士の心中を解し得ましょうや。

主「いや、たとえなんとあろうとも、塙の方略を用いることはならぬ」

といって、なんといっても聞き入れない。ここで岡部大学も、すっかり大野主馬に愛想をつかし、よしそれならばと主馬を見捨てて、おのれの手の者二百余名をしたがえ、団右衛門のあとを慕って引きあげました。

ところがこの時すでに、雲霞のごとく押し寄せた、浅野但馬守の軍勢、これに備えんとして引きあげて来た塙団右衛門、岡部大学の同勢と、たちまち蟻通し明神というところで、正面衝突をしてしまいました。

両勇士は、日ごろの犬猿もただならざる仲をうち忘れ、力を合わせて奮戦力闘いたしましたが、惜しむべきかな、衆寡敵しがたく、ついに両将ともども、乱軍の中に、みごとなる討死を遂げてしまいました。

塙と岡部の両将を討ち取った浅野勢、ここに勢いに乗じて、勝鬨も高らかに、大野主馬の本陣目ざして、はやりにはやって押し寄せましたから、なんじょうもってたまりましょう。たちまち総敗軍とはあいなり、名を惜しむ武士の面々、死ねや者ども、敵にうしろを見せるなと、米田監物をはじめ、幾多の勇士豪傑が、あっぱれな討死を遂げましたが、ひきょう未練なのは大野主馬、左衛門佐幸村につがえた言の葉もうち忘れ、命からがら、大阪城内へ逃げ戻ってしまいました。

こうなっては、淀君も大野主馬も、さすがに面目を失って幸村に合わせる顔とてもない。しかしそのままにもすまされませんから、淀君には幸村を召されて、

淀「このたびの主馬が不始末、勘弁してつかわすように」と、主馬にかわっておわびをいたされたが、左衛門佐幸村これをうけたまわって、

幸「お言葉かえって恐れいります。こんにちは一身の面目を、とこう申すべきときではございませぬ。ただお家の万代を考えるが第一にござります……」と答えて、ご前を引きさがりました。

二世かける妻白妙の遺書

さて、ことあれかしと待ちかまえておった、関東大御所におきましては、大阪方の大和攻めにつづいて、岸和田攻めのことが、京都所司代、板倉伊賀守からの注進によって、委細もたらされましたるにより、

家「こしゃくなる大阪方のふるまいかな。いで、ひともみにもみつぶせ」

腹の中ではわが事成れりと、にやりとほくそえみながらも、うわべはかんかんになって怒ったようすを見せ、たちまち、諸国の大名に命をくだしましたから、ここにおいてふたたび百万の大軍、続々と関東の旗のもとに集まってまいります。茶臼山の本陣に、神文誓紙を取りかわしてより、わずかに四ヵ月、慶長二十年、この年改元されて、元和元年四月十八日、家康公早くもこの大軍をしたがえて、京の二条城へと乗りこんでまいりました。

大阪方におきましても、もちろん、手早く籠城の用意はいたされましたが、なにしろ外濠も内濠も、埋めつくされた裸城、天下の要害であった昔日の面影いずこ、まことにこれぞ孤城落日、心さびしき限りでございます。左衛門佐幸村におきましては、

幸「もはや城を頼みに、天下の大軍を引き受けることはできぬ。このうえは城外に陣をかまえ、敵を途中にむかえ撃つの一途あるのみである」

と、智謀の限りを傾けて、その手配におよばれます。まず大和国へは、後藤又兵衛基次、二千八百の軍勢を率いまして先陣いたし、国分の山地を越えて、東軍をむかえ撃ち、薄田隼人の軍勢は、側面よりこれを助けるという計略でございます。

こちらは関東の諸軍勢、このたびは、ただ一戦に大阪方を打ち破らんと、その軍勢を三手にわけ、もみにもみ、はやりにはやって、潮のごとき勢い。まず国分峠へさしかかったのが、伊達独眼龍政宗の軍勢でございます。山道にさしかかるとはるか向こうに、紺地に白く、あがり藤に後の字を書いたる、旗印を押し立て、その同勢かれこれ七八百人ばかり、朝日に向かって陣を取ったる一隊の人馬が見える。その旗印をながめた伊達家名代の豪傑、片倉小十郎、大口開いてからからとうち笑い、

小「やあやあ、かしこに陣取ったるは、大阪方にさる者ありと知られたる、後藤又兵衛とは見受けたるぞ。たかの知れたる小勢をもって、われをさえぎらんとは片腹いたし。しかも朝日に向かって備えを立てるなぞとは、兵法を知らぬにもほどがある。それすみやかに踏み破って押し通れ」と、下知いたしましたから、片倉の同勢、どっとばかりに関をつくって、津波のごとくに後藤の陣へと押し寄せました。後藤の同勢心得たりとむかえ撃って、しばしがほどは持ちこたえましたが、なにさま小勢のことでございますから、ひとたまりもなく打ち破られて、ばらばらばらと崩れ立ちました。

小「それ、敵は崩れ立ったぞ、追い討ちして又兵衛を討ち取れっ」

と、無二無三に追い立て追い立てゆく、鹿を追う猟師山を見ずのたとえ、いい気になってわれを忘れ、立田というところまで、乗りこみきたったこのとき、かたわらの林の中より、数百人

の伏勢、筒先そろえて一度にドドンドンドン、火蓋を切って放しましたから、さあたいへんでございます。あっという間に、片倉の軍勢、倒れ死ぬもの数知れず。小十郎はびっくりして、

小「さては伏勢があったるぞ。者ども気をつけろっ」

と叫んだがもう遅い。たちまち林の中より、現われいでたる又兵衛の同勢、あたるをさいわいばったばったと、右に左に斬り払い突き倒す。又兵衛基次はみずから陣頭に立って、日本号の名槍を振りかざし、鬼神もかくやと荒れ狂いまするから、いよいよもって手がつけられません。片倉の同勢、総崩れとあいなって、どっとはるかに追いのけられてしまいました。これを見るより、後詰めの松倉豊後守、寺沢兵庫頭の軍勢、

○「それ、片倉の同勢があぶないぞ、乗りこんで助太刀いたせっ」

とばかり、けわしい山の木樵路を駆け抜けて、いましも猪の鼻というところへ、差しかかってまいりまするとと、ここに待ち設けていたのが、薄田隼人の伏勢、一度にたって、どっと不意を襲いましたから、なにかはもってたまりましょうや、この同勢もまた、支離滅裂に打ち破られて、総敗軍とあいなりましたは、左衛門佐幸村、いつもながらのあざやかな、軍配振りでございます。

しかし、一隊や二隊の軍勢が、打ち破られたりとも、雲霞のごとき関東の大軍、次から次へと新手を繰り出し、入れかわり立ちかわって、攻め寄せてまいりまするから、さすが大阪方においても、一戦ごとに手負い死人の数を増し、次第次第に人数も減って、取り詰められてまいりました。

さて関東勢においてはいま一手、暗峠の本道から、井伊掃部頭、小笠原信濃守、松平下総守、

本多若狭守などの大軍が、ひしひしと押しつめてまいります。

ここにおきまして左衛門佐幸村、つらつらゆくすえのことをおもんぱかり、いよいよ大御所を討ち取って、天下回復の功を奏せざるときは、秀頼公を奉じて薩摩の鹿児島へ落ちまする心底。このことについては幸村、冬のご陣が終わるとともに、かくもやあらんと先を見越し、かねて密使をもって、島津公のお許しも得ておりましたので、後藤又兵衛、木村重成、これらの人々へもその意中を打ち明け、

幸「さりながら、これぞ最後の最後のてだて、なんとしても大御所家康を、討ち取らねばあいならぬ。暗峠よりきたる本隊は、かようかような方略をもってむかえ撃たん」と、ここにこの大敵をむかえ撃つ大任を、当年二十一歳、花の若武者、木村長門守重成へと申しつけられました。

時は元和元年五月五日、菖蒲花咲く端午の節句の朝まだき、いっさいの計略を、左衛門佐幸村から授かった長門守重成、この一戦に家康を討って取らんかな、しからずんばわれ玉と砕けて、戦場の花と散らんと、いっさいの覚悟をきわめ、出陣に先立ってその妻、白妙の方をお側近くへ呼ばれまして、

重「このたびの合戦こそ、討つか討たれるか、二つに一つの合戦である。さりながら目にあまる関東の大軍、しょせん、生きてふたたび帰ることはかのうまい。あきもあかれもせぬ、そなたとの二年のちぎり、名残はつきぬがこれとても、戦国武士の世のならいじゃ、そなたもさよう心得よ」

と、ここに最後の別れを告げる。さて妻白妙の方におかれましては、大阪七手組の大将、真野豊後守のご息女でございまして、ご容貌も人にすぐれ、心ばえもまことにやさしく、さすがは長

門守重成の思い妻よと、賞めたたえられうらやまれて、芳紀まさに十八歳、梅と桜をこきまぜて、色も匂いもまことにゆかしき賢夫人。夫重成からこの決心覚悟のほどを聞かされても、少しも動ずる気色も見せず、涙一滴こぼしもいたさず、かいがいしく夫のいただく兜の鉢に、名香蘭奢待をばたきこめ、差し出しましたる心のうち、げにもあっぱれ武夫の、二世をかけたる妻とこそはあいみえまする。

これぞ万一、夫重成、討死いたせば、その首級は家康公の見参にいることならん。かかる時に、見苦しき屍臭あっては夫の恥辱、名を惜しむ武士の妻として、ここまで思いいたるとは、感ずべくもまた、あまりあることでございます。

やがて妻の白妙、この場を去って居間へ引きさがりましたが、長門守重成、いざ出陣とあいなっても、不思議やその姿が見えません。不審をうったる長門守、妻の居間をばのぞいて見ますると、こはそもいかに妻の白妙、北に向って正座をいたし、懐剣をもってただ一突き、みごとに咽喉を刺し貫いて、あわれはかなく死んでおります。

重「おお白妙、いかにいたしてそなたは……」

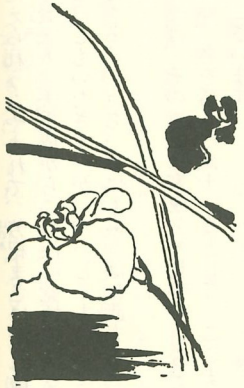
思わず馳せ寄ってかきいだけば、はやこときれて二言といわず、神々しいまでに静かなるその顔。かすかにその口辺には、ほほえみすらも浮かべております。あたりを見ると一糸乱れず整えられた部屋の中、机の上には夫重成にあてた一通の遺書、重成取る手遅しと開いて見れば、

一河の流れ一樹のかげ、袖すり合うも他生の縁とこそうけたまわりそうろうに、思えば一昨年、偕老の契りを結びそうらいてより、ただ影の形に添うごとく、楽しうれしく過ごしまいらせそうろう。

さりながらこんにちのご出陣、この世かぎりの御いでたちの由、いさぎよきご武運のほど、ひとえに祈りまいらせそうろう。わらわいとけなき日より父の言葉に、楚の項王とやらは、世に猛き武夫ながら、虞美人のために名残を惜しみ、またわが朝においても、新田公には、忠勇めでたきかたながら、勾当内侍の愛に溺れて、不覚を取られたまいしとやら、聞きおよびまいらせそうろう。

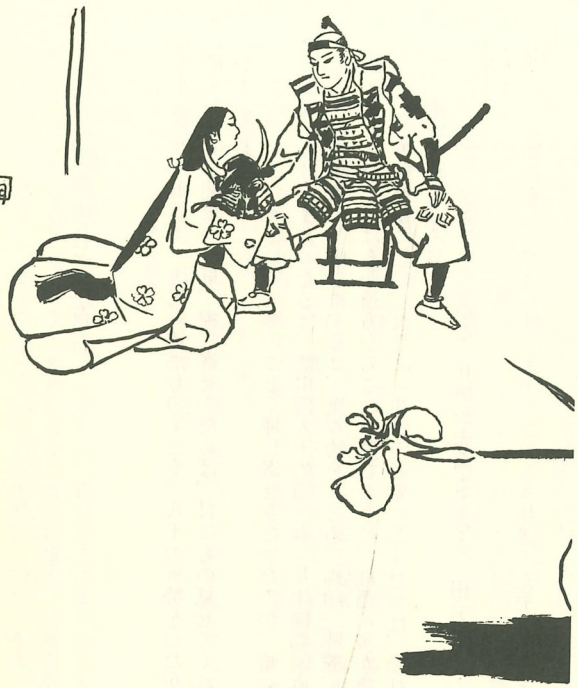
もはや世に、望みつきたるわらわにそうらえば、せめて殿、ご存命のうちに最期をいたし、三途の川とやらにて、殿のおいで待ちはべりたてまつりそうろう。必ず必ず秀頼公、海山のご高恩お忘れこれなきよう、幾重にも祈り上げたてまつりそうろう。あらあらめでたく、かしこ。

としてございます。長門守重成読み終わって、



重「おお白妙、そなたのこころざしうれしゅう思うぞ。されば これより死出の旅。屍を戦場にさらし、名をこの土にとどめて、冥土においてむつまじく暮らさん。されば三途の川においてあい待てよ……」

と、涙とともに白妙の黒髪、幾筋かを斬り取って、しっかと懐中に納め、合掌礼拝して別れを告げ、蘭奢待の名香をたきこめた、妻白妙の心こもれる兜をいただき、忍緒を結びきりにして、ぶっつりその先を切りましたのは、ふたたび兜を脱がぬ決心、夫といい妻といい、まこと往時の武士道にふさわしき、これぞ涙の物語でございま



す。

貰い首の功名で二百石

さても木村長門守重成は、決死の覚悟ものすごく、八千の軍勢をしたがえて、花岡山というところに陣をかまえ、関東の大軍、押し寄せきたらば、目にもの見せてくれんずと、てぐすねひいて待ちかまえております。

しかるところへこの陣さして、潮のごとく押し寄せきたったのが、暗峠を越えたる関東の大軍。その先陣をうけたまわったるは、徳川四天王の随一人、井伊掃部頭直孝の赤備えでございます。そもそもこの赤備えと申しまするは、旗差物をはじめ、馬印、陣笠、鎧、すべてのものを赤一色の色どりといたし、はるか遠方からこれを望むときは、紅蓮の炎が燃え立つかと怪しむばかり、そのうえ、勇猛無類にして、天下に「井伊の赤鬼」とうたわれ、恐れおののかれた軍勢でございます。重成これを望み見まして、

重「うーむ、あれこそ音にきこゆる、井伊の赤備えなるぞ。相手にとって不足なし。いで一戦に打ち破れっ」

勇気凛然、下知をくだして待ち受けます。このとき井伊の先手に進みましたのが、豪勇川手良利、

良「あれ見よ、花岡山のほとりに陣取ったるは敵の名将、木村長門守重成の手勢なるぞ。それ討ち取って、功名手柄といたせ」

と、たちまちはげしく鉄砲を撃ちかける。待ちに待ったる長門守の同勢、ただちにこれに応戦いたして、双方互いに打ち出す砲声のすさまじさは、殷々天にこだまして、天地も裂けんと思うばかり。このとき良利、

良「死ねや者ども、いまぞ進めっ」

と、弾煙を冒して、雨や霰と飛び来る弾丸ものともせず、槍を小脇にまっさきに駆け出し、木村の陣に乗り込まんといたしましたが、たちまち飛び来る敵弾に、胸板を貫かれて、あっと叫んで息絶えました。これを見るなり、同じく井伊家の侍大将、庵原朝昌という豪傑、もはや老年ではございまするが、戦場万馬往来にはおよんで、すこぶるの勇士、

朝「それ、川手氏の弔い合戦。われに続けっ」

と、大音声に呼ばわりながら、長門守の陣へ向かって、突き進んでまいります。これに続いて井伊家の面々、

○「それ、庵原殿を死なせるな」

△「朝昌殿に続けっ」

とばかり、どっと躍りこんでまいりましたから、両軍ここにまったく入り乱れての大乱闘。木村の同勢は、きょうを最後と思いきわめましたる、覚悟の槍先、一歩も引かず鋭く突き立てる。これを見るより、二番手、三番手を進んでいた石川主殿頭、松平、本多、小笠原などの諸軍勢、

○「それ、井伊殿におくれを取るなっ」

と、ばかりにどっと押し寄せ、競いかかって木村の同勢を、四方八方より十重二十重に、取り囲んでしまいました。

さて長門守重成においては、きょうを最期と思い定めたることでありますから、馬をあおって井伊家の同勢の、まっただなかへ躍りこみ、二間柄穂長の槍を取って、近寄る敵を突き伏せ、なぎ倒すありさま。さながら摩利支天の、荒れに荒れたる勢いをもって、敵将掃部頭直孝の旗本近く乗り込みきたり、天地にとどろく大音声、

重「やあやあわれこそは、この手の大将、木村長門守重成なるぞ。こんにちこのところにおいて討死せん。いでや敵将、掃部頭直孝殿に見参、見ざーんっ」と、呼びかけ呼びかけ、無二無三に掃部頭目がけて、突きかからんといたしましたから、旗本の面々大いに驚き、

○「すわわが君の一大事、近寄らせるなっ」

と、ただ一人の長門守を、八方より押し包んで斬ってかかる。重成あやうくとぞ見えましたが、あわやとばかり、このとき乗りこみきたりましたのは、重成股肱の近臣、根来智徳院、川崎和泉などの者ども、まいちもんじに馬を飛ばせて躍りこみ、井伊家の旗本勢をまっこう微塵に打ち砕く。主従わずかに数騎の奮戦に、天下に誇る赤備えも、浮き足立って崩れ立ちましたから、さすが掃部頭直孝も、歯ぎしりかんだがぜひもない。崩れる味方に包まれまして、後陣をさして敗走いたされました。このていを見て、

△「すわ、井伊の赤鬼がやられるぞ」

と、小笠原信濃、本多若狭などの同勢が、またもやどっと押し寄せてまいりましたから、ここに至って木村の同勢、内藤長秋、山口弘定らの豪傑も、戦い疲れて刀折れ矢つき、ついにこの新

手のために、枕をならべて壮烈なる討死を遂げました。

長門守重成におきましても、数刻の戦いに、もとよりその身金鉄ではございません。身に数カ所の重傷をば負いまして、すでに馬も倒れてしまいましたるにより、徒歩立ちとあいなり、いっぽうを斬り破って、花岡山のほとりまで抜けいでますると、流れいづる血潮は全身を朱に染め、吐く息さえも、絶えなんといたすばかりのものぐるしさ。

いまはこれまでなりと、長門守重成、乗り倒されてあったる馬へ腰打ちかけ、流れる血潮を飲んで咽喉をうるおし、何者にかわがこの首をつかわして、手柄にさせてつかわさんと、覚悟いたしておりまするに、かたわらの草むらの中に一人の武士、べつだん怪我をいたしたようすとも見えぬに、大地にどかっとすわったまま、立ちあがらんとする気力とてもなく、ぶるぶるとふるえているやつと、ばったり顔を見合わせました。ここにおいて長門守重成、

重「これこれ、それにひかえておるは何者なるぞ。さだめし敵の兵と心得るが、名前をいえ……」

○「へへっ、わたくしめは井伊掃部頭の家来、安藤長三郎と申しまするものでございます」

重「さればそのほう、それにてなにをいたしてはおるぞ。われは大阪方この手の大将、木村長門守重成なるが、そのほう、われを討たんとして、それにはひかえておったるか……」

長「いえいえ、なかなかもってさような大胆な心底は、毛頭ございませぬ」

重「しからばなにをいたしておるぞ……」

長「へへっ、実はさきほど馬より落ちまして、したたかに腰骨を打ち、起ちあがることもかなわぬしまつ。なかなかおてむかいなど、いたす心底はござりませぬ。なにとぞ、お見のがしのほ

ど願いとうございます」
がたがたぶるぶる、唇の色もなくして、ふるえあがっているのを見た長門守重成、からからと打ち笑いまして、
重「さてさて武士が落馬いたして、腰を抜かすなぞとは、気の毒にも哀れなことよ。さようなことにてはこののち、いくたび戦場を往来いたすとも、手柄を立てんことなどおぼつかまじ。よしよし、なんじに一つ手柄をさずけてつかわさん。われこんにち、ここに討死と覚悟いたせしうえからは、どのみち敵に与えるこの首。いまこそこの長門守重成の首を、なんじに授けるによって、打ち落として家康公の見参にいれなんじが手柄といたせよ。早々これへきたって首を取れ」
長「はっ、ありがたきおおせ……。しからばちょうだいつかまつりましても、おさしつかえはござりませぬか」
重「はっははは、つかわすと申す以上、いつわりは申さぬ。さあ、すみやかに首を討て」
長「へへっ……」重「これ、早く討てと申すに……」
長「へへっ、恐れながらちとどうも、腰が立ちかねまして……」
重「なに、腰が立たぬ。どうも手数のかかったやつじゃ。……しっかりいたせ」
と、えりがみつかんで、ぐっとそこへ引き立てたから、安藤長三郎、さては自分が殺されるかと、びっくりぎょうてんする拍子に腰がつがった。こいつはたいへんと思ったから、あわてて逃げ出そうとするところを、つかんだえりがみ、またもやぐっと引き戻して、
重「これこれ、あわててはいかん。いまこのほうの首をつかわすというのじゃ」と、長三郎の手に槍を持ち添えさせ、穂先を取ってわれとわが胸板へ、ずぶりと突き通した。ここに至って安

藤長三郎、
長「せっかくのご厚志、しからばちょうだいつかまつる」
と、一刀の鞘をはらって長門守の首級をかき落としました。この安藤長三郎という者は、井伊家にあって、臆病長三という、ありがたくないニックネームを持った男、それが思いもかけず、敵将長門守重成の首級を取ったのだから、さあ、うれしくてたまらない。一刀の先へ首級を刺しつらぬき、腰の痛さも忘れて大音声、
長「やあやあ、遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ。井伊家においてさる者ありと知られたる、臆病者の安藤長三郎、こんにちただいまこの所において、敵将木村長門守重成の首級をばもらい取ったるぞ。後日を争うことなかれ……」
と呼ばわった。だれそれの首を討ち取ったり、という者はあるが、もらい取ったるぞ、と呼ばわったのは、安藤長三郎がはじめてだそうで……。これを聞いたる木村の同勢、
○「さては御大将には、すでにご最期あそばされしぞ。遅れてのちの世に恥辱を残すな」
と、思い思いに敵陣目がけて斬っていり、勇士の面々、一人残らず討死をいたしました。さて、戦い終わってのち、安藤長三郎においては、重成の首を持って掃部頭のご前にすすみ、
長「それがし、こんにちこれこれによって、敵将木村長門守重成殿の首級をば、もらい取ってまいりました」
と、いっさいを言上いたしましたるところ、掃部頭におかれても、たいそうご感心にあいなり、すぐさま家康公の実検にそなえ、委細を申しあげましたから、さすが家康公におかれても、老いの目にはらはらと涙をこぼされ、

家「あああっぱれ若者を、死なせつるものかな」
とおおせられて、その首級をご覧になると、忍緒を結びきりにして、その先が切ってあるのは、生きて帰らぬ覚悟を語る決死のいでたち。兜の鉢からは、名香蘭奢待のかおりが馥郁として、殺伐な陣中へ満ち渡りましたから、家康公いよいよその心掛けに心を打たれ、
家「ああ惜しみても、惜しみてもあまりある人物、さんぬる冬の陣に、神文取りかわせの使いとして、予が許へまいりしときのふるまいといい、いままたこんにちのこの最期の心掛け、いかにも惜しきは、長門守重成であった……」と、声をつまらせてご賞美にあいなり、また安藤長三郎には、
家「ものをいつわり飾らざるとは、まことに心掛けのよきやつ、直孝、厚く賞してよかろうぞ」
というお賞めのお言葉でございましたから、掃部頭直孝も、ともども面目をほどこし、のち安藤長三郎、もらい首級の功によって、二百石のご加増とはあいなりました。
かようにいたして木村の同勢、ことごとくいさぎよき討死をとげましたが、いっぽう、道明寺河原に出陣いたした、薄田隼人におきましても、乱軍のうちに思う存分働いたうえ、討死を遂げるというありさま、ここに関東勢はいよいよ勝ち誇り、怒濤奔流、猛虎の勢いをもって、大阪城へと取りつめてまいりました。

奇妙な命令、不思議な下知

木村長門守重成、薄田隼人兼相らが、あいついで討死いたし、味方の先手ことごとく全滅におよびましたから、いまや勢いに乗ったる関東勢、もみにもんで、ひた押しに攻め寄せたりという注進は、城内にひかえたる軍師左衛門佐幸村のもとへ、櫛の歯を引くがごとくもたらされます。しかるに左衛門佐幸村、泰然といたして、さらに騒ぐ気色もございません。
幸「よしよし」と、柱へ寄りかかって、よい心持ちそうに、居眠りをいたしておりまするから、人々もその心根をはかりかね、不審を打っておりまするところへ、またまた、
○「ご注進申しあげます。ただいま伊達勢につづいて、越前勢二万ばかり、引き続いて峠を越えましてござりまする」
という注進、これを聞いてもなお幸村、
幸「よしよし」と、同じ返事を繰り返すばかり、これぞ幸村、存分に関東勢をば手許に引きつけ、大御所家康をわが奇計にかけて、討って取らんという計略でございます。しばらくいたしまするると、幸村、すっくとばかりに立ちあがり、
幸「いざ、機は熟したり、それ、出陣の用意におよべ」と、ここに手勢一万二千をしたがえて、隊伍堂々、大阪城をいで立たれました。このとき幸村、

幸「一同の者兜を脱ぎ、槍は雑兵に持たせて進め」という、まことに奇妙な命令。一同こは心得ぬ下知とは思いましたが、奇謀百出の幸村の言葉ゆえ、下知のままに兜を脱ぎ、槍を従卒に持たせまして、誉田の森を目ざし、進みに進んでまいります。やがて、敵陣まぢかにあいなりますると、

幸「それ、者ども兜を着けよ」と、下知をする。そこで始めて一同は兜をいただき、忍緒をぎゅっと結びしめました。するとまたまた二三町も進みまするとと、

幸「面々、槍を持てっ」という命令でございますから、いままでは兜も着けず、槍も持たずにおりました者が、敵陣近くなって兜をいただき、槍を手に取ると、にわかに勇気全身にみちみち、いかなる大敵も、物の数とも思わぬ気力が、下腹にみちあふれて、意気天を貫くばかりでございます。

ここに真田の同勢、六連銭の旗を初夏の微風になびかせながら、隊伍堂々と押し出してまいりましたから、はるか向こうの森かげより、このありさまを見て取ったるは、関東の先陣、伊達独眼龍政宗公、

政「やあやあ、かしこに押し寄せたは、まさしく敵の軍師、真田左衛門佐幸村とは覚えたるぞ。それ騎馬組の者ども、一駈けに駈け散らせっ」

と、例の片目をかっとむいて下知いたされましたから、「おう」と答えて飛び出したのは、伊達家名代の騎馬の鉄砲組、なにさま伊達の領地は馬の産地、そこで多くの名馬を集め乗り手に鉄砲を持たせるという、当今ならさしずめ原爆にもくらぶべき新鋭戦術、鉄砲で敵をどんどん打ちすくめて、ひるむところへ馬を乗り入れ、縦横無尽に駈け散らそうというのですから、たまったものじゃあございません。数百騎の軍勢、筒先そろえて、一度にどっと打ち払いましたから、さすがの真田の同勢も、五人八人、血煙り立ってばったばたばた、そのところに打ち倒されました。これを見るより左衛門佐幸村、

幸「うーむ、こしゃくなり伊達家の騎馬組、よし、さればこのほうにも考えがあるわい」

と、そこは智謀あまねき大軍師、すばやく陣を三段の備えに立て直し、第一段は地上にぴたっと折り伏させ、槍をも大地に伏せてかまえさせまする。第二段は少しく離れて膝を折り敷き、槍をそろえて中段にかまえさせ、第三段はさらに離れて、これは立ったるまま、槍先をそろえてかまえさせたる三段備え。

これを望んだ伊達家の騎馬組、敵は妙な陣立だなと、思ったかどうだか知らないが、砂塵を蹴立てて突き進み、地に折り伏した第一段はよくわからないから、二段、三段の備えに向かって馬上からぽんぽん、鉄砲を打ち放す勢いのものすごさ。なれども真田の同勢、さらにひるむ気色のないのは、敵陣まぢかくなって兜をいただき、槍を手に持ったることとて、勇気非常に立ったる折柄、泰然自若とひかえておりまする。気負い立ったる騎馬組の面々、弾煙の下より、わっとばかりに第一段の備えに迫った間一髪、

幸「それ立ちあがれっ」

と、下知を下したから、地に横たえ伏していた第一段の面々、さっとばかりに立ちあがった。騎馬組の者どもにも、第一段の備えが目につかなかったくらいだから、ましてや馬にわかろうはずがない。えらい勢いで飛んで来たところへ、ぱっと目の前にぴかぴかっと槍の穂先がきらめいて、時ならぬ林ができたから、驚いたのは馬のやつで、いい合わしたように棹立ちになってしま

った。

幸「それそこだっ。馬を突けっ」

という幸村の下知。そこで第一段の者がめいめい馬の胴っ腹を突いたから、なんじょうもってたまりましょうや、騎馬組の者ども馬にたまらず、どうとばかりに転がり落ちる。そいつを二段三段の者が躍りこんで、ずぶりずぶりと刺し貫いたから、これならまるで案山子を突くのと大差はない。伊達家自慢の騎馬組も、支離滅裂の敗北でございます。

ところが中にただ一人、三好清海入道の突いたる馬の武者が、馬から落ちない。こいつよほど豪気なやつだと、清海入道が驚いたが、なんとよくよく見ると、清海の槍が馬の胴っ腹を貫いて、こいつの肛門から脳天まで、芋刺しにしていたといいますが、こいつは少々はったりでございましょう。

幸「それ進めっ、この機をはずさず、仙台勢を一気に突き崩せっ」というなり、幸村先頭に立って、さらに大音をば張りあげ、

幸「わが槍先より、一尺たりとも前へ進んだる者は、こんにち第一の軍功といたす。者ども、われと思わん者は、われをしのいで先んじよ」

うまいことをいって励ましたもので、同勢一同、われもわれもと突き進み、本陣目がけて阿修羅のごとく突っこみましたから、さしも武勇を誇る伊達の本陣も、さながらかわらの崩れるごとく、総敗軍とはあいなりました。

幸「この勢いに乗って、越前勢をも押し破れっ」

と幸村、勇み立ったる勇士の面々を励ましまするとと、一同われ遅れじと、伊達の後詰めをなしたる、越前忠直の陣に殺到いたしましたから、たちまちのうちに越前勢も総崩れ、この一戦に最後の雌雄を決せんとする、幸村決死の働きこそは、まことに前代未聞、その正面に立ち支える敵とてはございません。

関東勢を粉のごとくに打ち破って、左衛門佐幸村、しばし人数をまとめて、息をついておりましたが、さらに関東勢、押し寄せるようすもありませんから、隊伍をととのえ、ひとまず城内へと引きあげました。

回天最後の大奇計

さて、大御所家康においては、木村長門守重成、薄田隼人兼相ら、名ある大阪城内の武将、ぞくぞくとあいついで、討死いたすところを見れば、大阪の運命も、もはや旦夕に迫ったものと見える。こんにちの左衛門佐幸村の戦いぶりを見るに、全軍死を決しての、出陣とこそ見受けたり。幸村討死いたさば、大阪城はすでに、わが掌のうちにありと大いに喜ばれ、ここに五月六日、道明寺より平野へと、本陣をお進めにあいなりました。

見るとこのあたりは、かねて大阪の同勢が出張って、陣場といたしておったものと見え、かまどの跡があちこちにたくさんございます。この野中のすてかまどというものは、蟋蟀の鳴くやさびしきすてかまど

夏草やつわものどもが夢の跡

などという、古戦場をとむらった句もございまするが、なんとなくもののあわれを覚えさせまするもの。家康公これをご覧ぜられて、

家「おお故太閤が辞世のごとく、浪花のことも夢のまた夢、豊臣の運命もここに極まったか……」

と、願望成就の喜びと、泡沫にも似たる人の世の運命に、ひとしおの感慨を覚えられながらも、

家「ここらあたりに本陣をかまえよ。さいわいかまどの跡もあれば、早々に兵糧を炊ぎ、一同の者も休息いたすがよろしかろう……」

というお言葉。そこで一同の者はただちに、その用意にと取りかかります。大御所におかれては、ほど近く、平野の地蔵堂というのがございますから、とりあえずこのお堂の中に入って、お休みになる。つきしたがいまする者は、大久保彦左衛門、安藤帯刀などの旗本衆……。

ところが家康公、なにぶんにも年をとっているから、小便が近い。しきりに尿意をもよおしましたので、どこぞこの辺に、便所はないかというおおせ。ところが原中の地蔵堂、まさか地蔵さまが小便をするわけもないから、そんな気のきいたものはございません。ところが大久保彦左衛門、例によって無頓着です。

彦「上さま、だれにはばかるところがございましょう。この庭でおやりあそばせ。彦左衛門恐れながら、おしょうばんつかまつります」

小便のことだから、おしょうばんというのもちと変だが、それ、なんとか者の連れ小便、家康の言葉を聞いて彦左衛門、急に自分も小便がしたくなったから、家康をおだてて、簡便なところで用をすまそうという考え……。ところが家康公というかたは、なかなか神仏を尊ばれたおかただから、

家「いやいや、それでは地蔵尊にあいすまぬ」

彦「なんの上さま、相手が地蔵尊だから仔細はございません。それ、地蔵の顔も三度というたとえ、二度までは大丈夫でございます」

家「これこれ、たわけたことを申すな……」

と、彦左衛門をおしかりになって、地蔵堂をお下りになると、かたわらにやぶがございます。それへまいって大御所はじめ、彦左衛門その他の面々、いっせいに放列をしいて、じゃあじゃあとやり出した。ところがまだそのころは、彦左衛門もそれほどの年ではないから、小便にも元気がある。勢いよくじゃーっとやってしまって、せいせいとしているが、大御所はなにさま七十余歳の高齢、だらりちっくり、ぽたぽたといった工合だから、なかなか手間がかかります。彦左衛門はうしろにひかえて、

彦「うーむ、どうも困ったものだ。日ごろから、『人の一生は重荷を負うて、遠き道をゆくがごとし、急ぐべからず』などとおおせられるが、小便までもこうゆっくりでは、お話にならんわい……」

などと、しきりにぶつぶついっている。するとどこからともなく、にわかにゴーゴーッという、すさまじい響きがしてきたかと思うと、こはそもいかにこはいかに、百千のいかずち、一時に落ちきたったかと、思われるばかりの大音響とともに、火の玉虚空に舞いあがり、いまのいままで休んでおった地蔵堂、木っ端微塵となって消し飛んだ。なんじょうもってたまりましょう。

大御所は前をまくったまま、あおむけざまにぶっ倒れる。彦左衛門もあおりをくらって、二三間がほどは吹っ飛ばされたが、あくまで気丈な彦左衛門、

彦「すわ一大事、上さまお気をたしかに……」

とばかり、倒れた大御所に飛びつくと見るや、俵かつぎに大御所を引っかついで、横っ飛びにすっ飛び出した。

見ればあたり一面の猛火とあいなって、人馬は高く空天に打ちあげられ、阿鼻叫喚、主人は郎党を見失い、家来は主人の行方がわからず、右往左往に逃げまどうありさま、この世ながらの地獄も、かくやと思うばかりでございます。

これぞ左衛門佐幸村が、狂瀾を既倒にかえして、豊臣の天下を回復せんとする、回天最後の奇計でございまして、大御所かならず、この地に本陣をかまえんことを察し、すてかまどの中に火薬を仕掛け、これより四方八方に導火線を張りめぐらして、地雷火をうずめおき、ひとたびかまどに火をつけんか、何百発という地雷火、一挙に大爆発を起こし、全軍みな殺しにいたさんという、計略でございます。しかるに大御所旗本の軍勢、ここにすてかまどを見つけて、これさいわいと、兵糧を炊がんといたしましたるところより、この大爆発をひき起こした次第でございます。

はるかにこれをながめましたる関東の全軍、すわ一大事とばかり、すぐさま駈けつけんといたしましたるところ、これぞとばかり左衛門佐幸村、三百匁、五百匁筒の大筒をもって、ドドンドドンと打ち払いましたから、関東勢の倒れるもの数知れず、あれよあれよとあわてふためくばかりでございます。新将軍秀忠においても、平野において大御所には地雷の計にかかり、生死のほども、定かならざる由に聞きおよんだから、大いに驚きたまい、

秀「それ、すみやかに出陣におよべ……」

と、打っていでんといたしますところへ、数百挺の鉄砲、筒先をそろえて打ち払い、その弾煙の下より、六連銭の旗をば押し立てたる真田の同勢、槍襖をつくって突っこんでまいりましたから、さすがの秀忠公、いかんとも致し方なく、馬をかえして一散に逃げのびられました。

かくて左衛門佐幸村が、はかりにはかった最後の奇計、じゅうぶんにその威力を、発揮いたしたるかと見えましたが、どこまでもご運のいいのは大御所と新将軍、大御所には、小便のおかげで命を拾い、彦左衛門にかつがれたまま、わずか数人の近侍の者にまもられて、泉州の岸和田までおたちのきにあいなり、新将軍秀忠においても、これまたあやうく討死をまぬかれました。

こちら城内においては、左衛門佐幸村、平野の地雷火破裂によんで、さしも関東の大軍、支離滅裂とあいなり、勝利はじゅうぶんと見えましたによって、秀頼公のご前にまかりいで、

幸「ただいま大御所、新将軍の本陣をおそって、ご両所ともに生死のほどは定かならず、旗本勢は算を乱して潰走なしたり。いざや君にはいまこそ、故太閤殿下ご出馬の陣立てをもって、ご出陣あってしかるべく、さすれば太閤殿下お取り立ての大名ども、たちまちお味方にくだらんことうたがいなし。いま二三頭の大名、お味方とあいならば、豊臣の天下を回復すること、火をみるよりも明らかなり、早々ご出馬にあいなるよう……」

と申しあげたから、秀頼公も大いに勇み立たれ、

秀「げにももっとも、即刻出馬におよばん」

と、金小札なしたる緋縅の鎧を召され、金の唐冠の兜をいただき、虎の皮の尻鞘かけたる太

刀を佩き、金切割の采配を取って、お立ちいでにあいなりました。このとき御母公淀君、またまた涙をもって、お引き止めにあいなりましたが、弱年とは申せ、さすが豊太閤の血をうけたる秀頼公、冬の陣の折のこともございますから、

秀「母君、このたびこそは、お言葉ご無用にござりまするぞ。いまこそわが豊臣の運命の決するところ、たとえ秀頼討死いたすとも、父太閤の名を、はずかしめとうはございませぬ。……それ、者ども馬を引け……」

と、鋭気颯爽、あたりを払うばかりのご気概にて、引き出されましたる連銭葦毛の駿足、飛龍と名づけられましたるに、ひらりと打ちまたがり、手綱さばきもあざやかに、これよりお乗り出しにあいならんといたしました。

しかるところ、いかがやいたしけん、右の飛龍が、ひーんと一声、棹立ちにあいなりましたから、これはと驚く秀頼公、乗りしずめんといたしましたが、あやまって、どうとばかり落馬におよばれました。

あっと驚いたのは、お側にひかえた真田大助幸昌、とつかは走り寄って、お起こし申しあげたが、秀頼公、よほど強く腰のあたりを打たれたと見え、立ちあがることができません。ようやく近侍の者に助けられて、お玄関先に取って返されたが、このご容体では、ご出馬なぞは思いもおよばない。思わざる不慮のできごとから、秀頼公せっかくの雄心雄図、たちどころに打ち砕かれてしまうという、悲惨なありさまでございます。

大助幸昌には、こは心得ぬことと不審を打ちまして、ご乗馬飛龍をよくしらべて見まると、こはいかに鞍の下に、真綿へ針がくるんで入れてございます。これでは馬が痛さにたえかねて、

棹立ちになったのも無理からぬわけ。大助大いに怒りまして、馬の口をば取ったる、馬丁をばそこにねじ伏せ、

大「なんじ、いかなればかようなことをいたした。いつわりを申すにおいては、大助幸昌その分には差しおかんぞ」

と、はったとにらみすえましたから、かの馬丁、

馬「なんとも恐れいりました。実は御母公、淀さまのお申しつけで、余儀なくかようなことを、いたした次第でございます」

大「なに、御母公さまのおいいつけ……」

と、ここにいたって大助幸昌、天を仰いで長嘆息いたしますれば、幸村公におかれても、「ああ傾くご運とは申しながらあまりと申せばあまりの御母公、かほどまでにいたして、わが君のご出馬をはばみたもうか。いまはぜひにおよばん……」

と、ここにわかに下知を伝え、諸将をことごとく城内へ引きあげさせました。

恨みを呑んで薩摩落ち

さてその夜、秀頼公のご前にまかりいでた左衛門佐幸村、お人払いを願ったうえ涙を流し、

幸「いかに天運とは申せ、こんにちのご出馬かなわざりしこと、残念千万にてござりまする。

千載一遇の好機はここについえ、もはや幸村の力をもってしては、いかんともいたしがたく、落城は旦夕の間に迫りました。よってこのうえはひとまず薩摩へ落ちのび、島津を頼らせたまえ……。幸村、かくやのこともあらんかと存じ、いっさいのてはずを備えおきましてござりまする。かの地にて静かに機会をうかがわせたまえば、なんと申しても大御所はすでに七十余歳、いま一、二年あいたたば、この世を去るは必定、大御所だにあいはてますれば、天下を豊臣に回復いたすこと難事にあらず、なにとぞこのうえは、忍びがたきを忍び、不肖幸村が計をば、お取

りあげくださりまするよう……」

と、言葉を尽くして申しあげましたから、秀頼公にも深くうなずかせたまい、

秀「うむ、幸村、そのほうの忠節、秀頼死すとも忘れはいたさぬぞ。して、母君もご同道いたすことができるか……」

幸「ははっ、恐れながら御母公さま、とてもこの乱軍の中をば、無事にお伴い申すこ

とはかないませぬ。万一そのゆえに、君の御身に不測の災い起こらば、豊臣家のご運はこれ限りとあいなります。御親子の情として、お忍びがたきは万々ながら、母君お一人のために、豊臣家百年の計をむざむざと失いたもうは、かえって故太閤殿下に対したてまつり、大いなるご不孝かと存じまする」

と、理を尽くしての幸村の言葉に、

秀「うむ、さればおいたわしき限りなれども、天下のためとあらばぜひもなし、母君はこの城へとどめおかん……」

と、急き来る涙をおさえて申されましたから、秀頼の心中を推しはかって、さすがに左衛門佐幸村、しばしがほどは言葉もなく、頭をたれておりましたが、かくてはあらじと心を鬼にいたし、

幸「さればわが君、時移っては一大事、さっそく御いで立ちのご用意を……」

と、これより大助幸昌に命じて、秀頼公を雑兵の姿にいでたさせ、また秀頼公の身代わりとして、城内にあいはてる者は、木村主計頭といたし、秀頼公の御扮装をば、ことごとく主計頭にたまわりました。なおまた左衛門佐幸村の身代わりとしてあいはてる者は、岩千代の昔より影の形にそうごとく、常に幸村の股肱となったる、穴山小助ということにあいなりました。

かようにいたして、いっさいのてはずがととのいましたので、その夜の深更、例の抜け穴よりいたして、城外にのがれいでましたが、つきしたがうものは、真田左衛門佐幸村、一子大助幸昌、後藤又兵衛基次をはじめ、合わせて五十余名。折しも薩摩より、家康公ご機嫌うかがいの名目にて、兵庫の浦までまいりましたる、薩摩の軍船にとうち乗りました。

明くれば元和元年五月七日、きのうの敗戦の汚名をすすぎ、一挙に大阪城をば屠らんものと、気負い立ったる関東勢、目にあまる大軍をもって、大阪城にと取りつめ、十重二十重にこれを取り囲んで、蟻のはい出るすきまとてもございません。

この日、幸村の身代わりをおおせつかったる穴山小助、きょうを限りと覚悟いたしまして、夜明け前より天王寺のほとりに出張り、六連銭の旗を朝風にひるがえし、きたれやきたれ関東勢と、てぐすねひいてあいまつところへ、攻め寄せきたったは本多出雲守忠朝の軍勢、

出「それ、かしこに真田が陣を張ったるぞ、攻め破って幸村が首を討てっ」

と、鋭き下知に、無二無三に攻めかかる。穴山小助、もとより望む相手と、士卒をはげましてむかえ撃つ、たちまちいり乱れての大乱闘とはあいなりました。

出雲守忠朝は、音に聞こえた無双の豪勇、二十貫にあまる大鉄棒をば麻幹のごとくに振りまわし、当たるをさいわい打ち砕き、馬を八方に乗りまわして、しきりに幸村に近づこうといたします。このていを見たにせ幸村の穴山小助、

小「敵将本多出雲守、いで幸村と雌雄を決せん、きたれやきたれっ」出「心得たり」

と、双方馬を乗り合わせて、一上一下、人まぜもせず闘ううち、いかなるすきやあったりけん、大力無双の出雲守忠朝、はっしと打ちおろす鉄棒、さしったりと小助、馬を乗り開いたからたまりません。力あまってそばの古井戸の石桁をば、がしんとばかりに殴りつけた。

これにはいかな出雲守も、小手先がしびれて、思わず鉄棒を取り落とす。ところへすかさず飛びこんで来た穴山小助、ただ一突きに胸板を突き抜きましたから、関東無双と聞こえた出雲守忠朝も、あわれや小助のために討ち取られました。

小「やあやあ、関東名代の本多出雲守忠朝を、かく申す真田左衛門佐幸村が討ち取ったるぞ」

と、大音声に呼ばわったから、忠朝の家来ども、大いに怒って、おのれ主君の仇と押し寄せまいるを、右に左に突き倒し、はね飛ばして、荒れ狂うありさま、さながら鬼神もかくやと思うばかりでございます。かくて本多の軍勢を踏みにじった穴山小助、息をもつかず越前勢の中へと斬りいった。このとき原隼人という越前家の武士、ひきょうにも横合いより走りきたって、

隼「幸村、覚悟っ」

と、鋭く突き出したる横槍のために、さしも勇猛なる穴山小助、脇腹深く貫かれて、馬からどうと倒れ落ちました。

隼「やあやあ遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ、日本無双の大軍師、真田左衛門佐幸村をば、かく申す原隼人が討ち取ったり」

と、高らかに呼ばわったから、これを聞いたる真田の軍勢、いまはこれまでなりと一人残らず、このところにおいて討死いたしました。関東勢においては、左衛門佐幸村、討死したるうえからは、もはや恐るる者はあらじと、雪崩をうって城門目ざして攻めかかり、たちまちにこれをば乗っ取って、このあたりより三貫目の大筒をもって、天守閣を目がけて筒口切って放ちましたから、天地にとどろく大音響とともに、豊太閤ご丹精にあいなりましたる名城も、その天守閣は崩れ落ち、たちまち一面の猛火とあいなってしまいました。

秀頼公の身代わりをうけたまわったる木村主計頭も、もはやこれまでなりと、御座の間に入って、切腹してあいはてました。

また御母公淀君においても、はやこれまでと、糒倉の中において自害をいたしてあいはて、こ

こに天下の名城大阪城は、五月七日まったく落城におよびました。

さて、お話かわって、真田、後藤の面々に守られ、島津の軍船に乗りこんだ秀頼公には、海上つつがなく薩摩の鹿児島へご到着にあいなり、太守、島津薩摩守家久公には、豊太閤の旧恩を忘れず、快くこれをむかえて、井上谷というところへ新城をきずき、これを秀頼公ならびに左衛門佐幸村はじめ、一同の人々の住居にあて、幸村以下ひたすら、天下をくつがえすべき機会をあいまっておりましたが、傾くご運とは申しながら、いたしかたないもので、秀頼公には病を得てついに起たず、島津公、幸村父子らに見守られながら、痛ましくも二十四歳をもって薨ぜられ、やがて左衛門佐幸村においても、恨みをのんでこの地に没したと伝えられております。

なお一説には、秀頼、幸村その他の面々、これことごとく、大阪城に討死とも申されておりまするが、ことの真偽はしばらく史家にゆだねることといたし、ここには伝えられるお話をそのままに、お伝えいたした次第……。いっさいの名利を捨て栄達を捨て、傾く豊臣家のために最後の最後まで節義を守り、徳川の心胆を寒からしめたる一世の大軍師、大楠公とともに、名将智謀の双璧とたたえられましたる真田左衛門佐幸村の伝、これをもって終局といたします。

（おわり）

講談名作文庫　1

真田幸村

昭和51年3月10日第1刷発行

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号 112　振替　東京3930
電話　東京(03)945－1111(大代表)

編　集　講談社出版研究所

印　刷　廣済堂印刷株式会社

製　本　株式会社国宝社

Printed in Japan　©KODANSHA 1976
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

講談名作文庫

1 真田幸村 名将智謀
2 水戸黄門 漫遊洒脱
3 大岡政談 明智度胸
4 柳生旅日記 剣豪一代
5 赤穂義士銘々伝 忠臣苦節
6 太閤記 風雲痛快
7 鼠小僧次郎吉 義賊仁侠
8 いれずみ奉行 天網恢々
9 猿飛佐助 神出鬼没
10 一休和尚漫遊記 頓智飄々
11 由井正雪 正義革命
12 快傑自来也 妖術変幻
13 荒木又右衛門 武勇仇討
14 伊達騒動 波瀾万丈
15 天保六花撰 江戸の華
16 弥次喜多道中記 珍妙失敗

各巻　320円　挿絵多数入り